光よあれ

私たちは主のもの 69人の証し シリーズ第7集









私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、
あなたの恵みとまことのために、
栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。
（詩篇　115・1）

光よあれ

私たちは主のもの　69人の証しシリーズ第7集

キリスト集会　編

はじめに

ゴットホルド・ベック

まず、聖書をみてみましょう。

（イエス様は）群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた。（マタイ　9・36）

羊飼いのない羊とは、イエス様がいらっしゃらない状態の羊、つまり人々のことです。イエス様は、助けのない、助ける者のいない、食べもののない、世話する者のいない、導く者のいない、あわれな人々をごらんになりました。イエス様はそんな人々を深く深くあわれまれたのです。

現代の人間はみな、なにかに飢えています。お腹をすかせています。私たちのまわりに住む人々、私たちが毎日顔をあわせている人々はみな、なにかを求め、そしてお腹をすかせています。人々はみな、心からのよろこびと平安を求めています。このようなたくさんの人々が私たちのまわりにいます。

これらの人々はみな、イエス様といっしょにならなければならないのです。

イエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福して裂き、群衆に配るように弟子たちに与えられた。人々はみな、食べて満腹した。（ルカ　9・16、17）

このとき、五千人の人々がイエス様のところにきて満腹しました。それは奇蹟でした。そして、人間は、イエス様のところにきてはじめて空腹がいやされるのです。

イエス様がいらっしゃるところには、あふれるばかりのよろこびと完全な満足があります。私たちは、自分の力に頼ってなにかをやろうとしても、決して平安や真のよろこびは得られません。また自分の力によりたのんで正しい者になろうといかに努力しても、ますます偽善者にならざるをえません。私たちがイエス様のもとにいくときにのみ、完全なよろこびと満足があります。いつまでも続くよろこびに満たされたほんとうの幸せは、ただイエス様と出会い、イエス様を知り、イエス様にしたがうことをとおしてのみ与えられるのです。

人間はみな飢えているだけではなく、孤独でもあります。私たちのまわりに住む人々、また私たちが毎日顔をあわせている人々は、みな孤独です。人々はみな、ほんとうの愛、よろこび、そして心からの平安を望んでいます。私たちのまわりには、たくさんの飢えている人々がいます。求めている人々がいます。

これらの人々はみな、イエス様といっしょにならなければならないのです。

イエス様だけが、私たちにつぎのような約束をしてくださいました。

「わたし（イエス様）がいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」

（ヨハネ　6・35）

なんと多くの方々が、このみ言葉の真理を、体験的に知るようになったことでしょうか。これらの人々は、力を失い、失望落胆し、みじめで孤独だったのですが、イエス様を知ることによって、今では新しい力と希望とよろこびを見いだす者になったのです。かつては生きる望みも、勇気も失っていたこの人々は、イエス様と出会うことによって、生きる勇気と、人生の真の目的を持つ者になったのです。この本の中でも、多くの方々がそのよろこびを証しされています。

「来なさい！わたしのもとに来なさい！わたしのもとに来る者は、決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも決して渇くことがない！」と、イエス様はきょうも呼びかけておられます。

渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

（黙示　22・17）

＊　　＊　　＊

ここまで読まれて、ほんとうにイエス様を自分の救い主として受けいれられた方々はみな「そのとおりだ」と賛成してくださることでしょう。しかし、世にいう多くのクリスチャンといわれる方々は、新しい力と希望とよろこびを見いだした者、生きる勇気と人生の真の目的をしっかりと持った者には見えず、また主にあるすばらしい人生を生きているようにも見えません。そしてそれらの方々は、主なる神について語っているときでさえ、はっきりした確信を持っていないように見えることが多いのです。これらの方々は、無意識のうちにいわゆる「キリスト『教』」と

いうものに染まってしまっています。「ほんとうの神は、キリスト『教』の神である」と。しかしほんとうにそうなのでしょうか。決してそうではありません。救い主である神、生きておられるまことの神は、「宗教」とはまったく関係のないお方です。すなわちまったく無「宗教」のお方です。今日の組織された「キリスト『教』」は、キリストご自身によって造られたものではなく、その昔、ローマ帝国の時代に人間によって作られたものです。

＊　　＊　　＊

また、よく「私の教会こそが聖書的であり、福音的です」と言われるのを耳にします。しかし「聖書的、福音的である」とは一体なにかという話になると、どこまでいっても平行線になり、終わりのない議論になってしまいます。自分の「理性」に頼る人間は、何が聖書的か、福音的か、決して理解し、判別することができません。聖霊だけがこの事実を、ちっぽけな、あわれむべき人間に啓示してくださることができるのです。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ　1・12）

聖霊によって導かれる者は、使徒パウロがとったのと同じ態度をとるでしょう。

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。（Ⅰコリント　2・2）

そしてその結果は、まことのよろこびであり、真の自由です。

＊　　＊　　＊

主イエス様は「わたしは…『わたしの』教会を建てます」（マタイ16・18）と言われました。しかし多くの方々は「私たちは、自分たちで教会をたてあげなければならない」と考えています。しかしそれは大きなあやまりであり、そしてまったく不可能なことです。なぜなら、主なる神だけがご自身の教会をお建てになることができるからです。

たしかに主は、主を信じる者をご自分とともに働く者として用いようと望んでおられます。

私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。

（Ⅰコリント　3・9）

しかし、もし私たちが自分自身の力に頼って主の教会をたてあげようと思えば、主は祝福してくださることができません。

＊　　＊　　＊

私たちが一つになること、一致する必要があることは、聖書でたびたび強調されています。

御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。

（エペソ　4・3、4）

しかし、まことの一致とは、人間の力で作りだせるものではありません。まことの一致は「聖

霊」による一致です。つまり、イエス様だけが中心です。そしてイエス様のからだである部分部分は、かしらであるイエス様に「私はどうすればいいのでしょうか」と尋ね求めるのです。

＊　　＊　　＊

ある実例をみてみましょう。二人の牧師はたいへん仲がよく、お互いに会うといつもよろこんでいました。ところがある日、一方の牧師の教会から、五、六人の信者が離れて、もうひとりの牧師の教会に移ってしまいました。そうすると、今までのいわゆる「仲のよい友情」はいっぺんにだめになってしまうのです。そのときよく使われるのは「羊どろぼう」という言葉です。しかし、相手を羊どろぼうだと非難する人こそがほんとうの羊どろぼうです。なぜならば、信者は決して自分の所有物ではなく、「イエス様に属する者」だからです。イエス様に属する者を「自分の信者」だと思いこんでしまうところから、このような間違いがはじまるのです。

主イエス様のみもとにいった者は、イエス様によって受け入れられ、もはや人間の所有物ではありません。徹頭徹尾、主のものです。

＊　　＊　　＊

よく、教会の「会員」を増やすために、多くの教会が集まって伝道のための大会を開こうという計画がもちあがります。しかし多くの場合、それをとおして無意識のうちに妥協がおこなわれる結果になってしまいます。なぜならば、その大会が開かれている何日間かのあいだ、異なった福音を提供し、異なったイエス様を宣べ伝え、したがって異なった霊に支配されている人々とともに働くことがよくあるからです。この危険は、今日、もっとも大きなものになっています。

というわけは、ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです。

（Ⅱコリント　11・4）

イエス様ははっきりと、つぎのように預言なさったのです。

「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」

（マタイ　7・22、23）

＊　　＊　　＊

人間的な思いでなにかをやろうと思えば、しかたなく人間的な方法でお金を得るために宣伝せざるを得なくなるでしょう。しかし、もし、かしらであるイエス様がすべてを計画なさるお方であるなら、人間的な方法でもって必要なお金を得るための宣伝などしなくてもいいはずです。献金するために、と勧められた多くの方々は、そのことでつまずいてしまったのです。また、未信者からお金をとることもよく見られますが、主イエス様は未信者のお金を絶対に受けとろうとは

なさいません。したがって私たちも未信者からお金を受けとるべきではありません。

＊　　＊　　＊

最後にゼカリヤ書からのみ言葉をとおして、主のみ心を自分のものにしようではありませんか。

「しかし、わたしが、それを取り巻く火の城壁となる。――主の御告げ。――わたしがその中の栄光となる。」（ゼカリヤ　2・5）

「シオンの娘よ。喜び歌え。楽しめ。見よ。わたしは来て、あなたのただ中に住む。」（ゼカリヤ　2・10）

「見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。」（ゼカリヤ　3・4）

「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」と万軍の主は仰せられる。大いなる山よ。おまえは何者だ。ゼルバベルの前で平地となれ。（ゼカリヤ　4・6、7）

目次(1)

はじめに……ゴットホルド・ベック　7

光よあれ　私たちは主のもの　69人の証し　第7集

1　真理への道……神竹孝至　21
2　神様のご計画……神竹礼子　35
3　闇から光の中へ……上野　哲セツ　50
4　たよりになるのは神様だけ……中島　仁　69
5　真実を求めて……中島尚子　82
6　私たちに弁解の余地はない……岡本雅文　94
7　くり返し「生きよ」と言われた主……岡本恵子　111
8　いつも喜んでいなさい……深沢門太　122
9　主の奇しきみわざは……深沢節子　138

10　奇蹟コミュニケーションで回心……飽戸　弘　152
11　目を開かれて……飽戸安子　206
12　私のすべてであられる主……友野雅志　215
13　主だけを見上げて……友野和子　235
14　いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を……児玉熙子（ひろ）　249
15　何と深い主のめぐみ……山崎曄子（てる）　283
16　主とともにある平安……藤澤順子　297
17　汚れと恥の深みから……吉田　浩　307
18　主の御名を呼び求めて……吉田和子　325
19　すべてを益とされる主……白石万里子　342
来なさい！……ゴットホルド・ベック　370

続く

目次(2)

49人の証し（カラーページ）……161

・私が弱い時にこそ強い…小々馬亜彦／喜び、希望、平安…小々馬真理子
・患難さえも喜んでいます…喜屋武昌信／重荷から解放されて…喜屋武信子
ともにいてくださる主…知念周子／主の愛につつまれて…比屋根さつき
神様感謝します…喜屋武倫子
・恵みを数える生活…大澤秀樹／苦しみに会ったことは幸いでした…大澤雅子
親愛なるイエス様へ…大澤綾子／いつも守ってくださる主…大澤宣明
・King of Kings に全てお任せ…櫻本芳弘／救い主イエス・キリスト…櫻本智江
主はただ一つのわが喜び…櫻本美世子／わたしが主である…櫻本佳子
・主のみこころのままに…故及川廣太郎　及川恭子
・主よ感謝します…松田博／あなたこそ私の主…松田由紀子
・天国に国籍を持つ…野田房男／主の呼びかけ…野田洋子
・私たちの生ける望み…槙野忠秋／イエス・キリストの恵み…槙野静子
・まことの救いへ…藤原民雄／導いてくださるイエス様…藤原晴子
・主とともに歩む人生…渡辺進／主はすばらしい…渡辺智子
・日々主に仕えながら…野口修／主は私の羊飼い…ブリギッテ・アンゲリカ・ベック

• 大いなる赦しの神…辻陽一郎／イエス様だけが道…辻純
• 主とともに歩むよろこび…濱田敏夫／主をほめたたえます…濱田千恵子
• 主の恵み…近森大志郎／ひとみのように見守る主…近森いづみ
• 救い主に出会えた喜び…中野覚治／野の草でさえ愛される主…中野鶴美
• 与えられた真理への道…浅野寛治／主にある自由…浅野温子
• 主は盛んになり私は衰える…長岡健次／ただ主の憐みによって…長岡伊津子
• 奥さんを愛していますか…片桐俊文／主は私を愛しておられる…片桐千雅子
• 主にある平安…会沢道広／本当の喜びに導かれて…会沢美世子
• 主の恵みと導き…三上忍／主は今も生きておられる…三上貴子
• 恵みとまことに満ちた主…川島文子　• 憐み深い主のご計画…村田タヤ子

写真特集　日本に、世界に広がる　バイブル・キャンプ

基礎的なみことば……399　「実を結ぶ命」のおすすめ……401　「光よあれ」のおすすめ……402
「神の愛」のおすすめ……404　「絶えず祈れ」のおすすめ……405　キリスト集会のご案内……406

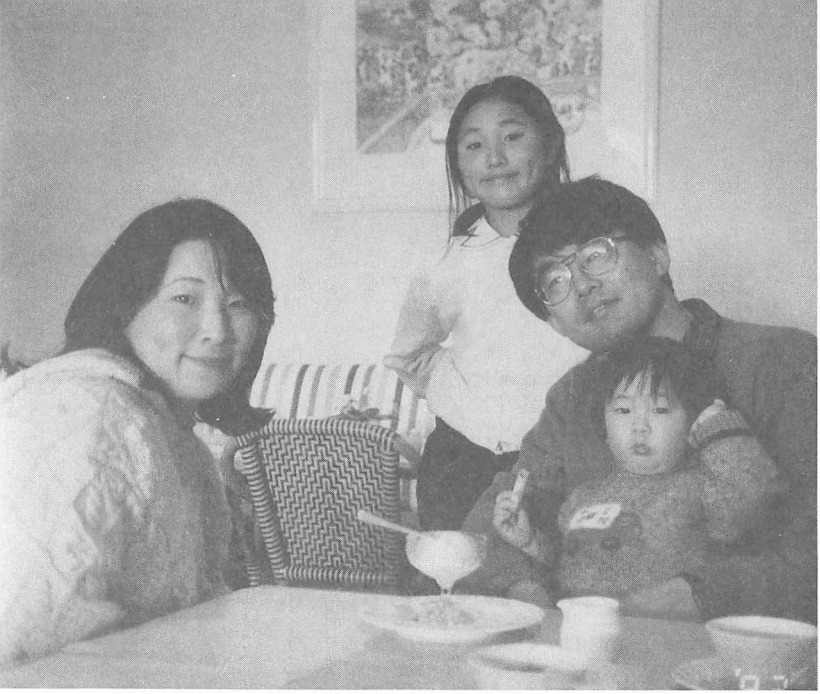


▲左から長女喜重子さん、真至さん、ニュー・オーリーンズで。

上・孝至さん、礼子さんを囲む親戚の方々。1990年３月28日、真至さんの葬儀の前夜式。
▼下・西軽井沢国際福音センターでの納骨式。1992年８月14日。







▲左から礼子さん、長女喜重子さん、孝至さん、長男光至さん。1993年正月家族旅行で。

真理への道

神竹孝至

一九五二年広島県尾道市に生まれる。尾道市立筒湯小、広島大学附属福山中、同高、東京大学工学部電気工学科卒業、同大学院工学系研究科博士課程を経て東芝総合研究所に勤務。主として交換機などの通信機器の研究に従事。工学博士。東芝総合研究所主任研究員。一九八七年から二年間、カリフォルニア大学アーバイン校に客員研究員として滞在。家族は妻礼子さん、長女喜重子さん、長男光至さん。趣味は音楽鑑賞、ピアノ。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ　14・6）

私たちの真至は一九八六年十一月二十五日に、私の立ち会いのもとに誕生しました。生まれたときから健康な子供でした。ほとんど病気をすることもなく、たまに熱を出してもけろっとした顔をして遊んでいるうちに、じきに病気が直りました。男の子は弱いというけれど、この子は丈夫だと信じていました。口が遅く、どちらかというとおとなしい、じっくりタイプの子供でしたけれども、他の子供たちの中にすぐ溶けこんで遊ぶ積極性も持っていました。パパっ子で、私が会社から帰ってくるといつも「パパ！」といいながら玄関まで迎えにきてくれました。私が真至を抱きあげると、熱い口付けをいつもくれるのでした。ほんとうに可愛い子供でした。この上もなく幸せでした。真至がいない生活はまったく考えることができませんでした。しかし、今思うと、もし家族の一人でも欠けたら、この幸せはどうなるだろうと恐れていたような気もするのです。私たちの幸せは、まさにガラス細工のような壊れやすい物でした。

突然の病気

私たちは東京に住んでいますが、私の郷里は広島県の尾道市です。私たちは一九九〇年の正月休みに、いつもと同じように帰郷することにしました。楽しく遊んで、一月六日早朝の新幹線で東京に帰ってきました。昼寝をして夕食をとった後、それまで元気だった七歳の長女喜重子と真

至の様子がおかしいのです。嘔吐と下痢をするのです。しかしその日は、真至はたいしたことはないように見えました。かえって熱もあった喜重子のほうが症状が重いように思われました。翌七日、八日と医者に見せましたところ、軽い感染症ということでした。その言葉通り、喜重子はまもなく快方に向かいました。しかし真至はなかなかよくなりません。八日、私が会社から帰ってくると真至の目の回りが落ち窪んできています。妻の礼子に聞くと、医者から帰った後、かえってひどくなったとのことです。しかし、おろかにも、「脱水症にはなっていません。今日ようすを見てよくならないようでしたら、明日点滴をしましょう」という医者の言葉を鵜呑みにして、病院に連れていかなかったのです。しかも私は「今日しなければならない仕事がある！」と礼子とけんかをする始末でした。その後も、水を求めてひきつるような泣きかたをしていた真至を前にして、看病の順番のことでけんかをするなど、ほんとうに酷い者でした。三日間の看病疲れでへとへとだったとしても、なんの言い訳にもなりません。私はこの時のことを思うと胸がかきむしられる思いがします。いったい私は真至をほんとうに愛していたのか。ふだん、真至を愛しているようでも、このような極限状態になると自分を優先してしまう。これで親といえるか。人間といえるか。私は自分の醜さ、汚さをいやというほど知らされたのです。

あなたは、包囲と、敵がもたらす窮乏とのために、…あなたのうちの最も優しく、上品な男が、自分の兄弟や、自分の愛する妻や、まだ残っている子供たちに対してさえ物惜しみをし、自分が食べている子どもの肉を、全然、だれにも分け与えようとはしないであろう。

（申命記　28・53～55）

これは、後で知った旧約聖書の聖句ですが、まさに私のことを言っていると思いました。

九日早朝の五時近くになって、真至はもう吐くものもないようになってきました。さすがにがまんができなくなって、救急車を呼んで広尾の日赤医療センターに連れていきました。しかし、救急車に乗るとき「救急車だ」といって喜ぶぐらい、意識はしっかりしていましたので、その時でさえまさか死にいたるほど重体だとは予想もしていなかったのです。日赤の先生も、脱水症状はかなり強いが、原因はロタウィルスで重い病気ではないという判断でした。脱水症状への療法として点滴をすることになりました。一本目の点滴のときは、点滴が嫌で暴れまわるぐらい、しっかりしていました。一本目の点滴が終わるころ、少し静かになってきました。「かわいそうに。疲れたんだね。少し眠った方がいい」そんな呑気なことを思っていました。二本目の点滴に換えるとき、もう一度先生が来られましたが、先生も何の変化も気付かれませんでした。しかしまもなく、真至がとろっとし始めました。目を開けてどこかをぼやっと見つめているようです。少し涙を流しています。目玉が少し振動しています。はじめは何を見ているんだろうと思っていましたが、ふと不安になりました。まさかと思いながら、真至の前で手を振ってみました。真至のほっぺをたたいてみました。何の応答もありません。「先生、来てください！」しかし、その時にはもうまったく意識がなく、瞳孔反射すら非常に弱くなっていたのです。二本目の点滴になってからわずか一時間後でした。

神様の救い

それから大騒ぎになりました。何人もの先生がた、看護婦さんが飛びこんできます。「お父さん、ちょっと外に出てください！」。それから悪夢のような日が始まったのです。ぼーっとしながら礼子に電話をしたこと。礼子の悲鳴のような声が聞こえたこと。先生から、脳腫瘍かライ症候群の可能性があるといわれたこと。検査の結果どれでもなかったこと。調べてみると真至のおしっこが一滴も出なくなっていたこと。すぐに小児科病棟に入院になったこと。礼子が病院にとびこむと、力つきて崩れ落ちたこと。どれを思い出しても辛いことばかりです。しかし、このときはまだ希望がありました。脳波はまだ出ていましたし、午後になっておしっこもわずかながら出るようになりました。点滴を継続して、水が全身に行きわたれば意識が回復する可能性があったのです。一晩中点滴をして、次の朝には落ち窪んでいた真至の顔はいつもの可愛い顔に戻ってきました。いつ意識が回復するかと待ち望んでいました。

十日午前九時、それまで落ち着いているように見えた真至の血圧がすーっと下がりました。たまたま血圧を計っていた看護婦さんが、「先生、おかしいです！」それと同時に心臓が止まりました。先生が青くなって飛びこんできます。このときは発見が早かったので、心臓マッサージをして強心剤を打つと、まもなく回復をしましたが、もう点滴だけではすませられません。おしっこがでないので心臓に負担がかかっているとのことで、おなかに小さな穴を開けて腹膜透析をすることになりました。悪化はこれにとどまりませんでした。血液が身体の中で固まり始め、その結果として血小板が非常に少なくなり、鼻、口、胃腸などの粘膜から染み出るように出血しはじ

めました。また、肝臓の組織が急速に壊れてきていることが分かりました。

十一日、先生にひそかに「肝臓の恐らく九十パーセントが駄目になっている。非常に危ない」と告げられました。「どうしよう。真至が死んだらどうしよう。礼子には言えないし、どうしよう」。もがき苦しんでいるうちに、初めて「神様、助けてください」とお祈りしました。そして、ふと五年ほど前にお世話になった吉祥寺キリスト集会の江藤さんご夫妻を思いだし、お電話しました。ほんとうにごぶさたしていましたのに、江藤さんご夫妻はすぐにほかの方々と礼子や私を訪ねてくださり、いっしょに悲しんでくださいました。そして、私たちに聖書の聖句を示してくださいました。それから私は、初めて真剣になって聖書を読み始めました。すると、今まで無味乾燥としか思えなかった聖書の言葉が、生き生きと私に語りかけてくるのでした。人の慰めの言葉は、慰めにはなりません。しかし聖書の言葉は、直接私の心の奥底に入り、母親が優しく赤子をだきかかえるように私の心を包みこんでくれました。それはどんなに大きな慰めになったことでしょう。

しかし真至の病状は、十三日にはさらに悪化しました。それまでは意識はなくなっていましたが、呼吸は自分の力でしていましたし、手足や目玉を時々動かしていました。ところが十三日の午前九時ごろ、脳に突然原因不明の血流障害が生じて、血圧が急に下がり、呼吸をしなくなりました。すぐ人工呼吸に切り替えてその場は切り抜けましたが、脳波もでない、自発呼吸もないという一段と悪い状態に陥ってしまったのです。真至の生きている証拠は、体のぬくもりと、強心剤の力を借りてかろうじて動いている心臓だけになってしまいました。そして皮肉なことに、肝

臓の組織の破壊はおさまってきたことが分かったのです。「どうして、どうしてこんなことに…」私たちには神様のなさっていることがまったく理解できませんでした。

十八日、ベックさんが病院に来られ、大きな手で私たちの手を包みこむようにして、ゆっくり話してくださいました。「私たちには神様は見えないし、神様の声は聞こえない。しかしそれは神様がいないからじゃないよ。私たちの罪が、神様と私たちの間に大きな壁を作っているからだよ。この壁は私たちがいくらがんばっても取りのぞけない。だけど、神様に『神様、私たちには何もできません。どうか助けてください』と子供のようにお願いすれば、神様の方からその壁を取りはらってくださるよ」。「神様は私たちを愛していてくださる。神様は私たちによいことしかなさらない。今はわからなくても後でよかったと思うようになるよ」。「真至は病気では死なないよ。人が死ぬときは、神様が呼んでくださるときだよ。真至は死んでも天国で生きるんだよ。天国でまた会えるよ」。

私たちは泣きながら、神様にお祈りをしました。そしてこのとき、私は生けるまことの神様を確信し、神様にしたがって生きていこうと決心しました。帰り道、真至の病状は絶望的だったにもかかわらず、私たちの心は、実に晴れ晴れとしていました。

その後、真至の病状は膠着状態になりました。私は会社への行き帰り、病院によって、真至のそばで聖書を読むのが日課になりました。

彼がわたし（主）を愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に

答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。わたしは、彼を長いいのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう。

（詩篇　91・14～16）

「恐れるな。わたし（主）があなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。…わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」

（イザヤ　43・1、4）

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ　63・9）

これらは特に私の慰めになった聖句です。それからまた、ベックさんのおっしゃった「罪」ということを考えました。私は世間でいう罪はあまり犯したことはないかも知れません。しかし、こうして自分を見つめなおしてみると、自分の心はわがままや、ねたみなどでまっ黒であることがよくわかりました。先に書いた、真至を看病していたときの罪も、この時はじめて自覚したのでした。私は自分の罪の深さにほんとうにおののきました。今まで罪を罪として自覚することさえなかったからです。罪を自覚しない罪ほど大きな罪はありません。

一カ月ぶりのおしっこ

二月七日、まだ真至の膠着状態が続いていました。真至は非常に悪い状態ながらがんばっていましたが、おしっこはあいかわらず出ません。先生からは「一カ月おしっこがでないとなると、腎不全が慢性化したと考えざるをえません」と言われていました。ところがこの日、腹膜透析のチューブが詰まってしばらく透析ができなくなったのを幸いに、腎臓が動きはじめました。それも一時間三十ccを越えるペースで出てきたのです。これだけ出れば腹膜透析の必要はありません。真至の身体中に付いていたチューブを、やっと一つはずすことができました。私たちは神様に感謝しました。おしっこがこんなにいとおしい物だとは思いませんでした。それから、真至のおしっこを見る毎日が続きました。一カ月後に出てきたおしっこは、私たちにとって大きな希望だったのです。真至のおしっこはチューブの先の針から一滴ずつ注射器のなかにポトポトと落ちてきます。そのさまは、勢いよく落ちるおしっこの水滴が水面上を踊るように滑って、あたかも真至がコロコロ笑っているようにも見えることもあれば、勢いがなくてあたかも元気のない真至のように見えることもあります。私たちは、真至のおしっこを見ながら、真至のいろいろなことを思い出したり、「真至、がんばれ、がんばれ」と応援したのでした。

天国へ

三月になりました。真至のおしっこはあいかわらずよく出ています。しかし、分泌物が肺に詰まって、うまく酸素を取りいれることができなくなってきました。酸素不足の状態が続き、次第

に心臓が弱って、血圧も低めになることが多くなってきました。三月二十日、いままで出ていたおしっこが出なくなりました。血圧が七十程度まで下がって、腎臓に血が行かなくなったのです。唯一の希望だったおしっこも出なくなってしまった。私たちはすでに神様を信じていましたが、この時は深い絶望感に突き落とされました。

この日、私たちの庭の木蓮が、寒空の中を、白く気高く咲いていました。それまで、いくら真至の状態が悪くても、雪が降っても、「きっと春がくれば」と思っていたのに、その春がきたとき真至の状態が変わった。私たちはこれで真至は天国にまもなく召されるということが分かったのです。先生方は、人工呼吸器の換気圧を、これ以上上げると肺が破裂するところまで上げて、強心剤も増しました。すると少しは効果があって、血圧が上がってきますが、まただんだん下がってきます。すると強心剤をまた増量します。この繰り返しでした。もう限界にきていることは明らかでした。三月二十四日、どうやってもおしっこがでなくなりました。ずっとおしっこが出ないので身体中がパンパンに腫れあがっています。私たちは、おしっこのでない針の先を睨みつけるように見ていました。真夜中になりました。ふと見るとおしっこがでています。ポトポトポト。軽やかに出ています。私たちは、もう二度とおしっこがでることはないと思っていました。ところが、真至は最後のおしっこをだしてくれています。「真至は私たちを勇気づけてくれているんだ」そう思うと涙が止まりませんでした。真至はほんとうによくがんばりました。お医者さんもびっくりするぐらいがんばりました。「これだけがんばってくれれば、もう直らなくてよい」そう思いました。

明くる三月二十五日は、真至の三歳四カ月めの生まれた日に当りました。私たちは最後の「誕生日」をお祝いすることにしました。真至の好きなミニカーを買ってきて、手に持たせて、いっしょに写真をとりました。そして「私たちは、このような小さなプレゼントしかできませんけれども、あなたさまはもっと大きなプレゼントを用意してくださっていますので感謝します」とお祈りしました。

その年は、例年になく暖かくて、桜がもう満開になっていました。私たちは小児科病棟の三階の窓から、愛しい気持ちで桜の花を見ていました。桜は短い命なのに、生きる目的も聞かず、神様の恵みを受けてあんなにきれいに咲いています。青空の下に輝く桜、深夜街灯に浮かびあがる神々しいばかりに白い桜、どれも私たちの脳裏から離れることはないでしょう。

三月二十七日、午前一時五十三分、真至は何の苦しみもなく、両親に見守られて天国に旅立っていきました。お医者さんがつけた病名は、結局ライ症候群でしたけれども、本当のところは神様が真至を呼んでくださったのです。

私たちには、今もって真至がなぜ三歳四カ月で天に召されなければならなかったか、分かりません。しかし真至の死は決してむだではありませんでした。少なくとも、真至は自分の死を通して、私を神様のもとに連れていってくれました。真至は、私が真至に与えたものよりはるかに大きなプレゼントを私に与えてくれたのです。

「一粒の麦（イエス様）がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で

そのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」

（ヨハネ　12・24、25）

吉祥寺キリスト集会のある方が葬儀のとき、「真至ちゃんという名前は、真理に至る、と書きますね。その名前の通り、真至ちゃんはご両親を真理である神様のもとへ連れていってくれる天使だったんですね」と言われました。ほんとうにそうだと思いました。「私たちは今まで天使を神様からあずかっていたんだ。それだけでも感謝です」、そう思いました。

生まれ変わった私たち

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

（ローマ　6・6～8）

この聖句の通り、イエス様を受け入れ、救われたことによって、今までの罪深い私は死んで、罪から解放された新しい私がキリストと共に蘇りました。しかしそれだけではなく、私には私たちが真至とともに葬られ、真至とともによみがえったような気がしました。もう真至は私たちと

ともに、私たちの心の中に生きていると思いました。

四月十五日のイースターの日、礼子と私は吉祥寺キリスト集会で主に従っていくことをおおやけに証しするため、洗礼を受けました。真至の葬儀をおこなった同じ場所で私たちは洗礼を受けました。真至が優しく見守ってくれているような気がしました。

肉的には、真至のいない寂しさ、悲しさは時として堪えがたいことがあります。もはや何も価値がなく、すべてが嫌になるときがあります。家庭の中が、不幸のどん底に落ちたように暗くとげとげしくなることもあります。いぜんのままの私たちであったら、きっと泥沼に入りこんでいたことでしょう。しかし、今の私たちには、幸いなことに主イエスへの信仰と聖書が与えられています。歩みののろい私たちではありますが、最後には聖書によっていつも慰めが与えられます。そして、神様は私たちに限りない恵みも用意してくださっていました。四月のある日曜日、礼拝の中である方が次の聖句を引用されました。

…彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから。　（創世記　4・25）

どういういきさつで引用されたのかは忘れましたが、私はこの聖句に電気で打たれたようになりました。これは、イエス様が私たちに新しい子を授けようとおっしゃっているに違いないと思いました。そしてその年の八月三十日のこと、礼子が懐妊していることが分かったのです。神様は弱い私たちをあわれに思って、目に見えない形だけでなく、目に見える形としても、恵みを与えてくださったのでした。私たちは、また大きな希望が与えられました。「ほんとうによかった。

イエス様のなさることはすべて美しい」。真至の死は、大きな痛みではありますけれども、それも含めてすべてがよかったといえる日が必ずくることを確信しました。

そして翌年の五月、私たちは男の子を主からいただきました。光至と名付けました。主の恵みに深く感謝しています。

私の今の望みは、私、礼子、長女喜重子、長男光至、そして私や礼子の両親など家族がそろって、主イエス様への信仰を持って生きることだけです。時がきたら、主イエス様は私たちを天国にまっすぐ引き上げてくださいます。私はそのときを待っています。天国では、真至と私たち家族は再会でき、そして主イエス様のみもとで永遠に別れることはないからです。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。」

（ヨハネ　11・25、26）

見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

（黙示　21・3、4）



▲真至さんと礼子さん。アメリカから帰国する前日に。

神様のご計画

神竹礼子

一九五三年東京都目黒区に生まれる。玉川小、目黒区立第十一中、都立深沢高、東京学芸大学教育学部音楽科卒業。小学校音楽教諭として勤務し、夫孝至さんと結婚。一九八七年夫が留学のため家族で渡米、二年後帰国。家族は夫孝至さん、長女喜重子さん、長男光至さん。趣味はスポーツ、旅行、美術、音楽鑑賞。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者　3・11）

私の家族

幼いころから私は友だちも多く、夕方までよく遊びました。父は大学に勤めていました。私が幼稚園のころは、父は毎日のように本を買ってきてくれ、「もう読んだの？　じゃあ、またあす買ってこようね」と約束し、寝る前になるとよくいっしょに歌を歌いました。父が学会などで地方に行くと、粘土や絵の具などをおみやげに買ってきてくれました。私は父が帰ると、眠い目をこすりながらもいつも父のおみやげに楽しい思いをしたものです。私が中耳炎をおこしたり、からだ中にあせもができたり、はしかになったりしたときには、父が午前中か夕方に、近くのお医

者さまにつれていってくれました。母は私が小学校に上がったころから病弱で、高校生になるまでに三度も入院しましたが、生命にかかわるような病気ではありませんでした。我が家には、私が小学校六年生になるまで、父の仕事のじゃまになるのでテレビがありませんでした。中学生のころまでは、夏休みにはいつも家族で海に旅行し、またクリスマスになると母がすてきな洋服を着せてくれ、レストランでそろって食事をするのでした。食事が終わると、ディズニーの映画や動物記のような映画を見にいき、みんなで楽しみました。父は大変子どもを大切にして育ててくれたと、いまでも感謝しています。

父は、病弱の母が入院中は大学から早く帰って、私たちに野菜がいっぱいのお料理を作り、母がいない間に子どもたちがおなかをこわしては大変と、生のレタスまで湯に通してていねいに食べさせてくれ、朝には私と弟と父自身の三つのお弁当を用意してくれました。日曜日になると、家の網戸を手製で作ったり、多摩川べりに遊びに連れていってくれたり、ふすまをはりかえたり、いまふりかえってみると大変まめな父親でした。

父は保守的な家庭に育った長男でしたが、「自分の築く家庭では言いたいことは言う、泣きたいときは泣く、笑いたいときは笑う、という方針だ」と、新婚時代に母に希望を言ったそうです。大恋愛のすえ結婚した父と母でしたので、けんかもよくしましたが、円満な家庭でした。そんな父でしたので、我が家には学生さんがよくいらしていました。私が小学校のときは、勉強にもしつけにも厳しく、よく叱られ、足ががたがたと震えたりもしました。まめな父に比べ、母は明るくざっくばらんで何でも話し、何かをおなかに溜めておくということができない性格でした。私

がくよくよしているといつも「泣きっつらに蜂、笑う門には福きたる」といって笑うようにしてくれました。

中学生のときでした。母が入院中、父が性教育を私と弟にしてくれました。「本当に愛しあって結婚をきちんとしてからじゃないとだめなんだよ。分かるね」と教えてくれました。私は高校生になって、いろいろな週刊誌や友だちから性教育を受けたのではないことに非常に感謝しました。父と母が愛しあって私と弟が生まれたことを直接父の口から聞いたことは、いかにも純粋で神秘的でした。私はこのような父と母に囲まれて過ごしました。父と母は学業の成績も中学生のときから本人に任せ、まったく無関心で、私が高校生のころ赤点という悪い成績をいただいたときも「学校から赤点の知らせがきたね。親が励ますようにと書いてあるけど、どうするの」と言われ、「試験の十分前にやっと教科書を見て十八点しか取れなかったからしかたないのよ。ごめんなさい」と答えると、あきれかえった顔をしているだけでした。母も、ふつうの母親のように子どものために何でもしてくれる母とはまるで反対で、私と弟が中学生のとき、弟は毎日お風呂掃除、私は毎日夕食後のお茶碗洗いをさせられました。子ども部屋がどんなに汚れていても、母は掃除をしませんでした。高校生になると、父と母は地方の学会によく出かけました。私と弟は協力して留守番をしました。弟はかけがえのない私のたった一人の兄弟で、父と母がいないときに私が病気になると、食事をきちんと作ってベッドまで運んでくれました。早くから子離れ、親離れができていたのかもしれません。

祖父と祖母のこと

私は小学校六年生のときから母方の祖父と祖母の隣に住んでいました。祖父も祖母もその当時からクリスチャンで私を大変愛してくれました。父と母の初めての子どもは女の子で私の姉にあたりましたが、産後二十六日目に天に召され、二年後に私が生まれました。祖母は初孫の私に「礼子が生まれてみんなが喜んで、私も幸せだったのよ」と言っていました。私の姉が召されたとき、母は、おもちゃなどを放り投げて悲しんで、せまい部屋の柱の前にぼう然と座って、何もする気がなく、窓ばかり見て泣いていたそうです。母親である祖母はそのようすを見て、ほんとうに心配し、祈り続けたと話してくれました。祖母はクリスマスにはいつも「礼子が一番欲しいものを買いにいきましょう」と言ってくれました。年に一度、祖母とすてきなものを買いにいくことは大変な喜びでした。そのとき買ってもらったオーバーや革靴を、私は長い間とても大切にしていました。

祖母の家から踏み切りをわたったところに、脳のご病気で半身が不自由な方がいらっしゃいました。その方がこられると、祖母は必ずお昼をたくさん作って、三人で食事をしていました。その方は半身が不自由なので、どうしても食事のとき汚れてしまうのですが、祖母は口を拭いてさしあげたり、ぼろぼろとこぼれたご飯をいつもにこにこときれいにしていました。「だれも相手にしてくださらないんですって。だから大切にしてさしあげなくてはいけないのよ」と教えてくれました。祖父も嫌な顔一つせず、「踏み切りが危ないから」と、必ず手を引いて踏み切りをわたらせてさしあげてから帰ってくるのです。私は今でもこのような暖かい祖父と祖母を大きな誇

りに思っています。

私の祖父は幼いとき母親を亡くし、青山学院の神学部を卒業し、本当は牧師になりたかったのですが、英語ができたのと暮らしが貧しかったので、三菱商事に入社したのだそうです。祖母は八歳のとき母親を亡くし、やがて青山学院の英文科に進みました。学業の途中で原因がよく分からない頭痛に悩まされ一年休学しましたが、その間家庭教師として祖母の勉強をみたのが祖父だったのです。祖母はどんなことをしても祖父と結婚したくて神様に祈る毎日だったそうですが、「もし結婚できなかったら、修道院にいって尼さんになるつもりだったから、絶望ではなかったのよ」と話してくれました。祖父も、祖母に「結婚できないのなら洗足池に飛びこんでしまう」という脅迫まがいの恋文を出したそうで、いろいろな反対といくつもの山を越えて、やっと結婚しました。やがて生まれた長男がコレラにかかりましたが回復し、次女が大火傷をしたときも生命が助かり、戦争のさなかにも祖父と祖母と五人の子どもは奇跡的に無事に外地から帰国できるなど、主の憐みと恵みをたくさんいただいたそうです。そのころ祖父は台湾や香港などで商社の支店長をしていました。祖母は、残留孤児や戦死なさった人のことを聞くたびに、戦争中も神様が私たちを生かしてくださったように思える、と語っていました。

帰国してすぐ、祖父は関西のほうへ単身赴任し、栄養不足と薬の飲みすぎでおかしくなりましたが、祖母の深い愛情と真剣な祈りで奇跡的に元通りになったそうです。祖父が召された日、私は祖母と召された祖父の三人で、同じ蚊帳の中に一晩泊りました。祖母は夜中にたびたび起きあがっては祖父の足や手をさすり、「出ていけ、なんていう言葉は一度も言われたことがなかった

のよ」とぽつりと言いました。今ふりかえってみますと、祖父が召された後、祖母が祖父のことで涙を流した姿を、不思議に見たことがありません。また悲しい、寂しいと、寝こんでしまうということもありませんでした。祖母はそれからも十三年間、一人で身のまわりのことを確実にこなし、聖書を読む日々を送っていました。じゅうたんはピンクを選び「ティーカップは白地に赤い花のついたものが明るくていいわ」と語り、私はそんな祖母が楽しくてモダンで大好きでした。

結婚へ

大学、そして就職へと時がたちましたが、私はあいかわらず家族の愛につつまれてほんとうにころころ笑い、ころころと太っておりました。就職して二年目に、父の大学の研究室のある方から結婚の申しこみを受けました。私は安易に考え、ついその方のご両親にお会いしたりしたため、急速にお話が進みましたが、いまひとつ気がすすみませんでした。私は祖母や母のように大恋愛をして結婚をしたかったので、愛のない結婚ということでこのお話をお断りしてしまいました。父はその方がたいへんよくできる方でしたので残念に思い、なんとかならないものかと考えすぎて、軽い脳卒中のようになりました。私は両親の心を痛めた自分がひどく悲しく、心から反省しました。

その直後、私は今の主人とお互いの友人の結婚式で出会いました。優秀な方だと聞きましたのに謙虚で思いやりがあって、おまけにピアノも弾いて、初めて会って隣に座って、「こんな方と結婚できたらいいのに」と感じました。二次会の帰りぎわに「僕が送っていってあげるから、家

に電話してもう少しいたらいいじゃない」と言われたのに帰ってしまい、ああ人生で一番のチャンスを逃してしまったと悔いました。「僕は夕方六時半ごろ、お茶の水の駅をうろうろしてますよ」とのことでしたので、すぐにお茶の水のアテネフランセの英会話を申し込んで、私も一カ月ぐらいお茶の水の駅を六時半ごろうろうろして、偶然に会うことを望みました。それから約四年間、彼のことをふと考えることはありましたが、会う機会はありませんでした。

私には父が大学教授ということでたくさんの縁談があり、いろいろな方とお会いしました。そのたびに「相手の方は悪い方ではない。とってもいい人なのに、なぜ愛情がわかないのか。結婚したらよい夫、よい父親になって必ず幸せにしてくれそうな方なのに、なぜ好きになれないのだろう」と迷っていると、母は「ぜいたくばかり言っていると、ほんとに独身になっちゃうのよ。自分がどれくらいの人間かよく考えなさい」と怒りだします。祖母は「必ず神様が決めてくださるから、あせってはだめ」と励ましてくれました。

二十七歳になって、親友が結婚したこともあって、友人に頼んでふたたび今の主人に会わせてもらうように頼み、パイプオルガンの演奏会で再会しました。私は何とか彼が私を一目見て「結婚したい」と思うようにという願いをこめて純白のワンピースをわざわざ着て、会場にいきました。二人だけになって話しているとき、彼は私の仕事への情熱を面白そうに聞いてくれました。電車の中で「また会っていただけますか」と言われたとき、夢のようで、私は「あさってまたリコーダーの演奏会があります」と言って、またお約束しました。それからあっという間に結婚へと導かれました。

九十歳の祖母は「赤い屋根の白いおうちに住みたかったから」と言って私たちのために家を新築してくれ、祖母が一階、私たちが二階に住むことになりました。その年の十二月六日に結婚し、四月の初めに懐妊していることが分かりました。私がびっくりして病院から祖母に連絡すると、「そんな気がしていたから驚かないけど、おめでとう」と言ってくれました。そして結婚一周年の記念日に私たちの長女が生まれました。名前は喜びが重なったという意味で「喜重子」と名づけました。祖母は毎日喜重子を見に二階までやってきました。私が喜重子を連れて夕方遅くなるまで買い物に出かけたときなどは、心配そうに道路まで杖をついて出て私たちを待ってくれていました。もう少しで喜重子が三カ月になるというとき、祖母はくも膜下出血で倒れましたが、意識がなくなる前、上を見あげてにこにこと微笑み、私の手を握っていました。祖母は「召されたらイエス様のところへ行くのよ。一番好きな人もそこにいるの」といつも言っていましたので、私はきっと祖父と、祖母の父とがそこで待っているのだと思いました。

「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」

（ヨハネ　14・3）

私は祖母が亡くなったときほど寂しい日々を過ごしたことはありません。「一年の育児休暇を取って、幼い娘と祖母といっしょにこれから楽しもうと思っていたのに」。「これからうんといろいろなことを手伝ってあげたかったのに、何もしてあげられなかった」。窓の外を眺めては「何

とかしてもう一度会いたい」と思いました。祖母は私がイエス様に従うようになることを心から望んでいて、「私の子ども五人はクリスチャンになれなかったけれど、礼子は必ずイエス様を信じる人になる」と言っていましたので、まことの信仰を持てば、必ず天国で祖母に会えると思いました。育児休暇のあと一年半ぐらいお仕事にもどり、共稼ぎの生活をしましたが、主人のアメリカ留学が決まり、退職しました。

そのころ、ある方が「光よあれ」を送ってくださいました。主人は早速読んで、「こういうところなら僕もいってみてもいいよ。いっしょにいこう」と言いだし、軽井沢のバイブル・キャンプに参加しました。そこで江藤さんご夫妻にはじめてお会いしました。主人は「いくまでは疲れるけれど、いざいってみると、疲れがとれ、皆さんの目が光って、いいところだなあ」と言っていました。私は、聖書を読むようになり、「今すぐにでもイエス様を信じる人になりたい。何とか主人とアメリカに行く前に…」と祈っていました。

やがて、生まれる前から名前を決めていた男の子、真至が生まれました。十一月二十五日に生まれ、二十五日はイエス様と同じ日だなあと思いました。真至は生まれたばかりのころから、私の声を聞くとにこにこしました。そのようすを見て、わが子はなんてかわいいのだろうと、もう嬉しくて嬉しくて、すぐにでも三人目が欲しいくらいでした。育児も二番めとなるとさすがに余裕があり、母乳はよく出るし、真至はよく眠る子で夜泣きすることは一度もありませんでした。「なんて親孝行な男の子でしょう」と思いました。

真至が九カ月になるころ、アメリカに一年半滞在することになりました。アメリカでの生活は、

苦しい目にあっても、また悩んだことがあっても、いつも必ず主に守られ、脱出の道が与えられるのでした。毎日曜日にその地の教会に通い、クワイアのメンバーにもなり、多くの親切な友人に囲まれていい思い出をいっぱい持って帰国しました。ほんとに夢のような生活でした。

帰国して三日後、私の父が食道がんで入院しました。主人は仕事、仕事。私は三人目の子どもが欲しくなり、「神様、私たち夫婦はおたがいにわがままでごう慢で、不満がいっぱいで…これでは三人目の子どもはいただけませんね。でも神様、一番いいときに、三人目の子どもをどうかお与えください」と祈っていました。クリスマスとお正月は、みんなそろって健康で、私は百パーセントの幸福感を味わいました。新しい年には三人目の子どもができて、もっともっと幸せになれるような気がしました。しかし心のかたすみには、「なにもかも恵まれていて順調すぎる人生を送っている私と主人は、どかんと逆境に会ったとき、どのようになるのか」と、とても怖い気がしました。そしてそれは、お正月のあとにきたのです。

真至が召される

楽しいお正月が終わった直後の一月九日、真至が意識不明になりました。「まさか」「なぜ」「どうして…」。百パーセント幸せだったはずの私が、不幸のどん底に落ちてしまいました。このときほど真剣に祈ったことはありません。なんとか意識が回復するようにと、夜中も明け方もいつも天を見上げて祈りました。容体が悪くなったとき私が祈ると、「私に任せなさい」という主のお声をまじかに聞いたような気がしました。そしてそのことを主人に伝えました。主人は真至

の枕もとで必死に聖書を読みました。私もいつも聖書を読み、真至のそばに神様がいつもいてくださることを確信しました。意識不明になって三カ月目に入ろうとしたとき、私の祈りは、「神様、どうか真至の意識をとりもどさせてください」という祈りから、「主よ、おまかせします。もし真至が天国に召されるのなら、私は真至のようなほんとにかわいい子どもを三年もの間あずからせていただけて、それだけで感謝の気持ちでいっぱいです。私は神様から真至を授かりました。私は真至を自分の命のように愛しているのです。たとえ真至が寝たきりになっても、何も分からなくても、この子の命があるかぎり、私はよろこんで私の一生をこの子のために捧げます。真至が生かされるなら、もし生きる命を神様がくださるなら、私はどんな苦しみもいといません。しかしどちらにせよ、主のみ心のままになさってください。主がお決めください」と祈りました。

「わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」（ルカ　22・42）

主は三月二十七日に、真至を天に召してくださいました。私はイエス様が真至をしっかりとみ手に抱きとってくださったことを確信しました。病院を出るとき、桜が満開でした。「きっとイエス様が一番いいときを選んでくださった。私が天国に行くときにも、やさしく抱きとめてくださるのね」と思い、ふしぎに涙は出ませんでした。

私たちの結婚のお仲人さんをしてくださった奥様が「あなたは天使を授かったのね」とおっしゃってくださり、心からそう思いました。私にとってはほんとうに天使のようにかわいい、優しい笑顔が魅力の真至でした。

あれから多くの日々が過ぎさっていきました。けんめいに看病した日々の苦しさは、主が一日一日と拭い去ってくださいましたので、思いだすこともまれになり、寂しい寂しいという思いもいつしか心の底に沈んでいきました。私は祖母の建ててくれたこの家にいます。祖母の小さな信仰が我が家に伝わり、これから私の家にイエス様を信じる人々があふれるようなようすが見えます。真至が亡くなったすぐあとで、主人に「私が悲しくて寂しがってると、天国の祖母が涙を流して心配しているわね」と言いますと、主人は「くすくす笑っているよ。おばあちゃんには全部先が分かっているんだからね」と答えてくれました。こんなことがあった後は、お仕事が手につかなくなったり、お酒に溺れてしまったり、夫婦が別れ別れになったりということをよくうかがいますが、私たちは聖書によって平安を与えられました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

苦しみを乗りこえた夫婦こそ、結婚していることのすばらしさがよく分かるのだということも知るようになりました。私が主人に一目会って愛情がわいたのは、きっと主のみ心だったのでしょう。聖書がなければ今の私はありません。私の姉が産後すぐに亡くなり、祖母の信仰を私が受け継ぐことになったのも、すべて主のご計画だったのです。祖母は「目に見えないものがいちば

ん大切なのよ」とよく教えてくれました。

その後、この証しを書くようにと言われ、私はどうしたらよいか分からず、「イエス様、『光よあれ』の証しをどのように書いたらいいのでしょう」と、毎日真剣に祈っていました。ある夏の明け方のこと、いつものように祈っていますと、主が私の耳もとで「真至君のことは忘れなさい」とおっしゃったような気がしました。「え？　忘れることなんてできません」とお答すると、「次の子どもを大事にしなさい」とまたおっしゃいました。私はほんとうに不思議なことがあるものだと思っていましたら、その後二十日ほどして、おなかに赤ちゃんがいることが分かりました。「光よあれ」の原稿のお話が私のところに来ましたのも、きっと主のご計画で書くことになっていたのですね。そして何よりも、「真剣に祈る」ということを、真至を通してイエス様から教えていただきました。イエス様を信じるようになってからの祖母も、いつもいつも真剣に祈っていたのだと思いました。これからは、私はイエス様にすがって生きていこうと思っています。また、キリスト集会の方々の中に守られて、多くの恵みをいただいておりますことも、主のご計画です。感謝申しあげます。

私の幼い娘の喜重子は、小学校一年生のとき弟を召されました。彼女は身も心も純粋そのものの年齢でしたから、きっと淋しさとやるせなさの中でそれからの日々を過ごしてきたと思います。娘はアメリカの自由な生活の中から帰国し、日本の小学校の規則に従うのは大変で、その上にこのような悲しみが訪れたわけですから、さぞかし苦しかったことでしょう。私が娘の年頃には母は病弱でしたが、このような悲しみを経験したことはなかったわけですから、弟を失った娘

の淋しさを思うとかわいそうでかわいそうで、私はずっと娘のためにも祈り続けていました。はじめ喜重子は「私は真至くんがいないとだめなの。トイレにもいけないし、ひとりで眠ることもできない。お母さん、助けて」と泣きました。しかし、それからしばらくたつと天国の絵をよく描くようになり、毎晩寝る前には「真至くんはイエス様と、きょうはどこへいきましたか?」「真至くんはイエス様といつもいっしょだから、安心しています」「きょうもぶじに過ごせてありがとうございます」とお祈りができるようになりました。私と同じ苦しさを幼いときに知った喜重子を見ていると、ほんとうにイエス様からの恵みだと思うことがよくあります。ベックさんはよく私たち夫婦に「幼子のようになって信じなくてはいけないよ」とお話してくださいますが、喜重子はまったく幼子のようにイエス様を受け入れているのです。娘の喜重子は、私たち夫婦の信仰の見本として神様が目の前に置いてくださったのではないでしょうか。まだ幼いので、日曜日の礼拝にもすぐあきてしまい、「公園の方がいい。早く帰りたい」などと言いますが、「でも日曜学校の先生はだい好き」と答えます。私たち夫婦にとって娘はほんとに大きな慰めであり恵みです。

桜が満開の三月二十七日、真至が神のもとに先立ち、その一年後、桜が満開の四月三日に、男の子が神様によって与えられました。光よあれ、そして私たちの希望の光ということで、光至と名づけました。心から感謝の気持ちで毎日を過ごさせていただいております。

イエス様はいつもぎりぎりのところで私たちを助けだしてくださいます。私が「イエス様!」と手をのばしたとき、必ずすれすれのところで私の手をとってくださり、その手をしっかりと握

ってくださることを、今は心の底から確信することができます。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・3～5）



▲左からセツさん、哲さん。自宅にて。

闇から光の中へ

上野　哲

一九二八年宮崎県小林市に生まれる。西小林小、旧制小林中、海軍兵学校七五期卒、旧制第五高等学校卒、九州大学文学部中退。福岡商会、関東石油を経て、一九六六年石油販売会社東英通商を設立。一九七五年頸動脈血栓にともなう言語障害と半身不随のまま今日にいたる。家族は妻セツさん。

上野　セツ

一九二八年小林市に生まれる。西小林小、都城高等女学校卒業。一九五〇年哲さんと結婚。

まえおき

夫の哲は脳障害のため、しゃべることも、筆談もできず、自分の思いをほかの方々に伝えることができませんので、妻の私が主人に代わって証しを書かせていただきます。

一九七五年春の早朝のこと、主人が泣いている大きな声で目が覚めました。とっさに、自営の会社がうまくいっていないのでそれを苦にして気が狂ってしまったのだと思いましたが、調べてみると右半身が麻痺し、言葉も失っていることがわかりました。入院して調べたところ、頸動脈血栓と椎骨動脈狭窄症とのことでした。長男が就職し、次男が高校に入学して一週間目のことでした。それから主人は一年二カ月にわたって入院しましたが、最後には医師から「生命はあと二年、長くても六年」と宣告され、失意のうちに退院しました。しかし、主人は十七年たった今もなお、生かされております。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。

（伝道者　3・1、2）

私たちの過去はほんとにひどい思い出ばかりで、私はイエス様に出会って救われるまでは、「あんなおぞましい過去など、一日も早く忘れ去ってしまいたい」と、そればかりを願っていました。しかし、イエス様に出会い、救われてはじめてわかったことですが、そのおぞましい過去こそが、母の胎で私を組み立てられ、私たちのすべてをご存じの神様のご計画によるものだったのであり、神様の愛だったのでした。神様の懲らしめがなかったなら、傲慢な私たち夫婦は、決

して決して神様に目を向けようとはしなかったことでしょう。私は天と地を形造られ、そのすべてを支配しておられる神様を信じようともせず、主人が倒れ、思考力、言語を失ってもなお人間の力を信じ、自分により頼み、努力することによって明日に希望を託そうとしていましたが、そのこと自体が神様を無視するという大きな罪になることも知らずに、長い年月を過ごしてしまいました。

彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。（エペソ　4・18）

生い立ち

主人も私も霧島山のふもとで生まれ、二人は同級生でした。主人は学校の成績もよく、道を歩きながらも本を読んでいるような人でしたから、田舎のこととて、まるで秀才あつかいでした。そのことが彼を高慢にし、以後勝手気ままな人生を送るようになったのだ、とよく本人が言っていました。

私はその地の旧家に生まれ、両親のもとでなに不自由のない生活を送るはずでしたが、一歳六カ月頃、近くの子どものいない叔父の家に、旧家にありがちなこととして両親の意志などまったく無視されたかたちで養女に出されてしまいました。それでも幼い頃は、両方の家の親に可愛がられて、どちらの庭でもよく遊び、果実をもいで食べたり、花や虫と一日中戯れたりと、屈託のない子ども時代をすごしたように記憶しています。それに、養家ではひとりっ子として育てられ

ましたから依存心が強く、無思慮で幼稚なところが成長してもとれず、それは大人になってからもずっと続いた私の性格となりました。

小学校の一年生の頃、私をたいへん可愛がってくれた実父が亡くなりました。また、養家にも男の子が生まれ、私の立場も微妙に変化し、私は祖母と未婚の叔母といっしょに離れで暮らすようになりました。

その祖母は大変な仏教信者でしたから、当然私も朝夕仏を拝まされ、お寺に仏事があると、かならず私も連れられていき、よくわからないながら坊さんのお説教を聞かされました。日曜学校も当然仏教ですから、子ども心にも「あの金色の後光のさしている仏がありがたいご利益をくださるのだ」と信じ、以来私の心には仏教が長い間にわたって影響するようになりました。養家の祖母は、私をわが子のように可愛がって育ててくれましたが、血の繋がりを大事にして一族で血筋を守っていくといった考え方が戦前は色濃く残っていましたから、私も幼いうちから親戚の男性の許嫁に予定されており、また年頃になってからは私が行きたかった宮崎師範学校への進学の道を断たれたりということもあって、私は養家に不満をもつようになっていきました。やがて私は、女学校卒業と同時に女子挺身隊に動員され、軍需工場で働かされました。いまの主人は海軍兵学校の七十五期生でしたが、卒業と同時に終戦を迎えました。私は郷里に戻り、そこで帰ってきたいまの主人に出会って、有頂天でした。ともに敗戦の痛手をいやしたいという思いが強く、また文化にふれたくて、姉などといっしょにさかんに本の貸し借りなどをしていました。主人はその頃、ほんの少しの間ですが教会に行っていたことがあったようです。まもなく主人は大学進

学のため、私と結婚の約束をして郷里を離れました。そのとき、教会に行っていた頃の聖書だと言って、文語文の聖書を私にくれました。難しくて読むこともありませんでしたが、どんな苦境にあるときも、その聖書だけは私と一緒でした。今もわが家の本棚にその聖書があります。

結婚して

そのうち、内緒にしていた主人との交際がばれてしまい、養家の叔母が「この家におくわけにはいかない」と、私を生家に返してしまいました。実母はそれをとても悲しんで、再び私を養家に戻そうとしませんでした。手塩にかけて育ててくれた祖母を、結果として裏切るような形になった罪悪感と、祖母が悲しみながら「おまえは今に罰が当たるよ」と言ったその言葉は、以後、苦しいこと、つらいことにあうたびに、私の心を暗くするのでした。ずっとあとで主人が倒れたときも、郷里では皆が天罰だとささやきあっていたようです。私はそのことを心の中から追い払おうとしましたが、「もしかしたら」という恐れを振りはらうことができませんでした。イエス様に出会うまで。

生家に戻ったものの、そこでも母の代が終わっていましたから、なんとなくいづらい雰囲気で、主人の結婚の申し込みがあったのをいいことに、なんの生活の手段の見込みもないままに結婚に踏み切りました。主人は福岡の九州大学へ、私は主人の家で卒業を待ちながら農業を手伝って過ごしました。やがて出産し、育児、慣れない農作業、家事いっさいの労働に疲れはて、よちよち歩きの子どもを連れ、主人と同居するつもりで、半ば強引に主人のところへ行きました。しかし

待っていたのは、惨澹たる結果でした。結局、子どもは主人の家へ引き取られ、私は生活のために東京の姉を頼って上京せざるをえなくなってしまったのです。つらい三年間でしたが、懸命に我まんしました。その間、私が心の頼りにしていた母が、がんで亡くなりました。

主人は学費滞納で大学を除籍処分になり、就職しました。親子三人で暮らすことを夢見て、福岡の主人のところに行きました。が、そこに待っていた主人は、まるで他人のようでした。同居を断られ、無一文の私は、駅に着いたその足で職安へ行き、そのまま住み込みの女中として働かなければなりませんでした。

母の死、変わってしまった主人、子どもといっしょに生活できないこと、慣れない仕事、すべてに失望し、私は服毒自殺を図りました。すでに瞳孔も開いていたそうですが、神様はなお私を生かし、試練をくださいました。

まわりの人々の計らいで、どうにか親子三人の生活をはじめることができましたが、主人は学生時代からの酒豪で、その頃は酒びたりで、私たち親子は食べるものがなく、極貧を越して悲惨そのものの生活でした。

そのさなか、次男を出産しましたが、その次男が生後三カ月で突然顔面と半身が麻痺してしまったのです。そして薬品による全身火傷、二階からの転落と、生後一年間に次々と災いがおきました。思いあまってある新興宗教にすがりましたが、なんの助けにもならないばかりか、辞めようとしても「辞めると祟りがある」と脅され、怖い思いをしました。

倒産、そして発病

主人は周囲の人々から性格破綻者と呼ばれ、私に離婚をすすめる人までできました。借金も増えに増えて家庭は崩壊寸前、さすがに主人もこのままでは自分が破滅すると思ったのでしょう、僻地への転勤で再起をはかりたいと願い出て、長野県の田舎にある福岡商会という小さな鉱山に勤務することになりました。

そこには当然ながら社宅などなく、着のみ着のままで落ち着いたところは村の丘の上にある藁葺き屋根の無人のお寺でした。そのみ堂には大きな仏像がほこりをかぶって置いてありましたが、私はもはや幼い頃のように仏を拝む気持ちはまったく失せておりました。

極貧の中で凍てつく冬をまえに、二人の子どものことを思い胸を痛めていましたが、その会社は半年でなんの前ぶれもなくあっけなく倒産してしまいました。さっそく東京に出て関東石油という会社に再就職しましたが、親子四人で落ち着いたところは会社の寮の一室でした。

長野を去るときには「とりあえず住むところがあって、暖さえとれればいい」と望んでいましたが、人間の欲望とは果てしのないもので、そこも二年たらずで辞め、もっと良い条件の河野興業という会社に転職しました。その会社は社宅もあり、給料もよく、結婚してはじめて一息つくことができましたが、またしても二年で突然の倒産です。

主人は東京へ就職した頃から体の不調を訴えていましたが、あいかわらず酒を飲み続けていました。いま考えると、すでにその頃から現在の病気が進行していたように思われます。

終戦後のきびしい世の中を、ずっと精神至上主義を唱えてがんばってきた主人でしたが、この頃にはさすがに疲れはててしまい、仏教の本をあれこれと読み、「お寺の坊さんになりたい」などと、しきりに言うようになっていました。

倒産した会社の社宅も明け渡さなければならなくなり、思いあまった主人は借金で東英通商という石油売買の会社を始めました。新しい事業に懸命に働いていた主人は、五年目にとうとう入院するはめになり、そのときはなんとか退院できたのですが、さらに五年後、会社もやっと軌道にのりかけたある日、突然発病、四十七歳でついに再起不能になりました。

現代医学にも見放され、死を待つばかりのそのさなか、こんどは当時高校生の次男がぐれてしまい、学校に呼び出されました。その当時、生活に追われてなにもかまってやれなかった次男は、まるで魂が抜けたようになっておりました。先生方の叱責にも無表情で、私は悲しくなり、「先生、私はこんなに一生懸命生きてきたんです。子どもは親の背を見て育つっていうけれど、それは嘘なんですか！」と思わず叫んでしまいました。

帰郷して

主人の生命がもうそんなに長くないのなら、せめて主人の好きだった霧島の山の見えるところに連れて帰ってあげたいと思い、ぐれた次男を長男に託して、私たち二人は郷里に帰りました。これまで対外的なことはすべて主人にまかせ、私は主人のうしろに隠れて生きてきたものですから、郷里で生きていくにはすべて自分が表に出なければならず、とても大変で、すべてが重荷で

した。うまくいかないことも多く、そんなときは、他人を責め、自分を責め、次第に人間嫌いになっていき、それまで私を支えていた精神的なものが音をたてて崩れていく毎日でした。

そんな私とは反対に、主人は六年を過ぎたあたりから日に日に回復し、どうしたわけか碁を打つ能力だけが元に戻り、あちこちで先生扱いされるようになり、碁会所や個人のお宅から呼び出されて引っ張りだこの忙しさになりました。私ははじめのうちは碁ができるほど回復したことを喜んでいましたが、送り迎えもけっこうたいへんで、碁に熱中しすぎては体調をくずす主人を病院へ連れていったり、最悪の場合は入院しなければならず、それやこれやで主人の我がままはひどくなるばかりで、私も看護に限界を感じるようになりました。

こうしたことがつもりつもって、私はついに主人に向かって爆発してしまいました。「私はいったいあなたのなんなの。奴隷？　それとも看護婦？」と言いつのってしまったのです。でも主人は、郷里に帰ってからの私の苦しい精神状態を知るよしもなく、私が言っていることがあまりぴんとこないようでした。

その頃、森林浴にいこうと主人を連れだして、首をつるための木を探しまわったこともありました。一人だけでは一日も生きていけない主人を残して、私ひとりだけが死ぬことはどうしてもできない、と自殺を思いとどまる日々でした。また、「たった一日だけでいい、主人を見てくれる人がいたら、もう少し生き続けていけるかもしれない」などと思ったこともありました。ほんとうに、とりとめもない邪念にかられる苦しい日々でした。

そんなある日、たいそう親切な人が現われたのです。主人の肩をもんでくれたりするので、主

ると事情が変わってきました。それまでは暗記するだけでも十分点がとれたのですが、この頃から応用力が必要になってきたのです。私は創作的なもの、中でも作文などは大の苦手でした。だんだんと勉強が面白くなくなってきました。成績も急速に下がり、卒業時には三百番以下になっていました。

高校三年のとき現役である大学に合格しました。しかし母親からもっとよい大学を目指すようにと言われ、一年間浪人生活を送ることにしました。当時私の田舎の親戚の間では「六大学に合格しなければ一人まえではない」という、今から思うと誤った風潮がありました。それで、何を勉強したいからということで大学を選ぶのではなく、六大学の中でもどこの大学のどこの学部の倍率が低いかと受験情報を調べていました。結局、そのころ倍率の低かった法政大学社会学部を選び、合格することができました。

今思えば私の学生生活は、何の目的もなくただ好きな山歩きをしたり、友人とコンパで騒いだりというふうでした。学費を出してくれた両親には本当に申し訳ないと思っております。

海外駐在員として

卒業後は、親戚の知人が社長をしている貿易会社に入社しました。最初の二年間は国内関係の仕事をしていました。その後輸出部に移り、一年後には突然シンガポール駐在員に任命されました。あこがれの海外駐在員として、同期の人達よりも早くその機会を与えられ、喜び勇んで赴任地に向かいました。

ところがいざ仕事を始めてみると、言葉の問題にぶつかりました。自分の英語力がこれほどお粗末とは思いもよりませんでした。英文と和文のパンフレットを持ってお得意先に商談に行くのですが、英語でうまく説明することができず、和文のパンフレットで内容を確認するという始末です。それでも自分では何とか仕事をしているつもりでしたが、やはり英語力の点で問題があるということで、三年の任期でしたが九カ月で帰国しました。

帰国後は鉄鉱石を扱う輸入部に移りました。そして数年後、今度はインド駐在員のチャンスがやってきました。シンガポールから帰国した後、夜間の英語学校に通っていましたので、二度目の駐在員はなんとか無事にこなすことができました。

その後の約七年間は特にこれといった変化もなく、平均的なサラリーマンの生活を送っていたと思います。その間に尚子と見合い結婚をし、長女美紗子、次女由紀子の二人が生まれました。

そして、いよいよ私が神様の助けを求めるきっかけとなった第三回目の駐在員の任命がありました。赴任地は二回目に駐在したのと同じインドのゴアという所です。ゴアはもとポルトガルの植民地だった所で、最近はかなりの数の日本人観光客が訪れているようです。治安もよく、特にこの地区で産出する鉄鉱石の主な買い手は日本の製鉄会社であるため、日本人に対しては親切な土地柄です。家族も連れて行くことにしました。

赴任して約一年が過ぎたころ、私は高熱病にかかってしまいました。四十一度の高熱が何日も続き、解熱のために使用した薬の副作用による肝機能低下が原因と思われる斑点が両手両足に出ました。現地の医者から、マラリヤの疑いもあるからキニーネを飲み続けるようにと指示されま

した。しかし、薬が強く胃が荒れて、とうとう日本米で作ったおかゆも喉を通らない状態にまでなってしまいました。六十七キロあった体重も五十八キロにまで減りました。その時すぐに帰国して治療に専念すればよかったのですが、任期途中で帰国して評価が下がることを恐れ、その後も一年間駐在員を続けました。

帰国後、身体がだるく顔色も悪いので、病院で精密検査を受けました。結果は、病名がつくほど重症ではないが、肝臓や腎臓の機能が低下しているということでした。やはりインドでの高熱病や薬害などが悪い影響をもたらしたのではないかというのです。会社には、十時頃出社し、無理な残業はしないということで了解をもらいました。何か常に不安な状態が始まったのは、この頃からです。

身体はすぐに疲れ、根気が続かなくなり、仕事の内容を深く思考することができなくなりました。このような状態から逃れたい一心で酒量がぐんぐん増え、今までの倍も飲むようになってしまいました。

当時の私の状態はこんなふうでした。

- 朝早く出社して、仕事を始める。(時間はたっぷりあるのに気持ちが落ち着かないため仕事の内容が全くまとまりませんでした)
- 昼食はなるべく会社の人達が来ない食堂でとる。(食欲がなく、ただつめ込むだけの味気ない食事でした)
- 昼休みは応接室で顔にハンカチをかけて横になる。(こうすることで人から話しかけられる

のを避けていました）

・新入社員のように電話がかかってくるのが怖い。（精神的に不安定だったので会話もスムーズにはできませんでした）

・身体の調子のいい時は残業し、調子の悪い時は家に仕事を持って帰る。（能率が悪く時間ばかりかかるので十二時頃まで仕事をしていました）

・土曜日曜は図書館で仕事をする。（図書館ではまわりにいるのは見ず知らずの人ばかりですし、皆下を向いているのでお互いに顔を見合わせることもなく、その頃の私にとっては実に都合のいい逃げ場でした）

それまでは草木が大好きで、大切に育て、傍らに草木があるだけで心が和む思いがした私ですが、この頃にはベランダに置いてある十数鉢の草木もすべて雑草にしか感じませんでした。また、いつもイライラして怒ってばかりで子供と一緒に遊ぶどころではありませんでしたから、子供たちも次第に私には近づかなくなっていきました。普段考えたこともない自殺が身近に思われ、ふと気がつくと、「他に逃れる方法もないし、いっそ死んでしまおうか」などと考えていることがありました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

（詩篇　119・71・72）

吉祥寺キリスト集会に集う

ちょうどその頃、長女と同じクラスだった本田絵里ちゃんのお母さん、謹子さんから、「吉祥寺キリスト集会にいらっしゃいませんか」というお誘いがあり、初めて日曜礼拝に集いました。一九八九年六月二十五日のことでした。そして七月四日にはベックさんとお話することができました。ベックさんは聖書のルカの福音書にある取税人のたとえ（ルカ18・10～14）を引用して、詳しく神様の話をしてくださいました。二時間ほどの話し合いの中で、最後にベックさんが言われた「仁、あなたが白旗を上げる時に、救われるよ」という言葉が強く心に残りました。

七月九日の日曜日は、ちょうど洗礼式でした。初めて、三十人の方々がおごそかに洗礼を受けられる光景に接し、私自身少し興奮気味で帰宅しました。その夜九州の兄に電話して、自分がイエス様に従いたいと思っていることを話しました。兄は、「信仰は個人の自由なのだから、人に迷惑をかけないのであればいいのではないか」と言っていました。

そのうち、自分でも理解できない心の動揺が始まりました。翌日、なぜか心が苦しく、やっとの思いで仕事を終えると這うようにして重い足どりで帰宅しました。七月十一日の朝になって、身体が震え出しました。なんとかネクタイを締め背広を着ることはできましたが、震えは止まりません。その時、本田さんが何かの用事で団地の下を通るのを妻が見つけ、部屋まで来ていただきました。私の方は震えとともに今度は涙が止まらなくなり、とても会社へいける状態ではありませんでした。その日は火曜日で、吉祥寺キリスト集会で学び会がある日でしたから、本田さんは私に学び会に集うようにと勧めてくださいました。学び会では池田さん、和田さんとお話する

ことができ、だんだん心も和らいできました。

その夜、以前私と同じような経験をしたことがある田中さん、久田さんともお話することができました。田中さんのお宅で夕食をいただいた後、今までの自分の人生を振り返り、自分がどんなことを考え何をしてきたか、また最近どんなことがあったかをとりとめもなく話しました。学生時代はなんとか自分の力で頑張ったこと、インドでの高熱病のこと、その後精神的にもゆとりがなくなり、不安定になったことなどを話しました。私が話し終わると、田中さんの奥さんは、ちょっと考えた後でこう言われました。

「そうね、中島さん。あなたが言ったように、少し言葉は悪いけれど『たよりになるのは神様しかいねえや』その気持ちを大事にしていけばきっと楽になりますよ」。

私自身は自分がそう言ったことを覚えていませんでしたが、その言葉を聞いてすーっと肩から力が抜けてくるのを感じました。この時、神様の一方的な愛によって私は救われたのです。

私は神に向かい声をあげて、叫ぶ。私が神に向かって声をあげると、神は聞かれる。

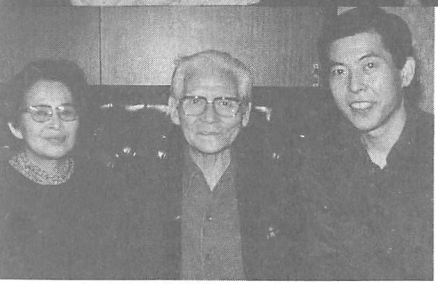
（詩篇　77・1）

主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

（詩篇　23・2～4）



▲左から長女美紗子さん、
仁さん、尚子さん、次女由紀子さん。
美紗子さんの洗礼式の日に。



▲左から仁さんの母千恵子さん、父三教さん、
仁さん。別府に見舞いに行ったとき。

たよりになるのは神様だけ

中島　仁

一九四九年大分県豊後高田市に生まれる。市立桂陽小、市立高田中、県立高田高、法政大学社会学部卒業。東南貿易（株）入社、シンガポール、インド駐在員を約四年半勤める。家族は妻尚子さん、長女美紗子さん、次女由紀子さん。趣味は山歩き、園芸。

不安だ。疲れている。根気がない。何かに追いかけられている……。最近このように精神的に不安定な人が多いように思います。特に海外駐在員は、環境の急激な変化についていけず、知らず知らずのうちに精神的なプレッシャーがかかり、しょっちゅう過度の緊張を強いられて心にゆとりがなくなってくるのではないでしょうか。実際私自身もそういう経験をしました。度重なる海外駐在での心労、疲労は言葉では言い尽くせないものがあり、三度目の地のインドでは高熱病を患い、日本に帰国した時には心身ともに疲れ果てていました。顔色もすぐれず、疲れやすく、仕事に集中することができませんでした。いつもいわれのない不安に悩まされ、人と顔を合わせることや会話をすることもわずらわしくてたまりませんでした。

私がどのようにして精神的に不安定な状態になっていったか、またどのようにしてその悩みから解放されたか、幼い頃から最近までのことを振り返ってみたいと思います。

幼稚園の頃の私は、先生の後ばかりついて回り、時には背負ってもらわなければ満足しないような子供でした。これは一つには自営業をしていたため両親が毎日忙しく、ほとんど構ってもらえなかったので愛情に飢えていたためではないかと思います。店にお客さんが来ると家の奥に隠れるほど人見知りをする子供でした。

小学校、中学校の頃はいわゆる「よくできる子」だったと思います。成績もよく、駆け足も早く、人気者でした。しかし試験の結果ばかり気にしすぎ、体育の評価がBだったりすると、わざわざ担当の先生のところに行って間違いではないかと確認するというような一面もありました。

高校に入学した時の成績は四百人中三十番くらいだったと思います。しかし高校二年生頃にな

人も私もつい嬉しくなってしまい、その人をすっかり信用してしまいました。しかしやがて、人を安易に信じ頼ることの怖さを思い知らされ、二人でじっと家に閉じこもる日々が続くような目に会いました。

そのようなことがあっても、だれ一人として心のうちを明かすことのできる人もなく、よく母の墓前で思いきり泣きながら苦しみを訴えたりしました。そしてこのときはじめて、仏に助けを求めました。それも最初は禅や仏教に関する本を読んでいたのですが、次第に土俗信仰や迷信の世界に迷いこみ、また一日中写経をしたり、はては占師の言うことを頼みとしたり、まさに偶像礼拝のるつぼの中であがきました。でもこのようなことはなんの助けにもなりません。この世がすべて灰色に見えました。生きることも死ぬこともできない極限状態の中で、「助けてー。助けてー」と心の中で叫び続ける毎日でした。

教会へ

そんなある日のこと、どういうわけか町でよく見かける教会の屋根と、主人から貰った聖書が私の頭にポーッと浮かんだのです。私は、教会というところをまったく知りませんでしたが、「あそこに行けば、まだ私のことを聞いてくれる人がいるのではないか、助けてくださる神様がきっとおられるのではないか」と、そんな気持ちになったのです。

「苦難の日にはわたし（主）を呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。」（詩篇　50・15）

主人に話しますとすぐに同意してくれ、さっそく教会へ行ってみました。牧師は、「あなたがきょうここに一人で歩いてきたということは、つまり神様が導いてくださったのです。神を信じましょう」と言われました。私はそのとき、とても素直に神様を信じることができました。そして、「この罪多い私を教会に導いてくださった神様とは一体どのようなお方なのか」が知りたくて、聖書研究会に熱心に通いました。また、早朝の祈祷会、聖日礼拝、会堂掃除など、忙しく働いているうちに、次第に自殺願望も消えていき、人に対する恐れもすこしずつ消えていくようになりました。

そして、目には見えないけれど、神様が存在しておられることに希望を持つようになりました。主人も聖日礼拝に行くようになりました。しかし、主人は半年も経たないうちに「牧師の説教がわからない」と言って教会に行くことをやめてしまいました。私も救われているという実感がなく、聖書の勉強をやればやるほどわからなくなり、しまいには聖書の中の律法にがんじがらめになり、五年近くなる頃に、とうとう教会を去りました。

しかし神様なしでは生きていけそうになく、また他の教会へ一年ほど行きました。その教会で、ふと不安になったことがありました。それは牧師によって聖書の解釈が違うことがあるということでした。「もしかしたらむなしい道を歩いているのでは？」その不安を消すことができないまま、その教会も去りました。

キリスト集会へ

それ以来、教会への不信感がつのるばかりで、だんだんキリスト教というものがいやになり、したがってイエス様が存在なさるということすらもはっきりした確信が持てないというひどい状態におちいりました。そんなとき、パッチワークが縁で、熊谷さんのお母様にお目にかかり、「光よあれ」のご本とメッセージのカセットテープをいただきました。テープをちょっと聞いたのですが、ろくに理解もしないうちに「もうお説教はたくさん」といった気分になって、テープを棚にしまいこんでしまいました。私はまた頼るものを失って、心は暗くなるばかりでした。

ある日、実に突然、「聖書全体を信じよう。イエス・キリストを信じよう」と、そんな気持ちになったのです。それからは聖書を読むと、びんびん心に響いてくるのです。「えっ、聖書にこんなことが書いてあるの」と、まるではじめて聖書を読んだような驚きの連続でした。来る日も来る日も聖書を読み、テープを聞き、「光よあれ」を読みました。実はその頃、キリスト集会のみなさんが私たちのために懸命に祈っていてくださったことを、あとで知りました。

やがて私は、イエス様こそが私の救い主であり、私の罪のために十字架についてくださったことを感謝して受けとり、この方に従って生きていこう、と思い定めることができるようになりました。そしていままでイエス様にほんとうに従っていなかった罪を悔い改め、心の底からお祈りをしました。

救われて三カ月後の一九九〇年の夏、宮崎県綾でキリスト集会のバイブル・キャンプが開かれ

たとき、私はなんのためらいもなく、イエス様に従って生きていくことを証しする洗礼をこの機会に受けようと思いました。洗礼を受ける当日、私は定刻より早く洗礼式の会場へ行ってしまい、一人きりでしたので、そこにあった白衣を着て祈っていますと、まったく思いもかけず、主は私の過去の罪を次から次へと思い出させてくださり、深い深い悔い改めに導いてくださいました。そしてとめどもなく涙があふれ、涙、涙の洗礼になりました。このことを通しても、「主は私の罪を赦してくださったのだ」と確信することができました。

翌一九九一年、主人もえびの高原で開かれたバイブル・キャンプで洗礼を受けました。主人ははじめはためらっていましたが、ベックさんはじめキリスト集会のみなさんが「ただ信じればよいのです」と主人をはげましてくださり、主人の救いのために祈ってくださいました。またみなさんが主人にいろいろと福音について話してくださいました。私も主人とともに悔い改めのお祈りをしました。

ほんとうに主はすばらしいお方です。「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。」（イザヤ55・8）と聖書にありますが、私の思いとはるかに異なり、こんなに早く私たちふたりを救ってくださり、永遠の朽ちないいのちをいただき、今はあの暗かった日々が嘘のようです。私たち夫婦は、イエス様につながったほんの小さな枝として、これからは主のご栄光のためにのみ歩いていけますから、感謝でいっぱいです。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

（イザヤ　38・17）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

（ガラテヤ　2・20）

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

（Ⅰペテロ　1・8）

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

（詩篇　119・105）

イエス様に出会って

なぜか、どうしてかわかりませんが、あんなに真っ暗だった世の中が、今はほんとうに明るいのです。どの時点でどう変えられたとうまく説明はできませんが、あんなに孤独だった私たち二人でしたが、今は違います。どう言ってよいのかわかりませんが、大勢の方々の味方ができ、大勢の方々に見守られている気がしてなりません。

「わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。わたしがわたしの羊を

飼い、わたしが彼らをいこわせる。――神である主の御告げ。――わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。」

（エゼキエル　34・14～16）

と聖書にありますが、ほんとうに毎日が緑の牧場にいこわせてもらっているような、それもなぜか、どうしてか、わかりません。イエス様に出会ったからとしか言えないのです。

イエス様に出会うまでの私たちは、よくこんなことを話していました。

「もう私たち長く生きても二十年よね。父さん死んだらどうなると思う?」

口がきけない主人はすこし考えて、「無」という字を書きます。私は、

「お先真っ暗よ。死後の世界も真っ暗よ」と言うのでした。

二人はほんとうにそう思い込み、先が暗くてしかたがありませんでした。でも、いつの頃からか、天国を信じるようになりました。それも「私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」（ピリピ3・20）と聖書にありますから、感謝だなといった気持ちはありましたが、そのことを一生懸命信じようと努力したわけでもありません。いつの間にか信じさせられておりました。天国はこんな所みたいよ、と説明こそできませんが、明るい明るいその先にパラダイスがあるようで、今は主人も私も天に召されるのがとても楽しみです。

イエス様は、生きて働いていてくださいます。つい最近、主人も私も流感にかかって二週間も

寝込んでしまいました。二人とも、発熱、悪寒、全身の痛みなどインフルエンザの症状が全部出てしまい、もうお手上げです。イエス様に出会うまでの私でしたら、二、三日でも寝込んでしまおうものなら、「さあ大変だ、買い出しはどうしよう、主人にどうやって食べさせよう」と、日々の生活が気になって、這ってでも台所に立ち、涙を流して頑張ったものでしたが、今回は二人とも申し合わせたように、イエス様にすっかり委ねて寝込んでしまいました。最初の一週間くらいは高熱が続いたのですが、肉体の苦痛とはうらはらに、なぜかうれしいのです。一呼吸ごとに声にはならないのですが、「イエス様、イエス様、イエス様感謝します」と祈り続けました。くる日もくる日もうれしくてうれしくて、今回初めて、「光よあれ」の第六集に記されていた、沖縄の玉城さん（筋萎縮性側索硬化症）の証しの、あの喜びをわからせていただきました。肉体的な苦痛にもかかわらず、喜んで天に召されていった方々の、あの喜びを、ほんの少しだけわからせていただきました。主人に、「私、天国行きの予行演習をさせてもらったから、もう大丈夫よ」と言いますと、主人もにこにことうなずいています。流感も後半の週になりますと、さすがに食べるものもなくなってしまい、ついあれこれと思い煩ってしまいました。そうすると、あの喜びがいつの間にか消えてしまったのです。私たちが自我のとりこになり、それに気づかないような時、イエス様はよく私たちに試練をくださいます。そんな時、イエス様はみことばを通して、時にはいろいろなできごとを通して、また人を通して、そのことに気づくようになさいます。私もしばらく苦しんだのち、なぜあの喜びが消えたのかをよくわからせていただきました。早速悔い改めと感謝の祈りをいたしました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

するとその後はほんとうに心が平安で、「何かおいしいものが食べたいな」と思っていますと、主人の妹が、私たちが病気になっているとは知らずに、大好物のお刺身を持ってきてくれたり、「おいしいおかゆが食べたいな」と思っていますと、姪がお鍋いっぱいおかゆを届けてくれたりで、それにキリスト集会の皆さんが集会の行き帰りに寄ってくださったり、頭痛や目まいで聖書も読めないでいますと「流感なんか平気よ」と長時間いっしょに聖書の話をしてくださったりで、食べることも、その他のこともイエス様がみんな整えてくださり、病気をしたことにより、多くの恵みをいただくことができました。イエス様ありがとうございます

私は花や植物が大好きで、わずかばかりの庭に雑然と花や草木を植えています。四季それぞれに花々が咲き、いつも小鳥たちが来てくれます。特に渡り鳥の季節になりますと、名も知らない小鳥たちが家の周辺を飛びかいさえずり、にぎやかです。蝶や蝉なども多く、霧島の山々も季節によって姿を変え、自然のすばらしさ、美しさを満喫できる所に住んでおりますが、かつてはこんなに恵まれた所に住まいを与えられながら、これらすべてが灰色に見え、この家から、この土地からどれだけ逃げたいと思ったかわかりません。この家に越してきて、ずっと同じ風景を眺め

てきましたのに、今はその風景が美しく、明るく輝いて見えるのです。霧に浮かぶ霧島の山々や、真紅の夕焼けに黒いシルエットとなり、荘厳で神秘的な霧島の山のたたずまいを目のあたりにします時、思わず、天地を創造なさった主を賛美してしまうことがたびたびです。また「ほらよくごらん、一木一草、この庭の花も、小鳥たちも、虫たちも、そしてこの住まいも、みんなわたしからの贈りものだよ」とイエス様のお声が聞こえるようで、思わず「イエス様、ありがとうございます」と祈っていることもたびたびです。

最近私は、イエス様に話しかけていることが多くなりました。台所にいても、歩いていても、時には車を運転しながらも、現在直面している問題をずっとイエス様にお話して、イエス様に解決をお願いしたり、悔い改めたりしています。目に見えないお方ですが、イエス様はどんなことでも聞いてくださいますから、話します。

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」（エレミヤ　33・3）

私は昔、なんでも話せる隣人をどんなに欲しかったことでしょう。でも今は、すべてイエス様です。すべてに答えてくださいます。「イエス様、あなたがいてくださいますから、私は歩めます。ありがとうございます」と祈ることも度々ですが、その瞬間イエス様のご慈愛が身にしみて、涙でいっぱいになります。また主人と毎朝聖書を読んでいますが、すべてのみことばが、イエス様が今そこにいて語りかけてくださっているような気がして、涙があふれ出て読めなくなること

もしばしばです。主人は私が涙もろくなったことに気づいていますが、「どうした」と一度も聞きません。主人もきっとわかっていて、同じ気持ちなのでしょう。

私は心を尽くしてあなたに感謝します。
（詩篇　138・1）

まだイエス様をご存知ない方々、まだイエス様と出会っていらっしゃらない方々、どうかイエス様のみ名を呼び求めてください。イエス様は、きっと、答えてくださいます。

主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。
（ローマ　10・13）

▼哲さんの洗礼を記念して。1992年8月えびの高原バイブル・キャンプにて。



主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。（イザヤ　40・31）

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」（マタイ　11・28～30）

この時から、毎日毎日が嬉しくて嬉しくて、しかたがなくなりました。

ある日、こんなことがありました。朝会社に行く途中、東京駅を歩いていると、道に碁盤の目のように三十センチくらいの四角いきざみが続いているのです。それを見て、何だか無性に子供の頃にやった遊びのケンケンパをしてみたくなりました。けれども背広にネクタイという格好です。一目で出社途中の会社員とわかる私が、道でケンケンパなんかしていたら、傍目にはどんなに奇妙に映ることでしょう。そう思ってその時は思いとどまりました。しかし、昼休みになるとまたどうしてもケンケンパをしたくてたまらなくなりました。そしてとうとう、私は会社の廊下でケンケンパをやってしまったのです。それまでのふさいだ気持ちでいた私には考えられなかったことです。

キリスト集会では、聖歌四七二番「人生の海のあらしに」を賛美するたびに、涙が出てしかたがありませんでした。

一九八九年十月一日、私は吉祥寺キリスト集会でイエス様に従って生きていくことを証しするため、洗礼を受けました。次の聖句はその時に久田さんからいただいたものです。

堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

（Ⅰペテロ　5・9、10）

別府の父のこと

七十も半ばを過ぎた私の父は、今でも平日は店の帳簿つけをし、週末には別府の家で母と過ごしております。父には、私が洗礼を受ける前に、イエス様を信じる者になったことを伝えました。その時父は「戦争中アメリカ軍の捕虜になり、シカゴで宣教師から聖書の話を聞いたことがある。戦後も日本で聖書を読んでいた。仁がクリスチャンになったと聞いて、不思議な気がする」と言っていました。

洗礼式の夜、その父から「おめでとう。夫婦で同じ神様を信仰することはよいことだと思う。ただし、狂信し、排他的にならないように注意しなさい」という電話をもらいました。

その後、父には「光りよあれ」「実を結ぶ命」の本や福音のテープなどを送っていました。そして翌年の三月五日、神様の不思議なお導きによって、私は父と一緒に別府でのキリスト集会に参加することができました。本当に感謝でした。

そのキリスト集会の時、私はある方から、

「あなたはいつ洗礼を受けましたか。その後何回聖書を読みましたか」と聞かれました。私は、「七月に神様の一方的な愛と恵みによって救われ、十月に洗礼を受けました。それまで一度も聖書を手にしたことがありませんでしたが、今少しづつ読み始めたところです」と証しとともにお話をしました。するとその方は、

「私も洗礼を受けましたし、聖書も何回か通読しましたので救われると思います」と言われました。その時一緒に聞いておられたベックさんが、

「それはまったく間違いです。いくら努力して聖書を読んでも、それだけでは決して救われません。ただ幼な子のようにすなおになり、神様を信じてお祈りするだけで救われますよ」と言われました。

続いて野田さんの奥さんも証しをされ、次の聖句を引用なさいました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

私に質問なさった方は、この聖句を声を出して読み始められましたが、一行読んだところで涙があふれ出し、次の行からは涙を流しながらやっとのことで読んでおられました。

キリスト集会のあとで、神様のご計画の完全さに驚くようなことがありました。ベックさんが父に、

「今日は疲れませんでしたか。私は四月にもう一度別府に来ます。渡辺悟さんという方のお見舞いのためです。機会がありましたらまたお会いしましょう」と挨拶された時のことです。父がびっくりして、

「ベックさん、いまおっしゃった渡辺悟さんは、もとお医者さんではないですか。その方なら私が四十年前薬を納めていた病院にいらした方です」と言いました。ベックさんは、

「確かに渡辺さんは医者です。今は病気のために別府で治療をうけています」と言われるではありませんか。まわりで聞いていた私達はただあぜんとするだけでした。神様は、私には想像もできないほど緻密な計画をたてておられたのです。私は別府での二回目のキリスト集会には出席することができませんでしたが、父は自分から渡辺さんのお宅でのキリスト集会に出向いて行きました。

その後父が上京した時、もう一度父とベックさんとを会わせたいと思い、ベックさんを探したのですが連絡がとれませんでした。私はがっかりしていました。ところが、なんと父の方から、

「一度吉祥寺キリスト集会の日曜礼拝に出てみたい」と言い出したのです。嬉しくて、思わず

妻と二人で泣いてしまいました。

今考えても別府での数々のできごとは、信じられないほど完全で、無駄なことがありませんでした。それら一つ一つのことを通して、神様はご自身のご栄光を現わすためにはどうすれば一番よいかよくご存じで、私達人間には何もできなくても、すべて神様ご自身が備えてくださるということを身をもって体験しました。ベックさんがよく言われる「偶然はない。すべて神様がよしとされることを神様ご自身がなされる」ということを、しみじみと実感しています。

「絶対にたよることができる神様なしには、私は生きていかれない」。今では私はこう確信しています。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。

（詩篇　103・1～5）



▲尚子さんの父土谷豊さんと尚子さん。入院の日に。

真実を求めて

中島尚子

一九五二年福岡県北九州市に生まれる。清見小、梅光女学院中等部、高等部、短期大学卒。野村證券入社。九年間の勤めの後結婚。家族は夫仁さん、長女美紗子さん、次女由紀子さん。趣味は書道。

一九五二年一月二十八日、私は六人兄弟の末っ子として生まれました。両親は、私が生まれた時二人の子供を病気で亡くしていたこともあってか、俗に言う「信心深い人」で、春夏秋冬の神事仏事は欠かしたことがなく、神社仏閣の前を通りすぎる時にはおじぎをしていくような人でした。朝に夕に神棚と仏だんにお水をあげ、食事の前には一番にご飯を供え、お給料や成績表を持ち帰った時はまず供えてから、という家庭でしたので、私もそういうことが知らず知らずのうちに身についていました。

ところがそんな両親が、なぜか私の行く幼稚園はキリスト教の関係の所を選んでくれました。わが家の近くに幼稚園があったにもかかわらず、少し遠い信愛幼稚園に通うことになりました。園長先生と両親が親しかったらしく、神さまの幼稚園ならいいのでは、と思ったようです。ですからこのころから私は日曜学校に行っていました。讃美歌「主われを愛す」はこの時から知っていましたが、「主われを愛す、主は強ければ、我弱くとも、恐れはあらじ」という歌詞の意味を心に深く感じたのは、それから三十年も経ってからでした。

小学校は公立でしたが、中学、高校、短大はミッション・スクールに通いました。とはいっても、聖書は授業のひとつとして読んでいただけでした。卒業後は父の仕事のため上京して就職することになりました。証券会社に勤めて九年が経つころには、劇務のため体はがたがたになっていました。そんな時、今の主人と出会いました。私は仕事に追われる生活がつくづくいやになっていましたので、よろこんで結婚しました。

結婚後は二人の娘に恵まれ、友人にも恵まれて満ち足りた毎日でした。それでもなお、私は生きていくのに何が大切か、自分は何をすべきか、子供のためによりよいものは何か、と常に求め続けていました。生活クラブ生協にもそんな思いの中で出会いました。生協の方針を大ざっぱに聞いただけで、「私の探していたのはこれだ！」とばかり大よろこびで入会しました。生協での活動を通して知り合った方々とも仲よくなり、もっと深く関わりたいと思っているうちに、主人の仕事でインドに行くことになりました。

インドでの一年と九カ月は、東京で毎日めまぐるしく時間に追われていた私には、ちょうどよい充電期間になりました。いろいろな事を考えたり、「帰ったらあれもしたい、これもしたい」と熱心に帰国後の計画を思い描いたりしていました。そんな私とは反対に、主人は疲労と心労で熱病を患うほど消耗しきっていました。私にはその主人のつらさを理解することができませんでした。やがて時の経過とともに主人の熱病もいやされ、あとは帰国の日を待つばかりでした。インドでしか味わえない楽しいこともありましたが、その一方でずいぶん辛い思い出もありました。これだけの苦労を何とか乗りこえたのだから、これからは何が起こっても大丈夫だと、主人と二

人で話しあっていました。ようやく待望の帰国となり、美紗子の小学校の入学の手続きをすませ、心新たに日本での生活を始めました。

長女・美紗子のこと

日本に帰ってきた安心感はほんの束の間しか続きませんでした。入学したばかりの美紗子は、私の知らないところでお友達を泣かせていました。人との接し方がわからない、遊びたいのに遊んでもらえない。そのさびしさから、きつい言葉でお友達を悲しませていたようです。家では、私はかなりきびしくしつけをしていましたから、美紗子のお友達に対する口調は、私の言葉そのものだったのでしょう。いじめられるほうが、まだいじめるよりはいい。なぜそんなことを私の娘がするのだろう。どうしたら美紗子にお友達の痛みがわかってもらえるかしらと、胸を痛める日々でした。美紗子のことを近所の友人に話す時は涙ばかり出ました。ちょうどその頃、主人は仕事と人間関係との板ばさみで苦しんでいる時でしたが、私はそんな主人のことを思いやる余裕がなく、ただただ美紗子のことばかり心配していました。

いっぽう私は子供によりよい物を食べさせたい、よりよい環境、よりよい友人関係を与えたいと求め続けていました。「本物」と思えるものを、いつもいつも求めていたのです。美紗子が二年生になった時、私はクラス委員を引き受けました。その話しあいの時、同じクラス委員だった本田謹子さんと出会いました。私の胸の内にはいつも子供の悩みがありました。本田さんから「吉祥寺キリスト集会へいらっしゃいませんか」とのお誘いを受けた時、そこに行けば「本物」

が見つかるような気がして、「行ってみたい！」と強く思いました。まず主人に相談してからと思い、家に帰ってさっそく主人に、

「吉祥寺キリスト集会というところに美紗子と一緒に行きたいけれど、いいですか？」と尋ねると、「じゃあみんなで行ってみようか」という返事です。おどろきながらも、皆で行けるならそれが一番いいと、喜んで出かけることにしました。

一九八九年六月二十五日、はじめて吉祥寺キリスト集会の礼拝に出席しました。昔行ったことのある教会とは全然ちがう礼拝のしかたに戸惑いながらも、母のふところに戻ったような心の安らぎをおぼえました。何人もの方たちが「あなたがたのことを祈っていましたよ」と、わざわざそばにきて声をかけてくださり、うれしさに言葉が出ませんでした。私がひたすら探し求めていた、このような場所が本当にあったのだ、求め続けていてほんとうによかったと思いました。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。」
（マタイ　7・7）

子供たちに対しては、つい感情で怒ってしまう愚かな母ですが、

若者をその行く道にふさわしく教育せよ。
（箴言　22・6）

望みのあるうちに、自分の子を懲らしめよ。
（箴言　19・18）

子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。

（コロサイ　3・21）

というみことばを示され、娘を通してイエスさまを忘れることのないようにと、私の信仰の道を正される思いがしました。

何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。

（コロサイ　3・23）

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

（Ⅱコリント　12・7～9）

その後、美紗子は本田さんの娘さんの絵里ちゃんというお友達を得て、学校生活にもだいぶなれてきました。三年生になってクラス替えがあり、絵里ちゃんとは別れてしまい、クラスになじむのに時間がかかりましたが、自分でもお祈りをするようになりました。幼な子の祈りをイエスさまがいつもほほえんで聞いてくださっていることを信じ、親も子も、ただイエスさまにたよって生きているこの頃です。

次女・由紀子のこと

吉祥寺キリスト集会に集うようになって、一九八九年の四月から仏教関係の幼稚園に通っている下の娘のことが気になりはじめました。親はイエスさまを信じてイエスさまにお祈りし、子供たちも家では一緒に「アーメン」と言っているのに、幼稚園に行けば「ののさま（仏）」におまいりするという生活でした。私がこのことで落ちつかずにいるせいもあってか、由紀子にもギクシャクした様子がみえてきました。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言　3・5、6）

四月に入園してようやくクラスにもお友達にもなれ、一学期も終わろうとしている七月の半ば、由紀子はやっぱりやめさせるべきだとの思いを与えられ、転園を決意しました。幼稚園では役員をしていましたから、突然の転園で他の皆さまには大変ご迷惑をおかけしましたが、私たちの気持ちを正直にお伝えして、やめることができました。

その時の担任の先生にごあいさつに行ったのは、夏休みに入ってからでした。由紀子も一緒にいくというので連れていきました。由紀子は私のとなりに座って、先生とのやりとりを静かに、とっても安らかな表情で聞いていました。イエスさまが守っていてくださることを心から実感し、感謝でいっぱいでした。その後新しい幼稚園に移り、通園には前より時間がかかるようになりま

したが、新しいお友達ともすぐになれて、親として心配していたようなことは何もなく、主のあわれみとお恵みにただ感謝するばかりです。

また、由紀子が幼稚園になれるまで、神さまはずっとお天気を守ってくださいました。曇り空で、「あやしいな」と思う日も、由紀子が自転車にのっている間は雨が降らず、由紀子をおろして私がひとりで家に戻りはじめると、ポツポツと降ってくるということがたびたびありました。また、由紀子が幼稚園ですごす間ずっと雨が降っていて、行き帰りは止んでいたこともありました。神さまが由紀子の転園をよしとされ、愛して守っていてくださるような気がして、ほんとにうれしくて感謝しました。

それからしばらくして、朝は大丈夫だったのに、迎えにいくころ大雨になったことがありました。タクシーもつかまらないので仕方なく歩いて幼稚園に向かっていたら、同じ団地の方にお会いして、その方が車で幼稚園まで連れていってくださいました。偶然とは決して思えない神さまのご配慮を心から感謝いたしました。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・2）

由紀子が新しい幼稚園にもすっかりなれたある日、大雪が降りました。二歳から四歳までインドで生活していた由紀子には、雪ははじめての体験でした。赤ちゃんのころつめたい雪にさわって泣いたことなど全く覚えていないのです。久し振りの大雪の中、幼稚園まで五十分かかって歩

いていきました。普通に歩けば三十分位のところですが、うれしくて、めずらしくて、遊びながら、すべりながらの通園でした。この日も、由紀子にとっていちばんよい時をイエスさまがくださったことを感謝しました。今の幼稚園の先生は、いつも神さまに感謝して子供たちと接してくださっています。クラスの終りの日、「光よあれ」をお渡しすることができました。読んでくださっていると思いますが、先生のことも祈る日々です。

「わたし（主）があなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」（マラキ　3・10）

主は私がためす前に、次々とお恵みを注いでくださいました。

主人と私のこと

主人も私も末っ子に生まれ、いつもだれかに頼ることがいつの間にか身についていました。主人がノイローゼ状態になった時、頼るものすべてを失くしていました。その時に、主人も私も、永遠に頼れるお方にお会いすることができました。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わ

たしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。」

（エレミヤ　29・11～14）

この弱い私たちに、イエスさまはみ手をさしのべてくださいました。一九八九年十月一日、主人と一緒に洗礼を受けられましたことを、心から主に感謝いたします。

今までは目に見えるものばかりをみつめていましたが、今は目には見えないけれど、主イエスさまだけを見上げ、ただ主の喜ばれることだけを願って、主のみこころがなりますようにと祈る毎日です。また、聖書にすべての答えがあることを知り、みことばにだけ頼ればこんなにも人生を楽に過ごすことができるということを、重荷をもつ多くの人々に伝えたくて仕方ありません。救われてからの主人の変わりようは、目を見張るばかり。ほんとうに、神さまでなければ人をこれだけ変えることはできません。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

（エペソ　5・22）

今でも不平、不満を感じることはありますが、イエスさまにより頼んで一日一日をすごしている主人の姿を見る時、主を仰ぎ見ながら共に歩んでいきたいと願わずにはいられません。

このように主を信じ、受け入れてから数年がたちました。一九八九年六月二十五日にはじめての礼拝に出席して、あの安らかな心を与えられてから、私はずっと「イエスさまがいちばん」と、

何事も行なってきたつもりでした。ところがある日、子供のために害のない食物を、よりよい場をと、あいかわらず神さまの存在しない会合に出ていく自分に気付かされました。「私にとって宝ものは何かしら?」と思った時、迷わず「イエスさま!」と答えていた私はそんな時にはどこにもいなくなっていて、子供のことにしがみついているあわれな自分の姿しかなかったのです。生協の委員としての活動も順番でなったこととはいえ、いざその場にのぞむと、ついついのめりこんでしまいがちでした。自分の思いとイエスさまが頭の中で交互にぐるぐる回りして、「ああ、もういやだ!」と叫びたくなりました。主人に相談すると、「聖書しかないよ。聖書が答えてくれるから読むことだよ」と言われ、一字一句必死で読み始めました。

「何を食べたらよいか、何を飲んだらよいか、と捜し求めることをやめ、気をもむことをやめなさい。…何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。」（ルカ　12・29、31）

この一年間、信仰のつまみ食いをしていたことを思い知らされました。自分にとっていいと思えることは今まで通りしっかりと持っていて、すべてを捨ててイエスさまにより頼んでいない自分の中途半端な姿勢を知らされました。聖書の中でペテロが言った、

私たちは自分の家を捨てて従ってまいりました。（ルカ　18・28）

というみことばに出会った時、私の体のまわりをがっちりととり囲んでいた厚い皮がむけ始めた

気がしました。口では「すべてを捨ててイエスさまに従います」と言っていても、心の中はちがっていました。このみことばを通して、ほんとうにイエスさまにより頼むことを学びました。今も生協の委員をしていますが、その時々で、「自分のすべきことを教えてください。求めている多くの人々に出会わせてください。そして、みことばを伝えることができますように」と祈ってから出かけるこの頃です。

主人にも私にも、年老いた両親がいます。その両親、兄や姉とその家族の救いのために、先に救われた私たちは祈らずにはいられません。

また現在、私の父は末期がんで入院中です。この病いの中で主イエスさまと出会うことができ、この世の残された日々を、語る口もとられ、書く手もとられ、私たちに残したい思いは山ほどあるでしょうが、ただ胸の内で主に祈り、平安を与えられる者となりました。思いがけないかたちでともに祈る者とされましたが、主のご臨在をいつも覚え、感謝して主の時を待ち望んでおります。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。」

（使徒　18・9、10）



▲尚子さんのご両親土谷豊さん、智香子さん、ベックさんとバイブル・キャンプで。



▲左から前小屋実さん、尚子さん、仁さん。バイブル・キャンプのあとで。

神にとって不可能なことは一つもありません。
（ルカ　1・37）

力強い多くのみことばに支えられて、ゆっくりとではありますが一歩一歩神さまに近づけられながら歩んでいます。家族四人がそろって唯一の神さまをみつめて、毎日イエスさまとお話できる幸せをかみしめています。最後に大好きなみことばを記します。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

私たちに弁解の余地はない

岡本雅文

一九五一年広島県呉市に生まれる。天応小、二河中、呉三津田高、山口大学工学部卒業。現在栗田工業（株）設計課長。一九七六年結婚。家族は妻恵子さん、長男恵以さん、長女さらさん、次女かなさん、次男嗣音さん、三女ほさなさん。

・家庭集会　不定期　・住所　東京都町田市森野四―五―一五〒一九四　・電　〇四二七―二五―六八九九

▼左から次女かなさん、長女さらさん、三女ほさなさん、恵子さん、次男嗣音さん、雅文さん。



誤算

酒ばかり飲んでいた私と、クリスチャンになったばかりの妻が見合いをしたのは一九七五年の四月でした。彼女は婚約時代の信仰をとおして、未信者との結婚に疑問を持つようになり、結婚式の当日はそのことで悩んでいたようです。一方、私は結婚式の準備から新婚旅行の計画や手配まで、一切を彼女と両親にまかせっぱなしにした無責任な者でした。

結婚後間もなく、大きな誤算があったことに気づきました。それは、私が抱いていたクリスチャンのイメージと、妻のそれとがあまりにも違っていたことでした。これまで出会ったクリスチャンは皆、私にとっては無害でした。ところが、妻の心は「イエス・キリスト」で占められ、熱心に教会のご奉仕に励むようになりました。あいかわらず独身時代と同じように遊びまわっていた私には、このような妻が理解できず、目の上のたんこぶのような存在でした。また、いつもクリスチャンと比較されているようでおもしろくありませんでした。しかもこの世の少数者のくせに、自信ありそうにしているクリスチャンの態度が気に食わず、次第に彼らにも反発するようになりました。

創世記一章

小学生のころ、日曜学校に通っていた私は、クリスチャンや聖書に対して決して否定的ではありませんでした。しかし結婚を境として、聖書のあら探しをするようになりました。妻やその友人たちの鼻をあかしてやりたかったのです。そして、聖書を攻撃するのに最もふさわしいと思わ

れる箇所を見つけだしたのです。それは、聖書のはじめにある「天地創造」の記述でした。たった六日間でこの天地のすべてのものが造られたということと、その第一日目から第六日目までの創造の順序は、現代科学の常識では考えられないことのように思われました。この点を突けば必ず勝てると確信し、さっそく妻を攻撃しはじめたのです。彼女は何の反論もせず、「種類に従って」という本を持って帰ってきて、私に読むように勧めました。この本は「進化論」を批判したクリスチャンの書いたもので、私はこの時から七年間にわたって「進化」について調べ続けるはめにおちいったのです。

その心を、人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ごさせよ。
（ダニエル　4・16）

私は妻が信じる「神」を否定するには、彼女の信仰の基盤である「聖書」を否定すればいいと単純に考えました。そして、その聖書に一点でも明らかな間違いがあれば、聖書は信じるに足らないことを示してやることができると思ったのです。人間が考えた理論にはどんな間違いがあっても許容できるが、神の書物にはそれだけの厳密さが要求されて当然だと考えたのです。また、聖書に立ち向かうには、信仰の領域で戦っても証明できないことは初めからわかっていたので、できるだけ客観的な事象をとらえて攻撃しようと心にきめたのです。そのための武器として見つけたのが「進化論」でした。この進化論は、ほとんどの現代人が無条件に事実として受けとっている強力なものでした。私は明らかに聖書を否定できると思い、進化論の勝利を信じて疑いませ

んでした。

それからというもの、時間さえあれば本屋をあさり、「進化論」という字が目につくと、片っ端から買い込んできて読みはじめました。今まで好きだった小説も、それ以来ぷっつりとやめて、進化に関する本を読むことに精力をつぎこみました。私が有名な学者の本や最近の科学雑誌を読みはじめると、妻はクリスチャン科学者の書いた本を次々に持って帰るようになりました。また私は、進化に興味を持った年に創刊された外国のクリスチャン科学者の論文を訳して紹介する月刊誌を、彼女に知られないようにこっそり取りよせたりしました。

このようにして相反する立場から書かれた本を何十冊も読み進んでいくうちに、進化論を批判する本にも「一理あるぞ」と思うようになりました。しかし、そのころはまだクリスチャン科学者の意見は、誰にも相手にされない世界の片隅でぼそぼそとつぶやいているようなもので、同じ土俵の上で戦われていない負け犬の遠吠えのように思われました。ところが、ダーウィンの「種の起源」から最近の学者まで約百年間の進化論の学説の変遷を調べていくうちに、時代や人によって学者たちの考えが大きく違っていることに気づいてきました。そして、進化論学者も進化論には一部矛盾があると認めているようなのです。彼らは異口同音に次のように言っていました。「進化の原因は証明できないが、進化は事実である」と。学者たちが感じている矛盾を明らかにしない態度に、何か非科学的な匂いを感じはじめました。彼らの考え方の根底には、「神はいない」という「信念」があり、それが前提となっていたのです。

愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。

（詩篇　14・1）

確率の問題

「神はいない」ということを証明するのが私の目的だったので、「神はいない」という前提で理論を組み立てている進化論者の立場には不満がありました。しかし、まだ全世界の大多数の学者たちが進化論を受け入れているという事実の前に、このような疑問も決定的なものにならなかったのです。その後、進化について読んだ本は百冊を越え、雑誌や論文にいたっては二百冊を越えていきました。

そして、多くの知識人の考え、つまり、「目に見えない世の勢力」に圧倒されていた私でしたが、しだいに進化論の抱えている数々の不合理さが動かしがたい疑問へと発展していきました。その中で最大の疑問は、「確率」の問題でした。宇宙の誕生、生命の誕生、および現在存在しているすべての秩序あるものが「進化」によってできる確率は、まさに「ゼロ」に等しいという事実でした。人間の「目」の進化一つとり出して考えても、連続する突然変異でできる確率は数学的に「ゼロ」に等しく、この調和した世界が偶然にできたと考えるのは、常識では考えられないという問題でした。この「確率」の問題について、どんなに有名な学者たちも私を納得させてくれませんでした。ノーベル賞を受賞した生物学者であるジャック・モノーの次の言葉の中に、人間の知恵である進化論の限界を見ました。彼は著書「偶然と必然」の中で正直に告白しています。

「生命は地上に出現したが、このできごとが実際に起こる以前には、生命の出現の確率はどれくらいあったのだろうか。このような決定的なできごとは一度しか生じなかったという仮説

の可能性は、現在の生物圏の構造から見てとうてい排除することはできない。そのことは、生命の出現する先験的な確率はほとんどゼロであったということを意味している……われわれの当たりくじはモンテ・カルロの賭博場で当ったようなものである」。

現代の学問を結集してできあがった不動に見えた進化論は、今や私には幼稚な「おとぎ話」に見えてきました。一つ一つの研究はいかに正しくても、全体のストーリーは何の証拠もなく、まさに「砂の上に建てられた家」そのものだと、鈍い私にも明らかになってきました。

「また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の家に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。」（マタイ　7・26）

進化論に対する決着

このようにして「進化論」は「科学」ではなく、ただ神を信じたくない人たちの唯一の逃げ道であり、一種の偏見にすぎないものであることを認めることができました。

「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」

（Ⅰコリント　1・19～21）

こうして七年間にわたる聖書との敵対関係が終わった時、七年前には知らなかった数多くの知識を得ていました。しかし、状況は何一つ変わっていなかったのです。目の前にはあいかわらず「聖書の神を信じるか」という同じ問題が横たわっていました。

そのころ、もう一つ深く心を刺された思い出があります。それは、四十年か五十年後、年老いて人生の最終段階に入ってもなお、進化論にしがみつき「神はいるか」と考えこんでいる自分の姿でした。一生涯結論の出ない問題に必死になっている自分の姿を見て、「ぞっ」としたのです。

最後に残された問題

今や私は、「進化論」を信じることも、「聖書」を信じることも、「どちらを信じるかという選択」の問題であるとわかるようになりました。そして、私の前には最後の「選択」だけが残されていました。しかし、それでも選択できませんでした。まだもう一つ残った問題があったのです。今まで偉そうに理論をふりまわしてきた心の奥に、弱い人間的な思いが隠されていたのです。

私は「クリスチャンになると、この世の楽しみが奪われきゅうくつな生活をしなければならないのでないか」という漠然としたイメージをぬぐいさることができませんでした。また「信仰」の世界は何か得体の知れない暗い感じがしていたのです。それは「信仰」というとつい「いわしの頭も信心から」というような「無知」を連想させられ、私には好ましいイメージのものではありませんでした。また、人から「弱い者」や「負け犬」を見るようなばかにした視線で見られる

のではないかという「恐れ」があり、「恥ずかしい」という気持ちもありました。

進化の問題は、かたくなな私が神に近づくために通らなければならない道でしたが、根本的な重要な問題ではなかったのです。それから私は科学者の本と並行して哲学書、思想書、歴史書、信仰書といった種類の本まで読みあさるようになっていきました。

「もしだれでも、わたし（主イエス）とわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いとの栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします。」（ルカ 9・26）

聖書そのものへの接近

そのころ、朝日新聞の天声人語に日本の生んだ思想家の一人として内村鑑三を紹介した記事がありました。やがて彼がクリスチャンであったこと、彼の進化論に対する考え方が私と似ていたことなどを知り、親しみを覚えました。彼の著書をとおして私は「この世にある教会」と「聖書にある主の身体である教会」とは別のものであると思うようになりました。以前から私には、両親が集っている田舎の教会や妻の集っている教会で感じられる、人間臭い規則に反発するものがありました。特に「約束献金」と称して名前を記入して献金させる制度はまったく非聖書的であり、未信者の私でもその間違いがわかりました。また、キリスト教の世界には多くの教団や派があるのがまんできませんでした。そのことについて、教会に集っているクリスチャンからはっきりとした解答を得ることができず、彼らの弁明は私には詭弁としか思われませんでした。とこ

ろが内村鑑三の著書はそのような疑問に答えているように思われました。聖書の神は、人の組織や計画によって人間を縛るような方ではなく、私たちを自由にし、喜びにあふれる者へと変えられる方であることを知りました。そのようなこともあって、聖書の言葉に接し、神への誤解はしだいに私の心の中で溶けていきました。

このようにして、私は聖書や神に対して反発をしなくなりましたが、それでもまだ神を信じることはできませんでした。この中途はんぱな状態から抜けでるためには、自分から一歩踏みださなければならないと思うようになり、妻の通う教会に毎週通い始め、聖書の世界と、現実の教会のギャップを横目で見ながら、一年以上通い続けました。しかし、まったく魅力を感じることができないまま、妻が教会を離れたのを機会に、私もその努力をやめてしまいました。

聖書の世界と現実の一致

それからしばらくたった土曜日の朝、妻が「今日会ってほしい人がいる」と言いだしました。私に無断で面会の約束をしてきた、と言うのです。私は腹を立て家を出ていきましたが、昼ごろになると急に「会ってみてもいい」と思うようになっていました。不思議な心の変化でした。

初めて会ったのは、ベックさんというドイツ人の方で、お話しているうちに非常にすがすがしい感じを味わいました。聖書だけをよりどころとしたベックさんの、単純明快な話に思わず相づちを打ってしまいました。今まで一度も経験したことのないものでした。私が探し求めていたものが、ここにあるのではないかと思いました。そして、次の日から吉祥寺キリスト集会に行って

みるようになりました。そしてこの日から、私は真剣に聖書を読むようになったのです。

聖書を読み進むにつれて、しだいに心が締めつけられるようになってきました。聖書に書いてあることと、自分の状態の違いが明らかにされてきたのです。「自分はよい人間だ」と思っていましたが、まったく「利己主義者」であり、「言うこと」と「やること」が一致していないでたらめな者であることに気づかされ、ときには自分にいや気がさして、はき気をもよおすようなこともありました。このような思いは初めてのことでした。

律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。しかし、罪はこの戒めによつて機会を捕え、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。

（ローマ　7・7～9）

神の招き

吉祥寺キリスト集会に集って三ヵ月たった五月のこと、軽井沢バイブル・キャンプに初めて参加しました。この三ヵ月間、ベックさん以外のキリスト集会の誰とも話したことがなく、すみっこで、聖書の注解書を読んでいました。バイブル・キャンプも終わるころ、キリスト集会の方々と話をする機会がありました。その時、ある方から「すでに疑問がなくなっているあなたに、まだ何が問題なのか」とずばっと言われ、自分の欺瞞を突然突かれたように思いました。頭の中で

はうすうす気づいていた自分の優柔不断さを、初めて他人から正面きって指摘されたのです。強く心を刺すものがありました。

その夜、宿舎の部屋のすみで横になった時、小さな私をすっぽり包みこみ、強く引っぱる力を感じました。そして、大きな平安の中へ一瞬のうちに引きこまれていきました。その瞬間、肩の荷が「スー」とおりていき、静かな喜びがわいてきたのです。そして、満たされた平安のうちに眠りにつくことができました。その時の経験は、昔読んだことのあるジョン・バニヤン著「天路歴程」の一節とよく似ています。「キリスト者が十字架の所へ上がっていくと、ちょうどそのとき彼の重荷が突然ほどけて、肩から落ちた」。そんなにも大きな荷物をかついでいたのかと思うほどでした。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

翌朝目が覚めた時、私はすでにイエス様のものでした。朝の祈り会で昨夜の方々のうちの一人が私のために祈ってくださった時、感謝の涙があふれてきました。祈りの中で私の心は満たされ、もはや一人ぼっちではなく、喜びで満ちあふれました。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。（詩篇　133・1）

私は救われるまで、神を信じるということは自分の力で決断することだと思っていました。絶壁の上から「エイッ」というかけ声もろとも飛び降りるようなものだと思っていたのです。そして何度も絶壁の上に登りつめながら、後ずさりしかできないでいたのです。このような私にとって、この静かな神の一方的な一連の導きは、考えてもみなかったことでした。

その後、しばらくして次の聖書の言葉が目にとまりました。

神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

（ローマ　1・19、20）

この聖句によって、私は「弁解の余地のない」道に迷いこむところであったことをはっきりと知ることができたのです。この世界に存在するすべての被造物は、明らかに計画性をもって創られたと信じることができ、私の疑問は初めから聖書の中に答えられていたことも驚きでした。ほんとうに疑い深い者でしたが、創造者である「神」を信じることができて感謝しています。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

（ヨハネ　20・27）

妻の奥にひそむ思い

私が聖書に対して執拗な反発をしはじめた原因となったのは、夫婦の不一致でした。十年を越

す結婚生活は、結婚式当日から数えきれないほどの争いの連続でした。妻も同じだと思いますが、なぜこんな結婚をするはめになったのか、何度悔やんだかわかりません。感情をむき出しにして激しく争った後、きまって彼女は顔をくしゃくしゃにして泣くのです。まるで「オニガワラ」のような顔で、子供のように声をあげて泣くのです。

私が主イエス・キリストを信じて約一年ほどたった時、会社からの帰り道、突然あの「オニガワラ」が目の前に現われてきました。「オニガワラ」の奥にひそむ、妻の長い年月のあきらめ、挫折感、悲しみをはっきりと見る思いでした。彼女にとって、私がどんなに不満であったか、彼女の不幸の原因であったか、そして彼女が期待した生活といかにかけ離れた結婚生活を耐えしのんできたかという一連の思いが脳裏に写しだされてきました。私がつぐなうことなど到底できるものではありませんでした。この時、はじめて彼女を「いとおしい」と心から思いました。家に帰るまで涙があふれて止まりませんでした。不思議な心の変化でした。そして、次の聖句も生きた言葉となり、このような妻を与えられたことを心から主に感謝することができました。

信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。

（Ⅰコリント　7・14）

「オニガワラ」の体験からすでにかなりの年月がたった現在、聖書の言葉どおり日を重ねるごとに主イエスにある一致に導かれ、年をとるごとに喜びと希望が増してきています。この世と違って、古くなっても変わらぬ「神の愛」を注ぎ続けてくださる主イエス・キリストに感謝してい

ます。

今私たちは、全家族が救われるという聖書の約束の言葉に、期待し信頼し、喜びの時を待ち望んでいます。でたらめな人生を送ってきた私に「生きる希望」と「永遠のいのち」を与えてくださった主イエス・キリストに、愛する家族、また友人たちがぜひ出会ってもらいたいと願い、心から祈っています。

ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。

（ヨハネ　9・25）

「わたし（主）の思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ。――天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

（イザヤ　55・8、9）

父が召されて

父が天に召されたのは、一九九二年の八月のこと、家族全員で初めて広島に帰省したちょうどその時でした。すでに片肺になっていた父は、私たちが東京に帰るその日の朝、突然呼吸不全におちいり、あっという間に召されました。父の地上での生活の最後をよく見ておくようにとの主の贈り物であったと思います。

彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。　（ヘブル　13・7）

父は誠実な努力家であり、他人に頼ることをいさぎよしとしない人でした。ですから神に頼ることは逃げることになると考えていたようです。葬儀の後で父の日記を見て、父の心の思いを知ることができました。父は十数年前、神を信じることができなかったにもかかわらず、母が大切にしているイエス・キリストに目を向けようと決心したのです。そうしてイエス様に出会い、悔い改めて主を信じ、救われることができました。

洗礼を受けてからも、当時父が集っていた地方の教会のあり方に疑問を感じていたようです。日記には、「まだ何かすべきことが残されている」と記されてあります。一九九〇年の五月に、突然母と二人で、当時軽井沢で開かれていたキリスト集会のバイブル・キャンプにやってきました。そこでキリスト集会の皆さんと、今までに経験したことのない、自由で豊かな語らいを通して主への新たな思いを与えられたのでした。主イエスを信じて救われた者が、喜びや真の自由が全く感じられない教会に行き続けるのはよくないのではないかと真剣に考えるようになったのです。しばらくして、三十年間その教会に通い続けた母と共に、教会を出る決心をしたのです。

この軽井沢のバイブル・キャンプの日を境として、父の日記は新しいノートに変わりました。それまでは、思い出したように心の痛みがしたためられていた日記が、ただ、その日に与えられた聖書の一節だけを書き記すようになりました。この日記は、召される四日前、私たちが父の所に帰省したその日で終わっています。すでに力のなかった父の最後の四日間を支配してくださっ

た主に、恐れと感謝を覚えます。イザヤ書の4章5節に「主は、シオンの山のすべての場所とその会合の上に、昼は雲、夜は煙と燃える火の輝きを創造される。それはすべての栄光の上に、おおいとなり、仮庵となり、……」とありますが、父が最後に書き記した聖句は、それに続く6節で、病弱だった父にふさわしい箇所でした。

昼は暑さを避ける陰となり、あらしと雨を防ぐ避け所と隠れ家になるからだ。
（イザヤ　4・6）

母にとって、地上で最も信頼する父が突然召されたことはやはりショックだったようで、「どうしてですか、主よ」と叫びました。しかし主イエス様は母を憐んで、次の聖句を与えてくださいました。イエス様が弟子たちに、ご自身が十字架につかれることをあらかじめ告げられたヨハネの福音書の一節です。

「わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。」
（ヨハネ　16・7）

この聖句が母にとって、地上での残された生活を生きていく希望の言葉となりました。助け主である聖霊が母を導き、共に歩んでくださるのだというお約束を改めて示され、母の生きる望みはいっそう確かなものとなったのです。そして、母にとって天のみ国は、父と、小さいとき召さ

れた一人の息子にいずれ再会できるなつかしい場所になりました。

父は、召される八年前のある日、日記に次のように書いています。「人は生まれ、そして消えていく。後に何かを残しながら。その残したものがその人の生きた印しであるのに、今、自分には、残すものは少ない」。

それから八年を経過した今、父が残してくれたものは、「主イエス・キリストを信じる信仰」だったと確信しています。

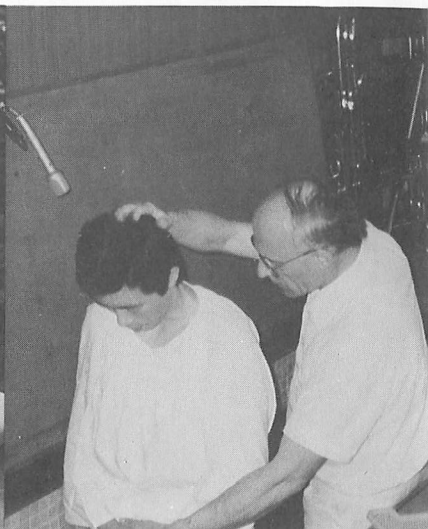
彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。

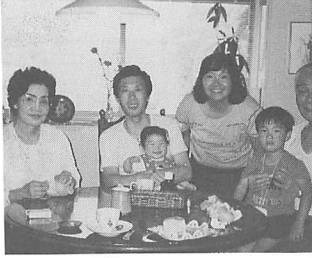
（ヘブル　11・4）

▼長女さらさんと。軽井沢のバイブル・キャンプにて。



▼洗礼を受ける雅文さん。1985年6月吉祥寺にて。





▲恵子さんのご両親、西村安弘さん、淑恵さんと自宅で。

くり返し「生きよ」と言われた主

岡本恵子

一九五一年広島県呉市に生まれる。長迫小、瓦木中、兵庫県に転居し西宮高、立正大学哲学科卒業。家族は夫雅文さん、長男恵以さん、長女さらさん、次女かなさん、次男嗣音さん、三女ほさなさん。

抜毛癖

船員の父はいつも不在で母は病弱といった家庭環境の中で育った私は、小学校三年の時から突然抜毛癖という自分で自分の髪の毛を抜いてしまうくせに悩まされるようになりました。抜けば抜くほど気持ちがよく、最後は円形脱毛になり、頭の地肌が見えるようになってしまいました。

気軽に理髪店にも行けず、皮膚科通いの日が続きました。今でこそこんなくせは心理学やカウンセリングで取り扱われるようになりましたが、三十年前には、「この子はどうしたんだろう」という目で見られているようでした。理髪店でも、皮膚科でも、「どうしたの」と聞かれることが怖いので、いつも嘘の答えを用意し、人の視線を気にすることが習慣になってしまいました。それもそのはず、自分で抜いてしまうのですから、人には理解されるはずもなく、自分でもどうしてかわからなかったのです。そのころの記憶をたどると、いつも心のどこかが空っぽという感じがありました。そのような状態にある私を、他人には極力隠すようにふるまっていたので、誰からも「明るい子だ」と言われていました。自分の中にこのような二面性が存在していることに

悩みはじめたのもこの頃です。

人生の問題を見つめる思春期に入り、「自分は何のために生まれてきたのか、その目標は何なのか」などと考えはじめ、生きるに価する人生があれば知りたいと思い、高校生のときに担任の倫理社会の先生に相談したところ、座禅がよいのではないかと禅寺を紹介され、通ってみました。しかし、今まで私が自分なりに努力して解決しようとしてきたことと同じで、自分の力に頼った禅寺の「自力本願の教え」では、私が抱いている問題に対する答えにはなりえませんでした。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。

（ローマ　3・10～12）

自由を求めて

両親から離れて上京した大学生活の中で、私は見るもの、聞くもの、行なうことのすべてが自由に思え、思春期の悩みはどこへやら、世の中の楽しみを追い求めることに熱心でした。しかし、そのような大学生活の中で残ったものといえば、以前と少しも変わらない自分でした。最終学年になると、ゼミでのレポート提出に追われる日々の精神的ストレスに一人暮らしの淋しさが加わって、再び抜毛癖が出るようになりました。

なぜ、私は労苦と苦悩に会うために胎を出たのか。私の一生は恥のうちに終わるのか。

（エレミヤ　20・18）

イエス様との出会い

卒業後、親の勧めた結婚話を断ったためにあずけられた広島のクリスチャンの伯母の家で、初めて聖書にふれることができました。その時私は、もう一度あの青春時代を通して解決できないままにしまい込んでいた問題に、聖書が何かの答えを与えてくれるのではないかと思いました。そして主は、私のような小さな悩む者の声を聞いてくださり、聖書の次の箇所を通して、「生きよ」と言われる主のあわれみと、限りないご愛の尊さを示してくださったのでした。

「わたし（主）があなたのそばを通りかかったとき、あなたが自分の血の中でもがいているのを見て、血に染まっているあなたに、『生きよ。』と言い、血に染まっているあなたに、くり返して、『生きよ。』と言った。」（エゼキエル　16・4～6）

私たちが生きているという価値が、これほどまでに主の目には尊いものであることを知り、また、自分の努力ではどうしようもないこんな自分をそのまま受け入れてくださるのは主おひとりだけであり、このご愛にお答えすることこそ真に「生きる」ことだと思いました。こうして私は、主のご愛を心から受けとることができました。

私は今までの生き方を心から悔い改め、イエス・キリストを信じ、救い主として受け入れる決心をしました。そして伯母の通っていた教会で、一九七五年五月に洗礼を受け、主に従って生きていくことを証ししました。

「あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、

新しい心と新しい霊を得よ。…わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。――神である主の御告げ。――だから、悔い改めて、生きよ。」（エゼキエル　18・31、32）

悩み

自分の存在価値を意味のあるものとして受けとめることができ、救われた喜びにひたっている時、伯母から結婚の話をすすめられました。相手は今の主人で、伯母の教会の友人の息子さんであり、中学時代まで熱心に教会に通っていたということでした。まわりの方々は、彼が結婚までには必ずイエス様を信じ救われると思いこみ、どんどん話が進んで、婚約期間は一年ということで婚約しました。彼を知る方々は彼が以前教会に熱心だったこと、今も教会に行くことに反対していないなどの理由で、誰もが賛成してくださいました。みんな私たちが幸せになることを願ってのことでした。婚約期間の一年間、彼は牧師や親、伯母からイエス様を信じ、従うようにと勧められましたが、受け入れようとしませんでした。それらのことを、私は他人ごとのような思いでながめていました。というのも、救われてからあまりにも急な話でもあり、信仰的にも未熟だったせいもあって、聖書でいう「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となる」（創世記2・24）という結婚の厳粛な意味を正しく受けとめていなかったからでした。

しかしやがて私のうちにも、未信者と結婚することへのためらいや疑問が生まれ、悩むようになりました。しかし動きだした大きな流れをとどめることができず、とうとう結婚式の当日を迎えることになってしまいました。

不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。…光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。

（Ⅱコリント　6・14、15）

このようにして、人生を共にする主人と共通な土台がもてないまま、結婚生活がスタートしました。人生を努力と頑張りで達成できると信じ、相手を思いやる言葉も少ない主人と、頑張りができない私との感情のずれが次第にあきらかになり、自然とお互いに理解しあうことができなくなり、私の心はかたくなになる一方で、その間しばしば口論がありました。やがて主人は聖書を批判することに熱心になり、科学的な観点から私を質問責めにして苦しめるようになりました。そして私だけではなく、行く先々の教会の牧師や友人にまで、同じように質問責めにするのでした。理屈に合わないもの、説明できないものを嫌がり、クリスチャンが出版した書物を読みあさり、科学者の学説を載せた出版物を内外をとわず注文しては読んでいました。

特に日曜日は、私にとって苦しみの一日でした。私は礼拝へ、主人は昨夜の二日酔いでお酒とたばこの臭う部屋で雨戸を閉じたまま寝ているのでした。主人は口を開くと「正論」を語り、実際の行動といえば飲みあかして午前様、給料も自分の飲み代にまわすというありさまで、私はこの矛盾にいらだちを覚え、満たされない結婚生活の日々が続きました。そしてそこから逃げだすために、家をあけ、聖書研究や奉仕へと自分をかりたてていきました。「主人が神様を信じていないから、こんなに不満足な生活になるんだ」と主人を心の中で責めながら、一年たち、二年た

ち、三年たつうちに、あせりとあきらめが心の中で交差しはじめ、祈ることも主のお答えを待ち望むことも忘れて、主人の救いの近道になるためならと、自分の思いであの手この手、人から人へと、方法と手段ばかりを追い求め、策略をめぐらしてばかりいました。二人が同じ信仰に立って、人生の土台を共有したいという執拗なまでの思いが、逆に主人を反発へと向かわせていったのでした。

その頃、私の精神構造は二重になっていて、外がわの自分はいわゆるキリスト者らしくふるまいながら、内がわの自分は最も醜い者でした。その苦しみから、再び抜毛癖が再発しました。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。…私は、ほんとうにみじめな人間です。（ローマ　7・18、24）

苦しみの末、私は自分のうちに大きなあやまりがあることに気づかされていきました。イエス様は言っておられます。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」（マタイ22・37、39）。主人がイエス様を信じるようになってほしい、主人に一緒に教会に行ってほしい、という私の側の要求が大切なのではなく、夫こそ私の隣人であるということに気づきはじめました。このようにして、夫の存在が心の中でしだいに大きなものとなっていきました。

みことばに導かれて、新たな思いで夫に関心を向けはじめた頃、主人が読んでいた内村鑑三の

著書にふれたのでした。その頃主人も、聖書に対する徹底的な反抗の末、その本を読みはじめていたのです。私はその本をひそかに読んで、信仰とは、奉仕することではなく、奉仕しようとすることでもなく、ただ主を信じること。また、働くことではなく、働こうとすることでもなく、ただ主を信じること。これらのことこそ、今私に必要なことだと思うようになりました。そして、自分を縛りつけていた教会の奉仕生活や教会教理から自由になることができました。やがて私は、教会へ行かなくなっていきました。私は無教会派の集会に関心を持つようになり、ある集会に何度が出席してみましたが、私の思いとは少し異っているように感じました。

キリスト集会へ、そして主人の救い

その頃、以前から吉祥寺キリスト集会のことを耳にしていましたので、思いきって訪ねてみました。一九八四年のことでした。そのキリスト集会で、礼拝で祈られる祈りを通して、またベックさんを通して語られるみ言葉を通して、聖書を中心とした集いの中に、イエス様がいきいきと生きて働いておられることを実感することができたのです。

やがて私は、この吉祥寺キリスト集会に集わせていただくようになり、このキリスト集会であれば主人は救われるのではないかと思うようになりました。折を見てベックさんに主人に会っていただくように、主人には無断でお願いしました。

お願いはしたものの、主人にそのことをなかなか言いだせず、とうとう当日の朝になってしまいました。このことも私の勝手な行動で、当然のことながら主人とけんかになり、主人は朝から

家をとび出していってしまいました。私はこんなことになったことを主の前に悔い改め、心を静めてベックさんにお詫びの電話をしますと、ベックさんは「恵子、一日は二十四時間あるよ」と慰められました。皆さんの祈りに支えられたのでしょうか、主人がしばらくして帰ってきて、また、ふらっと出ていってしまいました。ベックさんのお宅に行っていたことを後で知りました。それは一九八五年二月二日のことでした。その時、主人の心の内に何が起こったのかよくわかりませんが、次の日から黙って二人で吉祥寺キリスト集会の礼拝に集うようになりました。

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。（イザヤ　30・21）

三ヵ月後の一九八五年五月五日、軽井沢バイブル・キャンプに参加して、主人ははっきりと主の招きに従う決心をし、今まで主に反抗してきたことを悔い改め、主を受け入れて救われました。

結婚して十年目、ベールの入った包み紙の上に「恵子へ。長い間ありがとう。大事なのは新しい創造です。（ガラテヤ6・15）雅文より」という言葉を添えた小さなプレゼントをもらい、私たち二人に、主の恵みと祝福の時がやってきました。二人そろって聖餐にあずかった時の感動は今も忘れることができません。未熟な私が歩いた結婚への道のり、また数々のみ言葉をふりかざして相手を裁いていたことなど、数えあげればきりのないひどい私でしたが、主はそんな私たち夫婦を愛してくださり、真実をもってすべてを祝福に変えてくださいました。

待ち望め。主を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。主を。（詩篇　27・14）

あなたは私のかせを解かれました。私はあなたに感謝のいけにえをささげ、主の御名を呼び求めます。

（詩篇　116・16、17）

主の恵み

「のぞみも消えゆくまでに、世の嵐に悩むとき、数えてみよ主の恵み。」と聖歌六〇四番にあるように、主の恵みは、私にとってほんとうに身にあまるものでした。私たち夫婦のあらそいの中で育ったような長男も、小学六年生の時、主を受け入れました。次々と五人の子供たちが与えられ、それぞれ聖書からいただいた名を付けました。

いつも悔い改めのたりない者であり、不正直な私でしたので多くの戦いがありましたが、主はそれらの苦しみを必ず益にしてくださるという体験をさせていただきました。

イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

（ルカ　19・5、6）

私はこの箇所を読むたびに、自分の中にザアカイが重なって写って見えます。

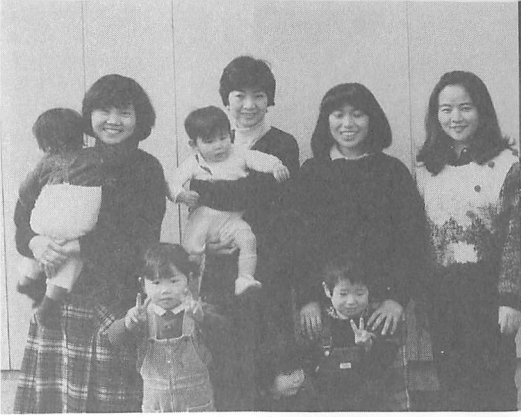
感謝

長い間私たち夫婦のために心を痛め、祈り続けてくれた主人の両親も、一九九〇年五月、軽井沢のバイブル・キャンプに、真の主にある喜びを求めて参加しました。そして、長年通っていた教会生活に終止符を打ち、新しい歩みを始めるようにキリスト集会に導かれました。集会の群れの中での生き生きとしたおつきあいを喜んでいましたが、二年後の一九九二年夏、主人の父が、帰省していた私たち家族と楽しいひとときを過ごしている中で天に召されていきました。以前から病弱だった父の呼吸が急に苦しくなり、主人の祈りの中で天に召されていきました。父の死を通して、私たちも、子供たちも、自分の命はすべて主のご計画の中にあり、召された後も天国で再会できる希望を新たにすることができました。

私の父も、その葬儀の前後に、私たち家族といっしょに日曜礼拝に出てくれました。そして、主人の父の前夜祈祷式と葬儀に出席して、「よかった。自分の葬儀もこのようにしてほしい」と、はじめて言ってくれました。その私の父は三ヵ月後、予期しない喉頭がんのために手術を受けました。最近父は病床で聖書のみことばに見入ることが多くなり、主は確実に父に働きかけてくださっておられることを実感いたします。そして主は、この父のために救いを約束してくださっておられることを、心から感謝いたします。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）



▲関町の祈り会の方々と。右から二人め故長沢文枝さん。



▲長男恵以さんの洗礼の日に。

若い頃から船に乗り、一生を海で生きてきた父。その父に主はみことばを通して次のように語りかけておられますから、深く深く感謝しております。

船に乗って海に出る者、大海であきないする者、彼らは主のみわざを見、深い海でその奇しいわざを見た…。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から連れ出された。主があらしを静めると、波はないだ。波がないだので彼らは喜んだ。そして主は、彼らをその望む港に導かれた。

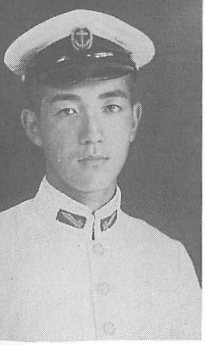
（詩篇　107・23、24、28、29、30）

いつも喜んでいなさい

深沢門太



▲左から節子さん、門太さん。



▲海軍飛行予科練習生のとき。土浦にて。

一九二七年東京に生まれる。武蔵野第一小、明星中を卒業、海軍飛行予科練習生となり終戦。盛岡高等農林、盛岡短大美術工芸科を卒業。㈱レナウン勤務の後独立。その後㈱白洋社を経て、油彩画家となる。家族は妻節子さん。趣味は畠仕事。

・日曜礼拝　毎週朝十時半
・家庭集会　随時
・住所　岩手県岩手郡雫石町西安庭三〇―二三―四〒〇二〇―〇五
・電　〇一九六―九二―五〇五六

私は東京の池袋で生まれました。ちょうどそのころ、父は鈴木三重吉という文学者が発行していた「赤い鳥」（児童文学雑誌）の挿絵を描いており、坪田譲治氏の「善太と三平」の挿絵も担当していたこともあって、私に「門太」という名前をつけたそうです。それ以来私は苗字で呼ばれることはほとんどなく、軍隊でさえも「もんた」と呼ばれ、六十五年が過ぎました。

軍隊へ

一九四三年、第二次世界大戦もいよいよはげしくなり、十六歳だった私は、国を護り、母や妹たちを護るためと信じて海軍甲種飛行予科練習生に志願し合格、ただちに三重県の海軍航空隊に入隊しました。毎晩のように誰かが失敗すると、全体責任ということで長さ一メートル、直径五センチもあろうかという精神棒といわれる棒で尻をたたかれました。やがて馬や牛のように、たたかれなければ働かないような精神状態になりながらも、日本は神国であり、絶対に負けることはないと信じながら訓練にはげんでおりました。終戦も間近い一九四五年になると、制空権は完全にアメリカ軍のものとなり、日本中は毎日空襲の連続でした。私は軍隊にいる間に三回死に損ないました。一回目は中国の上海航空隊での訓練中。二度目は徳島の飛行場で、米軍機による機銃掃射の時。この時は全員退避の命令で防空壕に入る時、私は背が高い方で、後から二番目に壕に入り、最後の兵が壕に入って戸を閉めたとたん、木の戸を貫いて私の後ろの兵に弾が当たり、即死でした。もし私が最後尾にいたとしたら、と思いぞっとしました。三度目は同じ徳島の航空隊でのこと。猛烈な空襲でした。私の班は十五名でしたが、班の編成替えで関西出身の兵十三人

の中に私ともう一人関東出身の兵が配属されたばかり。「全員防空壕に退避」の命令でしたが、何となく皆と一緒に防空壕に入るのがいやで、私だけが近くにあった機銃陣地に駆けていきました。そこでは以前の班で一緒だった戦友が必死になって米軍機を射撃しており、私も夢中で弾を運び、弾を込めておりました。「ズズーン、ドカーン、バリバリ」と猛爆が続き、辺りは土埃り、砂埃りで真っ暗になり、息もつけなくなりました。私もこれでいよいよ終わりだなと覚悟を決め、陣地の中で正座し目をつぶって死を待っておりました。不思議に恐怖感はありません。しばらくして静寂がおとずれ、明るくなったので陣地を飛び出し、自分が入るはずだった防空壕に走りました。なんと防空壕は跡形もなく、そこには直径十メートル位の大穴があるのみでした。茫然と立ちつくしていた私の足元に、砂の中から手首だけが出て、その手首がわずかに動いているではありませんか。私は夢中で砂を手で掘りますと、運よくすぐに顔が出てきました。その戦友は「プー」と口から砂を吐き出し、「助けてくれ」と叫びました。その頃私は下士官になっておりましたので、ばらばらに散っていた兵を集め、シャベルを集めて穴の中を掘らせました。四時間ほどで全員を掘り出し、生存者は最初に発見した戦友一人でした。この戦友は病院に入りました。夕方、十三人の死者をトラックの荷台に乗せ、私一人で近くの寺に運び、軍服をぬがせて井戸水で死体を洗い、また服を着せて本堂に十三人の遺体を並べ、たった一人の通夜をしました。その時十八歳。軍の命令系統は目茶苦茶でした。十五名の班で生存者が私一人ということで、なぜ私一人だけが生き残ったかということが後で問題になるのでは、と変な心配をしながら八月の終戦まで過ごしました。広島、長崎に原爆が投下され、八月十五日、ついに日本は無条件降伏をしま

した。

私はこれらの経験から、すっかり運命論者になってしまい、人間は生まれた時から「死ぬ人は死ぬ。年令にも性別にも関係なく、善、悪にも関係なく、その人の運命は定められていて、運の悪い人は死ぬ。自分の力ではどうにもならない」と思い、「どうせ死ぬなら、死ぬ時はにっこり笑って死にたい」。これが私の十八歳からの人生観になりました。そのためには、やりたいと思ったことは何でもやるという自己中心的な考えが強くなり、運命論者というと、何か悟った人間のように見えますが、要は「どっちでもいいや」という、「いい加減な人生」ということでした。

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。（詩篇 139・1～3）

主イエス様が私の道をことごとく知っておられることを知らず、自分は運が強いと信じ、宗教は自分の問題を自分で解決できない弱い人たちが信じるものと考え、また世界中の戦争の多くは宗教問題がからんで起こっていることを考え、「宗教」と「信仰」の違いも分からずにひとりたかぶっておりました。

戦後の混乱時代

いわゆる「特攻隊くずれ」として復員した私は、目的も持たず、やりたいことをやって生活し

ておりました。一時は親のすすめで盛岡の山の開墾をしたりしましたが、いつの間にか畠は兄と弟にまかせて、私一人東京に出てしまいました。どうせ一度ならず死んだ身体だという思いから、何でもできました。ある右翼の大物の家に居候し、書生をしたりしていましたが、街で理由もなく喧嘩したりしたのもその頃でした。

私は吉祥寺に四歳から十六歳で兵隊に行くまで住んでいました。それも不思議なことに、今の吉祥寺キリスト集会のある同じ通りでした。その頃は富士見通りといって、屋根に上ると富士山が美しく見えたものです。私たちが戦後盛岡に帰った後、その家には米国から帰国した家族が住んでおり、父母がアトリエに使っていた所でダンス教室をやっていました。私はそこでただでダンスを習い、夢中で踊っていました。大森の闇市でコロッケ屋をやっているのが家にばれて盛岡に戻った時、たまたま盛岡にもダンスホールができることになって、その設立委員の中に私の叔父がいたのです。オープンする三日前に興味本位で見にいった時、叔父から「門太、お前ダンスを知らないか」と聞かれ、「知っている」と答えたところ「それはちょうどいい。実はダンサーを二十人集めたんだが、ダンスを踊れるのが三人しかいない。ダンスの先生を手伝って、オープンまでに全員踊れるようにしてほしい」と頼まれました。三日間の特訓で、やっと足だけは動かせるようになりました。その頃の田舎のダンスホールはこんなものでした。「ついでにここで働かないか。ホール主任ということでボーイの責任者になってくれ」。今度はダンスホールの宿直室に住みこみ、毎日踊ったり、飲んだり、ダンサーを口説いたり、ふしだらな生活をしておりました。

私の若い時の罪やそむきを覚えていないでください。あなたの恵みによって、私を覚えていてください。主よ。あなたのいつくしみのゆえに。（詩篇　25・7）

祈りを聞かれる方よ。みもとにすべての肉なる者が参ります。咎が私を圧倒しています。しかし、あなたは、私たちのそむきの罪を赦してくださいます。（詩篇　65・2、3）

結婚

その後ダンスホールをやめて、米軍のキャンプに勤務しました。初めは庭師をやっていましたが、英文タイプを覚え、タイピストとしてやっとまともな仕事につきました。その頃、今の妻と知りあいました。まだ十七歳の女学生だった節子は、それまで汚い生活を続けてきた私にとって、天使のように清純な女性でした。一九四九年九月二十三日、妻十九歳、私は二十三歳で結婚しました。しかし私の生活はあいかわらずいい加減なもので、あっちこっちと職業を変え、二十六歳の時に絵を描きたいと言って家庭のことも考えずに美術学校に入学してしまったのです。今考えるとまったくひどい夫でした。二年生の時に子供が生まれ、アルバイトで稼ぎ、両親や親戚、まわりの人々に迷惑をかけながらやっと卒業しました。私は自分の生活が決していいものだとは思っていませんでしたので、子供は私のような生活をしない人間になってほしいと思い、妻にはその理由を告げずに「門太」の反対で「多門」と名付けました。

就職、独立、合併、就職

美術学校卒業と同時に、東京のレナウンという会社の宣伝部に就職することができました。その頃はまだ日本全体が貧しく、繊維会社で宣伝部のある会社はほんの一部だったと思います。他の新入社員は二十二、三歳、私は子連れの二十九歳で、しかも田舎の美術学校出というハンディもあったので、必死で働きました。二年目から、新作発表会の展示係になり、ちょうど会社の発展期ともぶつかって出張が続き、南は九州から北は北海道まで、それも今のように飛行機や新幹線もなく、汽車で全国を飛びまわっておりました。福岡に行くのに二十六時間、札幌に行くのに二十四時間ほどかかり、今日北海道から帰って翌日からは博多、広島というぐあいでした。日本人は働き過ぎだと言われますが、その頃は働き過ぎなどという言葉もなく、日本人は皆よく働きました。そのうち、仕事を通していろいろと学ばせられ、私のディスプレイもだんだん世の中に認められるようになり、会社を通して全国のデパートや洋品店から商品のレイアウト（配列）やディスプレイを頼まれるようになりました。営業部門が売上げを上げるために私を利用したこともあるでしょうが、私は自分の力を過信しデザイナーとか先生などとよばれ、たかぶり、不品行を重ねておりました。

「内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」（マルコ　7・21～23）

私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

（ローマ　7・19）

その頃は考えもしなかったのですが、人間の内側から出てくるものは、ほんとうに悪い考えばかりです。妻にばれなければ、会社に分からなければ、警察に見つからなければ、と自分中心にすべてを考え、自分の肉の思いをその場その場で満足させることばかりを行なっていました。

悪い考え、不品行、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさ、これらのすべてが、信仰を持つ以前の私に当てはまります。一九六一年、自分の思いでもっと収入をふやすために退職し、独立しました。私のたかぶりでしたが、東京オリンピックもあり、日本全体の景気がよくなり、それに乗ってモン・ジャッケという私の会社の業績も上がりました。朝から夜遅くまで懸命に働きました。自分では妻や三人の子供たちのために働いているつもりでしたが、妻はそんな夫を望んではいなかったことが後で分かりました。一九六二年、妻がノイローゼになり、入院してしまったのです。わけのわからないことを言って笑ったりしている妻を助手席に乗せ、かわいそうになり、涙をぼろぼろこぼしながら病院に連れていきました。自分は妻をこんなに愛しているのに、なぜこんな病気になってしまったのかと、自分中心の考えで悩みました。私はその頃スポーツウェアのデザイン、製作の会社を経営しており、デザイン、営業を私が担当して忙しく飛びまわっていました。自分の行動、生活、考え方を反省せずに、妻の弱さ

ばかりを気にして、自分が妻の心の中を分かってあげることができなかったからだということに気がつきませんでした。いつもの通り、「妻はこういう病気にかかる運命だったのだ」と勝手になっとくし、子供たちを兄夫婦や親類にあずけて仕事に逃げ、没頭しました。今考えると、その頃の妻には、友人はいない、金はない、夫との会話もないで、さぞ寂しく心細かっただろうと思います。まったく悪い夫でした。

罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。（ローマ　6・20、21）

やがて、いろいろな事情があり、私の会社はある会社と合併しました。私は企画、デザインの担当役員としてその会社で二年間働きましたが、自分のわがままからその会社を退社し、白洋社というユニフォームの製作メーカーに企画役員として再就職しました。一九七六年のことです。

主イエスを知った妻

妻は幸い三ヵ月で退院することができ、その後私の知らない間に主イエスに出会い、信仰を持つようになっていました。私は信仰にはまったく関心がありませんから、妻が精神的に落ちつくことができるなら、キリストでもなんでもいいと思っていました。私は小さい頃からクリスチャンに対してあるイメージを持っていました。それは断片的に聞かされていた聖書の言葉のせいだ

と思います。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」「右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい」「その人を赦し慰めてあげなさい」「さばいてはいけません」などなど。それらは自分にとって、都合のいい言葉ばかりです。私は自分のことをたなにあげて、クリスチャンのそういう優しさや自己犠牲的なものを妻に求めていたのだと思います。妻はどうして優しく話ができないのか、どうしてこれ位のことが我慢できずに文句ばかり言うのかと、いつも自分を中心に物を考え、生活に不満を感じていました。

その頃我が家では、いいことが次々に続きました。競争率の高いマンションが手に入ったり、茨城の大野村という海岸に百二十坪の土地が安く買えたり、七百人位の申し込みがあった展示用住宅の払い下げ抽選に当たり、念願の一軒家に住めるようになったりしました。

私はただ妻がすごく籤運の強い人だと思っていただけでしたが、妻はいつも「私は一生懸命祈ったのよ」と言っていました。私は「祈って何でもできるなら、世の中は簡単なものだ」と心の中で笑いながら、しかし一面ではよく当たるものだと感心していました。

千葉県での生活が始まった頃から、ベックさんという名前がときどき妻の口から出るようになり、また吉祥寺という地名が出るようになりました。私は幼年期、少年期を吉祥寺で育ったので、何となく気になっていましたが、イエス・キリストにはまったく興味が持てませんでした。どうして日本人が他国の神を信じなければならないのか、理解に苦しみました。

どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行なう人なら、神に受け入れられるのです。

（使徒　10・35）

今なら分かりますが、その頃は「どうしてドイツ人の宣教師なのか。日本人の宣教師だって多くいるのに」と思っていました。茨城に移り住んでから、私が朝起きると、妻はリビング・ルームでメッセージのテープを音を高くして聞いていることがよくありました。それが自分に挑戦しているかのように思えて、私の方は黙ってテレビをつけ、メッセージが聞こえないように負けずにテレビの音を大きくしたりして抵抗していました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒16・31）と聖書にあるように、ほぼ三十年になる妻の信仰により、私も主に従う者となる日が近づきました。妻にとってはさぞ長く待ちどおしい年月だったことでしょう。

回心、そして洗礼へ

私は六十歳になったらそれ以降の人生は絵を描いて過ごそうと決めておりました。六十歳で会社を辞め、非常勤役員となり、週に二日出勤する以外は毎日絵を描ける生活になりました。

一九九一年一月のこと、妻は長女のお産で一ヵ月間家を留守にしました。ひさしぶりの独身生活で心がゆるんだのでしょう。その間にある女性と親しい仲になりました。このことを知って、当然妻はおこりました。そして三日三晩一睡もせずに神に祈っていました。私は妻に謝りましたが、妻は「私よりも神様に謝りなさい。私よりも神様にゆるしてもらわなければ、あなたは救われません」と言い、私としては、その時神様より妻にゆるして欲しかったのですが、妻にせめら

れ、どうしても一度ベックさんという方に会うことを約束させられてしまいました。それでもまだ私は、ベックさんと話しあう気になれず、長々と手紙を書きました。いい年をしていまさら照れくさかったのです。二月二十七日に、妻といっしょに春日部の吉田さんご夫婦のお宅の家庭集会に行きました。二階の部屋でベックさんと二人になり、手紙を差し出しますと、ベックさんは「自分で読んだ方がいいよ」と言われました。自分で読む位なら、何もわざわざ手紙など書くのではなかったと心の中でつぶやきながら、半分やけくそでその長い手紙を読みました。

読み終わるとベックさんは「大丈夫、神様はゆるしてくれるよ」と一言おっしゃって、にこにこと笑って私を見ておられました。そのとたん、意味も理由もなく、この人の言っていることは本当だ、私はこの人の信じている神を信じようと決心しました。それから二時間位、妻といっしょに話しあいました。私が宗教はきらいだと言いますと、吉祥寺キリスト集会は宗教ではないこと、宗教と信仰は別物であること、そして父と子と聖霊のことなどを話してくださり、私は今までの罪多い生活を悔い改め、これからは主に従っていくことを決心し、表明し、ベックさんとともに祈りました。そればかりか、三月三日に吉祥寺キリスト集会で妻とともに洗礼を受けることまで決まってしまいました。

私は、ベックさんに会ってほんとうによかったと思い、豊かな安心感につつまれ、妻と集会の方々に感謝しながら帰途につきました。運転しながら「あなた、洗礼を受けるからと言って安心できないわよ。人間は同じ過ちを何回も犯すと聖書にもありますからね」という妻の言葉に心を刺されながら、私は絶対に二度と過ちを起こすまいと心に誓い、「神様、どうか私を悪から守っ

てください。私の弱い心に力をお与えください」と祈りました。生まれて始めての祈りでした。

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

（詩篇　32・5）

肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

（ヨハネ　3・6）

「あなたがたがわたし（主イエス）を選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」

（ヨハネ　15・16）

その後一九九二年三月に、私たちのふるさとである岩手県の雫石というすばらしい所に土地と家を与えられ、私たちは毎日感謝の日々を送らせていただいております。人間の幸福や平安な生活は、自分たちの努力によって手に入るものではなく、神の愛によって聖書を通してすべての人々に与えられることを日々体験し、感謝しています。まだまだ小さなことで言い争いの絶えない私たち夫婦ですが、口論してもすぐに仲なおりできるようになったことを感謝しています。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

新しい生活へ

一九九一年九月、軽井沢バイブル・キャンプに参加するため、煙草と晩酌をやめました。煙草は四十七年間も吸っており、何回か禁煙しては失敗をくり返しておりましたが、今回は何の苦労もなくやめることができました。自分自身との約束ではなく、神様との約束ですからやめられるのが当たりまえです。酒も四十五年間毎晩飲んでおりました。年二回の健康診断の前の日以外は必ず外か家で飲み、特に六十歳を過ぎて出勤が週二回になってからは、夕方四時になると気持ちがそわそわしてきて、自分で酒の用意をして飲み始めるという毎日でした。

また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。

（エペソ　5・18）

あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。

（詩篇　4・7、8）

酒はやめることができず、洗礼を受けてから半年間は毎晩飲んでいましたが、思いきってやめてみると、やめたその晩からすぐに眠れることがわかり、感謝でした。また、あれほど好きだっ

たゴルフも、それほど面白く感じなくなり、誘われても断っているうちに、誰も誘ってくれなくなりました。

しかしその代わり、畑仕事というすばらしい楽しみが与えられました。種をまき、芽が出て、成長していく野菜や花、木を見ていると、神様がお造りになったこの自然のすばらしさに目を開かれる思いで、毎日感謝しています。

若い頃から大好きだった読書も、聖書以外はまったく興味がなくなり、聖書に従う毎日を私たち夫婦に与えてくださった主に、心から感謝しています。私は今、喜びでいっぱいです。

すべてを神にゆだねて

私はよく友人たちと「あいつはあそこさえ直せばすごくいい人間なんだけどな。もう無理だな。五十を過ぎて、分かっていても自分の悪い所なんか直せないものな」と話しあったことを思いだします。すると皆が「それはそうだ。俺だって自分の悪い所をいまさら直せないし、直す気もないものな」で終わりました。しかし今私は、はっきり言えます。「自分の力で直すことはできません。しかし神様にお願いすれば、神様はそれは簡単にできます」。

去年の四月に、五十年来の長い交友が続いている友人たち九人が、二年ぶりに集まる機会がありました。私の家の新築を機に、わざわざ東京から来てくれた中学校からの友人たちです。その時友人たちは「門太、お前どうしたんだ。大丈夫か。病院に行った方がいいんじゃないか」と心配してくれました。彼らは冗談で言ったのですが、あまりに変わってしまった私に、皆戸惑いを

感じたようです。その時私は心の中で思いました。そうだ自分は一昨年、六十四歳の時、聖書という病院に入って、新しく生まれたのだと。感謝して、いつも喜んでいます。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか。」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」

（ヨハネ　3・3～5）

▼西軽井沢国際福音センターにて。仙台キリスト集会の方々と。



▼1992年、盛岡にて個展を開く。




▲1992年春、わが家のまえで。

主の奇しきみわざは

深沢節子

一九三一年岩手県盛岡市に生まれる。杜陵小、旧制白梅高女卒。
家族は夫門太さん、趣味は音楽、読書。

私は異母兄弟姉妹あわせて十人もいるたくさんの子供たちの末っ子として盛岡で生まれました。もの心がついたころは、父母が熱心な仏教徒で、朝夕仏壇に手を合わせ、私たちもそれをすまさなければ食事をすることができませんでした。家は呉服の商いをしていましたので、来客も多く、店員や家事手伝いの人も含めると三十人近くにもなりました。広い家の中は、みんなそれぞれの持場で忠実に働き、いつもきちんと片づいていました。

五歳になると子供心にも遠いと思える、川向こうの教会の一角にある幼稚園に入れられました。幼稚園は家とはがらりとようすが違って、広間にはマントルピースがあり、出窓にはレースのカーテンがかけられ、心地よい光がさし込み、近代的で清潔でした。先生方もきものにはかまをつけ、いつも優しく話してくださるので、私はすぐになじんでしまいました。そこにトマシイ・アーレンさんというおばあさんの先生がいらっしゃいました。外人を見たのはこのときが初めてで、卒園するまで、直接話したり、手をつないだり、頭をなでてもらったことは一度もありませんでしたが、いつも柔和で、威厳がありました。クリスマス礼拝が近づき「もろびとこぞりてむ

かえまつれ」の讃美歌を習い、家に帰ってくりかえし歌っていましたが、家の人たちはそれに興味を示すこともなく、六歳のお正月を迎えるころにはそれも忘れてしまいました。

一九四一年、私が十歳のとき、太平洋戦争が始まりました。その年の暮れに病気がちの父が亡くなりました。翌年長兄の息子が突然病死し、また翌年には長兄も後を追うようにあっけなく亡くなりました。悲しさに沈みこんだような我が家でした。私は念願の女学校に合格してつかのま母を喜ばせましたが、その母は安心したのか、たびかさなる過労からか、二十日ばかり入院して、帰らぬ人となりました。四年間も連続して葬式を出し、後に残されたのは女子供ばかり六人、毎日線香のただよう家で、終戦まで肩を寄せあって悲しみに耐えました。

一九四五年、敗戦。それも無条件降伏でした。戦後の価値観の大変化に混乱しながらも、私たちは平和と自由と民主主義を学び、新しい道を歩みはじめました。

中国から親戚の一家が引き揚げて来て、しばらくの間私の家に仮住まいすることになりました。子供六人を無事連れ帰ったものの、幼い下の子供三人が、風邪がもとで次々と死んでいきました。いったいなぜなの、さよならも言わないでなぜ子供たちが死んでいくの、私の生きている間、もう誰も死なないで…と、私は泣くにも泣けぬ思いで、だんだんと無口に沈みこんでいきました。

学校では、戦争中は防空壕を掘ったり、岩間に開墾にいったり、農事試験場に草取りにいったりで勉強はほとんどできませんでしたが、戦争が終わると、今まで敵国語だった英語が正規の授業になったり、勉強の内容もほとんど毎日変化するという教育の過渡期にありました。あるとき、

アメリカの青年が学校に講演にきました。彼は「これから平和にやっていくには友愛が大切です。それは、あなた『YOU』と私『I』で友愛です」と黒板にチョークで書き、私たちはそれを真剣に聞いていました。後一年勉強すれば高校を卒業できるのに、私は女学校を早々とやめてしまいました。翌月から、自由学園を出られた吉田幾世さんが「生活学園」を創立なさいましたので、そこに入学しました。その学園では、羽仁もと子さんの著書を読んでその内容を考え、生活の中に取り入れ、「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」の三本柱を中心に、よりよい生活ができるように指導するという方針でした。女学校でも、生活学園でも、私はなぜか今に本当に学ぶべきときがいつか必ずやってくるように思えてなりませんでした。

私たちのまわりには、戦後の東京の焼野原から盛岡に帰ってきて、文化活動をしたり、山に入って開墾する人たちがいました。門太さんのご両親は二人とも絵描きでしたが、雫石の地に開墾のため入植してこられました。門太さんは海軍の予科練で生き残り、兄弟三人で父母を助け、盛岡高等農林に通っていました。親戚ということもあって、彼は街に用事があるときは家にもやってくるようになりました。私は音楽が大好きで、女学生のころ兄嫁に無理に頼んでピアノを買ってもらい、時間のある限りピアノに向かい、心の慰めだったり、逃げ場だったり、夢中になって弾いていました。彼とは自然に兄妹のような気持ちで交際がはじまりました。

一九四九年、十九歳で結婚しました。そのとき主人の両親は、主人の兄が結婚したのを機に開墾事業を兄に譲り、盛岡の地にはじめての美術学校を創設するため、忙しく働いていました。私

たち夫婦は主人の母の実家に三世代同居し、忙しい母に代わって祖母と家事をやりました。そのころアルバイトをしていた主人は絵の勉強をしたいと志し、美術学校に四年間通いました。その間私は両親や実家の兄嫁に助けられ、そのうち長男も生まれました。主人は美術学校卒業と同時に東京に就職が決まり、一九五四年に上京し、すっかり生活が変わってしまいました。その年の暮れに長女を出産しました。

主人は、仕事を家に持ち込まない主義だと言って、帰宅がどんどん遅くなっていきました。私は何となく心細くなって、土地もないのに公庫に申し込んだところ当選し、ひばりが丘に住んでいた主人の姉を頼り、敷地の一部を借りて十坪の家を建てました。主人は家の返済に夜遅くまで働きました。そのうち次女も生まれ、長男は自由学園の初等部に入学し、私も三人の養育に追われる毎日となりました。私は疲れはて、長男が朝早く起きお湯を沸かしてから私を起こしてくれるという、親と子がさかさまになったような生活をしていました。無我夢中のうちに、結婚して早や十三年がたっていました。

長男が四年生の秋、借地のことでトラブルがおき、私は肝心なときに主人に相談もできず、主人は「おまえが悪い。謝れ」の一点張りでした。ついに夜眠れなくなり、軽度のノイローゼで入院しました。一家離散。みじめな入院でしたが、患者同士は心に着飾ることもなく、仲よく話しあうことができ、みなさんとクリスマスを祝ったり、ホールにあったピアノを弾かせていただいたりしながら、少しずつ落ち着きをとりもどしてきました。三カ月で退院し、久我山のアパート

で生活を始めました。そのとき私は、ふきん一枚しぼる力もありませんでした。

そのころ主人は私に相談もなく、女性のパートナーと会社を辞め、共同で事業を始め、一生懸命でした。主人とは顔を合わせても話すことがなくなっていました。子供たちは成長し、みんなで仲よく私を助けてくれました。主人は「妻というものは夫が何も話さなくてもわかるようでなければいけない」と言いますが、愚かな私はいままで何もわからずに生活してきました。あるとき主人は、辞書を一冊ぽんとテーブルの上に置き、「おまえは言葉を知らなすぎる」と言いました。わたしは返す言葉もなく、しょげてしまいました。三十年の自分の人生を振り返りますと、私は主人の苦労も知らず、子供たちを相手にわがままを言い、あまりにものんびりとした生活を送っていました。そのころ日本は経済の高度成長期に入っていました。

この辞書を使ってみようと思いたって、ある本屋に飛びこみ、一冊の本を買ってきました。ヘルマン・ヘッセの「デーミアン」でした。隠された内面の苦悩や孤独、善と悪の世界、良心の問題…ヘッセの本を次々に読みました。次はドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」を読みました。兄弟三人三様の性格の違い、欲望のものすごさ、そして六歳の男の子が天の啓示を受けたことなどに感銘を受けました。またサマセット・モームの「人間の絆」では、外に一歩も出たことのない身障者が健康な人より多くのことを理解しているところを読んで不思議な思いでいっぱいになりました。しかしどの本も一冊限りで完結です。本を読んでいるときは楽しいのですが、読み終わるとかえって虚しく悲しい気持ちに戻るのでした。今まで読んだ本に出てくるわからな

い言葉の意味を辞書で調べようとしてもよくわからず、ふっと教会にいってみようと思い立ちました。さいわい近くに高井戸教会があり、次の日曜日を待って一人で訪れてみました。

静かで、厳か。隣りに座っていらした方が親切に聖書の頁まで開けてくださいました。別世界でした。私は心配が山のようにありましたが、聖書と讃美歌を買い、家に帰りました。毎日一人になると読み出しました。聖書の頁を開けるごとに、すなおに聖句が心に入ってきます。どの頁の聖句も目にまばゆいばかりに輝いて、読み進んでいきますと宝石箱をひっくり返したような感じで、とうとうイエス様にお会いすることができました。心の奥底から、感謝と喜びがこみあげてくるのでした。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

（詩篇 119・71、72）

すると（イエスは）彼らに言われた。「では、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」

（ルカ 20・25）

このみことばで家の借地の問題も一気に解決されました。そして私の病気も少しずつよくなってきました。

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義

とみなされるのです。　（ローマ　4・5）

私の手から聖書が離れなくなり、本当のことを学べるときがついにきたことが嬉しく、楽しみになりました。そして、いままでイエス様に従わなかった罪を悔い改め、十字架の赦しをいただき、イエス様に従っていくことを口で言いあらわして救われることができました。

一九六五年四月十八日、イースターの日に滴礼で洗礼を受けました。近所の奥さん方とも仲よくなって、教会にも出席し、平安をとりもどしてきました。

ある日突然、主人は「一週間後に保谷に引越す」と私に命じ、あわただしく引越しました。いままで主人の給料袋など一度も見せてもらったことがなく、「今月はこれで生活しなさい」と言われればその額で何とかやりくりしてきましたが、アパートから一軒屋に引越してきますと、月の半ばを過ぎたころには手もとがとぼしくなり、主人の会社はボーナスなども期待できず、毎日必死の思いで生活しましたので自然に教会にも足が向かなくなりました。

一年が過ぎたころ、主人は「知りあいの会社で寮の管理人を頼まれた」と言いました。主人には従うことが主のみ心ですので、管理人をお引き受けすることになりました。長男を学園の寮にお願いし、長女を連れて千葉の本八幡に引越し、管理人の生活がはじまりました。

「わたし（イエス様）はまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。」
（ヨハネ　15・1）

毎日広いホールや廊下をモップで清掃するとき、わたしは畑を耕すように自分の心をみつめ耕し、すべての労苦を神様への捧げものと思えるように変えられていきました。体を動かすことによって健康も与えられ、みことばの種もしっかり心に入って、やがて枝葉が茂るように連なってくるのでした。一年三六五日気の休まることはありませんでしたが、「わたしはあなたがたを捨てて孤児にはしません」という主のみことばに生かされて、寮生と話すことも働くことも楽しみとなりました。半年後には盛岡の実家にあずけていた次女も呼びよせることができました。

主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。

（ヘブル　2・18）

管理人の仕事と家事に追われ、ひとさまの二倍忙しく立ち働き、教会にいくこともできず、信仰も深まらないように思うときもありましたが、無報酬で働くことの喜びを体験し、昼も夜もすべてが主への感謝と祈りと思い、体を動かしながら主に祈ることを学ばせていただきました。

やがていつのまにか七年の歳月が流れました。長女も次女も思い思いの進学ができたことは感謝でした。

やがて空家さがしをすることになり、市役所の一室に住宅公団の空家の応募用紙をもらいにいったとき、担当の方が「奥さんの年になったら、空家より公社の分譲マンションに申し込んだ方がいいですよ」と公社の場所を教えてくださいました。さっそく、申し込みにいき、申し込み用紙に書きこんでいました。すると係りの方が私の住所の箇所をのぞき込んで、「奥さん、ちょっ

と書くのを止めて、こっちの部屋にきなさい」と言われるので私はその部屋に入りました。係りの方は「実は奥さん、あなたの住んでいる隣の駅に分譲済みのマンションがあり、その中の一軒が事情があって空いているのだが、これから見にいって気に入ったら明日朝十時までにきて申し込んだらあなたに譲ります」と言ってくださいました。まさに主の恵み、感謝でした。

そのマンションに引越してしばらくして、主人の事業が暗礁に乗りあげました。主人は会社を整理して、四十九歳で再びサラリーマンになりました。あいかわらず日曜日はゴルフや釣りを楽しんでいる主人でした。長男が結婚し、長女はアメリカに、次女は大学の学生へと成長しました。

そのころ下総中山のある教会で、アメリカの宣教師のライトさん一家にお会いしました。岸節子さんという方にもはじめてお会いしました。そこで新改訳の聖書と聖歌をはじめて手にし、ときどき集っていましたが、一家がアメリカにお帰りになった後は、雰囲気ががらりと変わり、足も遠のいてしまいました。

そんなある日、久しぶりに街で岸さんとお会いしました。岸さんは吉祥寺キリスト集会のことを話され、とてもいい所に思えたので私もいつしか吉祥寺キリスト集会を訪れるようになり、そこでベックさんのお話をうかがったり、メッセージのテープを聞かせていただいたりして、どんどん神様のご計画どおりに導かれていきました。病気以来私は自分の健康に注意深くなり、用心深くなって、身体に無理のないようにということもあって市川の小川さん宅のキリスト集会に出席するようになりました。新しいテープを岸さんからお借りして聞くたびに、なんだか今まで聞いたこともないメッセージだと思いましたが、どうしてこうはっきり目が覚めるように語られる

のか、不思議な思いで聞いていました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

長女は、アメリカのクリスチャン・ホームで一年半働き、信仰を持って帰ってきました。そして日本に帰ってから、アメリカの教会で知りあった台湾出身の歯科医の方と結婚しました。次女も結婚し、次々と孫の出産であわただしい日々が続きました。やがてそれも終わると、主人と二人だけの生活になってしまいました。主人はお酒を飲むとおしゃべりになり、だんだん昔の夢がふくらんできているらしく、「芸術はこの世で最高だ」とか「ピカソがわかる。おまえに話してもわからない」などと返事に困るような話しかしなくなり、後はテレビを見てはしきりに何か考えこんでいるようでした。主人がいつかはっきりした老後の計画を話してくれるまで、私は忍耐強く祈ることしかできない毎日が続きました。

「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。」

（マタイ　18・19）

主人が六十歳を迎えたころから、「老後は好きな絵を描いて暮らしたい」としきりに言うようになりました。私も病気で心配をかけましたし、できることならマンションではなく環境が良く

て落ち着いて絵を描けるような住まいをと祈り続けていました。主人の会社も、後二、三年の間は週二日だけ出社すればいいということになり、自由な時間も与えられました。

あるとき、茨城の大洋村の別荘地を見にいこうということになりました。はじめて行く土地ですから方向もわからず、バンガローが並んでいるので道を入っていきました。海が広々として気持ちがいいところで、主人はたいへん気に入り、近所で仕事をしていた大工さんに近くに不動産屋があるかと聞きましたところ、「伯父さんが不動産屋をやっているから寄ってみなさい」と教えられ、そこで思いがけず百二十坪の土地を買うことができました。そこが一つ手前の大野というところだと、自宅に帰って二日ばかりも気がつかずにいるほど、突然買ってしまったのです。その後不思議なことに、ある建築会社の展示場の家屋に当選し、広い家が与えられました。感謝しても感謝しきれないほどの恵みをいただきました。

引越してから、岸さんから新検見川の川島さん宅でキリスト集会があることをうかがって、一カ月に一度そこへいくのが楽しみになりました。テープも、たくさん送ってくださいました。

主人は熱心に絵を描きはじめました。五十枚も描いたでしょうか、そのころ吉祥寺で第一回の個展を開きました。そのころはまだ生きていた父や母、そしておおぜいの方々が見にきてくださり、認めていただきました。その後水戸でも第二回目の個展をし、盛況でした。号数もだんだん大きくなり、本格的なアトリエがほしいとしきりに言います。それで近くを探しましたが、ちょうど地価高騰の時期にあたり、適当なものがなく、ただ祈るばかりでした。

春に久しぶりに盛岡で同年会があり、二日ばかり余裕をみて出かけました。昔私の家で働いて

いた方に土地の相談をしましたところ、すばらしい土地を二百七十坪手に入れることができ、夢のようでした。

あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。

（ダニエル　12・13）

新しい家の設計を建築会社にお願いしたり、家の売却、引越しなど問題も多く、私たち夫婦は力を合わせて祈らなければならない大きな転換期にさしかかっていました。

そんなある日、主人と私が真っ向から対立するという大問題があからさまになりました。今まで私は主人に従い、つくしてきて、平安で幸せな家庭だと思っていましたが、それが実はみせかけの平安と妥協の生活でしかなかったことがわかりました。これからの老後の幸せを思うと、信仰を持って真実な生活をしなければならないこと、罪を悔い改め神様に罪を赦していただくことがなにより大切なことを示されました。とうとう決着をつけるときがきたのです。三日三晩徹夜で話しあい、私は必死に祈りました。そして私たちは主に打ち砕かれました。四日目に岸さんに電話ですべてをお話し、理解していただき、春日部キリスト集会の吉田さんのお宅に私たちをつれていっていただきました。ベックさんとお話をして、主人はまたたく間にイエス様を受け入れました。主のみわざは、そしてご計画は、なんとすばらしいのでしょうか。

キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。…また、両者を一つのからだとして、十字

架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。
（エペソ　2・14～16）

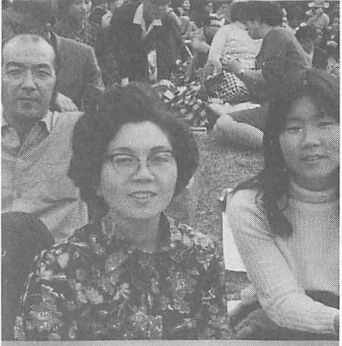
一九九一年の春、私たち夫婦は吉祥寺キリスト集会で二人そろって洗礼を受け、祝福を受けました。翌年の春には主からいただいた土地にアトリエができました。そして仙台キリスト集会の高田さん宅の礼拝に、月二回主人と出席するようになりました。このようにして私たちは、老後を主人と二人して主に従って歩ませていただくという幸せをいただき、深く感謝しております。そして老後の幸せは決して絵空事でないという真実を、主は恵みによってお示しくださいました。

「わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」
（ルカ　11・9、10）

私はこのみことばに従って、今日も明日も信仰の扉をたたき、主を仰ぎ見、主を中心にして救われた日々を感謝していきたいと祈る毎日です。ときには肉の思いが先行しますが、イエス様が七度を七十倍するまで赦しあいなさいと言われたとおり、主の前で二人ですなおに話しあって赦しあうことができるようになりました。主のあわれみが、私どもにどんなに奇しいみわざを成しとげてくださったか、はかりしれません。

互いの重荷を負い合い、そのようにして
キリストの律法を全うしなさい。
（ガラテヤ　6・2）

主のみ名を心から賛美いたします。そしていま、六十年をふりかえって見て、すべてが主のあわれみと恵みであったことに心から感謝申しあげます。





▲上・左から門太さん、節子さん、長女みどりさん。
長男多門さんの体操会で。
下・水戸市で個展を開いたとき。節子さんと友人の方々。

▼門太さん、節子さんを囲むキリスト集会の方々。



奇蹟コミュニケーションで回心

飽戸　弘

一九三五年横浜に生まれる。東京大学卒。東京大学新聞研究所助教授などを経て、現在東京大学文学部教授。日本社会心理学会常任理事、日本行動計量学会理事。主な著書に「アメリカの政治風土」「メディア政治時代の選挙」「消費文化論」「コミュニケーション」「社会調査ハンドブック」など。

趣味は旅行、スキー、テニス、シュノーケリング、囲碁。

家族は、妻安子さんと長女千弘さん、次女純さん。



▲日本社会心理学会のシンポジウムで講演中の飽戸弘教授。1985年。

左から弘さん、古田さん、河辺さん。
▼ニューヨークのマンハッタンで。



「神」と出会う

今から七年ほど前、一九八六年のお正月だったと思いますが、はじめて家内に連れられ、吉祥寺キリスト集会の元旦礼拝に行きました。家内が最近熱心に通っている吉祥寺キリスト集会とはどんなところか、ちょっと見ておこう、というくらいの軽い気持ちでした。わが家にはその頃ごたごたが絶えず、自分でも少しまいっていたことも、吉祥寺キリスト集会を覗いてみようと思った理由でした。

狭い会場に、大勢の人たちがぎっちり集まっているのにびっくりしたこと、牧師さんもおらず、プログラムもなく、いろいろな人が入れ替わり立ち替わりお祈りをするのにびっくりしたことくらいしか覚えていません。それにしても、どうしてこんなに大勢の人が、こんなに熱心に集まってくるのだろうか。ここには何かあるに違いない。漠然とそんな感じをもって、家内に誘われるままに、年に四、五回、家庭集会や、たまには日曜礼拝にも行くようになりました。

自分の生きざまに不安も疑問もまったく持ったことのなかった私、そして家族にも、仕事にも、心から満足し、すべて順風満帆で過ごしてきたわが家に、ここのところたて続けにごたごたが生じ、漠然と自分の生きざまに何かおかしいところがあるのかも知れないと、ふと不安がよぎるのでしたが、どこがどうおかしいのか、まったく分かりませんでした。それよりも、このごたごたの原因はやはり自分ではなく、家族の者たちのせいだと考えていました。

その年の秋、軽井沢バイブル・キャンプがあり、何となく参加することになってしまいました。しかもその時はじめてベックさんとお会いし、親しくお話をする機会を得ました。その時のベッ

クさんのお話はよくは分かりませんでしたが、後で触れますが、自分の生きざまに、自己実現の生き方に、本当に自信を喪失し、はじめてその罪に気づいたところでしたので、実に素直に、自然に、主を受け入れ、自らの罪を心から悔いて、主に謝罪することができました。ベックさんについて、生まれて始めてお祈りをすることもできました。

こうして私のクリスチャンとしての第一歩が始まりました。あと何年生きられるか分かりませんが、残る人生は主とともに歩こう、主に従って歩こうと、決心したのでした。一九八六年の晩秋、私がちょうど五十歳のときのことでした。

信仰に至る「五段階理論」

これは私にとっては大事件でしたが、しかしこの時の私の信仰はまったく未熟な段階でした。信仰を持ちたいと考えた頃、まず私は心理学者として、人々がなぜ、どうやって、信仰を持つことができたかを分析することにより、いかにして自分も信仰を持つことができるかが分かると考えました。内外の私が尊敬しているクリスチャンの先人たちが、どのようにして信仰を持つに至ったかを分析してみることにしたのです。これはそう難しいことではありません。吉祥寺キリスト集会のみなさんには沢山の証しのテープがありますし、「光よあれ」もあります。内外のクリスチャンの書いた信仰書も膨大なものがあります。こうして沢山の信仰書を読んで「研究」をしてみました。しかしさっぱり分かりません。

なぜ信仰を持つことができたかは分からないのですが、信仰に至るプロセスには、かなり共通

の段階があり、それぞれその段階を経て信仰に至るようだ、ということも分かってきました。当時、私が「飽戸弘の五段階理論」などといって考えたのは、次のようなものでした。

第一段階「神の存在」……天地を創造され、人類を造られた方、これを主、または神と呼べば、そういう神は存在するにちがいない。

第二段階「三位一体」……父と子と精霊という「三位一体」が確信できる。

第三段階「認罪と謝罪」…自分は罪人であることを認め、単数の罪（主から離れ、主に背いて生きてきた罪）と複数の罪（この世で犯した数々の罪）を、主に謝罪する。

第四段階「イエス様の死と復活」…イエス様の十字架での死と復活を確信することができる。

第五段階「再臨」……イエス様の再臨も、千年王国も、天国も、すべて確信できる。

はじめて主を受け入れ、ベックさんとお祈りした時の私は、この第三段階をパスした所だったのです。神の存在を信じる。そして自己実現の罪のため、家族が味わった悲しみと苦しみを知り、主に謝罪し、赦していただきたかったのです。信仰とは、理解しようとして理解できるものではなく、信頼し、確信するものなのです。主は、さまよえる一人の魂を救うために、ともかく第一歩をスタートさせるよう、ベックさんを通して私を励ましてくださったのです。

信仰と私

元来私はまったくの「無神論者」でした。大学を出て就職しても、結婚してからも、ともかく

物心ついてから神仏を拝んだ経験はまったくありません。神社へ行っても賽銭をあげたり、お札を買ったり、おみくじを買ったりしたことはありません。先祖の墓参りにはときどき行きましたが、これはまったくのレジャーとして、またはこの世の社交として行っただけで、信仰とはまったく関係ありませんでした。

特に研究者になってからは、科学者というものは、目に見えるものだけを信じ、目に見えるものだけを使って、天地万物の法則を発見し、人間行動のルールを定式化していくもので、いわゆる宗教などとは無縁のものと考えていました。今までにも、神について、信仰について、しばしば考えたことはありましたが、それはあくまで理論的な関心で、真の信仰とはまったく無縁のものでした。

まず第一に、私の専門が心理学で、なかでも「国民性や価値観の国際比較」という領域に主な関心がありました。特に日本人とアメリカ人やヨーロッパ人とを比較するという研究が多かったわけです。そこで日本人と欧米人を比較する際、欧米人の価値観や、生活慣習の基底にあるキリスト教的価値観、クリスチャンの生活慣習を、まず理解することがどうしても必要だと考えていました。またはその聖典である聖書を「理解」することが不可欠だと考えていました。自分の研究のために、まず聖書の「勉強」をしなければ、と考えたわけです。

第二に、仕事を離れても、日本人として欧米人に伍して国際人として生きて行くためには、「教養」として聖書の知識ぐらいもっておかないといけない、という考えもありました。明治、大正時代の日本人は、みなそのような意識を強く持っていました。

このような理由で、キリスト教文化や、聖書についての勉強をしなければと思っており、しかし自分ではなかなか暇がなくて勉強は進みませんでしたので、家内や娘が「教養」として聖書を読んだり、教会へ行くのは賛成でした。しかし自分がクリスチャンになるなどとは夢にも思っていませんでした。また家内も娘も、「教養」を越えて、洗礼まで受けて本物のクリスチャンになってしまうということになると、これも反対でした。

家族の脱落と家庭の崩壊——「自己実現」の破綻

ところで、私の人生における最大の理想は「自己実現」でした。人間は死ねば土に帰る。短い一生のなかで、自分がこの世に生きたという証拠を残すためには、何でもいい、仕事でもいい、趣味でも、社会奉仕でも、スポーツでも、芸術でも、何でもいいから、何か一つ、自分でなければできないことを捜し、そしてそれを実現するべく、自己を鍛え、努力し、頑張って頑張って、それをなしとげる。これこそが人間がこの世に生まれてきた意義にほかならない、と考えていました。家族も私と同じ目標を持って、それを信じて、みんなで頑張ってきました。

家内は、油絵、パステル画、声楽、コーラスと、いろいろな趣味を持って、家事のまにまに実に忙しく活躍していました。数年に一度は私と一緒に外国へ行き、私の仕事を手伝ってくれました。そんな家内が自慢でもありました。二人の娘たちも小さいときから音楽に全力投球し、末は音楽家として活躍することを夢みて頑張っていました。

しかしこんな幸せ一杯の家庭に、ついに破綻が訪れます。長女は、作詞・作曲とドラムス演奏

を担当するロックバンドのリーダーとして頑張ってやっていましたが、ついに精根つきてダウンしてしまいます。胃潰瘍と突発性ノイローゼで、まったく仕事ができない状態になって、入院してしまいました。

この試練を通して、家内は真の信仰を求めるようになり、吉祥寺キリスト集会へ通い始めました。家内はそれまで生きがいとしていたすべての趣味や活動を止めてしまい、吉祥寺キリスト集会に全生活を投入するようになりました。「いままではあなたの言う通りに生きてきましたが、これからは自分の考えで生きていきます」と、自己実現の放棄を宣言し「人形の家」から出ていってしまいました。もちろん物理的に出ていった訳ではなく、精神的に独立して出ていったということです。すっかり自己実現を放棄した家内のあまりの変わりようにとまどい、夫婦の間も冷えきっていきました。

そうこうしているうちに今度は下の娘も、バイオリンを止めて普通の勉強をしたい、芸大は受験しないと言い出しました。必死で説得し、芸大だけは進学させましたが、もうかつての自己実現への熱意は消失していました。こうしてわが家の「自己実現」は、次々と挫折していきました。自分の生きざまに、そして今までの家族の生きざまに、何か問題があったのかも、といった漠然とした感じは持っていたのですが、しかしよく分からないままに、何となく、何かを求めて、吉祥寺キリスト集会へ行くようになったことを記憶しています。

吉祥寺キリスト集会で

吉祥寺キリスト集会に集うようになってしばらくは、本当に驚きの連続でした。

まず第一に、なぜか人々が底抜けに明るく、喜んでいるということです。どうしてこんなに無防備なまでに明るい顔をしていられるのだろうか。第二に、吉祥寺キリスト集会に集っている人たちが、なんともクリスチャンらしからぬ人たちばかりだということです。もとアル中、薬物中毒、もとノイローゼ、現在別居中、重い病に苦しんでいる人、事業に失敗した人などなど。しかもそれを証しの時、食事の時に、みなしゃべってしまうではありませんか。しかもこうした不幸、災難を、どうも感謝している風があること、それを喜んですらいるようであるということでした。第三は、みんなが、自分は「どうしようもない人間だ」と、言い続けていることです。

第四に、何よりもびっくりしたことは、「むさぼってはいけない」、「頑張ってはいけない」、ということ。そして「自己実現は罪だ」と言うのですから、これには驚きました。そんな話は聞いたこともありません。この世で何よりも大切なことは「頑張る」ことです。私自身も、頑張ってきましたし、教師としていつも学生諸君に、頑張れ、頑張れと、励ましてきました。何よりも、私の人生の最大の目標であった「自己実現」が罪であるとは。まさに仰天しました。

今考えると、これらはすべて、聖書に書いてあることばかりなのです。少しも驚くようなことではなかったのですが、始めてこのような考え方、生き方に接したときは、本当にびっくりしました。そしてこれは、大きなショックでもありました。こうして、この世とまったく違う、新しいルールで生きている人たちを実際に目で見ることにより、それに接した人々は徐々に変わっていくわけです。主によって、変えられていくわけです。

「自己実現」の罪

どうしても納得できなかったのが、第四の、むさぼってはいけない、頑張ってはいけない、自己実現はいけない、というところでした。私が一生をつぎ込んで求めてきたものが、いま、全面的に否定されようとしているのです。これは私にとって危機でした。

わが家の自己実現の生きざまが、次々と破綻を迎えるのを目のあたりにし、そしてキリスト集会でなんどもなんどもむさぼりは罪だ、自己実現は罪だ、と聞かされているうちに、本当にそうかもしれないと、ふと思うようになっていきました。人間は自分のことしか考えないどうしようもない者だと聞かされているうちに、そうかも知れないと思うようになりました。するといままで、家族が私の理想から脱落し、家庭が崩壊の危機に瀕しているのは、家族がだらしがなく、キリスト集会で変なことを吹き込まれ、人生観が変わり、頑張れなくなってしまったためだと考えていたのですが、これらすべてが、実は私のせいかもしれないと、ふと思いました。

長女も、私の自己実現の理想を追って、頑張って頑張って、ついにダウンしてしまった。家内も人形の家から出ていくといって、すべての趣味と活動を止めてしまった。次女も、コンクール、受験と、本人はあまり気にしていない風でしたが、実は心身ともに疲労困憊していたのでしょう。こう考えてくると、すべてが私の「自己実現」という理想がもたらした罪なのだと、やっと分かってきました。自分のこの理想が、家内を、娘たちを、こんなにまで苦しめ、その結果が今日のわが家の状況なのだと、はじめて気がつきました。

するといろいろなことが見えてきます。世間の親たちが、子供連れで公園で遊んでいたり、日

（一九三ページに続く）





（写真上から）上左・勝子・ストーバーさん。
上右・ボストンから来たリャオ・メリーさん。
中上・ロス在住のご婦人がた。
中下・南場さんご一家。自宅で日曜礼拝を。
下左・地元のサン・ユキコさん、
リン・グレイスさん、斎藤さん。
下右・東京から参加の酒井夫妻。



日本全国から世界へ!
広がるバイブル・キャンプ。

キリスト集会のバイブル・キャンプは、いつも日本全国のどこかで開催され、最近は海外でも開催されるようになってきました。イエス様をまだご存じない方も、信じて救われておられる方も、ぜひご参加ください。



バイブル・キャンプ開催地（1993年現在）
- 旭川・札幌・盛岡・仙台・富山
- 西軽井沢国際センター・名古屋
- 神戸・広島・坂出・徳島・高知
- 大牟田・別府・宮崎・沖縄
- ロサンゼルス・ドイツ（予定）





写真撮影・選定　G・ベック









(写真上左から)
・キャンパスで藤本さんと。
・洗礼を受けた方々。(下)
・古田ご夫妻と北海道の方々。(上)
・学生食堂のごちそう。浅利さん、那須川さん。
・89歳で元気な鐵さん。
・証しをする筋萎縮症の児玉さん
・旅行の世話をしてくださった桜本さんご一家(下)。
・バイオラ大学の美しいキャンパス。
・ロス在住の杉山さんご一家(下)。自宅で日曜礼拝を。

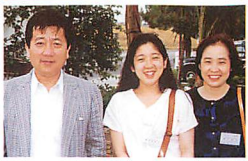
ロサンゼルス バイブル・キャンプ 1993.6.19~23

明るい太陽に輝くロサンゼルスのバイオラ大学。豊かな緑と自然にかこまれたキャンパスに恵まれて、ロス在住の方々、サンフランシスコやニューヨークから来られた方々、それに日本から参加した233人の方々を加えて300人ちかくの方々が、主のみことばを中心に、あふれるばかりの恵みと祝福をいただき、すばらしい大キャンプになりました。洗礼は夕闇のなか、聖歌に包まれてプールで行われました。「ふたりでも三人でも、わたし(イエス様)の名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」(マタイ18・20)

下・バイオラ大学のホールの前。参加者の全員が集まって。









それから、イエスは彼らにこう言われた。
「全世界に出て行き、すべての造られた者に、
福音を宣べ伝えなさい。」…主は彼らとともに働き、
みことばに伴うしるしをもって、
みことばを確かなものとされた。(マルコ16・15, 20)








(写真上左から)
・洗礼を受けた方々。
・ベックさんと仲よく金丸誠さん。
・参加したご婦人がた。
・内科医の南さんと山台さん。
・結婚式をあげた飯沢和裕さんと南場紀子さん。



下上・貴美先生のために一生懸命歌う教え子たち。
下・高島佳紀さん（右）、久保田貴美さんの結婚式。
聖歌がホールに響きわたって。



高知バイブル・キャンプ 1993.5.29～30

太平洋の絶景を望む国民宿舎海風荘で、毎年春秋に開かれます。毎回約200名の方々が、四国はじめ日本の各地から集われます。このときは結婚式が2組あり、主の祝福があふれました。「そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです。」（Ⅰコリント3・23）







(写真上から)
上左・塩瀬さんご一家。
上右・ライラックの花の前で。
参加したご婦人がた。
中・「イエスは小さい子どもを呼び寄せ…」
(マタイ18・2)

北海道バイブル・キャンプ



見よ。兄弟たちが
一つになって共に住むことは、
なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。
…主がそこにとこしえの
いのちの祝福を命じられたからである。(詩篇133・1,3)







北海道バイブル・キャンプ 1993.5.15～16

毎年春秋の2回開かれます。このときの会場は札幌市郊外の高台にある真駒内ハイツ北海道青少年会館。100名以上の方々が、北海道はじめ各地から集われました。「兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまずくことがありません。」（Ⅰヨハネ2・10）







（写真上から）ページ上・主を信じる喜びにあふれて。
日本各地から集まった方々。
上・美しい自然環境に囲まれた
真駒内ハイツ北海道青少年会館。
中左・証しする森島さん、中・桜井さん。
右・メッセージを伝える岡本さん。
下左・ソフトクリームをなかよくなめながら。
下中・84歳の菅原さんとベックさん。
下右・左から元木さん、大島さん。おばあちゃんと孫。









(写真上から)
・洗礼を受けた左から金城さん、
比嘉さん、大谷ご夫妻、多和田さん。
中左・土方さんご夫妻。中・加藤さん。
中右・豊里さん。
下・筋萎縮症で主を喜んでいる玉城さん。
ページ下・主の光に輝いて。参加者の方々。











神は真実であり、
その方のお召しによって、
あなたがたは神の御子、
私たちの主イエス・キリストとの
交わりに入れられました。(Iコリント1・9)





よろこびの集い

日本に、世界に広がるバイブル・キャンプ。

キリスト集会のバイブル・キャンプは、年間ほとんど毎週、全国のどこかで開かれています。この集いは主おひとりだけが中心であり、数百人が宿泊し食事できる快適な宿泊施設を利用し、ホールでは聖書のみことばがメッセージを通して語られ、証しがされ聖歌を歌い、自由時間には仲よく語りあい、時には音楽会も開かれます。すべて自由参加で、祈り会、洗礼式も行なわれます。イエス様をまだご存じない方々も多数参加され、福音に接して多くの方々が救われます。一九九三年の春から初夏に開かれたキャンプをご紹介します。

沖縄バイブル・キャンプ 1993.6.5~6

透きとおった青い海沿いの白雲荘で、毎年春と秋に開かれる沖縄のバイブル・キャンプは、沖縄はじめ全国から100人以上参加されます。「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」(Ⅰテモテ2・4)





(写真上から)
・平良さんご夫妻と中央中村さん。
・信永健ちゃんを囲んで。
・仲よく白雲荘の一室で。中央友野さん。
・沖縄バイブル・キャンプの参加者。白雲荘の前で。





恵みとまことに満ちた主

川島文子
群馬県出身／千江田小／千江田中／館林女子高／ＥＬＥＣ、中央ステノカレッジ修了／夫静夫／子供　三男

次々と起きてくるいろいろな家庭問題の中で、救いを求め、ほんとうに真理はあるのかしらと疑いながらも集会に集い、叫び続けていた私を主はあわれんで捕えてくださり、まことの救いへと導いてくださいました。問題を通して自分の罪深さを知り、真理であるみことばに従ったとき、主は人の思いをはるかに越えた方法で導き恵んでくださり、永遠に変わることのない全能なる主イエス様への信頼を増し加えられました。「神、その道は完全。主のみことばは純粋。主はすべて彼に身を避ける者の盾」（詩篇18・30）　与えられた問題はまだ解決しておりませんが、主がいつもともにいてくださり、混乱ではなく平安を、絶望ではなく希望を、悲しみではなく喜びを与えてくださいます。家族はまだ救われておりませんが、イエス様が私たち家族の最善を考えておられ、導いてくださいますから感謝です。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）　家族の救いは主のお約束ですから、期待しつつお祈りしております。そしていつも主イエス様を仰ぎ見て、従い歩むことができますように願っております。



憐み深い主のご計画

村田タヤ子
宅地建物取引業（自営）まるせい
福岡県出身／大阪市立姫島尋常高小／杉野芳子ドレスメーカー学院卒／宅地建物取引主任

私は友人２人と終戦直後に受洗しました。しばらくしてのちイエス様から離れ、この世と妥協し、罪の奴隷のなかにおりまして、まったく喜びがなく、この世の矛盾と罪の恐れでむなしい日々を過ごしておりました。そんな時、ふたたび聖書を読みたくなり、「この方以外には、だれによっても救いはありません」（使徒４・12）が示され、ときも同じく最愛の姉の死がそこに加わり、そのことを通して、神さまの一方的な憐みと慈愛により、み手の中に導かれ、立ち返るときが与えられました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）　このみことば通り、主人がともにイエス様を信じ、救われました喜びは忘れられません。イエス様がいまも生きて働いておられますことは真実であり、体験を通して信頼と確信を得ることができました。「神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」（ローマ６・23）のみことばにはげまされ、いまは希望と喜びと平安とで日々心は満たされ、すべてにおいて、イエス様に心から感謝できるように変えてくださいました。



主の恵みと導き

三上　忍
日本ウッドワードガバナー㈱勤務
東京都出身／花水小／浜岳中／広尾高／横浜国立大学工学部卒／妻　貴子／子供一男一女

私はクリスチャンホームに生まれ両親の祈りの中で育てられました。19歳の時、教会の修養会に参加し、イエス様の救いを信じ受け入れました。それまで何度も読んでいた聖句「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」（ヨハネ15・5）が強く心に迫ってきて、神様の愛と罪の赦しを知り涙がとまりませんでした。そこの教会ではいろいろな奉仕をさせていただきました。しかしどんな人でも自由に集い、福音が聞けるようにと我が家でも礼拝と集会を開くようになり、神様のみこころを祈り求めていた時にキリスト集会に導かれました。イエス様を頭として直接主につながる信仰生活に導かれ感謝しています。西軽井沢国際福音センターの献堂式には家族４人そろって参加でき、娘の望が受洗に導かれ感謝でした。「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また、『何の喜びもない。』と言う年月が近づく前に」（伝道者12・1）

主は今も生きておられる

三上貴子
群馬県出身／渋川北小／北中／渋川女子高／国際基督教大学教養学部卒／夫　忍／子供一男一女

「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です」（Ⅰコリント１・18）　小さい時から、私には何か大切なものが欠けていると思っていました。小２の時に日曜学校でイエス様の十字架のお話を聞き、心に強く残りました。やがて大学時代、全国的な反体制運動が高まるなか、生きる意味、学ぶ目的がわからないままに、混乱から逃れるように帰郷しました。そこである教会に導かれ、私の罪のためにイエス様が十字架にかかってくださったことを知り、イエス様を信じて救われました。その後結婚し、ミッションスクールで４年あまり教師をし、教会に通っていましたが、この20年あまり、主は高ぶりやすい私に必要な訓練を与えてくださり、昨年、私が主のために何もできない者だということを深く示され、主人とともに導きを求めていた時にキリスト集会に出会いました。すべてを主のご支配に委ね、聖書により頼み、喜びと祈りのうちに家族や友人が救われていくキリスト集会に加えられて、私は帰るべき故郷に戻ったようで、ほんとうに感謝です。主は今も生きておられます。



住所　千葉市稲毛区園生町158-９〒263　電043-251-8874　家庭集会　毎第２土曜夜７時

主にある平安

会沢道広
三愛プラント工業㈱勤務
東京都出身／千寿第八小／千寿第２中／都立航空高専卒／妻　美世子／子供　三女

自分の人生にこんなすばらしい日々が訪れようとは思ってもみませんでした。長い教会生活に疲れはて、教会を去る決心をした時、このキリスト集会へと導かれました。それまでの自分は、いつも何かに追われているように、あらゆることに一生懸命がんばってきました。しかし何をしていても、またどんなにがんばってみても「これでいいのか」「このような生き方でいいのか」と不安と焦燥感にさいなまれ、虚しい日々が過ぎていきました。何かほかにしなければならないことがあるように思え、自分の生き方に確信をもつことができず、結局「人生とはこんなもの」「幸せとは妥協の産物でしかない」と考えるようになりました。「平安、喜び、自由」という言葉からいつも遠い所に住んでいました。しかし今、真の救い主であられるイエス様に出会い、自分の考えがまったくまちがっていたことがわかりました。主を見上げる時、そこにはほんとうの平安と喜びがあり、あらゆる束縛から解放された自由があります。今、確信をもって言うことができます。「この生き方、すなわち、主とともに歩む生活のみが私にとって平安です」と。

本当の喜びに導かれて

会沢美世子
新潟県出身／黒田小／城西中／北城高卒／夫道広／子供　三女

18歳の時、職場のクリスチャンの方に誘われ、興味半分で教会の門をくぐりました。救いの確信もなく洗礼を受け、18年間教会生活を送りました。一生懸命奉仕し、働くことが主を喜ばせることであり、努力することで自分自身も良い人間になれるのではないかと思いがんばりました。しかし努力すればするほど追いつめられてゆき、幸せだった夫婦の心はしだいに離れ、悶々とした日々が続き、喜びも平安もなくなってしまいました。また母の病を通し、天国への確信も私にはないことに気づかされました。「形だけの信仰生活。イエス様が見えない。信仰って何だろう」。そんなうめきともつぶやきとも言えぬ祈りの中で、主はキリスト集会に導いてくださいました。そこでは主が生きて働いておられるのが実感としてわかりました。わがままで傲慢な醜い自分の姿も示され、主の大きなあわれみと赦しを体験させていただきました。そして求めていた天国への確信をいただき感謝と平安の喜びの日々を過ごしています。言葉では言いつくせないこの喜びを、一人でも多くの方々に知っていただきたいと心から願っています。主にご栄光がありますように。



▲中央は長男喜央さん。

奥さんを愛していますか

片桐俊文
大丸合成薬品㈱勤務
東京都出身／神明小／富士見中／武蔵ヶ丘高／多摩美術大学芸術学部卒／妻　千雅子／子供　一男

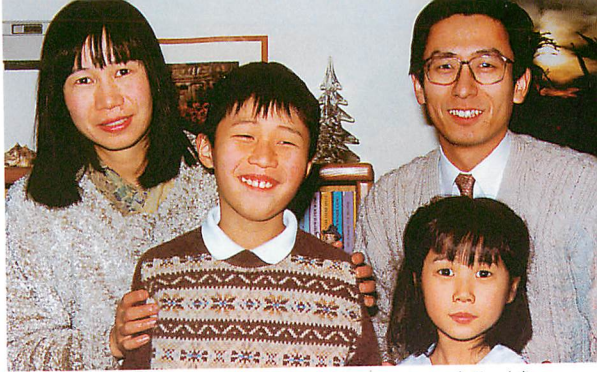
「あなたは、見つめておられました。害毒と苦痛を。彼らを御手の中に収めるためにじっと見つめておられました」(詩篇10・14)　この聖句の通り私は「自分勝手という害毒と苦痛」の中にありました。両親を悲しませ、友人を苦痛の巻添えにし、結婚すると妻をも苦しめました。愛もなく酒に溺れ苦痛が絶頂に達しても「宗教に頼るものか。宗教家はうんざりだ」と思っていました。そんな時、お会いしたベックさんは言われました。「俊文、あなたは宗教家になってはいけない。あなたの妻を愛する夫になるためにイエス様を信じるんだよ」この一言で私はイエス様に祈る者とされました。「窮した者の祈りを顧み、彼らの祈りをないがしろにされなかったからです」(詩篇102・17)「私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない」(詩篇103・10)　独り苦しんだ時も主は私を忘れることなく、愛し続けておられたことを悟りました。私は主を尊ばなかったのに、私の痛みをになわれたという主の一方的な恵みのゆえに、今私は愛する妻とともに、主の愛と永遠のいのちの希望に喜び踊っています。

主は私を愛しておられる

片桐千雅子
横浜市出身／釜石鉱山学園小・中／女子美大付属高／武蔵野美術大学中退／美学校木彫刻科修了／夫　俊文／子供　一男

物心つく頃から私の心はわがままに支配されていました。自分が第一であり、大切にすべきことは自分の考えだけでした。そしてしだいに学校へ行くことを拒み始めました。まわりの世界に対して「なぜ？」という疑問がつのり、不安に駆り立てられていた小学生の私には表現できる言葉もなく、学校へ行くどころではありませんでした。この自分という存在の不安に明確な解決を得るまでは社会には出られないと思い、かたくなに自己を追求しました。人間関係にも絶望し、したい放題のわがままの果てに「こんなわがままな役立たずの私が存在する理由を、だれか教えて！」という半狂乱のような叫びに対して、創造主なる神は憐みをもって「わたしはあなたを愛している」(イザヤ43・4)　とご自身を示してくださいました。「主はみことばを送って彼らをいやし、その滅びの穴から彼らを助け出された」(詩篇107・20)　「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています」(Ⅱコリント6・10)　主を信じ救われた今、日々の恵みを心から感謝しています。

左から伊津子さん、長男慧さん、▶
長女由希子さん、健次さん。



住所　長野県長野市松代町皆神台153　〒381-12　電0262-78-8655　家庭集会 毎第2・4 水曜10時半

主は盛んになり私は衰える

長岡健次
大丸合成薬品㈱専務取締役
長野県出身／松代小／松代中／屋代高／京都薬科大大学院修了／妻伊津子／子供一男一女

「自由とは何か」これが長年にわたって私が追い求めていた問題でした。年少の頃は自分のわがままを何でも通すことが自由であると思っていましたし、成長してからは、個人主義的な生き方にしばしの安住の地を見いだしてきました。しかし20歳前後にノイローゼを経験し、誇り高い自分のことがまったく頼りにならないものであることを知りました。その後、親友の須藤さんが訪ねてくださり、イエス様を信じて救われたことを話されました。私も妻も須藤さんをよく知っていましたので、とても驚き困惑しました。それから誘われるまま、軽井沢のバイブル・キャンプに5年間で20回近く参加することになってしまいました。しかし、聖書の話は何回聞いてもわからず、自分には関係ないことと思っていました。それでも信じる方々の顔がいつも喜びと平安に輝き、そこに本物の自由があることを認めざるをえませんでした。私も妻も子供たちもイエス様の救いの中に、平安と喜びと自由の中に入れられてしまいました。「それで、私もその喜びで満たされているのです。あの方（イエス様）は盛んになり私は衰えなければなりません」（ヨハネ3・29、30）

ただ主の憐みによって

長岡伊津子
大阪府出身／高松小／和歌山大付属中／桐蔭高／神戸女子薬科大学卒／夫　健次／子供一男一女

イエス様に出会うまでの私はたいした挫折を経験したこともなく、自分の思いどおりに楽しく毎日を過ごしていました。人生について、死について深く考えたこともなく、まして自分が罪人であることなど思いもよらないことでした。けれどもまあまあいい人間だと思っていた私のほんとうの姿に気づかされた時、私は愕然としてしまいました。自己中心で、高慢で、嘘つきで、愛のない者、それが私だったのです。神様を無視し、わがままに生きていることが罪であることを知りました。私はまぎれもなく大罪人でした。そしてこの私の罪のためにイエス様が十字架にかかって死んでくださり、罪を贖ってくださったことを知った時、私の目から涙があふれました。楽天家で神を求めることのなかったこの愚かな私をも、主は一方的に愛してくださり、手をさしのべてくださり、ただ憐みによって救いへと導いてくださいました。言いつくせない感謝でいっぱいです。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです」（Ⅰヨハネ4・10）



◀左から寛治さん、次女千恵子さん、長女加奈子さん、温子さん。

住所 大分県別府市西野口町８―30 〒874　電0977-26-1539 家庭集会 不定期 礼拝 日曜朝９時半

与えられた真理への道

浅野寛治

日本テキサス・インスツルメンツ㈱勤務
徳島県出身／柿原小／吉野中／阿波高／徳島大工学部卒／妻　温子／子供　二女

「私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい」(申命記30・19)　見学のつもりで参加したキリスト集会のキャンプで聞いたメッセージの中のこの聖句に、平凡な一人の男の心はとらえられました。その日、眠れぬ夜を過ごし、くり返し自分自身に問い続けました。「イエス様を受け入れることによって私を失ってしまうのではないだろうか。大切なものとはいったい何だろう。人間が与えられた人生を正直に、精一杯しあわせに生きていこうとするとき、神様の存在は不可欠なのだろうか。人の営みの中にも美しいものや価値あるものがあるのではないだろうか。もしかしたら、今までの私の心の自由が、神様を信じることによって奪われてしまうのだろうか。ならば、私が大切だと主張する私の心はほんとうに自由なのだろうか。そのような私の人生に、幸福と希望と揺ぎない真実があると言えるのだろうか」。問いかけは終わり、私は聖書に従い、「いのち」を選びました。そしてイエス様を私の主と告白し、一夜明けて洗礼へと導かれたのです。

主にある自由

浅野温子

松山市出身／清水小／勝山中／松山北高／徳島大教育学部卒／夫　寛治／子供　二女

「私、死にそう……」６年前突然亡くなった伯母の最期の言葉です。死の恐怖におびえていた伯母は弘法大師を拝み、四国八十八ヶ所参りを何回もした人でした。「弘法大師とは何を助けてくれるんだろう。死んだら人はどこへ行くんだろう」。私は死について考えるようになり、誘われてある教会へ行き始めました。流産という悲しみを通して、神様は生をも死をも支配されていることを明らかにしてくださいました。また自己嫌悪に陥っている私をイエス様は助けてくださいました。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」(Ⅱコリント12・９)　こうして受洗した私ですが、病気になっても癒されることが恵みだと思っていたので平安がなく、まさに「彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです」(ローマ１・21) とあるその通りの者でした。そんな時「実を結ぶ命」に出会い、死の恐怖から解放されることこそが恵みだと知らされました。ここに真理がありました。



▲左から三男芳哉さん、長男功一さん、覚司さん、母の泉さん、次男雄太さん、鶴美さん。

救い主に出会えた喜び

中野覚司
日本ＴＩ㈱勤務
大分県出身／八坂小／宗近中／杵築高／大分大学工学部卒／妻　鶴美／子供　三男

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）　私が生まれて初めてふれた聖句です。膠原病で苦しむ弟をなんとかして助けてほしい気持ちと、次から次へと起こる家庭の問題から逃れたくて、薬をもつかむ思いで「お参り所巡り」を３年ほど続けました。何の解決もないまま失望とむなしさの中で、仕事にも意欲をなくし、八方塞がりの状態から抜け出すことができず、ついに私はうつ病からくる自殺志願者となってしまいました。そんな時、ベックさんとお話する機会が与えられ、真の神様の存在を知り、初めて悔い改めのお祈りをし、主を受け入れました。それからは言いようもない心の平安と喜びが与えられ、初めて参加した宮崎バイブル・キャンプで夫婦そろって受洗しました。この平安と喜びを弟や両親にも知ってもらいたくて、集会に誘いました。そして使徒16・31の聖句の通りに弟と母が主を受け入れました。今では召された弟と天のみ国で再び会えることを確信し、母と私たち夫婦は主にある集会の皆さんとのお付き合いに喜びをもって集っています。

野の草でさえ愛される主

中野鶴美
大分県出身／西安岐小／西安岐中／国東農高／尾座和裁研究所卒／夫　覚司／子供　三男

４人姉妹の末っ子として生まれ、苦労を知らずに生きてきた私は、結婚を通して大きな試練に出会いました。嫁姑問題、それに加え、ドラマの中のことだけと思っていたような大きな問題が私の身にふりかかりました。人生の希望を失い、この生活から逃れたいというわがままから、親子４人でアパート暮らしを始めましたが、心に平安はありませんでした。何度か離婚も考えました。しかし、私と実家との板ばさみになった主人の苦しい胸の内を聞かされ、この人をここまで追い詰め苦しめた自分の愚かさを思い知らされ、悩み、悔やみました。そんな時、主人はベックさんとお話をしてイエス様の救いを受け入れ、心の平安と喜びをいただきました。そして私もイエス様を信じ、宮崎のバイブル・キャンプで主人とともに受洗しました。

「きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくしてくださることでしょう」（ルカ12・28）　野の草にも劣る私でさえイエス様は愛してくださり、救いの道を備えてくださったことに、心から感謝しております。



▲中央長女愛花さん。

主の恵み

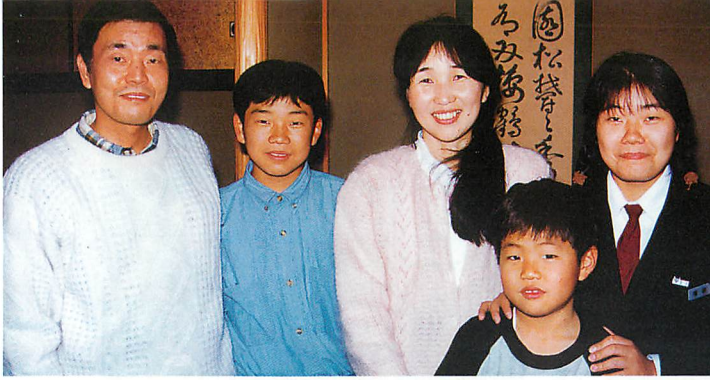
近森大志郎
高知医科大学老年病科医
高知県出身／野市東小／土佐中・高／山口大学医学部卒／妻　いづみ／子供　一女

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です」（エペソ２・８）　イエス様に出会って10年以上になります。今でも、私のような自己中心的で隣人への愛のない者を、よくぞみ手にとらえてくださったという思いでいっぱいです。信仰の歩みが遅く、いつもこの世のことにうろうろしています。毎日が悔い改めの日々です。それでもイエス様は私と私の家族のことを愛してくださり、豊かな恵みを与えてくださいますから、感謝するばかりです。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである」（ヨハネ３・16、17）　家族全員の救いを願い主を証しする時言葉だけでは議論に終わります。救いは人の力によるのではなく、神様からのものであり、神様が救ってくださいます。聖書には家族全員の救いが約束されていますから、希望を持って祈りの日々を過ごしています。

ひとみのように見守る主

近森いづみ
東京都出身／聖心インターナショナルスクール小・中・高／ミルスカレッジ／カリフォルニア大学サンディエゴ心理学部卒Ｂ．Ａ．／夫　大志郎／子供　一女

「あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに」（詩篇139・16）　神様から授かった私たちの子どもは主がひとみのように見守ってくださり、大きな愛とご計画をもって導いてくださることが実感されて感謝の思いでいっぱいです。私自身も14歳のとき、そのような主の愛の対象であることに気づかされました。わがままで自己中心的な私をも愛と赦しをもってイエス様が父なる神様と和解させてくださいました。このときから主は私がどんな状態でも、見捨てずあわれみ続けてくださいました。「主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます」（詩篇138・８）　この聖句の通り、夫との結婚も６年という年月をかけて、はっきり主が会わせてくださった伴侶だと確信して結婚することができました。住みなれた東京を離れて自然に恵まれた高知へと導かれたとき、そこにも主は愛するキリスト集会の皆さんを備えてくださいました。今は周囲にいらっしゃる多くの方々に、私たちの家庭を通して主を証しできるように主人とともにお祈りしています。



左から敏夫さん、長男知明さん、▶千恵子さん、次男知宏さん、長女恵子さん。

住所 香川県坂出市青葉町４―19 〒762 電0877-45-8666　家庭集会 毎第1・3 金曜朝10時半

主とともに歩むよろこび

濱田敏夫

宇多津町議会事務局長

香川県出身／西部小／大手前学園／関西大学法学部卒／妻　千恵子／子供　二男一女

1968年、ある教会のキャンプでイエス様を信じました。その教会の米人宣教師はとても友好的で、博愛主義者の無私の方でした。しかし私は教会の組織に重圧を感じ、教会生活に喜びを見出だせず、人間が考えた組織の中での信仰についていけませんでした。また私は、自分の自我と、意思と、誇りと、自己中心的な心から、信仰生活も神様から離れたものとなっていました。３年前に妻がキリスト集会に集いはじめ、教会とは異なり、聖書と祈りのみに支えられた喜びのある集会を知り、私も集うようになりました。それ以後人を見ることなく、主と自分との関係を大切にしてきました。再び自由な信仰が与えられ、家族そろって洗礼を受け、信仰を証しすることができました。そして集会の皆さんとの交流のなかで、人が主に導かれ、主と出会い、救われていくことの喜びが自分のことのように喜べ、主への感謝となりました。今は主の恵みにより、日々主イエスに自分を明け渡し、自分の無力さを認め、すべてを主に委ね、祈りながら主とともに歩む喜びをいただいています。「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」（マタイ６・10）

主をほめたたえます

濱田千恵子

兵庫県出身／八千代小／八千代中／西脇高／神戸女子短大初等教育科卒／夫　敏夫／子供　二男一女

私は多可郡八千代町という片田舎で生まれ、福音を聞く機会もなく育ちましたが、小学生のころテレビでイエス様に祈る人を見たとき、家の中の神棚と仏壇を見ながら、神は唯一でなければ納得できないと思っていました。神戸の短大在学中、教会に行きましたが、満たされることもなく、それからも心の空洞を埋めてくださる方を求めてさまよい続けました。長男が小一のとき、腹痛を訴え病院へ行ったところ、２人の医者の誤診により、あやうく手遅れとなり命をなくすところでした。生後２ヵ月の次男もかかえていた私は医者不信から人間不信に陥り、当時、頼っていた宗教が何の支えにもならないことを知り、絶望しました。その後キリスト集会に導かれ、真理であられるイエス様に出会い、ほんとうの心の平安をいただくことができました。家族５人が救われ、主を見上げ、賛美する生活に変えられ、八千代の弟家族にもイエス様を伝えることができました。「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」（詩篇103・２）　私の人生最大の喜びは天地万物の造り主なる唯一の神、主イエス様と出会ったことです。



大いなる赦しの神

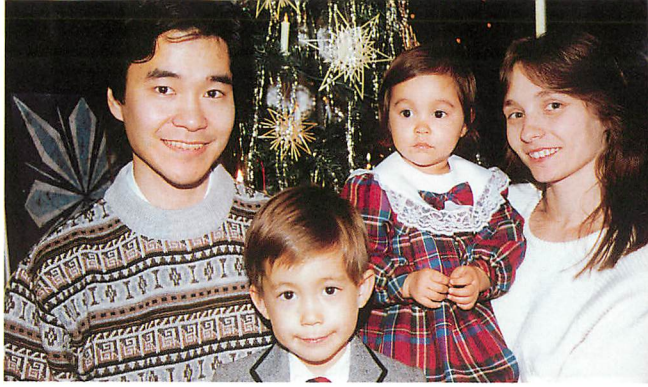
辻　陽一郎
武蔵野赤十字病院小児科勤務
神奈川県出身／八坂小／学芸大付属竹早中／同付属高／東京医科歯科大学医学部卒／同大小児科／墨東病院小児科／愛妻　純

複雑な家庭環境、社会に出る不安などを通して私は主を知り救われました。それまで私は、神様とは人を裁かれる方と思っていたので、自我が強く他人への愛のない自分はいつか神様によって滅ぼされてしまう、という不安を持っていました。しかし真の神様は、すべてを創造しご支配なさる私たちの想像をはるかに越えた大いなる方です。「天も、天の天も、あなた(主)をお入れすることはできません」(Ⅰ列王８・27)「この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」(Ⅰコリント１・21)そして罪深い私を愛してくださる「赦しの神様」でした。主の十字架の贖いによって私のすべての罪が赦されていること、主が私を愛しておられることを知った時、この世では得られない真の平安と希望が与えられました。「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである」(ヨハネ３・17)　主は私にも多くのみわざを示してくださいました。主に祈ると、主は必ず行くべき道を示してくださるので平安です。今も生きて働かれる主に心から感謝します。

イエス様だけが道

辻　純
千葉県出身／浜田山小／東田中／東京芸術大学付属音楽高／東京芸術大学音楽学部卒／同大学院中退／夫　陽一郎

７歳の頃からバイオリンを習っていた私は、才能を伸ばし、人より抜きんでることを目標としてがんばっていました。しかし競争の中で、優越感と劣等感との狭間を行ったり来たりする毎日は実に虚しいものでした。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」(ヨハネ14・６)　幼稚園のときからみことばに接していながら、自分の知識や能力によってそれを知ろうとしていた私には、このみことばがずっと理解できなかったのです。大学４年のときに、失恋という試練を通して絶望を経験し、自分の無力さを初めて素直に認めたとき、聖書のみことばをそのまま信じられるようになりました。それと同時に、何事も自分の思い通りにしようと欲望のままに生きていた自分の罪がはっきりと示され、イエス様の血による贖いによってのみ、人はこの罪から解放されることを知りました。イエス様と出会ってからは自分の努力では決して得られなかった平安と喜びでいっぱいです。今は両親も救われ、主から愛する主人も与えられ、音楽も主への感謝の証しとなりました。



▲中央左から長男順さん、長女由希さん。

日々主に仕えながら

野口　修
東京医科歯科大学第二内科勤務
東京都出身／東久留米九小／西中／早稲田大学高等学院／AFS25期生／東京医科歯科大学医学部卒／妻　ブリギッテ／子供　一男一女

「私は世界で一番しあわせです」。以前私が担当したがん患者さんが、死を目前にして言われたことばです。自分が助からないとわかったのち、その方はイエス様の救いを信じ、死の恐怖から解放されたのです。日々の診療の中では医療のもたらす恩恵より、むしろ、医療の限界を感じることのほうがよくあります。人間のからだは自動車の部品を取り替えるように直すことができず、少しでも良くするには多くの犠牲を強いられます。たしかにからだや健康は大切ですが、ほんとうのしあわせは医療ではなく神様だけが与えることができます。病の苦しみや死を前にしても平安と感謝を失わないでいることができたら、どんなにすばらしいでしょうか。12年前にイエス様を信じて以来、主はこのことを私に教え続けてくださっているように思います。神様のうちにある確かな希望と喜びをいただきながら、これからも歩んでいきたいと思います。「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです」（Ⅱコリント1・4）

主は私の羊飼い

ブリギッテ・アンゲリカ・ベック
国籍　ドイツ／出生　東京都／大森ドイツ学園小、中、高／Leonberg 看護学校卒／Kirchheim 病院勤務の後日本へ／夫　野口修／子供　一男一女

宣教師の家庭に生まれ育った私は、イエス様の救いを自然に受け入れることができました。16歳から5年間、家族と離れドイツで勉強するように導かれたときも、神様はいつも私を守りささえてくださいました。日本に帰国したあと、私は失恋という大きな試みに会いました。私はどうしたらよいのか、このさき生きていけるかどうかわからないような気持ちでした。「私には苦しみがあります。助けてください」。自分の弱さをはっきりと知りました。「神様、どうか私がこの試練を通し、多くのことを学ぶことができますように。この小さい信仰を強めてください。この苦しみに耐える力を与えてください。この苦しみを感謝します」。私が苦しんでいるそのとき、神様は私とともにいてくださいました。そして、キリスト集会の皆さんの慰めとお祈りにささえられ、だんだん元気を取りもどすことができました。それから2年、神様は主人との結婚に導いてくださいました。「彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない」（ローマ10・11）主にあって備えられていた主人とともに、主に仕えていくしあわせを心から感謝しています。



主とともに歩む人生

渡辺　進
サンヨーエンタープライズ㈱代表取締役
兵庫県出身／城北小／広嶺中／姫路西高／関西学院大学商学部卒／妻　智子／子供　一男三女

私が49歳まで持ち続けていた価値観を一度に変えた方。それまで大切だと思っていたものがまったく大切でなく、逆に大切でないと思っていたことが非常に大切であると気づかせてくださった方。そして私に真の幸福を与えてくださった方。この方は、主イエス・キリストです。娘の問題を通して、妻の友人より福音が伝えられた時は、私は聖書を作り話と誤解し、また宗教と信仰の違いも分からず、集会やキャンプに集った時は嫌々でしたが、このように高慢でわがままな私を主はみもとに引きよせてくださり、主を個人的に知るようになり、救いを確信することができました。これは神様の一方的な恵み以外のなにものでもありません。それ以来、聖書のみことばにふれ、集会の皆さんとの交流を通して、もっと主のことを知りたい、主のすばらしさを一人でも多くの方に伝えたいと願う人生に変えられました。「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。『目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである』」（Ⅰコリント２・９）

主はすばらしい

渡辺智子
サンヨーエンタープライズ㈱勤務
東京都出身／杉並第二小／東田中／杉並高／学習院女子短期大学英語専攻卒／アンダーウッドカレッジ卒／夫　進／子供　一男三女

娘の問題でキリスト集会に集うようになりました。聖書に真理が書かれてあることを知り、真理を知りたい、イエス様をもっと知りたいと思い聖書を読むようになりました。そして、まず私たち夫婦が主の救いを信じ、聖書に従って生きることが大切だと気づかされました。「主を恐れることは知識の初めである」（箴言１・７）　子どもにも勉強が一番ではなく、イエス様を知ることがもっとも大切であると思うようになりました。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」（ローマ８・28）　この聖句を信じ主人と心から祈ったとき、平安と希望が与えられ、ほんとうに神様から愛されていることの喜びを体験しました。

高慢、ねたみ、わがままなど、愛のない私ですので主に祈り、主に頼らざるを得ません。こんなみじめな私をも赦して愛してくださるイエス様に感謝しています。そして親類家族、まわりの方々にも、生きて働いておられ一人一人を一番愛してくださっているすばらしい主に出会ってほしいとお祈りしています。



まことの救いへ

藤原民雄
塩野義製薬㈱勤務
神戸市出身／高木小／灘中／灘高／京都大学農学部卒／妻　晴子

学生時代はまったくの無神論者でしたが、結婚後妻に誘われて教会に行くようになり、3年くらいして聖書のみことばが自分に向けて語られていることを知り、洗礼を受けました。そのように変えられたことが自分には奇蹟です。主があわれんで信仰を与えてくださったと思います。その後、信仰の試練があり、平安がなくなりました。母が病気になり、救われることを願っていましたが、自分には何もできないと無力感に陥っていました。そのような時、神戸のキリスト集会へ導かれました。自分がそれまで宗教としてとらえていたこと、そして神を求めるのではなく、自分の思いを求めていたことを知らされ悔い改めました。母に与えられたみことばの力と救い、一人の救いのために真剣に祈り心をくだいてくださる集会の皆さんの、静かな中にも喜びにあふれている姿が新鮮な驚きでした。私をまことの救いへと導くために主がすべてをご計画され、なしてくださったことを感謝します。「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」（箴言3・5、6）

導いてくださるイエス様

藤原晴子
西宮市出身／高木小／瓦木中／神戸女学院高等部／聖和大短大卒／夫　民雄

イエス様を知ったのは小学生の時でした。それから長い間、教会には行ったり行かなかったりの生活でした。しかし、結婚を機に再び思いが与えられ、主人とともに教会へ行き始めました。罪を示され、イエス様の救いを信じ、洗礼も二人で受けました。喜びが与えられたのもつかの間、熱くも冷たくもない信仰生活となりました。子供は与えられませんでしたが、特別な試練もなく、やさしい主人に頼り、母にも頼った生活でした。この世を幸せに生きるため神様にお願いのお祈りをしていただけでした。キリスト集会に導かれ、集会の皆さんの信仰と自分の信仰とのちがいを感じ、そのような信仰を持ちたいと祈りつつも、やはり、神様のみ心より自分の気持ちを大切にしていました。そんな時、母が脳卒中で倒れました。このことは私に自分のみにくさや、この世の幸せのむなしさを教えてくれました。かたくなで自分本位で、どうしようもない私を、神様は忍耐強く、見捨てずにいてくださったことを知りました。主に感謝します。「それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる」（イザヤ30・18）



▲左から次男直哉さん、静子さん、三男聡さん、忠秋さん、長男静雄さん。

私たちの生ける望み

槙野忠秋
水戸短期大学付属高等学校勤務
茨城県出身／大谷小／旭中／緑岡高／明治大学文学部卒／妻　静子／子供　三男

私は27歳のときに万物の創造主であるイエス様を救い主として信じ受け入れました。それまでの人生は、「わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした」（詩篇73・22）　とある通り、息苦しい自我の牢獄からの出口を見いだせず、酒で自分を麻痺させ、文学の中に真理を探していました。そんな時、イエス様の十字架の死とよみがえりが私のためだったという驚くべき福音を聞き、「あなたはわたしを信じますか」という問いかけによって決断をせまられました。イエス様によって目が見えるようになった盲人のように「主よ。私がその方を信じることができますように」（ヨハネ9・36）　と願ったとき、私は心の目を開かれました。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです」（ヨハネ9・37）　イエス様を知るまで、私の内側はどんなに暗かったことでしょうか。「自分」がまず先にあって、その後で神の存在を問うという態度こそ本末転倒でした。イエス様は今日も「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい」（マタイ11・28）　と呼びかけておられます。

イエス・キリストの恵み

槙野静子
茨城県出身／那珂湊第一小／那珂湊中／茨城キリスト教学園高／東京農業大学短期農業科卒／夫　忠秋／子供　三男

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）　いつも好きなことだけをしてきた私は、いろいろな夢はありましたが結局生花店に就職しました。すべてが楽しくて、何事も勉強と思いましたので、苦になることもなく一生懸命働きました。

しかし、時がたつうちに「はい」と言いながら心の中では従えない自分が日増しに大きくなり、満たされない思いで一杯になりました。病気がちになり「何のために生きているのだろう」と自問しても、人に相談しても、答えは得られませんでした。その頃、姉に勧められて吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。集会は、この世のことしか考えられない私にとって不思議な所でした。「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ」（イザヤ55・8）　聖書を通してイエス様の十字架のみわざを知りました。聖書に従うとき自我からの解放があり、心からの平安があります。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です」（Ⅱコリント5・17）



▲左から房男さん、次男恵太さん、洋子さん、長女牧子さん、長男尚広さん。

天国に国籍を持つ

野田房男
スペース・ノア㈱勤務
愛媛県出身／宮窪小／宮窪中／今治西高／法政大学経営学部卒／妻　洋子／子供二男一女

「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした」（ヘブル２・15）

私は子供の頃から墓の中の暗黒を想像して死後の世界がわからなくて不安でしかたがありませんでした。愛する人との避けがたい永遠の別離と孤独はいくら考えてもわからない死後というブラックボックスでした。高校時代下宿で一人で思いました。「人生は虚しい。どうせ皆死んでしまうのだ。なぜ努力するのか。出世のためなのか。生きること自体、無意味で不可解だ」。寂しがりやの私は友人の勧めで教会に行きました。聖書にふれ、私の心の内の虚しさは創造主であられる神から離れて自分勝手な生き方をしていることが原因であり、神を無視することが大きな罪であることを知りました。神のみ子イエス様が、自ら十字架上で血を流されたのは私の罪のためであったとは……。圧倒的な神の愛により私は救われました。主は死を打ち破り復活して今も変わりなく生きておられます。私の罪は赦され、天の住まいが備えられていることを確信しています。「主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの光栄となる」（イザヤ60・19）

主の呼びかけ

野田洋子
東京都出身／井之頭小／武蔵野一中／府中高／淑徳短大社会福祉学科卒／夫　房男／子供二男一女

「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています」（コロサイ２・９）　幼い頃から神棚に手を合わせ神社参拝も毎年行きましたが、神の存在は漠然としたものでした。成長とともに自己中心で醜い自分に気づき始め、一人になると心が暗く沈み自分を直視する勇気もありませんでした。本に逃避し本ばかり読んでいました。キリスト集会に導かれたとき、イエス様の一方的な犠牲の愛によって罪が赦され永遠の命まで与えられていることを知り、涙が溢れました。初めてイエス様の前に今までの自分をさらけ出すことができました。私のありのままを受け入れてくださる方、この方こそ天地万物の造り主であり幸せの源である方なのです。主は今も生きて働き支え続けてくださっています。「イエスは言われた。『わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません』」（ヨハネ６・35）　今もすべての人に主は呼びかけておられます。「わたしのもとに来なさい」と。この主を仰ぎ見て、一人でも多くの方が救われますように。



◀左から長男崇さん、博さん、次女初穂さん、次男賛さん、由紀子さん、長女めぐみさん。

住所 東京都練馬区谷原6-6-13〒177 電03-3997-3933 家庭集会 毎第4土曜18時30分

主よ感謝します

松田　博

日揮株式会社勤務

茨城県出身／五箇小／水海道中／水海道一高／静岡大工学部卒／妻　由紀子／子供二男二女

イエス様にお会いする以前の私はコンプレックスと同時にプライドが強く、人に心を開くことができず、孤独でした。一時的な心の満足といえば他人に気を使う必要のないクラシック音楽や園芸や自然などに浸っている時でした。この哀れな者をイエス様は愛してくださり、最初の結婚生活で大きな試練を与えてくださいました。この試練を通し、私がどんなに惨めで罪深い者か、そしてこの私の罪がイエス様を十字架につけたことを知り、イエス様を信じ受け入れました。

その後、妻が天に召されるという試練もありましたが、主は現在の妻との祝福された結婚に導いてくださいました。この新しい生活の中でイエス様はさらに私に光を当てて、砕いてくださり、喜び溢れるキリスト集会の皆さんとの豊かな交流の中に入れてくださいました。また、昨年は家族全員が救われるという恵みもいただきました。乏しい信仰による歩みですが、家族そろって天国を目指して歩んでいきたいと願っています。「そして主は、彼らをその望む港に導かれた」(詩篇107・30)　「あなたは私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました」(詩篇30・11)

あなたこそ私の主

松田由紀子

京都府出身／緑ケ丘小／石神井東中／大泉高／東京造形大学造形学部卒／夫　博／子供二男二女

かたくなな心で罪の暗闇を歩いていた私を、イエス様はあわれんでご自身のみもとに呼んでくださり、救ってくださいました。生きる真の意味を教えられ、希望と喜びの日々へと変えられました。その後、先妻を天に召されて2人の子供をかかえた主人と結婚に導かれました。この結婚は、私の奥に潜むすさまじい自我と愛のなさをとことんまで自覚させられるものでした。この10年不平不満の中にいた私を、イエス様は忍耐して待ち続けてくださいました。もうこれまでと思うたびにみことばによって励ましてくださいました。「この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ」(Ⅱ歴代20・17)　そして「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」(詩篇119・71)と心から言える者に変えてくださいました。今では子供4人が皆救われ、ともに天国に行ける幸いをかみしめています。主の手で一つに集められた家族がただ主の愛とみ恵みによってのみ建て上げられて行くありさまに、イエス様をほめたたえずにはいられません。ほんとうにイエス様、ありがとうございます。



主のみこころのままに

故及川廣太郎
関東学院大学教授　東大名誉教授
東京都出身／東京高等師範付属小・中／第一高等学校／東京大学理学部卒／妻　恭子／子供　二男

及川恭子
東京都出身／世田谷区立弦巻小／学習院初等科・中等科・高等科／東京女子大(短)卒

夏の終わりのある日、私たち家族は医師に呼ばれ、夫の廣太郎の死の近いことを告げられました。忘れもしないその翌日、竹田さんの奥様から電話をいただき、お見舞いに来てくださるとのことでした。私は夫のことをお知らせし、取乱しながらひたすらお断りしました。でもいつになく竹田さんは強気でした。あの時会いに来てくださらなかったら、夫は救われなかったことでしょう。竹田さんはご自身の経験を通して「私は主にすべてをお任せした時に救われました」と言われました。「私だってそう祈っているのに」と思った時、ハッと気がつきました。夫のがんだけは治してください、と心のどこかで必死に願っていたことに。そこですべてみ心のままに従おうと決心したとたん、心が軽くなり、涙が止まりました。不思議でした。死が近いとは知らぬ夫に、ベックさんが会いに来てくださったのは数日後でした。2時間もお話をしてくださいました。「救われるのは簡単なことなのですね」と夫は言いました。今まで自分が考えていた罪とは違う罪があることを知り、悔い改めて主にお縋りすれば赦され、永遠の命をいただけるということも信じえたようです。その後ベックさんは本人に死の近いことを知らせるべきだと言われ、私は夫に伝えました。「こんなで死ぬのか、死ぬような気がしない。主にすべてをゆだねているから不安はないが、心残りは学校のことだ。皆さんにご迷惑をおかけした」と淡々と言いました。

それから1ヵ月半は聖書を読み、祈る毎日でした。あるとき私が「もうすぐお別れね」と言いましたら、うとうとしていた夫は「そんなことはないでしょう」とはっきり言ったのです。主の福音がしっかりと夫の心の中に入ったことを知りました。夫は自分の心の内を人に知らせることをひどく嫌う人でした。自分の葬儀を無宗教ですると決めていましたが、聖書に基づいてとまでは言っていませんでした。2度目にベックさんがお話くださったとき、今まで越えられなかった一線を飛び越えたのです。聖書に基づいてキリスト集会で葬儀をしていただくとはっきりと言いました。不思議にもそのすぐ後、夫は言葉を失い、召されるまで意識は戻りませんでした。でも、夫の顔の何と穏やかだったことでしょう。すでに主のおそばに行っていたのかもしません。「主のみ心のままに」と祈りながら。



▲左から智江さん、次女佳子さん、長女美世子さん、芳弘さん。

King of kings に全てお任せ

櫻本芳弘
アルプス・トラベル・サービス㈱勤務
東京都出身／千葉大学教育学部付属小／付属中／東京教育大学付属高／東京外国語大インドネシア科卒／妻　智江／子供　二女

13歳の時、母は38歳で脳腫瘍がもとで亡くなった。大学に入った年、3歳下の弟が18歳で自ら命を絶った。私の少年時代、青年時代はこの二つの死という別れによる深い傷とともにあった。人生の意味を求めてのたましいの放浪の旅は長かった。既存宗教や新興宗教はすべて空しかった。1985年夏、田園調布の家庭集会に導かれ初めて聖書に接した。人間のつくった宗教は無力であること、宗教であるキリスト教は人を救い得ないことを知った。そして神から離れていること、背いていることが罪だと聖書は語っていた。私はそれまで神を神と認めていなかったから、自分が罪人であることを認めた。そして罪の赦しは2千年前にキリストが十字架につけられた時に完了したこと、そのキリストの復活によりキリストを受け入れるすべての人に永遠のいのちが与えられることを知った。あとはただ、「神様、ごめんなさい。赦してください」と言うだけであった。その年の秋、白旗を掲げて主なる神様に無条件降伏した。私の終戦記念日である。私は今や世界最強の方、King of kings をわが主と仰いでいる。主に委ねるとき、何があっても責任をとってくださる。

救い主イエス・キリスト

櫻本智江
千葉県出身／東陽小／光町中／森田学院卒／夫　芳弘／子供　二女

イエス・キリストを知る前の私は、思想、哲学、宗教、政治の中に善を追い続けて来ましたが、どの中にも私の望んでいるものはありませんでした。しかし、聖書を通して真理であられるイエス・キリストにめぐり会うことができました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」（ヨハネ14・6）　そして、今まで知らなかった、神様から離れているという自分の罪を示していただき、心から悔い改め救われました。「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように」（エペソ1・17～19）　まことの主であられるイエス様に心から感謝します。



主はただ一つのわが喜び

櫻本美世子(姉)
アルプス電気㈱勤務
東京都出身／青葉台小／雪谷中／文教大付属高／拓殖大卒

「その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた」(イザヤ63・9)　神様が私のことをいつでも、ずっと愛してくださっているとわかってから、私の生活は以前とは比べものにならないほど輝いています。心から信頼し、頼ることのできる方がいるというのはほんとうに幸せです。神様がいつも私のことを背負い、また抱いてくださっているのだと思うと嬉しくてしかたありません。以前、電車の中で人にからまれたときに思いました。「ああ、ここで刺されたらどうしよう！」しかしすぐに「神様、私にはあなたがいてくださいます。どうかあなたのご計画に従って最善のことをなしてください。私には何もできませんから神様が働いてください」と祈っているうちに、なんと、神様の話をする機会が与えられたのです。その人は降りるときに「いい話が聞けてよかった」と言ってくれたのです。「神様のご計画には何ひとつ無駄はない」と実感した瞬間でした。「あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる」(詩篇55・22)　「私は主を愛する」(詩篇116・1)　私は神様が一番大好きです。

わたしが主である

櫻本佳子(妹)
東京都出身／雪谷小／雪谷中卒／都立日比谷高校在学中

私は幼いころから、寝る前に布団の中でお祈りをすることが習慣になっていました。友達に「お祈りを続けると必ずその願いはかなうんだよ」と言ったことがあります。けれども、この確信はどこからくるものなのか、そして自分はいったい何に対して祈っているのか、まったくわかりませんでした。このことについて考えるようになったのは中学生になってからです。吉祥寺キリスト集会に何度か行きましたが、はっきりとしたことはまだわかりませんでした。中学2年の夏、アメリカへ行くため1人で飛行機に乗ったとき、突然私は恐怖感に襲われました。「頼れる人は誰もいない、私は1人なんだ」と思うと寂しくてどうしたらいいのかわからなくなりました。そのときに「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから」(イザヤ41・10)　という聖句を思い出し「ああ、これだ。この方に対して祈ればよかったのだ」ということに初めて気づきました。このときの感動と平安は忘れることができません。目的がはっきりとわかった今、何も悩むことはありません。ただ主にだけ祈り、主にだけ頼ろうと思っています。



▲左から綾子さん、雅子さん、宣明さん、秀樹さん。

恵みを数える生活

大澤秀樹
東京ガスサービスセンター
㈱小倉総合設備　営業開発部部長
群馬県出身／堤ケ岡小／中央中／前橋育英高
立正大学文学部卒／妻　雅子／子供一男一女

「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい」(コロサイ3・16)　1989年の夏、あわれみによってイエス様を知り、まことの救いにあずかりました。それから今日まで、イエス様は私の心の中にいてくださって、重荷や思い煩いから解放してくださり、日々の歩みの道を整え、導いてくださっています。家族が共に主を見上げ感謝して生活する幸いをしみじみとかみしめています。以前は足りない物を不満に思う日々でしたが、今では主の恵みを数えて喜ぶ生活へと変えられました。私にとって主は完全であり、神は愛であり、生きる糧です。祈る時、主を賛美する時、みことばに帰る時、いつもイエス様のご存在を身近に感じています。イエス様のみ心に従って生きること、イエス様とともに歩むことが人生の望みに変えられたことを感謝します。「このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです」(エペソ2・22)　主のご栄光だけがありますように。

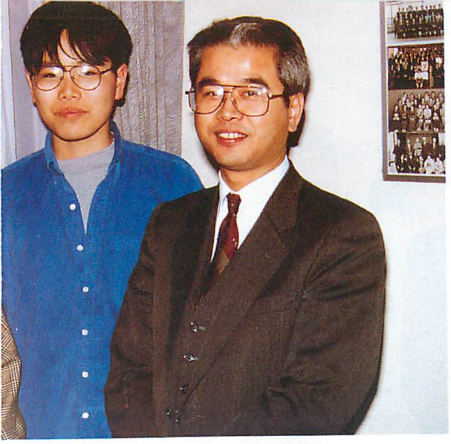
苦しみに会ったことは幸いでした

大澤雅子
香川県出身／四番町小／城内中／明善高／立正大学文学部卒／夫　秀樹／子供　一男一女

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです」(詩篇119・71、72)

私はイエス様を知って3年になりますが、生まれて一番幸せな時を、今過ごさせていただいております。脳腫瘍という病気になり、そのことを通して家族全員がイエス様の救いにあずかり、聖書を土台とした家族に変えられ、何の不安もない、すべての価値観が同じ夫婦、親子の関係に変えていただきました。家族の思いが一つとなることのすばらしさは、何と表現してよいのか分かりません。この先、神様のご計画がどのようなものか分かりませんが、今現在、脳腫瘍が大きくなっている状態にあっても、病気のことを忘れて平安な楽しい毎日を過ごさせていただいています。イエス様の一方的な恵みを、心から感謝しております。

「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます」(詩篇23・1～3)



親愛なるイエス様へ

大澤綾子
東京都出身／雪谷小／雪谷中／関東国際高校
演劇科在学

イエス様、いつも私を見守っていてくださってありがとうございます。私はあなたに会えてほんとうによかったと思っています。まだ私があなたを知らなかった小さいころから、困った時、つらい時、さびしい時、どんなときでも私を力づけてはげましてくださいました。それは今でもずっと変わりありません。私があなたを見ていなくても、罪をおかしても、私を愛し、その罪を赦してくださるイエス様、私は心からあなたに感謝いたします。

「主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない」（イザヤ40・31）　私はあなたとともにいることが、あなたから力を得ることが、うれしくてなりません。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから」（イザヤ41・10）　いつもこのみことばを思いだしながら、苦しいレッスンや演技実習に励んでいます。そのことをあなたはご存知ですよね。どんな時にもともにいてくださり、勇気を与えてくださるイエス様、私はあなたを心から愛しています。

いつも守ってくださる主

大澤宣明
東京都出身／雪谷小／神奈川中在学中

「主は、あなたを守る方。主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる」（詩篇121・5,7,8）　ぼくは3年前に救われました。それまでは高慢で、自分がつねに中心にいないと気がすまないタイプの人間でした。救われて3年目の年、神奈川県に引越すことになり、学校も変わりました。その学校でいじめに会いました。けられもしました。なぐられもしました。でもぼくは以前とちがって、イエス様に頼ることができます。神様という強い味方がついていてくださったおかげで、この試練を乗りきることができました。「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」（Ⅰコリント10・13）　ぼくはこのことがあってから、主は、いつでもどこでもぼくのことを守ってくださっているんだなと確信できました。ぼくを守ってくださる主に感謝しています。これからも、主とともに歩みたいと思います。



▲左から次女さつきさん、昌信さん、信子さん、三女倫子さん、長女周子さん。

患難さえも喜んでいます

喜屋武昌信

沖縄県出身／島袋小・中／コザ高／琉球大学教育学部卒／妻　信子／子供　一男三女
住所 沖縄県沖縄市久保田１―25―３　〒904
電098-933-0284　家庭集会（不定期）

５年前に脳出血で倒れ、右半身マヒの後遺症に失望落胆し、奈落の底につきおとされる思いでした。いちるの望みをリハビリに専念することにかけ、ハリ治療に中国まで行きました。日常生活のすべてをリハビリの場と考え、夜は家内と一緒に海岸沿いを歩行訓練に出かけました。そんなある日、ベックさんとお話をして、主イエス様を自分の救い主として受け入れることができました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）

それ以来私の価値観は変わり、主への思いが中心になりました。今は聖書を読み福音のテープを聞くのが毎日の楽しみとなりました。これまでの重荷から解放され、希望と喜びに満たされています。主のあわれみと恵みに感謝しています。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）

重荷から解放されて

喜屋武信子（妻）

沖縄県出身／諸見小／コザ中／コザ高／和洋女子短大卒

主人が倒れてからの５年間は、ただ元の体にもどすためのリハビリにあけくれ、色々な宗教に惑わされ、動かなくなった手足が直るのなら、どこへでも、どんなことでもしようと私たち家族はただ夢中でした。主人の職場復帰のこと、子どもたちのことで私の心配は次から次へとつのるばかりでした。

主に導かれ、首里キリスト集会に集うようになって、主人は明るくなり、ほっとしました。

しかし私は仕事で忙しく、聖書のみことばが身につかない者でしたが、聖歌を歌い、キリスト集会の方々の証しを聞いて、いつしか「神様ごめんなさい」と悔い改め、主を信じ、祈る者と変えられました。

主人の変化は不思議なばかりで、あれほど主人のことを心配していた悩みはうそのように消え去り、今は家族は主にあって平安になり、重荷がおりました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）

ともにいてくださる主

知念周子（長女）
カワイ音楽教室勤務
沖縄県出身／島袋小／山内中／北谷高／昭和音大短期大学声楽科卒

私の二人の祖母は20年以上も前から教会に集っており、私もキリスト教の幼稚園に通い祈りを覚え、クリスマスには皆で讃美歌を歌い、聖書にもふれていました。そのような私たちの姿をみても両親は、特に父は全然興味を示しませんでした。そんな頑固な父が6年前に倒れ、体の自由がきかなくなってから私たち家族はどうしたら父に生きる希望を持たせられるか必死でした。そんな父をイエス様は見捨てず救ってくださり、家族に光をあたえてくださいました。現在家には毎日福音と聖歌のテープが流れています。イエス様が私たち家族の真ん中に立って大きな愛で包んでくださっていることを感じ毎日感謝しています。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」（Ⅰテサロニケ5・16～18）

主の愛につつまれて

比屋根さつき（次女）
㈱りゅうせき勤務
沖縄県出身／島袋小／山内中／普天間高／琉球大学法文学部卒

去年の11月、私たち三姉妹はともに洗礼を受けイエス様を信じる信仰を証しする喜びを与えられました。

しかしそれまでの私は大学卒業や就職のことなどほかのことに頭がいっぱいで、集会にもあまり集わず、聖書もほとんど開かないといった状態でした。その日私は姉や妹の受洗に立ちあうためにキャンプに集っていましたが、ベックさんが私の気持ちを察し、そんな私をイエス様のもとへとあっというまに導いてくださいました。今では家族の心が一つになり、イエス様に見守られ、満たされた毎日です。まだまだ不安定な私ですが、イエス様の前ではいつもすなおでいたいと思っています。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」（イザヤ41・10）

神様感謝します

喜屋武倫子（三女）
沖縄県出身／島袋小／山内中／普天間高／沖縄キリスト教短大保育科在学中

イエス様は、父をはじめ私たちの家族を次々と温かいみ手で救ってくださり、食事の前の感謝のお祈りや日々流れる賛美の歌、日曜礼拝や家庭集会など、毎日がイエス様の愛でいっぱいになりました。また、去年5月の西軽井沢国際福音センターの献堂式に家族で出席することができ、大きな喜びでした。福音センターは私が想像していたよりもはるかに大きくて、すばらしく、そこで出会ったたくさんの方々とお話し、メッセージや証し、ハレルヤコーラスなど、ひとつひとつがイエス様の愛を確認でき、忘れられない思い出となりました。私はまだまだ信仰も浅く、聖書の知識もあまりありませんが、イエス様がいつも私たちのそばにいてくださって、いちばんいい道へと導いてくださいますから心から感謝しています。



私が弱い時にこそ強い

小々馬亜彦

日本航空サービスディレクター査察乗務員
東京都出身／二宮小／二宮中／成城高卒／成城大中退／妻　真理子／子供　一男

「何のために生きるのか」誰もが考えるこの問題を、かつて私も長い間考え続けていました。どうせ死ぬまでの短い人生、楽しく生きなければ損だ、と思い傲慢で強がりの自分に甘んじていました。苦しみに直面した時にはじっと耐え、決して弱さを見せないことが男の道だと自分に言い聞かせていたのです。誰にも相談せず自分自身の力で問題を解決してきた日々に空しさを感じ、疲れはてていました。しかしこんな私をも主はじっと見守ってくださっていたのです。主のみわざにより、私は変えられました。主が示された条件は唯一、「主の前にひざまずき、降参しなさい」でした。長い間背負って来た重荷をすべて主にゆだねた時、私の気持ちは驚くほど楽になりました。主は私のかたくなな心を素直なものにつくり変えてくださったのです。妻と留学中の息子との心の一致が生まれました。自分の弱さを誇れるようになったことも奇蹟です。なんの取柄もない、欠点だらけの自分をも選んでくださったことを主に感謝する毎日です。

主にある家族の一人として私を加えてくださりありがとうございます。

喜び、希望、平安

小々馬真理子

旧満州旅順生まれ／杉一小／杉森中／恵泉女学園高／女子栄養短大卒／元日航国際線スチュワーデス／夫　亜彦／子供　一男

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です」（エペソ２・８）　不思議な招きでキリスト集会に導かれてから、二つ大きくなったことがあります。それは「主の存在」と「私の罪」です。この二つがまるで入道雲のようにぐんぐん大きくなり、とどまることがありませんでした。そしてはっきりわかりました。私の中には何一つ良いものがなかったのです。主に対して、また一番身近にいる夫に対しても長い間、傲慢な態度をとり続けていたことに気づかされました。その時の心境は水に溺れた子供のようでした。思わず、「イエス様助けてください」と叫ばずにはいられませんでした。夫に対しても心から謝りました。主は夫も主を呼ぶ者と変えてくださいました。みことばに生命が流れ、生き生きとした祈りの生活に変えられました。今、夫とともに礼拝、家庭集会、キャンプに喜んで参加しています。永遠の慰めと希望、主からくる平安が私の心を支配しています。「真理はあなたがたを自由にします」（ヨハネ８・32）　ことばに表わせないほどの賜物ゆえに、神に感謝します。

曜日、教会から親子連れで帰っていく姿を見たり、旅行の帰りに、電車の中で親子仲良くトランプをしていたりするのを見ると、自分はこれらのうちの何一つ、子供にしてやっていない、日曜も祭日もなく、仕事仕事で頑張ってきた。しかもそれは、家族のために頑張ってきたと自分では確信していました。しかし本当は、自分のことしか考えていなかったのでは、本当は子供たちは、パパと公園で遊び、トランプがしたかったのではと、はじめて思いいたりました。申し訳ないことをしてしまった。できることならもう一度人生をやり直したいと、心から思いました。

そして主が、人間を造られたときにお考えになった人間の生きざまとはまったくかけ離れた人生を送ってきたことを、主から離れ主に背いて生きてきたことを実感しました。「神様、本当に申し訳ありませんでした。この愚かな私を赦してください。そして私のために、辛い、苦しい毎日をいま送っている家族をどうか助けてください」と、そのとき心から神に赦しを乞いました。

どうしてこんな簡単なことに気づかなかったのでしょう。一人一人が、自分のことばかり考えて、自分の栄光のために、皆が頑張って頑張って突き進んだらどうなるでしょう。そこには当然摩擦が生じます。衝突も起きます。社会に平和はなく、一人一人の心の中に平安はありません。あるのは、妬み、怒り、苦しみ、悲しみ、そして限りない虚無感です。自分のことばかり考えるのではなく、主にあって隣人を愛するとき、主の栄光のために生きるとき、そこにはこの世の何物も与えることのできない平安が訪れます。これこそ主が望んでおられることです。

イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くし

て、あなたの神である主を愛せよ。』次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」（マルコ　12・29～31）

イエス様の死と復活

しかしここまでなら、家族の不幸、家庭の不和から自己実現の罪に気づき、理論的に自分の努力で人生観について小修正をしたというにとどまります。真の信仰にはまだまだ至っておらず、従って喜びはありませんでした。何よりも、イエス様の十字架での死と復活ということがどうしても分かりませんでした。キリスト集会でのお祈りの中心テーマである十字架での死と復活について、どうしてこんな非科学的なことをみんなは信じられるのだろう、そう思っていました。

一九八九年十二月、私と一緒に洗礼を受けたいと待っていてくれた次女も、ついに諦めて一人で洗礼を受けました。翌一九九〇年の夏、今度は二カ月間ほどハワイ大学（東西文化センター）から呼ばれたのですが、昨年末から次女が半年以上も原因不明の高熱に悩み、いくら精密検査をしても分かりません。そこで、ハワイでゆっくりと休養させたらよくなるだろうと、家内と次女と三人でハワイへ出かけました。しかし次女の病状は悪化するばかりで、後半の二カ月目にはもうほとんど外出すらできず、宿舎で寝てばかりという状態でした。

私の方は仕事も順調に進み、八月中旬にレポートも書き上げ、報告会も大変な好評ですっかり有頂天になっていました。仕事も終わったので、あとの二週間は夏休みとして休養し、日本へ帰ろうというときに、突然「ギックリ腰」になってしまいました。もう私はまったく動けず、トイ

レへも行けません。次女もほとんど寝てばかりという状態でした。好運にも家内一人が元気で、まさに大活躍をしてくれました。ハワイでの最後の二週間、私に代わってすべての帰国の準備を完了してくれました。

この間、毎日朝から晩まで家族全員で聖書を読み、信仰書を読み、主について語り、家でごろごろしていました。なにしろ私と娘はまったく動けませんし、家内が持って行った本が聖書と信仰書だけでしたから、他にすることがないわけです。しかし他から見たら最悪の状態のこの時、主は私たちの真ん中におられました。日々、本当に平安で、なぜか不思議な幸福感で満たされていました。私は猛烈人間で、子供と遊んだ経験などありませんでしたが、この時始めてゆっくりと家族で語りあうことができました。娘もはじめて父親と一緒にいるという気がした、と言ってくれました。

しかし聖書を読み、信仰書を読み、幸せでしたが、イエス様の死と復活というのはよく分かりませんでした。

当時私は、イエス様の死と復活などという、まわりくどい方法をなぜ神様は選ばれたのだろうか、もっと良い方法がいっぱいあるはずだ、例えばノアの箱舟のように、もう一度良い人間だけ残して残りは全滅させればよいではないか、またソドムとゴモラのように、悪い人々のいる部落や街は炎で焼き尽くし、旧約聖書に繰り返し出てくるように、戦いで全滅させればいいではないか、その方がよっぽど分かりやすい、そう思っていました。

しかし主はこのような方法ではなく、人類を全滅させ、総入れ替えするのではなく、いま生き

ている人間をできるだけそのまま、一人でも多く救ってやりたいとお考えになったのでしょう。しかしただ赦してやれるほど人間の犯した罪は軽くはない。そこで「身代わり」をたて、身代わりを処刑する事で、人類の罪を無罪放免にしてやろうとお考えになった。するとこの身代わりになれる方は、罪のない方でなければならない。どんな優れた人間といえども「義人はいない、一人もいない」と聖書にある通り、この世の人間はすべて罪人であり、罪人が罪人の身代わりにはなれない。そこでたった一人のわが息子、イエス様を、人間のかたちにして地上に送り、このイエス様を人類の身代わりにして死刑にすることで、人類の罪を永遠に赦してやろう、そうお考えになった。こう考えてくると他にはもうどんな方法も見あたらないこと、これ以外に人類を救う方法がなかったことが、やっと分かってきました。これも、聖書にはっきり書かれています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

イエス様はオリーブ山で、天のお父様に、やはり自分は人類のために計画通り死刑になるのかどうか、祈られます。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

（ルカ　22・42）

イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。（ルカ　22・44）

このようにして、イエス様は主のみこころをお知りになりました。イエス様は神の子ですが、この世に人間の姿をとって生まれ、人間として遣わされたのです。嘲られ、唾をはきかけられれば悲しいし、鞭うたれ、十字架に釘付けにされれば、苦しいでしょう。

十字架の上でイエス様は、よほどお辛かったのでしょう、

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」（マタイ　27・46）

と悲痛な叫びをあげられながらも、天のお父様のご計画通りにすべてを成就され、さいごに、

「完了した。」（ヨハネ　19・30）

「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」（ルカ　23・46）

と、天のお父様に報告され、お父様を信頼しきって、ついに息絶えられます。

愛する一人息子が苦しみのなかで息絶えるのを、天のお父様は断腸の思いで見ておられたことでしょう。しかしイエス様も、天のお父様も、どうすることもできません。それが人類を救うた

だ一つの方法だったからです。イエス様は、私のために死んでくださった、という漠然とした思いは、やがて確信に変わっていきました。感謝が、喜びが、こみ上げてきました。

聖霊が私の中に

そのころ私は、祈ることが一番の苦手で、あまり祈ったことがありませんでしたが、帰国の数日前、ハワイでの最後の日曜日、朝のお祈りの時に、「イエス様、私のことは結構ですからどうか次女の純を助けてください」と、本当に生まれて始めて、命がけで祈りました。

せっかくハワイの地まで静養にきて、病気は回復するどころかますます悪化し、この抜けるような青空の下、紺碧の海のそばにいて、狭い宿舎から一歩も出ることもできない。もう二カ月もほとんど寝てばかりです。しかも一言も恨みがましいことを言いません。もう少しすれば元気になるだろう、そうしたらあの紺碧の海を見せてやろうと、そう思っていたのですが、私のギックリ腰でそれももう絶望となりました。それどころかここのところ容態が悪化し、このまま死んでしまうのではと思うことすらありました。

イエス様、神であるイエス様、どうぞ純を助けてくださいと、口のなかで三回祈りました。すると、最後の二回が大声になり、叫んでいました。その時、なぜか分かりませんが、主が私の願いを聞きとどけてくださるという確信を持ちました。主の愛をひしひしと感じ、涙が止まりませんでした。その時、聖霊がはっきりと私の中に入っていると、実感しました。救いの確信を得て、生まれて始めて、この朝「パンとぶどう酒」を、家内と、娘と一緒に、いただきました。

それからの、最後の一週間に、娘も、私も、不思議に回復し、何とか車椅子で帰国することができました。日本に帰ると、娘は見違えるように、みるみる元気になりました。感謝でした。

ぐじゃぐじゃになって、洗礼を受ける

しかしまだ、洗礼を受ける気にはなりませんでした。まず第一に、私はまだすべてを主に明け渡していない。第二に、まだ私は聖書に書いてあることはすべて真実であると、イエス様をまるごと飲み込んでいない。第三に、私は研究者なのだから、研究者らしく、私の五段階理論で五段階のすべてをクリアーし、五百点満点を取ってかっこよく洗礼を受けたい、こう考えていました。

当時私は、自己採点では第四段階をほぼパスして三五〇点くらい取ったところだと考えていました。そしてあと四～五年で、五段階のすべてをクリアーし、五百点満点をとれるだろうと考えていました。ところが一昨年（一九九一年）の三月、突如、なぜか洗礼を受けたくてたまらなくなり、ついに洗礼を受けることになってしまいました。私も、まことにカッコ悪く、ぐじゃぐじゃになって、洗礼を受けるハメになったわけです。理由はいまもよく分かりません。

一つには、主が無駄な猛勉強をしている私をあわれに思い、もうこのへんでいいでしょうと、助けてくださったのでしょう。家内や、娘の切なる祈りが、そして多くのキリスト集会の皆さまの祈りが主に届き、主が助けてくださったということでしょう。自分ではあと四～五年で、五百点満点をとれる見通しでしたが、そんな保証はどこにもありません。来年がんで死ぬかも知れません。いや、明日交通事故で死んでしまうかも知れません。こんなことをしていてはとても間に

合いそうにないと、主があわれんでくださったのでしょう。

もう一つ、信仰とは自分で努力して五百点満点をとったら、自動的に神様が信じられるというようなものではなく、主が一方的に救ってくださったのだということをお示しになるため、私の五百点満点計画を粉砕されたのでしょう。おそらくこの両方でしょう。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。

（ヨハネ　15・16）

第一、第二の点についても、これは実は、自分の努力で達成することではなく、主が、聖霊によってなしとげてくださるのだということが、そして、自分を明け渡すというのも、自分の決意や努力でできるものではなく、主が徐々に、取り上げてくださるのだということが、あとで分かりました。

聖書には、救われるために五段階すべてが分からなければいけないなどと、書いてありません。イエス様の死と復活が分からなければいけないとも書いてありません。牢番がパウロに「救われるためには、何をしなければなりませんか。」と訊ねたとき、パウロの答えはただ一つ、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒　16・31）でした。

罪を悔い改めて、神様ご免なさい。どうぞ助けてください。イエス様、あなたを信じます。こ

れだけで、あとはすべて、主が、聖霊が、やってくださるのです。自分の能力や努力によってではなく、主のあわれみによって、律法の行ないによるのではなく、信仰によって（ローマ　3・28）、あとは主がすべてなしとげてくださるのです。どうしてもっと早く、このことに気づかなかったのでしょう。

たかがギックリ腰、されどギックリ腰

私のギックリ腰はその後ほぼ一年経ってもまったく回復の兆しもなく、十メートルか二十メートルも歩くともう痛くて痛くて顔がゆがみ、脂汗が出る、という状態が一年以上続きました。何とか車だけは運転できましたので、授業だけは車で行ってすることができましたが、あとはほとんどの仕事を断り、どこへも行けず、家に閉じこもっているという状態でした。

ただでさえ見栄坊で、気取り屋の私が、道を歩いていて十メートルも歩くと、ついに痛さに我慢できず、道ばたにしゃがみこんでしまいます。そんなときに限って、知り合いに会うのです。どうしたんですかなどと聞かれて、なんとも恥ずかしく、脂汗を流しました。

またこういうこともありました。洗礼を受けた直後の四月頃、すこし容態もよくなって喜んでいましたところ、翌五月にはドイツから、六月にはパリから、そして七月にはバンコックからと、立て続けに講演の依頼があり、有頂天になっていたのですが、これらすべてが実現しませんでした。出発の二週間くらい前になると、ギックリ腰の容態が悪化し、断念せざるを得なくなるのでした。病気とはいえ、呼んでくださった海外の友人や機関にも顔向けできない始末でした。

こうして主は、ギックリ腰という実に絶妙な手段により、私を完膚無きまでに打ちのめされました。そしてそのことを通して、再び私に謙虚な心を持つようにさせ、周囲の人々の思いやりを、愛を、実感させてくださいました。私の信仰も大きく前進させてくださいました。

その後ついにギックリ腰の手術を受ける決心をしました。一昨年夏のことです。手術は大成功で、三カ月の入院と自宅静養ののち完治し、社会復帰ができました。この間、実に多くのキリスト集会の皆さま方から、お見舞いの訪問と、励ましと、み言葉を頂きました。不安で寝られない夜も、皆さまからいただいたみ言葉を読み返すと、希望と勇気が湧いてきました。そしてこのキリスト集会の皆さま方とともに歩んでいる限り、どんなに私が信仰の牧場から迷い出ても、きっと主は私を捜しだし、この方々のもとへ連れ戻してくださると、確信することができました。何よりも、試練が主の恵みであったことを、そして、試練を通して私を鍛えてくださったことを、主の愛を、いま実感することができますので、感謝です。

それればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・3～5）

救われて、主に感謝して

こうして主は数々の信じられないような奇蹟を通して、主の怒りを、主の悲しみを、そして主

の愛を、示してくださいました。この主からのコミュニケーションによって、主のみ心を知り、主の愛にふれ、主に感謝し、そして救っていただくことができました。

クリスチャンになって変わったかということをよく聞かれます。まだまだ、主にすべてをお任せできず、すぐ自分でしてしまおうとする愚かな者ですが、いくつか変わったなと思うことはあります。時々、自分でも不思議なほど、信じられないほど、自分が素直な、優しい気持ちになっていることに気づくことがあります。家族や親族の健康について、キリスト集会の方々が会っておられるさまざまな試練について、親しい知人、友人の救いについて、気がつくと必死で祈っているのです。これはとても自分では考えられないことです。主がさせてくださっている以外に、考えようがありません。

信仰とは、土の器に主が宝を入れてくださることだと、書いてあります（Ⅱコリント4・7）。傲慢で自分勝手な私が、自分のことしか考えない私が、あるときびっくりするほど素直で、優しい気持ちになって、他人のために祈っているのです。これは主がさせてくださっているとしか考えられません。主がこの土の器に、宝を入れてくださっているのです。本当に感謝です。

もうひとつ、はっきり変わったことがあります。主に救われて、いま本当に自由になり、楽になりました。人さまの噂も、世間の目も、昔のように気になりません。クリスチャンは主が喜ばれるか、主が悲しまれるか、それだけ考えていればいいからです。そしてその判断も、実に簡単です。主が喜ばれているときは、考えられないような心の平安が訪れます。主が悲しんでおられるときは、いらいらし、辛く、悲しく、むなしさがこみ上げてきます。すぐ分かります。

まだまだ毎日のように、主を悲しませるようなことばかりしてしまう愚かな者ですが、主を悲しませてしまったと分かったら、神様ご免なさい、またやってしまいましたと、すぐ謝れます。家内には、子供には、そして知人、友人には、なかなか謝れなくても、神様にはすぐ謝れます。すると瞬時に胸がスーッとして、平安がかえってきます。本当に感謝です。これだけでも、クリスチャンになって本当によかったと思っています。

困ったときも、思い悩むのではなく、腹がたっても、どうしようかとイライラしないで、主に祈ると、すぐ答えがかえってきます。そして平安が訪れます。悩んではいけない、裁いてはいけない、これらはすべて主がなさってくださると、聖書に書いてあります。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。

（詩篇　55・22）

ここのところわが家は試練続きでした。しかしこれらの試練は、すべて主が、愛するわが子を鍛えるために与えてくださった恵みであったことを、いまは確信できます。

まだ私たちの周囲には、主を知らずに頑張っておられる家族、親族、そして多くの親しい友がいます。家族のためと確信して頑張っているのですが、その虚しさはひしひしと伝わってきます。どうぞこの人たちの上にも、主が働いてくださいますように。そして一人でも多くの友が、一日も早く主を知り、お約束通り主にあってゆっくりと、休ませていただけますように。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあ

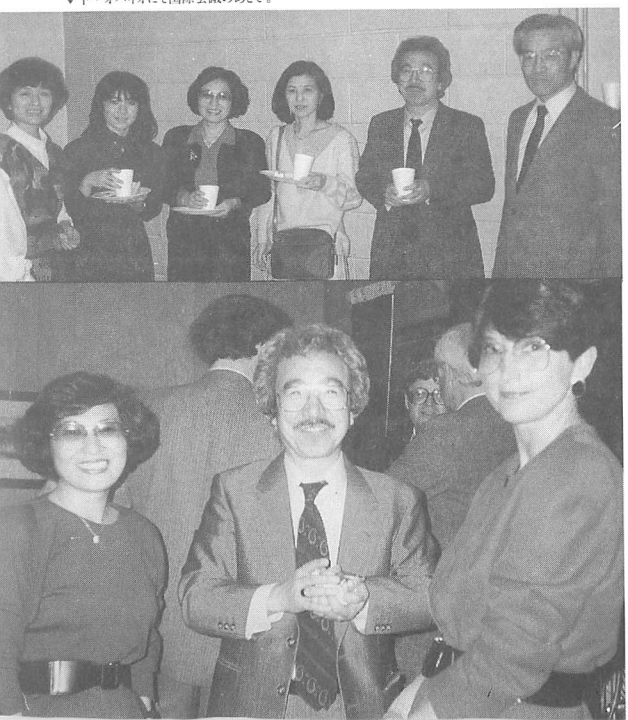
なたがたを休ませてあげます。」

（マタイ　11・28）



▲左から安子さん、次女純さん、長女千弘さん、弘さん。自宅にて。

上・ニューヨークでの礼拝のあとで柴田さんたち、佐々木さん、河辺さんと。
▼下・オハイオにて国際会議のあとで。





目を開かれて

飽戸安子

一九三八年東京に生まれる。平井東小、小松川第二中、都立小松川高校、不二服装専門学院卒。野村衣料株式会社に子供服のデザイナーとして勤務。一九五九年弘さんと結婚。家族は長女千弘さん、次女純さん。

「エミちゃんがご両親と一緒に洗礼を受けるんですって」。

当時高校生だった次女が、学校から帰るなり、興奮して私に告げたのでした。次女の親友の河辺詠美子さんがお母様とご一緒に聖書を読み始めていらしたことは聞いていましたが、お父様もご一緒とは…。吉祥寺キリスト集会とは一体どんな所なのかしら、と大いに興味をそそられました。

その頃の私は、クリスチャンになって十年近くたっていましたが、主人の救いのことなど考えたこともありませんでした。物事すべて理詰めで考える主人が目に見えない神様を信じることなど、私には赤い雪が降るぐらい信じにくいことでしたし、私自身、真の信仰の喜びを知らず、また当時私の集っていた教会では、働きざかりの男性が救われた例がほとんどなかったからです。

河辺さんにケーキの会に誘っていただいたり、「光よあれ」をいただいて読ませていただいているうちに、私もこの人達のように心からの喜びがほしいと思うようになりました。しかしその頃は、教会を去ることなど思いもつかないことでした。今日まで愚かな私を導いてくださった教

会の方々に対して、教会を去るなどということは決してできないという、人間的な思い煩いからでした。しかし主は、不思議な方法を通して私達を導いてくださいました。

近くの教会へ

一九七一年の夏、私達家族は、西船橋からここ浜田山の地に引越してきました。かすかに聞こえてくる讃美歌の歌声で、近くに教会があることを知りました。屋根の上の小さな十字架で、教会であることがやっと分かるような、ひっそりとしたたたずまいでした。

それまでの私は、聖書をきちんと読んだことはありませんでしたが、欧米の文学書を通して、キリスト教に対して聖らかなイメージとあこがれを感じていましたので、教会が近くにあることをうれしく思いました。そしてその秋、当時四歳だった次女をその教会の幼児クラスに入園させていただきました。年度の途中でしたが、優しい先生に見守られて、次女は喜々として通園しておりました。

私は次女が教会から持って帰ってくる暗唱聖句のみことばにふれ、週一回の聖書研究会に出かけるようになりました。主人も「聖書を読むことは欧米文化を理解する助けになる」という理由で賛成してくれました。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。

（詩篇　119・130）

聖書を読み始めて、私は少しずつ、今まで気づかなかった私自身の心の醜さや罪深さに気づかされました。私自身それまで愛だと信じ、主人や子供達に押しつけてきたことは、ただ自分を正しいとした自己愛であったこと、天地万物を造られた創造主である神から離れた人間は、本来罪人であり、自分以外には誰をも愛せない存在であることなどを知りました。そして、私の心の奥底にずっとひそんでいたむなしさの謎が解けたような気がしました。

愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。（Ⅰヨハネ　4・7、8）

このみことばにより、醜く罪深い私は神様に赦していただき、心から人を愛せる者になりたいと思い、イエス様を救い主として受け入れ信じる決心をしました。

その頃の私は、少々わがままでダダッ子だけれど愛すべき主人と、あまり丈夫ではないけれど音楽好きの二人の娘に恵まれ、たくさんの趣味を持ち、この世的には何不自由のない毎日でした。クリスチャンになったものの頭だけの信仰だった私は、主を第一とした生活ではなく、日曜日に礼拝に出かけたり、わずかなご奉仕をしたり、それまでの生活に教会生活が加わることによって、ますます忙しい毎日を送るようになりました。はじめは受洗することに反対していた主人でしたが、私がクリスチャンになったことで忙しくなったことのほかは何の変化もないので、内心ほっとしたようで、一年後には洗礼を許してくれました。

そんなわがままな日常でしたから、信仰の本当の喜びはありませんでした。私は真の信仰を求

める渇望と、やっぱり私はだめなのだという諦めが入りまじった思いで、日々を過ごしていました。クリスチャンになっていつしか七、八年が経っておりました。

真の救い

音楽が好きな二人の娘は、小さい時から長女がピアノ、次女がバイオリンを習っていました。長女が中学生の時、一年間アメリカに滞在したのがきっかけとなり、長女はすっかりロックのとりこになりました。帰国してからのある日の夕食時、長女の念願のロッククラブの新設許可が中学校でおりたこと、自分がドラムを受け持つことなど、長女はうれしそうに報告しました。

リベラリストの主人は、「人間たった一度の人生なんだから、若い時にはいろいろやりたいことをやってみるのもいい」と、理解を示しましたが、私は今までせっかく続けてきたピアノをやめてしまうことや、次女との合奏もできなくなること、またロックに熱中すると人生のわき道にそれてしまうのではないかといった自分の思いこみによる心配や、成績が下がるのではないかといった現実的な不安から、大反対しました。

私は次女のバイオリンのレッスンにはとても協力的でしたが、長女のロックはどうにかしてやめてほしいと思っていましたので、長女はだんだん私に心を閉ざすようになり、心がどんどん離れていきました。主人は長女と私の冷たい戦いを見ながら、「レジスタンス音楽を求める娘の心を理解してあげることが先だよ」と、よく私に言ってくれていました。ロックをすると聞いただけで、道を外れてしまうのではないかと心配する大人達への不信感こそが、その後ますます娘を

ロックに熱中させていったのかも知れません。娘は私への意地もあったのでしょう、音楽に関する出費はいっさい親にねだることをせず、昼食代をためたりアルバイトをしたりして出費をまかない、勉強も以前よりがんばっているようでした。

大学卒業後もプロとしてロックを続けたいと、がんばりにがんばった娘は、大学卒業の春、とうとう胃潰瘍になり、突発的なノイローゼ状態になりました。「ママ怖いの、助けて」と、すがりつく娘を胸に、私はただただ娘がいとおしく、哀れでなりませんでした。繊細で負けず嫌いの娘は、突発的にノイローゼという形をとることでしか、私に甘えるすべを知らなかったのです。

この娘が元気になるためなら、私はどんな犠牲をも惜しまないではらおう、とその時思いました。そして次の瞬間、はっと気づきました。私のように自分勝手な親でさえこれほどまでにわが子をいとおしく、せつなく思うのなら、天地万物を、そして私たちを造られた神様の愛は、どれほど深く、広く、大きなものだろうかと。

クリスチャンといいながら、わが子ひとりをも理解できず、子供を自分の所有物のように支配し、自分の考えを押しつけて育ててきたことの愚かさと罪深さ、そしてこの私の罪のため、この私の咎のために、イエス様は十字架にかかってくださったのだと、その時やっとイエス様の血潮の意味を実感したのです。堰を切ったように流れる涙をぬぐいながら、「神様、どうか今までの私の罪をお赦しください。どうかこの娘を助けてください」と、心の中で叫んでいました。

その後しばらくして、河辺さんからキリスト集会の祈り会へお誘いの電話をいただきました。まさにイエス様が招いてくださったのです。その頃の私は、娘の問題を教会の人々に打ち明ける

勇気がありませんでした。

池田さん宅で開かれていた祈り会は、日当たりのいい二階の部屋に、五、六人の方々が集まっておられましたが、初めての私を暖かく迎えてくださり、私の家族のために心を注ぎだして祈ってくださいました。

「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」（マタイ　18・20）

凍とした空気の中に確かに主のご臨在を感じ、身体の中を熱いものが貫きました。涙が止めどなく溢れ、主の前にひれ伏す思いでした。このことを通して、本当にかたくなな者であった私も、やっとイエス様に心から従い、主を第一として生きたいと心から願うようになったのです。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

イエス様の大きな愛をこの身に体験した時から、それまでの私の価値観が音をたてて崩れはじめました。罪を赦された確信は、私を大きな喜びと、完全な解放感で満たしてくれました。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。（ローマ　6・23）

まことの喜びと真の救いを体験し、この喜びと、死の滅びからの解放を、どうしても家族に知ってもらいたいと、家族の救いを心から願うようになりました。イエス様の愛にふれ、やっと母と子の心が近づけられ、長女は二ヵ月ほどたって元のように元気になりました。また次女も救いの恵みにあずかることができました。そしてその頃から、長い間私の心の中にわだかまっていた近くの教会への人間的な配慮や思い煩いからも解放され、すべてを主にお委ねし、キリスト集会へ集わせていただくようになりました。

主人の救い

私は主人の性格から、主人が救われてイエス様に従う者にされることはほんとにむつかしいだろうと考えていました。しかし、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒16・31）のみことばにより、もしかしたら救われるかも知れない、という希望を持つようになりました。その後、ベックさんとお話しているとき、ベックさんは「家族の救いは主のお約束ですから、夫を救ってくださいと祈るのではなく、救ってくださることを主に感謝すべきです」と言われ、その信仰の深さに圧倒されたことを覚えています。

以前の私達夫婦は、似たもの夫婦というのでしょうか、行動パターンが似ていること、そしてお互いに欠けている所が多く、二人あわせてやっと一人前、というふうでしたから、いつも二人三脚をしているようなものでした。しかし私が真の信仰に導かれ、価値観が大きく変わりだした頃から、何となく夫婦の関係がギクシャクしはじめました。なにごとも人一倍頑張ることの好き

な主人は、私がいろいろな趣味に興味を失ったことで、すっかり私に失望してしまったようでした。私は私で何とか主人が救われて欲しいと願うようになり、証しのテープを大きな音でかけたり、信仰書を勧めたりし、主人はますます福音に耳を閉ざすようになった時期もありました。

主人は時々うんざりした口調で「やれやれ、また正義の味方黄金バットが、マントをひるがえしてかけまわっているよ」とぼやきましたが、その頃の私は、主人の救いを願うあまり、自分の力でなんとかしようとあせっていたのでした。次女に原因不明の熱が続いた時も、主人が腰痛で苦しんだ時も、これは主人の救いのために与えられた主からの試練であると思っていました。しかしそれは大きな間違いでした。

腰痛で礼拝に出られない主人を家に残し、一人で出かけた日曜礼拝の折、ある方が読まれたみことばが鋭く胸につきささりました。そのみことばは私に向かって真っすぐに飛んできたのです。

「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」（黙示　2・4、5）

本当に私は傲慢な者でした。いつも心の中で、なかなか主の方に向かない主人を裁いていました。この私の傲慢を砕くため、娘を苦しめ、主人も試練の中におかれていることをはっきりと示されました。涙が止りませんでした。イエス様の光の前に大きく立ちはだかっていたのはこの私

だったのです。

その日、食事のお祈りの時、自分の傲慢さとわがままを、心からイエス様と家族に詫びることができました。その後、主人は本当の救いを体験し、心から喜ぶ者に変えられ、受洗へと導かれたのです。一度解かれた私達夫婦の二人三脚の結び目を、今度はイエス様がしっかりと結び直してくださいました。主はほんとうに生きておられ、私達家族に奇蹟をなしてくださったのです。主人とともに信仰による平安な毎日を心から感謝し、一人でも多くの方にこの喜びを知っていただきたいと心から願う毎日です。

私のすべてであられる主

友野雅志

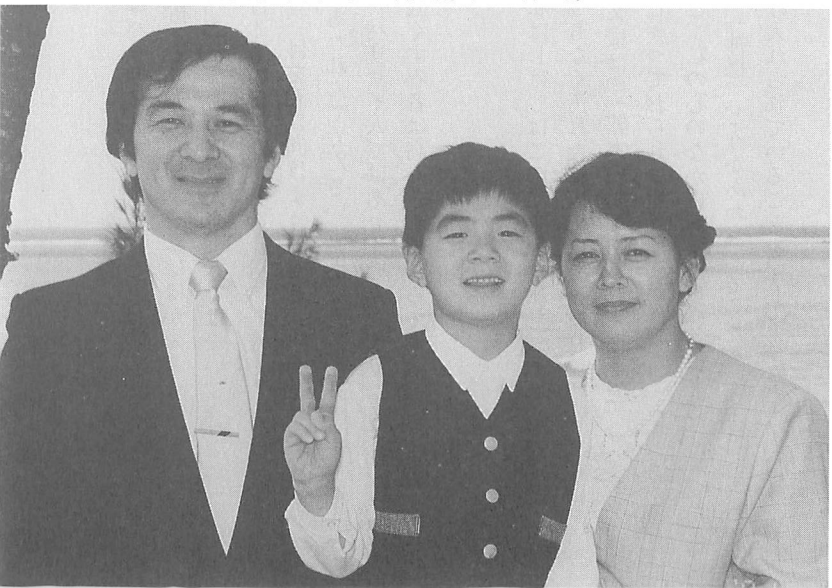
一九五四年鹿児島県奄美大島に生まれる。伊津部小、金久中、鶴丸高、東京大学教育学部卒業。株式会社ハイテック・システム・マネージメント代表取締役。家族は妻和子さん、長男恵理也さん。趣味は読書、絵画。

- 家庭集会　毎週土曜午後二時
- 住所　沖縄県宜野湾市我如古七七八―一〇シティラ イツガネコ3F㈱ハイテック内〒九〇一―二二一
- 電　〇九八―八九八―〇一〇五



▲上・左から雅志さん、和子さん、雅志さんのご両親と奄美大島で。
下・雅志さんが初めてベックさんと会った日に。1990年6月。

▼左から雅志さん、長男恵理也さん、和子さん。1991年春の沖縄バイブル・キャンプで。



「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

（ルカ　18・10～14）

イエス様は聖書のなかでこのように語っておられます。私はしばしばこの話を思い出し、慰められます。これまでの私の人生を思うなら、私はどうしようもなく汚れた罪人であり、神様のまえに立てるような者ではありません。しかし、ここでイエス様は、「罪人の私をあわれんでください」と頭を垂れる者を神様は受け入れてくださるとおっしゃっておられます。

私がこれまで歩んできた道、そこでのさまざまなできごと、私の心のなかにあった思い、そしていまの私の心の奥底からでてくる思いについて考えると、「神様、どうかあわれんでください」としか言えません。そして、神様は私をあわれみ、私が受け入れられていることを示し、平安と慰めで私を包んでくださるのです。

学生時代

私は高校時代から政治活動に関心を持ち、そのころ盛んだった学生運動のなかに正しさがあると思いました。高校の卒業式での日の丸掲揚や答辞をめぐっての集会やビラ配りからはじまって、大学に入学すると、入学式どころか大学へはほとんど行かず、ヘルメットをかぶって旗を持って一日中走り回るようになっていました。

しかし、学生運動のなかには憎しみや力への欲望はあっても、私が期待した正しさなどどこにもありませんでした。学生運動をやめた私は、絵画や文芸のサークルや酒に酔っての馬鹿騒ぎに明け暮れるようになりました。両親も友人たちも、そのように、なにごとにも積極的ではあるものの品行のよくない私にとまどい、あきれていたようです。

そのころの私は、自分の内側にはまったく確かなものがないと気づいており、あれはどうだろう、これはどうだ、と試していたのだろうと思います。

自分の欲望のままにすべてに向かっていたそのころ、あるできごとがありました。私はある女性の友人から、私の友人の中のひとりを、私よりはるかに尊敬します、と言われたのです。その友人はある仕事に就くことを目標としており、人格は私よりはるかにすぐれていました。私は自分でもそのことを認めざるをえませんでした。

色々なサークル活動に参加し、まわりからは有意義に生活していると言われることもありましたが、外から見ると生きる力があふれているように見えても、実は私の中身はむなしいと気づい

ていました。この仕事に就きたいという希望もなく、こうして生きていきたいという人生の目標もなく、どの仕事に就いても満たされないだろう、という思いがはっきりとありました。

まったく違うところに行けば思いは変わるかもしれないと、私は大学の卒業式のまえに、両親には知らせずに日本を発ちました。インドネシア、タイ、マレーシアと、リュックサックを背負って旅行しました。しかし、珍しい建築や歴史的遺跡、見たことのない風景を見ながらも、私の心は喜ばず、むなしさを感じていました。

あと四、五日でロンドンへ向かうというとき、私が宿泊していたホステルの横の海岸に、ベトナムからの難民船が到着しました。「ベトナムからの難民についての電報、国際電話、写真撮影を禁止する」と、あらゆる公共施設に張り紙され、難民のまわりには自動小銃を持った軍人が何名か立ちました。

その少しまえ、タイの新聞で、「タイの青年がマレーシアで軍人にパスポートの提示を求められ、内ポケットからパスポートを出そうとしたところ、拳銃を出そうとしていると勘違いされ、撃ち殺された。撃った軍人は逃亡して逮捕されたが、六カ月の刑を受けた」という記事を読んだときは、大変なところだな、と思いましたが、軍隊というものを知らない私は、それが実際にはどういうことかわからずにいました。

難民たちの中でアメリカの親戚と連絡がとれた人は早く収容所を出てアメリカに行けると聞いた私は、無鉄砲にも彼らにエアメール用の封筒をわたし、親戚と連絡がとれるようにしようと考えました。封筒の束をわたそうと、写真を撮るかのようにカメラを持って彼らに近づきました。

その瞬間、背中に小銃の先をあてられ、数名の軍人に囲まれていました。両手を上げたまま裏の岩陰に連れていかれました。何がなんだか理解できない間にカメラは取り上げられ、フィルムは引き出されていました。そのときリーダー格の人が私が日本人だと気づき、ほかの軍人たちを止めました。全身から力が抜けてしまい、その後二日間は食欲もなく、私は難民たちが砂浜にいるのをホステルの窓からただながめていました。自分のことを「まるで野良犬のように力も価値もないではないか。しかもいざとなったらただ殺されてしまう野良犬だ」と思っていました。

ロンドンにて

そんな心の状態のままでロンドンに到着した私は、ロンドン大学の学生たちのアパートに住み、英語学校に通い、学校の喫茶室で働きました。そこにはイランから亡命してきた元テヘラン大学教授、タイから留学している王族の青年、小さいころからむごたらしい戦争を見てきたレバノンの娘、そのほかにも人間を信じられないで絶望している外国人が大勢いました。各国の学校や企業から送られてきて英語を学んでいる学生もいましたが、私が親しくなったのは、時々のダンスパーテイを楽しみにして、苦しさを酒でまぎらわし、時々睡眠薬を飲む人々でした。

夜中に電話が鳴っては、「マサシ、死にたいよう。死のうと思って薬を飲んだけれど吐いてしまったよう」と泣くのは、イランの百科事典の編集者だったアリです。イランに帰ると銃殺になるそうです。夜中にタクシーで駆けつけては、「死んではいけない。生きなければいけないよ」と声をかけ、夜が明けるまでいっしょにいるのです。

「人は生まれ、悲しみのなかで生きて、死ぬ」と私は考えていました。その人生のなかで人に優しくあること、どれだけ優しくなれるか試みることが人生の意味だ、と思っていました。

私自身はというと、レコードを聞きつつ本を読み、酒に酔ってはベッドに入るという生活でした。酒を飲み、そうして生きている自分が悲しくなり、泣きながら寝入ることもしばしばでした。

そのころ、小説の「罪と罰」を読みなおし、よく思い出しました。殺人を犯した青年が良心の痛みに苦しむ。馬車にひかれた酔っ払いを家へ連れていくが、貧しくて悲惨な状態にもかかわらず、なぜか安らかなその家の娘に心をひかれる。そして娘に自分の罪を告白すると、娘は「十字路のまんなかで大声で自分の罪を告白しなさい、神は赦してくださいます」と言う。青年はそのとおりにして逮捕され、シベリアへ流される。しかし、いっしょについていった娘と二人で新しい生活をはじめるというストーリーでした。「神がいるなら、そして赦されるなら、私も新しく人生をはじめることができるのに。しかし、神はいない」と、私はまた酒を飲んで寝入るのです。

両親への愛のなさ、あらゆることでの自己中心性。ロンドンで生活し、イギリスの女性と結婚しても一カ月ともたず、そのころの私は「私の人生は失敗だった」とばかり感じていました。

神様助けてください

そうした中で和子と出会いました。老人ホームでボランティアをしながら英語を勉強するためにイギリスへ来て腰を痛めたという彼女に、私にはない健康的なものを感じました。私たちは、もう一度日本でやり直してみようと帰国しましたが、すぐに絶望してしまいました。

私の故郷、奄美大島での、私の両親の家の都市計画による工事の手伝い。そのさなかの和子の流産。違う文化の中で苦しむ和子。不安を覚えながらの結婚式。東京での生活の開始。二週間で仕事の都合で奄美大島へ引っ越し。休日もなく朝から深夜まで仕事に熱中する私。私の母との関係で悩む妻。

そしてある日、和子はとうとうひとりで沖縄へ帰っていきました。電話で話をしても、飛行機で日帰りで会いに行って話をしても拒否する和子に、私はどうしようもない思いでした。

ある日私はどうしてもこのまま仕事を続けてはいけない、と決心し、沖縄へ渡ることにしました。私と私の両親のあいだにも深い溝ができていました。

那覇の空港へは妻が迎えに来ていました。まるで心のかよわない私たちを、妻の姉の平良芳子さんが教会へ誘いました。帰国から半年後でした。聖書を読んだこともなく、イエス様については、小さいころイースターの卵をもらいに日曜学校へ行ったきり、覚えているのはタイタニック号が沈む紙芝居だけという私でしたが、教会の方々に誘われるまま、時々行くようになりました。

結婚生活のなかに自分の幸せを期待していた妻の心をずたずたにした私は、妻との心のへだたりをどうしようもなく、「神様、なんとかしてください」という思いでした。

ある日、いすに座っているとき、祈りも知らず「神様、助けてください」と心の中で語るだけの私でしたが、涙があふれてしようがありませんでした。私は、神様がいらっしゃること、そして私を愛し、私の身代わりに十字架にかかられるほど私を愛し、十字架の贖いのみわざによって私の罪を赦し受け入れてくださっていること、その神様はイエス様であることを確信しました。

イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」彼女は言った。「だれもいません。」そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」（ヨハネ　8・10、11）

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」（マタイ　5・4）

イエス様は妻と私を慰めてくださり、私たちを愛し、赦しておられることを示してくださいました。私たちは心のへだたりをまだまだ強く感じていましたが、イエス様にすがることで希望を持つことができました。私たち夫婦はいっしょに洗礼を受けました。芳子さんもいっしょでした。イエス様は、私たち夫婦と私の両親とのあいだの音信不通の状態も一瞬にして解決してくださいました。

それからの私たちは、あいかわらずイエス様に愛されている事実を忘れて、自分のわがままで相手を苦しめ、イエス様の心を痛めることの多い者でしたが、イエス様はあわれんで導いてくださったとしか言いようがありません。

「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」（ヨハネ　6・37）

イエス様がともにおられる

その頃、母が手術を受けることになりました。母は長い間私たちに隠していましたが、乳がんが進行し、本人も耐えきれない状態になっていました。鹿児島県立病院への入院、手術の前の祈り、八時間の手術、そして両腕を動かせないようにしばられた母の集中治療室での看病と祈り。突然のできごとに私たちはとまどいながらも、祈ることがゆるされていることで支えられました。

三カ月間両腕を動かせなかった母に、昼は妻、夜は私が付き添いましたが、朝に夜に、そして食事のときには母もいっしょに祈るようになりました。気が強く、気性の激しい母でしたが、「祈ってちょうだい」と頭を垂れていっしょに祈るようになっていました。母は手を動かせるまでに回復したあとも三カ月間入院生活を続け、そのあいだ妻が付き添いました。

「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」（マタイ　18・20）

私たちは私たちの主、イエス様がともにおられること、その平安のすばらしさを体験させていただきました。

一年後、正月を奄美で過ごすために、妻は当時三カ月の赤ん坊だった恵理也を連れて一足先に奄美に行きました。その妻から「母が大変だからすぐ来るように」と電話があったとき、私は「やはり」と思いました。手術後のお医者さんの話では、「肋骨の間にがん細胞が入りこんでいて

手術するのは不可能です。薬でなんとかやってみましょう」ということだったからです。

母は瞼をあけるのもやっとというほど弱っており、全身はやせ細り、足だけが異様にむくんで、一日中いすに座っている状態でした。助けてもらって恵理也を細い腕に抱かせてもらい、喜んでいました。

沖縄の病院へ入院する手続きをとる時間すらなく、母は救急車で入院しました。妻と私は、心電図を見ながら聖歌を賛美し、聖書を読み、祈りました。

やせて横になり、穏やかな表情をしている母の横で賛美しながら、私たちは天のみ国で母に再会できることを深く深く感謝しました。母は安らかに天に召されていきました。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

（Ⅰテサロニケ　4・16、17）

イエス様に抱かれて歩む

母が召された年、私が勤めていた会社が経営に行き詰まり、縮小しました。退職した同僚たちと、業界のこともわからず、自分の力も知らず、コンピュータ・ソフトウェアの会社を設立しました。妻は大反対しましたが、私は自惚れ、たかぶり、聞く耳を持たず、会社をはじめました。

その結果はほとんど家にお金を入れず、逆に貯金を使いはたし、家族もようやく生活できているという貧しさで、会社はすべての支払いに窮する状態でした。自宅の電話は料金を払わないので通話できないというのが日常でした。

ある夜、家に帰ってきて電気のスイッチをいれても真暗なままでした。電気もとめられていました。しばらくすると妻が寝入った恵理也を抱いて帰ってきました。恵理也が泣くので近くのスーパーのまえの街灯の下であやしていたのです。私はすでに夫として失格だと自覚していましたが、父親としても、社長としても、そして何よりも神様のまえに完全に無価値な者でした。

心の中では「早く天国に行きたい」と思う毎日でした。あと何日分のガソリン代があるかな、と計算しては通勤し、営業しながら、サトウキビ畑の農道に、あるいは海岸に、車をとめては泣きながら祈り、叫んでは泣いて、また営業するという日々でした。そうした生活のなかで、私たち夫婦はそれぞれにイエス様に支えられ、手を引かれ、抱かれて歩むことができたと思います。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ　63・9）

東京へ出張し、事務所を兼ねたマンションに寝泊まりして営業しているときのこと。十二月になろうとしているにもかかわらず、十二月分の給与も賞与もまったく支払える可能性がない状態でした。「狭い沖縄県より、何十倍も広いマーケットである東京で販売すれば、ずっと将来性が

ある」と考えてはじめた東京営業所でしたが、営業は思うようには進まず、ほとんど販売には結びつきませんでした。

年の暮れに、事務机とコンピュータ、資料キャビネットやコピー機が所せましと入った狭いマンションにひとりで寝泊まりし、昼は営業に歩きまわらなければなりませんでした。社員や取引先に対する責任、そしてそれを果たせないときの恥ずかしさと辛さを思うと息苦しくなるのでした。「もし十二月中に入金がなければ、社員は落胆し、会社を見限るだろう。またこれまでも迷惑をかけてきた取引先に頭を下げて回らなければならないけれども、今回は待ってはもらえないだろう」と思うと胸が苦しくなるのです。

「イエス様、どのようになろうとあなたが導いてください」と祈って外に出るのです。それまで営業で訪問してきたお客さんを電車と徒歩で訪ね、社長さんが不在でしたらほかを回ってまたもどってくるのですが、なかなか会えませんし、会えてもよい返事がもらえるわけではありません。電車のホームで、駅からの慣れない道で、信号待ちで立っているとき、「イエスがいるから、明日は怖くない。イエスがいるから、恐れは消え、イエスがいるから……」とその歌のフレーズだけなんどもなんども繰り返して歌いました。人通りの少ない道では喜んで大声で歌い、人とすれちがうときや人混みが近づくと小さい声で歌うのです。お客さんの店が近くなっても、目は真赤に泣きはらしていますから、目の赤みがとれるまで歩きまわり、それから訪ねるのです。

クリスマスが近づくころ、必要なだけの契約がもらえ、なんとか最低限の給与と賞与、そして取引先への支払いをすることができました。支払うべきものを支払うと、年明けの一月にはまた

まったく貯えのない状態になっており、次の給与や家賃の支払いをどうしようかと考えなければなりませんでした。

そのころの私は、ビジネス手帳にヨシュア記の聖句を書き写し、なんども開いて読んではイエス様に「今日一日いっしょにいてください」と祈っていました。

「わたし（主）はあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」（ヨシュア　1・9）

「今月の給与がまるで足りません」、「明日の支払いが不足しています」、「どうぞ歩むべき道を歩ませてください。もし会社が行き詰まるなら、原因は経営者として愚かである私にありますが、どうかそのなかにもあなたの栄光を現わしてください」と祈る日がほとんどでした。目を覚ましてからイエス様に祈ることができるまでの時間は、胃を締めつける苦しさと吐き気で身体が重く、昼間は「ああイエス様、どうしたらいいでしょう。助けてください」と心のなかで叫んで過ごす日が多く、また帰る道でも、聖歌のテープに合わせて歌いながら、「主よ、天国に行くときはまだですか」と、主を見上げて慰められる日々でした。

私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。（詩篇　4・1）

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。

（哀歌　3・22～24）

イエス様にあたたかく導かれて

私の汚れた歩みの日々、愚かさと弱さと自己中心の生活、そしてイエス様の愛を知ってなおさら気づかされる私自身の内側の醜さ、罪の本性。私の人生はイエス様がなければ絶望的な失敗と苦痛そのものに過ぎません。妻に大声で怒鳴り、あるいは冷たい目つきで見たり、心のなかにあるのはどうしようもないエゴイズムだとなんどもなんども気づかされます。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。

（ローマ　7・15）

「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

（マルコ　7・20～23）

イエス様を知ってからの人生は、神様が、頑固な私に、私自身に強いところや良いところはな

く、汚れと醜さと弱さしかないことを、これでもかこれでもかと示しつづけておられる道のように思えます。それでもイエス様にさからおうとする私を、イエス様が「これが道だ」と、辛抱強く暖かく導きつづけてくださった日々でもあります。

兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです。

（Ⅰコリント　1・26～31）

誇れるようなものどころか、良いところのまったくない私は、ただ「こんな罪人の私をあわれんでくださり、ありがとうございます」と頭を垂れるだけです。そしてただ感謝するだけです。

教会生活での悩み

イエス様に愛されていることを知って十年になりますが、その間ただイエス様のあわれみと恵

みを受けただけでなく、「私自身はイエス様に従って生きているだろうか」と考え悩みました。はじめてイエス様について聞いた教会は、異言やいやしを行なう教会でした。そのころ私は聖書をよく読んでいたわけでもなく、理解していたわけでもありませんが、息苦しさ、重苦しさがどうしても感じられ、洗礼を受けて間もなく行かなくなりました。いま思えば、私はそこにイエス様の聖さを見出せなかったと思います。(編集注・異言というのは、意味の分からない言葉や声をお祈りの中に入れることを言います。異言といやしの問題についてベックさんは、「実を結ぶ命」の一二七ページ以降において、「…異言を語ったり、どうしてもいやされることを催促したりすることを絶対にしないように忠告します」と実例をあげて明快に書いておられますので、ぜひ、あわせてお読みください。)

ちょうどそのころ母の手術があり、私たち夫婦は母との和解、母の救いと、主のあわれみと主のご計画のすばらしさを体験することができました。母の手術の付き添いのため奄美大島へ帰っている期間の長かった私たちは、そのままその教会から遠のくようになりました。

それから一年もしないうちに恵理也の誕生があり、和子の姉夫婦である平良さんたちに誘われて、住まいから二十キロメートルほど離れたある教会の特別伝道会へ行きました。私たち夫婦は渇ききった者が水を求めているようにその教会へ通いました。通いはじめて二カ月ほどたったころ、母が召されました。

その後、聖書を読み知っているわけでもなく、信仰の友を多く持っているわけでもない私たちは、教会の皆さんが誘ってくださるし、悪い雰囲気ではないし、とその教会の会員になることに

しました。しかし、この教会もやはり異言、いやしを祈り求めることが分かりました。また多くの行事や集まりをとおして、この教会は神のみ心を第一に尋ね求めることよりも、人間の知恵と努力でことがすすめられているように思えてきました。私たち夫婦は悩みました。聖書の示す「キリストのからだ」とはこういうものだろうか、という疑問が、いつも心にありました。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・23）

また、私が生きる上でもっとも重要だと考えていた、イエス様の十字架の贖いによる罪の赦しに感謝し、主のみ心だけに従っていくということも、なかなか理解してもらえないようでした。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。（Ⅰコリント　1・18）

やがて、妻は礼拝に行かなくなりました。「どうするの?」と尋ねる妻に、私は「主が教えてくださるときに、それに従う」としか答えることができませんでした。しかしある日、思い悩む私は、次のみことばで目を覚まされました。

事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。（ローマ　9・16）

事は人間の願いや努力、配慮によるのではなく、ただあわれんでくださる神によってなされる。この聖句で、私はこの教会を去る決心をしました。教会の皆さん方のことを思うと悲しみと痛みがありましたが、私たちは牧師にわけを話してそこを去りました。

キリスト集会に導かれて

先にその教会を離れていた平良さんご夫妻をとおして、妻はキリスト集会の集いに行きはじめました。妻は「とってもいい集会だから行ってみよう」と私を誘いますが、私は「最初の教会も二度目の教会も人の誘いで決めたが、もうそうはしたくない」と決心していたので固く拒みました。当時私は「これが神様のみ心であるとはっきりしないかぎりどこにも行かない。その集まりがみ心にそったものだとどうして言えるんだ」と、激しく反発したものです。

しかしある日、妻と友人の長浜さんを乗せて車でキリスト集会へ行った私は、集会の後列に座ってメッセージを聞くことになりました。そのとき、聖書のみことばがしきりに心に思い浮かんでしようがなくなりました。「あなたはわたしを愛しますか。」（ヨハネ21・17）というイエス様の問いかけと、「神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。」（Ⅰヨハネ4・21）という勧めです。私の目の前にはキリスト集会の皆さんが座っていました。私はイエス様の愛で涙をとめることができませんでした。そのときまで、ベックさんをはじめたくさんのキリスト集会のみなさんが私のことを祈ってくださっていたことを後日知らされました。

その日以来、キリスト集会で主のからだの一部として受け入れられ、ともに主をほめたたえる

ことがゆるされていることを、心から感謝しています。

キリスト集会に集いはじめて、改めて主の導きに深く感謝したのは、東京に出て吉祥寺キリスト集会の日曜礼拝に参加したときのことでした。集会場は多くの人々であふれ、その中に主ご自身が生きて働いておられることを実感しました。次々に立って祈る男性たちのだれもが自らの罪を悔い、頭を垂れてイエス様の十字架の贖いのみわざと主の恵みに感謝していました。私は改めて、このキリスト集会へ私を導いてくださった主に心から感謝しました。

私の仕事や生活が決して楽になったわけではありません。しかし、たくさんのキリスト集会のみなさんをとおして確信できる主の真実さ、恵みの確かさ、そして先に天国へ召された方々に見た天国への希望に、心はいつも喜びと平安に満たされています。

すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・15～18）

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでにな

るのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ　3・20、21）

私自身はあいかわらず良いところがなく、無に等しいものであり、日々の困難に苦しむものですが、いつも私を見守り、私の祈りを聞いてくださるイエス様が迎えに来てくださるときを待ち、喜んでいます。すべてのことをとおして、私を恵みで満たしてくださるイエス様に、心から感謝しています。

▼沖縄の家庭集会で。前列左端雅志さん。後列に吉祥寺キリスト集会の方々も。





▲左から和子さん、受洗した幼な友達の長浜みゆきさん、ミンヘンさん。

主だけを見上げて

友野和子

一九五六年沖縄に生まれる。本部小、中、高等学校卒業。沖縄県庁非常勤勤務の後、喜屋武真栄後援会書記を務める。退職後、福祉と語学の学習のため渡英。英国で夫雅志さんと出会う。夫雅志さん。長男恵理也さん。

救いへのきっかけ

一九八二年、私たちは結婚することになり、主人のふるさと奄美大島で式を挙げるため、ふたりが出会ったイギリスからいっしょに帰国しました。主人の母（故人）は、大変な子供思いで、私たちの結婚をとても喜んで迎えてくれました。帰国する前から、主人の母とは文通を交わしたり、電話をしたりしていました。帰国して結婚したら、これほど息子を愛しているこのお母さんを大切にして仕えていこうと思っていました。しかし、身近かでの日々をすごしていくうちに、大変なむずかしさを感じ、この結婚はうまくいかないのではないかと不安と迷いが起こり、「結婚したくない」という思いと「いや、ここまできたのだから長男の嫁としてしっかりしなければ」という二つの思いで、心中はとても揺れていました。主人の母はとても聡明で、何でもよくできるしっかりした人でしたので、見習いたい点もたくさんありましたし、また人柄も明るく気さくでよく話してくれましたので好感が持てました。ところが、気に入らないことがあると、まるで人が変わったかのようにすごい剣幕になり、突然の変わりように家族の者は戦々恐々として

疲れてしまうのでした。母がどうしてこのように急変してしまうのか不思議でよくわかりませんでした。しかしこのままではよくないので、できるだけ母のことを理解して、ご機嫌をとって気に入られるように仕えていこうと思い、意識的にふるまいましたが、内心はゆとりがなく疲れはてしまい、母を思いやる気持ちよりもいつまでこの生活が続くのだろうかという気持ちの方が強かったように思います。

私たちは結婚するとすぐに東京に移り住む計画でしたので、主人が先に上京して府中にアパートを見つけ、私もしばらくして奄美を離れ上京しました。主人の両親も若いうちは東京でいい仕事をした方がよいとの意見でしたので、東京で所帯を持つことをすすめてくれました。

ところが就職した主人は奄美勤務となり、上京一カ月後、私たちはすぐに奄美へ戻らなければなりませんでした。そのころ母は府中のアパートに何度も電話をしてきて、細かいことまで指図するようになっていました。夜中でも思いたったらかけてくるので、眠れない日がよくあり、私は電話の音におびえるようになり、身心ともにまいっていきました。そのようなわけでしたから、重い心をひきずっての奄美大島への引っ越しはとてもつらく、自分の不運を思って嘆きました。引っ越しはしたものの、主人は仕事に明け暮れる毎日で、ほとんど会話を交わす時間もなく、慣れない土地での孤独な結婚生活でした。

そんなある日、住んでいるアパートに母から電話がかかり、はげしくののしられたとき、私は体から力が抜けていくのを感じました。ああ、もうこれで終わりだ、と思い、「沖縄に帰らせていただきます」と告げました。主人にも話して、なんとか承諾を得て次の日の夜の船に乗りこみ、

一大決心をして帰ってしまいました。このままでは主人や主人の母を不幸にするだけだし、私自身もだめになってしまうので離婚をした方がいいと思い、さっそく実家の両親に離婚をゆるしてほしいとお願いにいきました。ところが父は、「離婚は絶対に認めない。大島のお母さんもいつかきっとわかってくれる時がくるからがまんしなさい。雅志さんはいい人だよ」と、きっぱり言いきられました。父の言葉には威厳があり、私は不思議と何も言い返すことができず、父に従うしかないと思いました。そのころ奄美では、主人も仕事に不信感を持っていて、退職をしたいとのことでしたので、もう一度、沖縄に住んでやり直そうということになりました。ところが主人の母から解放されても私の心には元気がなく、むしろ心にひそむ憎しみと、奄美で主人の両親が私と同じように苦しんでいるのかと思う自責の念から、次第に鬱の状態に落ちこんでいきました。そして、食事ものどを通らず、私は主人に自己主張をぶつけるようになっていきました。

そのような時に、私の姉から教会へ行ってみないかとさそわれ、主人といっしょに渇いた心をひきずって、飛びこむような思いで行ってみました。流れてくる賛美の歌声に、なつかしいふるさとに戻ってきたような気がして、こみあげてくるものを感じました。

しばらくその教会に通っていたある日のこと、「人のした悪を思わず」という聖書の箇所が出てきたときに、私は絶句してしまい、頭を殴られたような衝撃を受けました。私は人のした悪を思い続けていたからです。この世の基準とはまるで逆の世界があることに気づかされ、何か光を見たような気がしました。それまで私は、自分の中に人を憎む思いがあるが、それは人間誰もが持っている性質なので、しかたがないと思っていました。しかし、それは「罪」なのだとはじめ

て知りました。罪を罪として認識するか否かでは、人生への向かい方、生き方がまったく違ってくることを考えさせられ、それまでの自己中心的な生き方を主のまえに認め、悔い改めずにはいられませんでした。

しかし私はほんとうにみじめでどうしようもない者で、あるとき、私の実家あてに奄美の両親から小包みが届いているのを見て、むらむらといらだつ思いが再び出てきました。それで、もう神様にすがるしかないと思って、夫婦いっしょに誰もいない部屋にいって、「どうぞ私のあわれなこの憎しみの思いを取ってください」とけんめいに祈りました。祈ること一時間半、ほんとに不思議でしたけれども、静かな思いになり、奄美へ電話をして謝ろうという気持ちになりました。もしかしたら怒鳴られるかもしれないけれど、でも、とにかく早く謝ろうと思いました。すると、電話の向こう側の主人の母が、それまで聞いたことのない優しい声で「情けない親と思ったでしょう。ほんとうにごめんなさいね。ゆるしてね」と言うのです。耳を疑うほどの母の変わりように、イエスさまは生きていらっしゃると思いました。「いいえ、私の方こそ、わがままで、勝手なことをしてほんとうにすみませんでした」と謝ることができ、やっと私の凍りついた心に雪どけがやってきました。それからまた、主人の母との文通がはじまり、聖書や賛美の歌のテープ、聖書についてのメッセージなどを送ったりして、新しいおつきあいができるようになりました。母からの手紙には「今まで私がまったく知らなかった世界があることを知ってほんとうに嬉しい」という内容のことがたびたび書かれていました。みじめな嫁と姑の関係から、神様をいっしょにほめたたえる間柄に変えられ、イエスさまの一方的なあわれみによって奇蹟が起こったので

した。このことを通して、イエスさまが十字架上で死なれたのは、私の罪のためであり、さらに、死んで三日目によみがえり今も生きていて私たちのためにとりなしてくださっているということ、そして聖書のお約束どおり祈りは聞かれるということを体験的に知り、主のご真実にふれました。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

（ローマ　5・8）

キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・25）

私は二十六年間、イエスさまから遠く離れ、さまよい歩いていた者であり、過去の数々の罪やあやまちをふり返りますと、恐ろしい汚れとたかぶりと、思慮に欠けた愚かな者でした。こんな私を何のとがめだてもせず、ただ愛し、赦してくださるイエスさま、何という驚くばかりの恵みでしょうか。ほんとうに口では言いつくせない心の底からの感謝の叫びを覚えます。そして私は自分の罪を告白して、主イエスさまを私の救い主として信じ受け入れ、救われました。そして一九八三年三月二十一日、私たち夫婦は、姉といっしょに主に従って生きていくことを証しする洗礼を受けたのでした。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じ

る者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
（ヨハネ　3・16）

「わたし、このわたしが、主であって、わたしのほかに救い主はいない。」
（イザヤ　43・11）

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」
（イザヤ　43・4）

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」
（マタイ　5・3）

主人の母の救い

私たちが洗礼を受けてから五カ月後、主人の母は病に倒れ、調べてみるとがんで、しかも末期にきていることがわかりました。すぐに手術することになり、私たち夫婦も急いで奄美大島へ飛び、母の病床でともに祈りました。約四カ月にわたった入院生活の間、朝昼夕と日に三度祈り、ベッドの横の机にはカセットデッキを置いて賛美の歌のテープを流しました。壁には聖句の日めくりをかけ、毎日その聖句を読みました。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われ

るのです。」（ローマ10・10）という聖句がかけられたある日、母は主人と私に自分の今までの罪をすなおな口調で語り、心から悔いていました。私たちは驚きました。主のみことばが働いて、母の内側に光がさしているのがよくわかりました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

わたし（イエス様）のところに来る者を、わたしは決して捨てません。（ヨハネ　6・37）

主人の母はその時、主を恐れ、みことばに従い、主を受け入れたのでした。ほんとうに母の救いは思いがけない不思議な方法でした。やがて退院して一年間の自宅療養の後、母は召されましたけれども、天国でまた会えることがみことばによって約束されていますので、しばらくの間この地上で別れることは淋しいことですけれども、希望を持って再会を待つことができますことを心から感謝しています。主人の母の存在が、私たち夫婦がイエスさまと出会うきっかけとなり、また救いへと導かれるきっかけとなりました。結婚を通して、この主人の母との出会いを通して、イエスさまは特別な恵みをくださいました。この母は、イエスさまが私に必要な人としてお与えになったのだと思います。このイエスさまの愛に満ちた不思議なご計画に心から感謝をささげます。母は激しいところがありましたけれども、正直でいさぎよい人でした。天国に行ったらまっ

さきに会いたいと思います。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」（ヨハネ　11・25）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

試練

主人は、サラリーマンを辞め、数人の友人たちといっしょにコンピュータのソフト開発の仕事を始めようと計画していました。私はそのことをまったく知りませんでしたので、主人にその計画を打ち明けられたときにはショックを隠せませんでした。彼は大学で教育行政を学んでいましたし、まさか専門でないコンピュータを生涯の仕事として打ち込むなどと言い出すとは、まさに青天の霹靂でした。それに、事業を起こすには社会的な経験もまだ浅い三十一歳という年齢でしたので、あまりの無謀さに大反対をしました。しかし、すでに具体的に会社を設立することを友人同士で進めているので、やるしかないと強い意志を打ち明けられ、私はしかたなくうなずいて

しまいました。当初から主人は「経営者として社員にいい給与を出し、最高の条件で社員の生活を保障してあげたい」と語り、会社の利益を自分の富とすることは恥であるとさえ思っていたようでした。信仰によってではなく、ヒューマニズムで始めた事業でしたから、最初からうまくいかず、設立の抱負とはまったく裏腹な状態になり、社員の方々への給与さえも遅れるという羽目になってしまいました。社員の方々への申し訳けなさで、私の心はいつも小さくなっていました。そして当然ながら私たちの生活も成り立ちませんでした。やがて私も働かなければと仕事をはじめたのですが、半年ほどして持病のヘルニアが悪化し、寝こんでしまいました。あげくのはてには手術を受けなければならなくなり、貧しい中でかえって足かせとなり、とてもみじめでした。

いっぽう、主人は何をどのように考えて会社をこのまま続けていこうとしているのか、何も話してはくれず、私は途方にくれました。主人は教会では何もなかったかのように明るくふるまい、奉仕をする人で、家に帰ればただ疲れはてて寝こむという、活気のない暗い生活でした。私にはそんな主人の態度が偽善のように見え、心でいつも批判していました。そして私が最も心配していたのは、主人が金銭を扱う態度でした。このまま経営者として続けていっていいのかどうか、神様のみこころかどうか、とても恐れていました。もう、どうしてよいかわからず、呆然として日を過ごしていました。

そんなある日のこと、「主よ、私はどうしたらいいのですか」と心の中で叫びながら庭へ出てみますと、そのころ飼っていた犬の太郎のくさりが切れてしまって、道路へ飛び出していってしまいました。「太郎、おいで！」大きな声で呼びますと、太郎はしっぽを振って体じゅうで喜び

を表わし、こちらへすごい勢いで走ってくるのでした。喜んでじゃれてくる犬をまえに、私は飼い主としてとても嬉しく、喜びでいっぱいになりました。その時です。私はハッとしました。この犬が、主のまえに喜んでいる主人に見えてきたのです。そして、心にささやきがありました。「あなたの夫は、苦しい時にわたし（主）を喜んでいる。わたしはあなたの夫を喜ぶ。わたしが喜ぶあなたの夫を、どうしてあなたがさばくのか」。私は、びっくりしました。自分の姿に気がつきました。「イエスさま、申しわけございません。私は目の前の問題を見つめすぎていました。問題があることが問題なのではなく、それを問題とする私自身に問題があったのですね。これからは夫も会社も、すべてをイエスさまにおゆだねします」と悔い改め、今まで従えなかった主人にも心からおわびしました。ほんとうに思いがけない突然のことで、私のまちがいに気づかせてくだった主に心から感謝しました。そして、愚かな悩み方はもうよして、夫と同じ信仰にしっかりつながれ、立っていきたいと考えました。そして会社のことで長いあいだ一致がなかった私たち夫婦に平和が訪れ、聖書から「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ6・33）というみことばが与えられ、主を第一にしていなかったことを悔い改めて、ふたたび救われたはじめの愛にかえったのでした。

「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。」

（黙示　2・4、5）

それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。（ヨブ　42・6）

「宗教」から「信仰」へ

そのころ、私たちはある教会の会員になっていましたが、そこでは異言が語られていました。しかし異言で祈りはじめると自我がかきたてられ、心のたかぶりを感じ、そこには主にある平安と聖さ、静けさがなく、私は疑問を感じ、やがて祈祷会にも行けなくなり、ともに祈ることができなくなりました。（編集注・異言といやしの問題については「実を結ぶ命」の中でベックさんがくわしく書いておられますのでぜひお読みください）。それから先、どのように信仰生活をしていっていいのかわからなくなり、ほんとうに苦しみました。

そのころベックさんの「健全な成長」というお話をテープで聴き、ゆがんだ信仰の歩みに気がつかされました。それまでの私の歩みは「信仰」の歩みではなく、イエスさまを中心としないで、人間の考えが中心になっている「宗教」だと気がつきました。いままで、どこかがおかしい、何かが間違っていると感じていましたが、ついにその原因がわかりはじめ、たしかな希望を見つけたような気がしました。

私たち夫婦は、「主のみ心だけがなるように」と祈りもとめました。それまで全力を教会に傾けてきただけに、そこを去ることには身をさかれるような痛みがありました。しかしイエスさまと人間、御霊と肉の思いをまぜこぜにしていたいままでの歩みを主は喜ばれず、そのまちがった歩みから「主だけを見上げ、主を恐れ、従うように」とあわれみによって導きだされたのでした。

肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。
（ローマ　8・5、6）

幸いなことよ。主に信頼し、高ぶる者や、偽りに陥る者たちのほうに向かなかった、その人は。
（詩篇　40・4）

主を恐れる人は、だれか。主はその人に選ぶべき道を教えられる。
（詩篇　25・12）

しばらくして、キリスト集会の沖縄バイブル・キャンプがあるということで、私は姉とふたりでそこへ向かい、東京から来られたおおぜいの吉祥寺キリスト集会の方々にお会いしました。皆さんが明るく、自由に、仲よく語っておられる姿にとてもびっくりしました。そして始めてお話させていただいたベックさんにも、主にある静かさとあたたかさを感じ、とても感動しました。そして皆さまの向こうには、たしかにイエスさまが生きて働らいておられることが感じられたのです。ほんとうに驚くべきことでした。

日曜礼拝では、主イエスさまだけが中心で、いっさいの形式がなく、導かれるままにみことばと感謝の祈りが捧げられ、そして賛美の歌声にあふれ、パンさきにあずかるのでした。私もこのような集会に集いたいと思うようになり、主人に話したのですが、主人はみ心がはっきりするま

で待つと言いました。やがて、吉祥寺キリスト集会から蘇畑さんが来られ、主人と同じ奄美大島出身ということもあって親しくお話していただき、またベックさんとも何度もお話していただき、とても感謝でした。けれども、主人はそのたびに納得いくまで質問をして、かたくなに警戒しているようでした。このような主人のために、ベックさんはじめ皆さまがたが祈ってくださったそうです。とてもありがたく、感謝でした。今までに見たことのない祈りの輪に圧倒されました。そして一九九〇年十一月、ついに皆さまの熱い祈りに主が答えてくださり、主人がキリスト集会に集うことを決心しました。

それから約三年がたちましたけれども、その間にも多くのことを主に学ばされました。そして試練をいただくごとに、私たちにとってその試練は最善であり、主の思いは人間の思いと異ってはるか高い所にあることを体験的に知らされました。私のような罪深い者のために死なれたイエスさま、復活して天にのぼられ、そしてふたたび私たちを迎えにこられるイエスさま、私たちがいつもイエスさまだけを見上げ、日々目をさましていることができますようにどうぞお導きください。主イエスさまの人知をはるかに越えた大きな愛に、心から感謝をおささげします。

渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

（黙示　22・17）

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

（詩篇　51・17）

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

（ローマ　8・1、2）





▲上・結婚式にて。1982年5月15日。
下・ロンドンで出会ったころ。1981年。

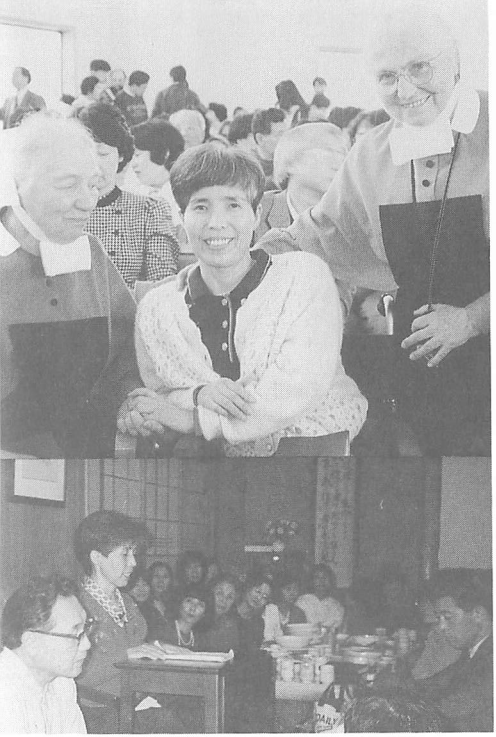
▼沖縄バイブル・キャンプ。1992年11月。



いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を（詩篇146・2）

児玉熙子（ひろ）

宮崎県都城市に生まれる。高城小学校、高城中学校、県立都城泉ヶ丘高校卒業後上京。三共株式会社入社。その後草月流吉田春庭氏の内弟子として修行。高城に帰って父を看病する。再び上京して歯科医受付け勤務の後ご主人の達緒さんと結婚。家族は長女綾子さん、次女慶子さん。



▲上・西軽井沢国際福音センターの献堂式で。左ドイツからこられたルディー姉、右エミリエ姉。1992年5月。
下・重田さんの家庭集会で証しを。

左から次女慶子さん、三女純子さん、照子さん、達緒さん、長女綾子さん。
▼この半年後に純子さんが召され、照子さんが発病。



まえおき

私は八年前、難病である脊髄性筋萎縮症を発病し、日々の生活能力を失いながら今日まできました。今では、病状も進行しほとんど生活能力を失い、車椅子の生活をしています。

イエス様は、絶望に沈んでいたこの私を一瞬にして暗闇から引き出してくださり、希望の光の中に移してくださいました。そのすばらしいみわざのことを書いてみたいと思います。

私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。

（詩篇　139・14）

突然の発病

いまから九年前、一九八四年五月末のことでした。近くの公民館で思う存分卓球を楽しんでの帰り道、突然、左足のつま先に力が入らなくなりました。足が重く、痛く、引きずるようにしてやっとの思いで帰宅しました。「どうしたのだろう?」「何が起ころうとしているのだろう?」と、心が動揺し、それは大きなショックでした。それでも運動後のことでもあり、一時的なものではないかと気を取りなおしました。しかし、三カ月ほど様子をみましたが、やはり左足のつま先には力が入らず、足をひきずらなければなりませんでした。何かおかしいと、九月になって東京の東邦医大大橋病院の神経内科木下教授の診察を受けることになりました。

不安な日々を過ごした後、検査結果を主人と二人して聞きにいきました。私たちふたりは診察室で待っていましたが、やがて「教授室でお話しましょう」と言われました。これはただ事では

ないと察して、「何を宣告されるのやら」と心配でいっぱいでした。教授室を訪れると教授は、「脊髄性筋萎縮症です」と診断結果を告げられました。「これは、脊髄の中にある運動神経を司る前角細胞に異常があることによります。少しずつ運動及び生活能力が失われていき、動くことも不自由になります。原因は不明です。治療法は今のところありません」というようなことを話されました。まるで頭をハンマーでたたかれたような衝撃でした。

病院を出て家に着くまでの間というもの、私の心の中は悔しさと憤りと無念さとやり切れなさで張り裂けんばかりでした。「どうして私だけがこんな苦しい目に会わなければならないの」「神様は不公平で残酷だ」「神様などいない」「なすすべもなく日々むしばまれ、衰えていくわが身をじっと見つめて死ぬまで耐えていけと言うのか。私にはそんなことは絶対にできっこないし、嫌だ」「冗談じゃない。そんなみじめな姿になって死ぬなんて」「死ぬなら今すぐ死にたい」「しかし、私には幼い子が二人いる、子どもたちのために頑張れるだけ頑張って生きていかねばならない」……。また反面、こうした思いが静まってみると、私の心は主人や子どもたちへのすまなさにさいなまれ、苦しみました。「パパ、こんな病気になってごめんなさい。これからは、あなたや子どもたちに心配や迷惑ばかりかけることになるけれど、私はできるかぎり現実を見つめてしっかり生きるように努力するからよろしくお願いします」。主人は「そうだ、いっしょにがんばろうね」と優しく言ってくれ、このことばが何よりの支えでした。

おいたち

私は一九四四年十二月七日、宮崎県の都城市で、若松功、はつの四女として生まれました。生後間もなく、父が隣町の高城町郵便局長として赴任することになり、私たちはそこへ転居しました。やがて弟二人が生まれ、七人兄弟になりました。

父は思いやりのある誠実な人で、おおぜいの方々によく尽くし、信頼と尊敬を集めていました。母は東京の文化服装学園を卒業し、おしゃれでモダンで明るく、少しわがままな人でした。そんな私は十八歳になるまで、両親のもとでなんの不自由もない恵まれた生活を送っていました。高校三年生のとき、父が病に倒れ、大学の進学を諦めなければなりませんでした。知人の紹介で三共株式会社に入社することになり、卒業と同時に上京し、一九六三年の春から姉と二人の生活が始まりました。職場にも恵まれ、楽しいＯＬ生活を送りながら、お稽古ごとに日々を過ごしていました。いつの日か生け花教室を開きたいという夢もあって、四年後の夏に退社し、草月流吉田春庭先生の内弟子として二年間を過ごしました。その後父の病気が思わしくなく、看病のため帰郷しましたが、一カ月もしない一九六九年九月十八日、父は六十二歳で天に召されました。

父は若いとき、教会に行っていたようです。結婚後はまったく教会から離れていましたが、晩年には病気を通して近くの教会の宣教師さんのお見舞いを受け、主に立ち返り、信仰を持ち、天国へ帰るという喜びを持って召されました。母も父の病気を通してイエス様に出会い、やがて救われ、一九七五年六月二十三日、六十五歳でくも膜下出血で天に召されました。私も帰郷したこ

ろには、両親が通っていた教会の宣教師さんのところへ時々英会話を学びに行っていましたが、しかし、イエス様を信じるにはいたりませんでした。

一九七二年に再度上京し、結婚していた姉の家に身を寄せることになりました。そして歯科医の事務、受付けとして働いていましたが、あるとき知人に紹介され、いまの主人と結婚することになりました。

しかし、私が頭でえがいていた結婚と、現実の生活とはまったく違ったものでした。この結婚を機に、私たちは次々と苦難の道を歩むことになりました。事情があって、主人の母と同居するという新婚生活が始まりました。それまではたいした苦労もせずわがままにすごしてきた私は、忍耐力もなくまわりを思いやる愛にも欠けていて、主人の母に上手に従っていくことができませんでした。そしてついには離婚するしかないというところまで追いこまれていきました。主人は母との別居を決心してくれましたが、そのことで私たち夫婦の間にも深い溝ができてしまいました。私たちは人前ではなにも問題がないようなふりをしていましたが、二人だけになるとことあるごとにお互いを責めあっていました。その間、長女、次女と二人の子どもが生まれました。

そんな時、三女の純子を授かり、一九八一年一月に出産しました。純子は重度の心臓障害児として生まれました。泣き声も弱々しく、乳首を吸う力も弱く、ミルクをよく飲めませんでした。寛容な心に欠けていた私には、この子を大きな愛で受け止めることができず、不安と絶望にさいなまれる日々でした。病院の帰り道、この子を道ずれにして電車に飛びこんでしまおうと、何度も思いました。しかし主人は、この子の障害を冷静に受け入れ、愛をもって見まもってくれ、か

えって私を励ましてくれました。

そのころ、「純粋倫理」という教えがあることを知りました。「苦難は幸せへの門」だということで、なにごとも前向きに明るく受けとめ、小さな一つ一つのことにもつとめて感謝していこうと努力しました。やがて娘や主人、母との関係も、前よりすこしはよくなっていくような気がしました。

また、純子を通して、私は目に見えることのみに心をうばわれて、目に見えない何か大切なことに心を閉ざしているのではないかと思うようになりました。ほんとうに大切なものはなにか、そのときの私にははっきりとは分かりませんでしたけれども、娘をつれていく先々で出会った障害児を持った方々との触れあいを通しても、今まで私の知らなかった何か大切なものがあるように感じました。純子を通しての数々の体験のなかで、たしかにこの大自然を創造された神様とでもいうべき大いなるお方が存在し、私たちを厳しく打たれるけれども、その苦しみを通して、それ以上の深い喜びと幸せと、心の平安を恵んでくださるのではないかと、何となく思うようになりました。

やがて、わが家の宝であった純子は、一九八三年十二月二十二日に病院でのクリスマスのお祝いをし、その翌日の二十三日の早朝に、やすらかに召されていきました。そして、子どもをなくして悲しみの消えさらない六カ月後、冒頭で述べましたように、今度は私の病気という大きな苦しみが始まったのです。

あらゆる治療方法を試みて

病院で脊髄性筋萎縮症という病名を告げられてからは、三カ月に一回という割合で診察を受けました。しかし、血圧と腕力を計り、運動能力のチェックだけでした。治療はまったくなく、むなしい思いでした。

なんとかよくなりたい、進行を少しでも遅らせたいと思い、東洋医学ならなんとかなるのではないかと思い、東京にあったある会で漢方と物理療法とを試みました。また、何度かその会の保養所で断食療法も試みてみました。しかしその効果もなく、病気は確実に進行していきました。一九八六年、発病後三年めに入りますと、ささえがないとふらふらするようになり、静止して立つことが困難になりました。そんな時、主人はバイクの免許を取るよう勧めてくれました。「エッ！」と思いました。しかし、主人は先のことまでよく考えている人です。その主人の勧めですから、私は免許を取ることにしました。おかげで二年あまりの間、自由に活動することができました。そればかりか、行動範囲も以前の倍以上に広がりました。このことはこの上ない喜びでした。今でも主人に心から感謝しています。

やがて、日々歩くことも困難になり、東京での治療も断念しなければなりませんでした。その後、友人たちが心配してくれ、ヨガや電気療法、光線療法やカイロプラクティック、針、お灸、気功治療法、玄米食事療法など、よいと勧められる治療法は何でも試みました。

あるカイロ治療院に行ったときのことです。部屋の中央に治療台があり、そこに私がよこたわ

り、家族がまわりを取りまいている中で治療が始まりました。すると突然、治療師が治療の手をとめて、「四代前の丑年のご先祖が神社の土地をかっぱらった。私が祭っているかみさま（神道）が大変怒っている」と告げ、「あなたがそのご先祖に代わってお詫びの行をし、かみさまに許してもらわなければ、あなたの病気は直らないし、これからも子孫に同じ病気が出ることになる。大変なことだよ」と言います。わたしはびっくりし、恐ろしくなりました。それから先祖の家系図を作ったり、親戚に問い合わせをしたりしましたが、四代前の先祖にはそのような事実はみつかりませんでした。それでこのことを治療師に告げると、「かみさまはうそをつかない。そんなはずはない」と言われ、仕方がないので言われるままに悪い因縁を断ち切らなければと一生懸命になりました。

それから三年あまりの間、いろいろなところでのお詫びの行を、主人や実弟に助けられながら行ないました。主人たちは時間を都合して、できるかぎり協力してくれました。九州の宮崎にも二回、大宮の氷川神社には都合のつき次第出かけ、鎮守様では百日間のお詫びの行をしました。そして、行の終わるたびごとに、「まだ許されていない」とさらに行を勧められました。しかし、このようなことをしていても、ストレスを増すばかりで精神的な不安が増すだけでした。また、この治療師は私たちの謝礼の金額によって治療や行の仕方へのアドバイスが違い、人によっても待遇が違うのです。やがて私はこうした治療や行のすべてにまったく納得がいかなくなり、ついには先生の人柄にも不信を抱くようになりました。それがもとで、その治療師とは絶縁することになりました。

一九八八年の夏には、杖と介添えがないと歩けない状態になりました。来年の夏には完全に立てなくなるだろうという予想もつきました。主人は、私が一番行きたがっているところは北海道だとよく知っていましたので、北海道行きの計画をたて、実行にうつしてくれました。義母を伴い家族と五人で、寝台特急北斗星での車中二泊を含めた五泊六日の旅に出ました。口には出しませんでしたが、私たち夫婦は、これが家族そろってできる最後の旅行だと思っていました。この時はじめて、車椅子を使いました。車椅子に座っていることの恥ずかしさ。みじめでつらい思いでした。でも、主人や子どもたちは人前を気にするようすもなく、気持ちよく車椅子を押したり、歩く介添えをしてくれたりしました。雄大な美しい自然との語らい、グルメざんまいの楽しい旅でした。しかし、何よりもうれしかったことは、義母や主人や子どもたちの優しさ、思いやりといたわりでした。家族のすばらしさを存分に味わうことができた旅でした。

失われゆく運動能力

このころまでは、私の主婦としての役割りも、なんとか工夫してできていました。しかしその後、病気の進行が早まり、一日一日と目に見えて自分の運動能力、生活能力が失われていくのがわかりました。家事も昔からの仲間や友だちに助けていただくことが多くなりました。また、焦りが私をとらえ、その上長女の反抗期も重なって、ますます大変な状況でした。

私は一日長生きすると、その分だけ運動能力や生活能力が失われていくのです。そのことがよくわかっていましたから、できるだけ前向きに、自分ができる一つ一つのことに喜びと感謝をお

ぼえるように、できるかぎり明るく過ごすように懸命に努力し続けました。主人はそんな私を見て「つっぱりママ」と言って冷やかしていたほどです。

しかし一九八九年八月初め、恐れていた決定的瞬間は容赦なくやってきました。とうとうこの日、そのXデーはやってきたのです。いくら努力しても立ち上がれなくなりました。がく然とし、情けないやら、くやしいやら、悲しいやら、いろいろな思いがこみあげてきて泣き叫びました。「こんなみにくい姿で生きているのは嫌だ」「つらい」「人に迷惑かけてまで生きるのは苦しい」「死にたい」「殺して」と。主人はそんな私をなすすべもなく、ただ黙って悲しそうに、淋しそうに見つめているだけでした。小学校五年生だった次女の慶子は、「お母さんがんばってよ、お母さんが生きているだけで、私たちは嬉しいのだから。ねえ、私ごはんをいっぱい食べて、大きくなって、お母さんをおんぶしたり、持ち上げられるようにがんばるからね」と泣いて励ましてくれました。後に、中学二年生だった長女の綾子は私に言ってくれました。「お母さんだけが苦しいのではないよ。私たちだって、お母さんがこうなったことで苦しんでいるんだよ」と。この子の言う通りでした。私は自分の不幸のことばかり考えていて、家族の苦しみや悲しさや淋しさなどを考えてあげられなかったことを反省しました。申しわけない思いでしたので、私はせいいっぱい、できるだけのことを、がんばれるだけがんばりました。しかし、秋が深まるにつれて、一段と心がおちこむ日が多くなりました。「この冬を無事に越せるだろうか」と死への不安にかられるようになりました。夜は、死の不安からよく眠れず、眠ったかと思うと、恐ろしい夢にうなされました。時には主人に手を握ってもらったり、腕の中に抱きかかえてもらったりして眠りま

した。新聞を見ても、まっ先に死亡欄が目にとびこみ、年齢と死因ばかり気になりだしました。心の安らぎを求めて、先祖供養の読経と写経にはげんでみたりしました。

山川千秋さんの訃報を知って

そのようなある日、フジテレビの山川千秋さんががんで亡くなられたことをニュースで知りました。突然のことでびっくりしました。私にとってこの訃報は、非常に大きなニュースでした。私は山川さんのファンだったからです。がんだったとは！……「さぞかし苦しい闘病生活だったのではないか」と思い、しかし心のかたすみでは「もう苦しまなくていいので、本当によかったなあ」とうらやましいと思い、また一方では「病気とどのように戦っておられたのだろうか」「死をどのようにとらえておられたのだろうか」「死の恐怖とどう戦われたのだろうか」と、山川さんのことをいろいろ知りたいと思いました。

やがて私は、山川千秋さんの奥様が書かれた「死は終りではない」という本が出版されていることを新聞で知りました。さっそく娘に頼んで買ってきてもらい、一気に読みました。千秋さんは、信仰をもっておられた奥様の祈りと、キリスト集会のベックさんの数回のお見舞いやテープを聞いていくうちに、心がイエス様に傾くようになられたのでした。そして、イエス様を自分の救い主として受け入れられたのでした。私は、山川千秋さんが苦しみの中にあっても死に直面してもいつも平安に満たされ、天国への希望と確信を持って天に召されていかれたことに驚きました。このような山川さんが私にはうらやましく思われ、自分も山川さんのようになれたらどんな

にいいだろうと思いました。私は、本の中に書いてあったベックさんという方にお会いできたら、もしかしたら、自分も山川さんと同じようになれるのではないかという気がしていました。すぐにでもベックさんに会いに行きたいと思いました。しかし、今まで主人にあちこちつれていってもらっていた手前、なんとなく頼みづらく、頼むことをためらっておりました。そして、ベックさんにお会いしたいという思いを心の底にしまいこみ、いつしか諦めてしまっていました。

一九九〇年の四月のこと、次女の慶子が、友だちの鈴木加奈さんの誕生会に招かれていきました。二人はなかよしの同級生で、お互いの家をよく行き来していました。加奈さんのお母さまの紀子さんは、そのころ教会を出て吉祥寺キリスト集会に行きはじめておられました。私はそれまで加奈さんのお母さまにお会いしたことはありませんでしたが、娘さんを通して私のことをよく知っていてくださっていました。そしてその誕生会の日、私の両親がクリスチャンだと知って、「すばらしい本だからこの本をお母さんに渡してあげて」と、リンデさんの「実を結ぶ命」を慶子にことづけてくださいました。その本を見て、私はびっくりしました。お会いしたいと思っていたベックさんの本だったのです。次の日一気に読みました。二十歳でがんで天に召されたベックさんのお嬢さん、リンデさんの信仰についての証しの本でした。イエス様のすばらしさと、そのイエス様に頼りきったリンデさんの信仰のひたむきさが私をイエス様にしっかりと結びつけました。私にはもう、このイエス様しかいない、このイエス様のほかに誰もいないと思いました。しかし一方では心に恐れがありました。それは、児玉家の家宗が曹洞宗であり、三女純子の仏壇もあり、家の中に二つの宗教を持ちこむことによって生じるいろいろな問題でした。加奈さんの

お母さまの紀子さんに、いただいた本のお礼の電話をした時、私は「死は終りではない」でベックさんのことを知っていたこと、なんとかお会いしたいと思っていたことなどを告げました。

「神様は熙子を愛しているよ」

私は紀子さんのはからいで、その年の七月十二日、初めてベックさんにお会いしました。ベックさんは、数人のご婦人がたといっしょにわが家を訪ねてくださいました。お会いしたいと思いながらあきらめていた方がわが家にきてくださったことに感動し、「やはり神様はおられる」と思いました。ベックさんの顔を見るなり涙が出て、何を話したのかほとんど覚えていません。ただベックさんは「神様は熙子を愛しているよ。心配しなくていいよ。病気では死にません。神様の時がこないと絶対に死にません。神様の時が最善の時です」と言われたことだけを覚えています。それまでは神様のことをなにも知らなかった私でした。神様はご計画を持っておられ、神様の時があること、それから病気では死なないことを知りました。また、ベックさんは私のために祈ってくださり、それから私もベックさんのあとについて祈り、「アーメン」と言いました。その後、紀子さんが何回かきて話をしてくださり、メッセージのカセットテープを何本かお借りして聞いたりしていました。

しかし、せっかくまことの神様に出会ったにもかかわらず、またもや私は人間の力により頼もうとしてしまったのです。ある知人の紹介で通いはじめていた均整院の先生に、「断食と正食食事療法で歩けるようになる」と断食療法をすすめられると、ついその気になってしまったのです。

主人と合意の上で、断食と食事療法に最後の望みをかけることになりました。そしてその年の夏に入院し、断食療法に入りました。二十日たっても宿便が取れず、私の体が衰弱しきっているのを見て、主人はこれ以上断食療法を続けることに強く反対し、先生が「あと二、三日ですから」と言われたにもかかわらず、強引に他の病院に緊急入院し、点滴をうけました。この病院でいろいろ検査をした結果、肝炎の疑いがあると言われ、一カ月間入院するはめになりました。五十日ぶりにわが家に帰った時には、生活能力をまったく失い、すべてに介助を必要とするような状態になりました。手の力がすっかりなくなり、字も書けなくなり、「いざる」こともできず、一人で起きることも、寝ることも、寝返りをうつこともできなくなりました。夜中に何度も体の位置を変えてもらわないと、痛くて苦しくて眠れませんでした。薄いかけ蒲団やタオルケットでさえ重いのです。死にたいと思っても死ぬこともできなくなりました。起きていても寝ていても、苦しくて、つらくて、むなしくて、まるで地獄のようでした。そのようなときには、家族とともにいるだけでもありがたいと、自分に言い聞かせました。そして、家族や友だちの前ではせいいっぱい元気を装い、明るくふるまうようにがんばりました。しかし一人になると、私の心は孤独とむなしさに激しくさいなまれました。

「主よ、急いで、私を助けてください」

一九九一年に入ると病状はさらに悪化し、忍耐も極限状態となり、気も滅入るようになりました。主人の態度が冷たいと言ってはわめき、子どもたちのふるまいが悪いと言っては当たりちら

し、時には気にくわないからと食事をひっくり返したりして気をまぎらわすというようなありさまでした。私の心の奥はますます重く、暗くなるばかりで、孤独がつのる一方でした。家族は笑いを忘れ、みなが私の一言一言を恐れるようになり、顔色をうかがうようになりました。私は私でつくづく思い知らされたことがありました。それは「人は、家族といっても、外側を助けることはできても、内側の助けにはまったくならない」ということでした。そのことで恐ろしい孤独に陥りました。もはや「神様しかいない」と思いました。心の中で「イエス様、私はもうがんばれません。私はもうダメです」と自己破産の宣言をし、「どうぞ、助けてください！」と叫んでいました。

主よ。どうかみこころによって私を救い出してください。主よ。急いで、私を助けてください。

（詩篇　40・13）

そして、無性に聖書を読んでみたいと思うようになりました。母の聖書がありましたが古いものでした。紀子さんが読みやすいものがあると言っていらしたのを思いだし、すぐ彼女に電話で買ってきてくださるように頼みました。紀子さんは快く引き受けてくださり、「明日集会があるので、その後でほかの婦人がたといっしょに訪問したいのですがよろしいでしょうか」と言われ、私はほんとうにうれしく思いました。

翌日、十カ月ぶりに、野田さん、吉田さん、鈴木さん、島途さんがわが家を訪ねてくださいました。そしてみなさんで、イエス様の話やキリスト集会の話をしてくださいました。そして、春

日部で開かれているキリスト集会にでてみませんかと誘ってくださいました。しかし私は、「こんな身体ですから手がかかりますよ」「重いですよ」と話しますと、「二、三人で来れば大丈夫よ」と言われたので少しほっとしました。「でも、お世話になっても何のお返しもできません」と正直に言いますと、「集会の皆さんの上に主の祝福がありますようにと祈ってくださるだけでいいのですよ」と言われます。これも、今まで知っている宗教関係の方々と違うなあと思い、心からほっとしました。その夜、主人にそのことを話し、キリスト集会に行かせてほしいとお願いしました。主人は、自分を巻きこまないということでその件を許してくれました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

キリスト集会の群れに加えられて

翌週から、鈴木さんと島途さんが送り迎えのお手伝いをしてくださるようになりました。キリスト集会ではベックさんが「熙子、よく来たね。うれしい」と笑顔であの温かな大きな手で握手してくださり、「ちょっと、やせたね」と心配してくださいました。たった一度しかお会いしていないのに、ベックさんの記憶力にはびっくりしました。この私を忘れないでいてくださったこと、心配してくださっていたことに感動しました。また、キリスト集会に集っておられる方々の目が輝いていること、そして喜びにあふれている様子に目を見はる思いでした。この方々は、ひとりひとりが皆、私と同じように苦しみや悩みを持っておられ、イエス様との出会いを通して喜

んで輝いておられるのです。ここには、何かがある、力がある、と感じられ、一筋の光を見つけたような気がしました。そのうち、島途さんのご主人様が助けてくださるようになり、礼拝にも毎週出られるようになりました。今までの私中心の一週間が、イエス様中心の一週間に変わりました。週の始めの日曜日は礼拝、週の半ばの水曜日は家庭集会、金曜日は祈り会というように、主にある方々と語りあう機会が多くなり、生活が充実してきました。そんな七月のある日、キリスト集会のメッセンジャーとして来られた重田さんとお話することができました。

私たちの国籍は天にあります。

（ピリピ　3・20）

重田さんは「児玉さん、聖書によると、私たちはこの地上では旅人で寄留者です。この地上のいのちは長くても七、八十年で、限りがあります。しかし天国は永遠です。天国の永遠に比べたら、この世の歩みは一瞬でしかありません」と話してくださいました。その時、ハッと気がつきました。「この地上がすべてだと思うから、希望が持てずに苦しむのだ。天国の永遠を思ったら、この地上での苦しみは、たいしたことではない」と思えました。そう思えたことで肩の荷がおり、心が軽くなり、目の前がパッと明るく開けました。

八月のはじめ、みなさまに助けていただいて、次女慶子とともに、初めて、西軽井沢福音の家ゲスト・ハウスで開かれたバイブル・キャンプに参加させていただきました。バイブル・キャンプに集っている方々は、どなたも喜びで輝いていました。なんてすばらしいことだろうと思いました。二日目の朝のことでした。目を覚ますと、私には何が何だかわからないのですが、心の中

から喜びが湧いてきました。「イエス様、感謝します。私には、もう、あなたしかいません」と、何度も何度も心の中で叫んでおり、涙が止めようもなく溢れてきました。そのことをみなさんに話しますと、「あなたのうちに聖霊が働いておられるのよ」と大変喜んでくださいました。

そして、八月の家庭集会で重田さんとお会いした時、その経験をお話しました。そして、私が救いの確信をいただいたこと、自分が変えられていったことを、いつの間にか熱心に語っていたのです。

そのうち突然、火曜日に開かれている吉祥寺キリスト集会の婦人の学び会で、それらの体験を証しとしてお話するようにと言われました。そして、十月一日、行きたくて行きたくて、いつも祈っていたあの吉祥寺キリスト集会にとうとう行くことができたのです。証しのお話をするということで、ついに念願がかなえられたのです。思ってもみなかったこと、考えてもみなかったことでした。イエス様の奇しき恵みに感謝しました。

光の中に移されて

イエス様に出会ったことによって、今まで暗やみの中にいた自分と家族に、本当の光がさしはじめました。私の心は、キリスト集会でのお話や語り合いを通して、あふれるばかりのみことばの雨の中で潤いを取り戻し、満たされるようになりました。

イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」

（ヨハネ　9・3）

今まで、三女のこと、私のことは、みんな先祖の因縁か、私の罪から起こったことだと苦しんできました。しかし今、イエス様ご自身のみことばが、そうではないことをはっきりと証明してくださいました。患難や苦難がたたりや呪いからくるのでは決してないことを知りました。それは、神の愛の現われであり、主のご栄光がその人に現われるためだったのです。それを知った驚きと、喜びと、感謝と、感激は、とても筆や口では言い表わせないほど大きなものでした。心は安らかになり、私が三女を殺したのでは、という思いからもまったく解放されました。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ　8・18）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（Ⅰコリント　10・13）

すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・15～18）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。――主の御告げ。――わたしは、あなたがたの捕われ人を帰らせ、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める。――主の御告げ。――わたしはあなたがたを引いて行った先から、あなたがたをもとの所へ帰らせる。」

（エレミヤ　29・11～14）

これらのみことばから、患難も苦難も、すべては神様から出ていることを知りました。また、神様のご計画には約束があり、愛があり、そしてすばらしい恵みが伴うことを知るようになりました。また、この私は神様に呪われているのではなく、大いに愛されていることもわかるようになりました。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。…たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

（詩篇　23・1、2、4）

「見よ。わたし（イエス様）は、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

（マタイ　28・20）

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたし（イエス様）のことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」

（ヨハネ　5・24）

「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。ま

た、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」（黙示　21・3、4）

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。（ピリピ　3・20、21）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

死の恐怖からの解放

死についての恐れは、前にも書きました通り、大きな暗雲となって私をとり囲んでいました。いつも不安と心配と恐怖でおびやかされつづけてきました。まず「自分がどんな死に方をするか」が大きな心配でした。次に「自分が死んだらどこへ行くのか」、そしてまた、私は自分の罪深さを知っていたので、「地獄へ行くのではないか」という恐れがありました。それから、自分の死後、「主人や子どもたちはどうなるのだろうか」という不安でした。みことばによって、主

は死の時にも私と共にいてくださり、死は終わりではなく、死に勝利されたイエス様の永遠のいのちをいただき、天国の住人にしてくださることがわかりました。主イエス様とともに天国に永遠にいこうことができ、苦しみもなく涙もない、イエス様と同じ姿に変えていただける、とうれしいお約束をしてくださっているのです。また、家族の救いも約束されており、先に天に召された三女純子とも天国で再会できるのです。そればかりでなく、愛する主人や二人の娘たちとも必ず天国でいっしょになれるという希望を持ち、また、確信しております。こうして、主は私を死の恐怖からまったく解放してくださいました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

（詩篇　119・71、72）

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ　2・8）

罪の意識からの解放

また私は、三女の純子を通してはじめて自分の罪の深さを知るようになりました。私は自己中心的な人間ですから、まわりで起こるすべてのことに対して他人が悪く、いじわるで、わがままなのだと思うような者でした。そればかりでなく、私は自分を正しいとする者でした。しかし、純子とともに歩む体験を通してほんとうに悪いのは自分であり、他人ではないことに気づかされました。ほんとうは、私がわがままで、自分勝手で、高慢で、どうしようもない者なのだと……。そしてそのことが、家族や主人の母をはじめ、どれだけ多くの人々を平気で傷つけてきたかを示され、恐ろしくなりました。でも、気づかされたことを心から感謝しました。そして私は、そのことを反省し、これからは、もう決してわがままかってを繰り返すまいと人間的な力によりたのんで努力をしました。しかし一生懸命心がけ、努力したにもかかわらず、罪と知りながら、悪いとわかっていながら、私は罪を犯さざるをえませんでした。その意識におびえ、思い悩み、呪いがくるのではないか、たたるのではないかという思い煩いに時々襲われました。それから逃れたい一心で、夢中になってお詫びし、また供養もしましたが、私は「犯した罪は、いくらお詫びしても絶対に許されない」と思っていましたので、その罪の苦しさに何度もさいなまれました。いくら人の努力で罪の問題を解決しようとしても、平安は与えられませんでした。

「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、

そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」
（マルコ　7・20～23）

しかし私は、イエス様に出会って変わりました。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。
（Ⅰペテロ　2・24～25）

イエス様は、十字架の上で、私の罪の身代わりとして死んでくださったのです。私の罪はイエス様の十字架のみわざによってすでに贖われており、私がそれを信じて受け入れさえするならば罪は問われないですむのです。天から下ってこられた方、神の子イエス様が「すべての罪は赦された」と宣告されているのです。

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。」
（イザヤ　44・22）

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」
（ヘブル　10・17）

私は、イエス様の憐みとご愛にふれ、私の罪がまったく赦されていることを知りました。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。（ローマ　8・1、2）

私はこれらのみことばに驚き、イエス様の偉大さ、はかり知れない愛の深さ、そして権威に満ちたみことばの重みに圧倒され、感激の涙を流しました。

イエス様は私を、子どもの死や私の病気の苦難を通して、罪と死から完全に解放してくださいました。そして私に、喜び、平安、自由、永遠のいのち、み国への約束を与えてくださっただけでなく、この私を神の子、相続人にまでしてくださったのです。

またそのころ、私は旧約聖書のエレミヤ書の中で、次のようなすばらしい箇所にいきあたり、大きな慰めをいただきました。長いので部分的にしか記せませんが、できれば聖書で全体をお読みくだされば幸いです。

主は遠くから、私に現われた。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。おとめイスラエルよ。わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。…あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。…あなたの将来には望みがある。…わたしが疲れたた

ましいを潤し、すべてのしぼんだたましいを満たすからだ。…わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。…わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。…見よ。その日が来る。…みな主に聖別され、もはやとこしえに根こぎにされず、こわされることもない。」（エレミヤ　31・3、4、16、17、25、33、34、38、40）

そんなある日、クリスチャンで、まばたきの詩人といわれている水野源三さんの詩に出会いました。この詩は、まさしく、私の心そのものでした。

キリストのみ愛に触れたその時に
キリストのみ愛に触れたその時に
私の心は変わりました。
憎しみも、恨みも、
　霧のように消え去りました。

キリストのみ愛に触れたその時に
キリストのみ愛に触れたその時に
私の心は変わりました。
悲しみも、不安も、
　雲のように消えさりました。

キリストのみ愛に触れたその時に
キリストのみ愛に触れたその時に
私の心は変わりました。
喜びと、希望の
　朝の光がさしてきました。

イエス様に従っていく証しとして洗礼を

私は、イエス様を救い主として信じ、従っていく証しとして、洗礼を受ける決心をしました。決心はしましたが、十二月二十二日の受洗の日を前にして、主イエス様と倫理との二心を示されました。この罪が光の下に出されていないことを示されました。倫理の教えは、主イエス様とお会いするまでは私のささえでした。そしてこの倫理に対して「信仰ではない」からそのままでよいと思っていました。ですから、初めのうちはそのことには何の疑問も感じていませんでした。しかし、受洗を決心して初めて、なにものであれ主以外のものに頼ることは明らかによくないことだと示されました。平安がなくなり、苦しくなりました。

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」
（マタイ　6・24）

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。幸いなことよ。いつも主を恐れている人は。しかし心をかたくなにする人はわざわいに陥る。

（箴言　28・13、14）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

（Ⅰヨハネ　1・9）

倫理の方々には大変お世話になり、親身に助けていただいておりましたので、倫理を退会することにはほんとうにつらいものがありました。しかし、主に示されて、主に従わないことは罪です。お従いしようと退会を決心しました。そして、キリスト集会の皆様のお祈りに守られて、なにごともなく退会することができました。

罪のことも、私はこのようにすでに主の前で悔い改めていましたので、あとは受洗すればよいと思い込んでいました。しかし、日がせまるにつれてなにか気が重くなり、ベックさんの前で罪の告白をしたいと思うようになりました。そうすることで、罪やいろいろの思いを捨てて軽くなりたいと思いました。十二月十八日にその日が与えられ、悔い改めをほんとうにすることができました。ベックさんは、「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」（イザヤ1・18）の聖句を示され、「ヒロ

子、大丈夫、罪は赦されているよ」と言ってくださいました。心のわだかまりも取れました。すばらしく晴れ上がったクリスマス礼拝の日、私はその青空のように晴れ晴れした心で洗礼を受けました。ごいっしょに洗礼を受けられた方々は六十二人でした。洗礼を受けたことは、私にとって、本当にうれしいことでした。

いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を

今の私は、以前想像もしたことがないほど平安です。苦しみ、悲しみ、孤独、不安から、そして死の恐怖から、まったく解放されました。私は今、心が自由です。五体満足な健康体の時より、比較にならないほど、自由です。

キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。

（ガラテヤ　5・1）

兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。

（ガラテヤ　5・13）

「ですから、もし子（イエス様）があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

（ヨハネ　8・36）

「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」
（ヨハネ　8・32）

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」
（ヨハネ　14・6）

「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」
（ヨハネ　14・1）

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」
（ヨハネ　14・13）

がんばる必要がなくなりました。必要は祈れば答えられます。心配がなくなり、平安です。

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。…わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。…

恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。」　（イザヤ　43・1、2、4、5）

主人が出社し、子どもたちが学校へ出かけますと、夕方まで一人でいます。以前は火事になったら、地震がきたら、と不安でした。今は、主がともにいてくださいますから孤独をまったく感じません。以前は悪夢でよくうなされたり、不安で眠れませんでした。しかし今は、夜もこわくなくなり、よく眠れます。病気はあいもかわらずです。むしろ、日々少しずつ進行していますが、すべてを主におゆだねしていますから平安です。病気のことは私にとって、もう、いやされようがいやされまいがどうでもよいと思うようになりました。主イエス様を信じている者には天国が約束されています。それにイエス様は、お心一つで何でもできるお方です。その主イエス様がわたしのドクターであり、わたしの親友ですから、わたしの一番よいように導いていってくださると確信しています。吉祥寺キリスト集会の葬儀のテープを聞いてからは、わたしの葬儀もこのように行なわれるのかと思うと、かえってうれしいくらいです。ぜひ、このような葬儀にしてほしいと決めています。遺言状にもそのことを書きました。私は今では喜びと希望を持って、自分の葬儀のことを、笑いながら、うれしそうに、楽しそうに話せます。

それからまた、主にあるすばらしい家族の一員として、キリスト集会の皆さまがたとの心をゆるせる親しいおつきあいを通して、ますますイエス様への信頼が強められ、イエス様からの励ましや慰めや力をいただいています。いつも喜んでいられます。今や私にとって、そのような主にある霊の交わりのもてる礼拝や家庭集会やバイブル・キャンプがこの世の天国です。一九九三年

六月にロサンゼルスで開かれたバイブル・キャンプでも、全国のキリスト集会の皆さま、特に春日部キリスト集会の皆さまの祈りと助けに支えられて参加することができ、また証しをすることができ、深く深く感謝しております。

主イエス様を信じ、その救いにあずかってからは、私の変化を見て、新しい私を主人が認めてくれているようです。以前は主人の口からいつも「つっぱりママ」と言われてきました。今ではその言葉が消え、その代わりに「幸せそうでいいね」と言ってくれます。このことばが語るように、私は主の平安と喜びと希望とに満たされています。家庭も、あの暗さは去り、なごやかさを取り戻しはじめ、娘たちも心が伸びやかになってきました。ほんとうに主イエス様に感謝です。今、私の唯一の願いは家族の救いです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

このみことばの通り、主のお約束がありますから心配はまったくしていません。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・11）

イエス様は最上の時に最上の方法で、家族を救ってくださると信じています。そして、祈りながら期待しています。一日も早く家族そろって主を喜び、賛美し、霊とまことをもって礼拝できる日がきますようにと願って祈り続けています。

私と私の家とは、主に仕える。（ヨシュア　24・15）

「わたしの家は祈りの家と呼ばれる。」（マタイ　21・13）

最後に、私の救いのために、多くの方々が祈ってくださっていたことを最近知りました。ありがとうございました。心から感謝を申しあげます。主にご栄光がありますように。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。（イザヤ　38・17）

あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。（ユダ　24、25）

ハレルヤ。私のたましいよ。主をほめたたえよ。私は生きているかぎり、主をほめたたえよう。いのちのあるかぎり、私の神に、ほめ歌を歌おう。（詩篇　146・1、2）



▲北海道の登別温泉で。1992年10月。

何と深い主のめぐみ

山崎曄子（てる）

一九二八年満州撫順市永安台に生まれる。永安小学校、撫順高等女学校卒業。満鉄撫順医院に薬剤手として勤務。終戦により引き揚げ、豊橋市第一工業繊維勤務。上京してご主人の精一さんと結婚。一九七五年に精一さん召される。現在めぐみ愛育園めぐみ保育園園長。趣味は園芸。

・土浦集会　日曜礼拝毎週十時半より
・住所　土浦市烏山五―二二五〇―九〒三〇〇　・電　〇二九八―四一―二八三八

めぐみ保育園の玄関で園児と。
▼1993年1月。



「いま私が味わっている平和な生活が突然失われたとしたら、いったいどうなるのだろう?」という思いが心をかすめ、不安と疑問が渦巻きはじめたとき、実にタイミングよく、朝の新聞にはさまれていた「きたれ!キリスト教天幕伝道」と大きく書かれたちらしが目に飛びこんできたのです。その当日になると、私は迷うことなく、夫のこぐ自転車の後ろに乗って、その伝道会場へと向かいました。「いっしょに入らない?」と誘ってみましたが、主人は「いやだ」とひとこと、言ったきりでした。

六日間にもわたってお話を聞いてはみたものの、なんの得るところもなく、「ああ、なんだか時間を損してしまったな」という思いだけがむなしく残っただけでした。とはいうものの、最後までいて、日曜日の礼拝のおこなわれる教会と時間をちゃんと聞いて帰ったのですから、聖書にあるとおり、神様のみ手はまちがいなく私にさしのべられていたのですね。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」（ヨハネ　15・16）

次の日曜日に夫を送りだしたあと、なんだか見えない力に導かれるように、バスにとび乗り、教えられた大貫というところの教会にいきました。案内をこうと、「ハイ」という男の方の声がして、出てこられたのは金髪の若い男性でした。それまでに外人を見たことがないわけではありませんでしたが、こんなに間近に見るのははじめて…。思わず「きゃっ」と叫び声をあげ、玄関から飛びだし、一目散に今きたバス停へと逆戻りしました。しかしバスを待ちながら、「いやい

や、このまま帰ったらせっかくきたのにバス代が損しちゃう、せめてバス代分ぐらいは聞いて帰らなくては…」と、あさましい心をだして、私は再びその教会へと向かったのです。

このようにして主は、私のささやかな打算の心をも用いてくださって、伝道者の書3章1節に「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。」とあるとおり、神様の時として備えてくださったのでした。

やがて私は礼拝に、聖書研究会に、祈祷会に熱心に集うようになりました。ところがいつしか私は、自分を無にして主に献身しておられる若いご婦人の伝道者を、迷わされた人だと見るようになり、この伝道者の目を覚まさせてあげるには、彼女が誤りがないと信じこんでいる聖書の中から誤りを見つけだし、「ほら見てごらん、神様なんていないのよ」と教えてあげることが必要だと、いまから思えば傲慢な心で聖書を一生懸命に読み、自分流の間違った解釈をしては彼女に話し、それを彼女に訂正されるとおち込み、また聖書に取り組む、それもあくまでも誤りを見つけるためというひどい毎日でした。

神は人を正しい者に造られたが、人は多くの理屈を捜し求めたのだ。

（伝道者　7・29）

私はまさにこのとおりの者だったのです。聖書に誤りを見いだせないままあせっていた私は、こうなったら神様とじか談判しかないと思い、「もしあなたがほんとうに生きておられるのなら、私に声をかけてください。私はどうしても神様がいるなんてばかばかしくって信じられません」

と言いながら、それでも教会で教えられたとおりに祈りながら聖書を読み続けていました。この傲慢な私の問いかけに対して主は次のように聖書をとおして答えてくださったのです。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

（ヨハネ　14・6）

イエス様こそは父なる神のみもとにゆくただ一つの道、そして真理。でもいのちってなんだろうと一句一句をかみしめるように読んでみて、やがて私は脳天をハンマーでたたかれたような強い衝撃を受けました。とにかくイエス様を知ろうとしなければ神様を知ることができないのだと思いました。イエス様はご自分を道として、「この道を歩みなさい」と教えておられるのだと思いました。そして次に出会ったのが、次の聖句だったのです。

「わたし（イエス様）は、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。」

（ヨハネ　14・18）

この聖句は私にとって決定的なものとなりました。この世にあるいわゆる神々は多いけれど、釈迦にしても弘法大師にしても死んだ後に再び帰ってくるという約束をしたものがいただろうか。世界のベストセラーといわれ世界中の人々に読みつがれている聖書の中で、こうもはっきりと断言できるお方、このお方こそまことの神様、生きておられる神様なのだという思いが稲妻のよう

に頭をよぎった瞬間、私はただただ突っ伏して、溢れ出る涙にむせびながら「神様、赦してください、ご免なさい」と言い続けていました。するとどうでしょう、いままで「私は罪なんか持っていない、信仰なんて弱い人のためのものだ」と、頑固なまでに思い続けてきた私に、「神を認めず信じないことが罪なのだ」と示されたとたん、あれほど正しいと思っていた自分の心の中の悪かったことがまるで走馬燈のように次から次へと浮かびあがって、ただただ神様の前に赦しを乞うのみでした。

このようにして悔い改めてイエス様を受け入れ、主の軍門に完全に降った私は、聖書の詩篇のダビデの讃歌に完全に共鳴する者と変えられました。そして毎日の生活が感謝と喜びの日々に変えられていきました。

その頃、夫もイエス様を信じて救われ、一九六一年の秋には洗礼を受けて主に従う者であることを証しすることができました。また私の母も主を求めるようになり、主は詩篇にある次のみ言葉どおり母を救いの道へと招いてくださったのです。

主よ。あなたはあなたを尋ね求める者をお見捨てになりませんでした。(詩篇　9・10)

ほんとうに主を讃めよ、ですね。この母は九十一歳で天に召されました。

しかし、私はまだイエス様の十字架上の贖罪の意味を知ることができませんでした。ある日の夕方、当時大洗にいらしたベックさんのメッセージを聞きながら、イエス様の十字架上のお姿を頭に浮かべておりました。私はそれまで生意気にも「キリスト教というものが日本で普及しないの

は、あの十字架につけられたイエス様のお姿があまりにもみじめに見えるためではないか、あからさまな表現をきらい、わびやさびの心情を愛する日本人の心に訴えてこないからではないか」と、ひそかに考えていました。そのとき、どんなメッセージが語られたのか、いまではまったく覚えていませんが、それを聞いているとき突然「日頃みじめでかっこ悪いと思っていたあのイエス様のお姿は、実は私自身の罪を贖われるためのお姿ではなかったのか？　そうだ！　私が神の前に受けなければならなかった刑罰を、イエス様が私の代わりに受けてくださったのだ」ということが頭でなく、言葉でなく、はっきりと聖霊のお働きによって、電光石火、受けとめることができたのです。

ベックさんの「祈りましょう」という言葉に、流れる涙とともに悔い改めと感謝の祈りが口をついてほとばしりでたのを、よく覚えています。

その後、私の信仰生活にはもちろん多くの紆余曲折がありましたが、三十年間にわたってイエス様ひとすじにこの道を歩ませていただくことができたのも、ただただ主のあわれみと、イエス様の十字架の贖罪が私のためであったという、この一事につきます。

やがて一九六三年に、夫が埼玉のゴルフ場建設に迎えられ、共に祈り苦労して献堂された教会堂、なれ親しんだ教会の皆様が送ってくださる姿が涙でかすむのをこらえながら、大洗の地を後にしたのでした。

埼玉県の東松山に住み、近くにある東松山の教会にもなじんだころ、そこの宣教師から「日曜学校のピンチヒッターとして奉仕してください」と言われました。主は私に宣教師の口を通して、

幼い子供たちのための奉仕の道を開いておられたのです。私はそのときすぐ「私、子供は好きでないです。だからいやです」とお断りしました。宣教師は「神様に祈ってみてください」と言われ、「まあいいや。宣教師の顔も立てて…」と、横着な考えで日曜学校の準備を始めたのです。しかし妙に宣教師の言われた「祈ってください」という言葉が心にひっかかり、「祈ったって答えはないと思うよ」と、心にひっかかるものを強く否定しながら聖書を読み、日曜学校の準備にはいったのですが、どうしても「祈れ」とせかされているような気がして、とうとう「主よみ心を教えてください。でも、私にはとてもできません。どうやって子供たちに話をしたらよいかわかりません」と祈りました。いまでもあの時の情況は頭に浮かんできます。初秋の陽ざしがにぶくさしていた窓もいつしかかげり、あたりは薄暗くなっていました。準備のためにと開いた聖書から、次の聖句が目に飛びこんできました。

主は彼に仰せられた。「だれが人に口をつけたのか。だれがおしにしたり、耳しいにしたり、あるいは、目をあけたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」

（出エジプト　4・11、12）

この聖句を読んだとき、私はひどく叱責されたような気がしました。闇のせまる部屋で明りもつけず聖句を読み返しながら、「そうだ、自分が語るのではない、主が幼い子供たちに語ってくださるのだ。私はそのための道具でさえあればいいのだ。主よ、あなたが語ってくださるのです

ね」と主に念を押してから、幼い子供たちの前に立ったのでした。

しかし、一週間に一度しかない日曜学校、それもたった一時間だけ、福音をつたえるのにこれだけでいいのだろうか?もっとほかになにか方法がないだろうかと考えるようになりました。

とうとうその思いが強くなって、ある方から「日曜学校の教師を訓練する指導者のための学校が埼玉の所沢にある」と教えられ、夫とともに祈り、道が開かれるのを待ちました。幸いにも入学を許され、三カ月の訓練が始まったのです。受講する学科の一つ一つに基礎がないため、追いつくのに精一杯で、ほんとうに苦しい三カ月でした。でもその間、主はすべてを備え、導いてくださいました。

神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。（ローマ　9・15、16）

このみ言葉どおり、主に守られて無事卒業式にのぞむことができ、迎えにきた夫とともに三カ月ぶりに家に帰り、我が家の畳の上に転がったときは、まさに「やった!」という気持ちでした。ひさしぶりに夫とともに夕げの食卓につき、主のあわれみと守りをいっしょに感謝し、主を賛美しました。

それからは、主の与えてくださったお恵みを、日曜学校に、開拓伝道の子供会に、教会学校の夏期学校にと活かさせていただきました。いま思いかえすと、大洗を出てからこのかた、主が私

に与えられたご計画の実現のために、私を一歩一歩と導いてくださっていたのだということを深く確信いたします。

埼玉のゴルフ場が完成し、軌道に乗ってきたので、次に新しく建設されるゴルフ場のために茨城の土浦に帰ってきました。このころ、私は生活の場からイエス様を証しすることを主に示され、養護施設をつくるための準備をしておりました。しかし主はやがてこのご計画を保育所をつくることに変えられました。

やがて主は、私に訓練として聖路加国際病院の小児病棟へと道を開き、乳児のいろいろなことを勉強させてくださり、また〇歳児モデル保育所、障害児の総合保育をしている施設へと、次々に道を開いてくださいました。それらがすべてキリスト教関係の保育所だったことは、訓練中の私にとってはほんとうに主の恵みというほかありませんでした。

そのころ、夫は暖かな静岡方面に住みたいと土地をさがそうとしていましたが、不思議にもその頃近くにあった土浦教会の牧師の語られた一言によって、現在住んでいる土地が与えられたのです。その牧師とともに現地を見にいきましたが、バスの便も悪く、道路も未整備で、雨が降りでもしようものならまるでお汁粉、お天気が続けばさながら砂漠、バスも人も黄な粉を浴びたようになるというありさまでした。見わたすかぎり畑々々々。人家なんて遠くにぽつん、またぽつんと農家があるだけ…。思わず夫と顔を見合わせてしまいました。そのときふと、次の聖句が頭に浮かんできました。

「立って、その地を縦と横に歩き回りなさい。わたしがあなたに、その地を与えるのだ

から。」

（創世記　13・17）

「神様が与えてくださるのなら、きっと最上の土地になるだろう」と言う夫の言葉で、二人して縦と横に歩き回り、足跡をたくさんつけて「神様、おっしゃるとおりにしました。ありがとう」と喜んで帰宅し、早速契約をしました。主のお約束に間違いはありません。二十年前のこの畑地から、どうして現在の町の姿を想像することができたでしょうか。

やがて保育所建設の認可も下り、建築が始まったのが一九七三年六月一日でした。そのころ保育所の数も少なく、特に乳児をあつかうところは当園だけだったこともあって、いろいろなことでかなり苦労をしました。でも入所児にイエス様を伝えることができるのだと、夫婦ともども喜びながら日々の仕事にたずさわりました。やがて仕事が忙しくなるにつれて、夫も片手間仕事ではどちらも中途半端になってしまうと言いだして、保育園の経営のいっさいを引き受けてくれるようになり、私も保育だけに専念するようになりました。このようにして忙しい月日が流れていきました。

園の経営がまだ軌道に乗っていない一九七五年十二月二十三日のこと、夫は突然神様に召されて、天のみ国へと帰っていきました。まったく急なことでした。

朝、いつもと変わりなく子供たちと話をし、昼食を私といっしょに食べたあと、年末調整のために税務署を訪れ、さらにクリスマス・ツリーを買うためにデパートにいっしょに行った帰り、車の中のことでした。急に胸が痛い、といって車を路肩に寄せ、エンジンを切ってハンドルの上

に突っ伏してしまったのです。すぐ救急車を呼んで車に戻ったとき、実に静かな声で「祈って」とはっきり言い、私の祈りを聞きながら息が絶えました。

葬儀の日、すべてが終わり、だれもいなくなったとき、白木の箱に収まった夫を抱きしめて、私は初めて声をあげて泣きました。

そんな日が何日続いたことでしょう。ふと「数えて見よ、主の恵み…」という聖歌六〇四番が口をついて出てきたのです。そのとき私は、はっ！としました。夫が召される瞬間をいっしょにいられた恵み、夫が祈りとともに天に迎えられた恵み、救急車はすでに死亡している人は搬送しないのに病院まで運んでもらった恵み…。数えだしたらほんとうにきりがありません。私は流れ落ちる涙の中から、「そうでした主よ、悲しいことだらけに見えても、あなたのくださった恵みのほうが多いのですね。いままで私は一人ぼっちになったことがとても悲しかったけど、一人ぼっちではないんですね、どうぞいつも私のそばにいてください」と力を得たように祈っていました。

私は声をあげて、主に呼ばわる。すると、聖なる山から私に答えてくださる。

（詩篇　3・4）

私にとって、主こそ岩、盾、そして砦です。王の王、主の主です。主を賛美します。主に慰められ、力をいただいて歩みだしてから早くも二十年近くの歳月が流れ去りました。その間に、三十人定員の小規模保育所から、六十人定員の一般保育所になりました。定員増とそれに伴う園舎

の増築に踏みきるとき、資金の面でも、将来の見通しからも、かなりの不安がありました。ちょうど一九七六年ごろから子供の出生率が少しずつ低下し始め、保育所の定員割れが必ず起こると見られるようになってきていたのです。しかし主は、

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。

（ピリピ　2・13、14）

と語りかけてくださり、勇気づけてくださって、増員、増築を決断させてくださいました。主のなさることに間違いはありません。すべての必要が与えられ、満たされている現在です。また増員のおかげで四、五歳児の入所が増え、週一回の聖書のお話も、毎日の朝のお祈りも定着してきました。

そして主は、キリスト集会のベックさんの口をとおして土浦キリスト集会の場所を、この保育所にしてくださったのです。しかし今度のことは、保育所の中だけでおさまる話ではありません。一歩まちがえば、むしろ主のご栄光を傷つけることになるかも知れません。私は正直いってたいへん怖いと思いました。でも、考えてみると、すべては主からいただいたものばかりです。必要なら喜んでさし出すのはしもべとしては当然のことです。私は「どうかいままでのように、主が語ってください。み心にかなうようにしてください」と祈りました。でも、お答えはなかなかいただけません。そのころ集っていた集会にとどまるべきか、それともそこから出て保育所で新し

くキリスト集会を始めるべきか。心は激しくゆれ動きました。どちらにするか、間違ってはいけないと思い、主のお答えのないままに、とても悩みました。

そのころ私はピリピ人への手紙の1章から読み続けていましたが、9節の「あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。」というところで、ますます慎重になってしまいました。しかし、一九八八年一月十日のこと、ある方といっしょにお祈りするために、ピリピ人への手紙の1章を交互に読んでいたところ、次の聖句にいきあたりました。

あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、……あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。（ピリピ　1・27、29）

さらに2章へと読みすすんでいくうちに、主のみ心を確信できるようになりました。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。（ピリピ　2・6、7）

ゲッセマネで血の汗をしたたらせながら祈られ、人々の救いのために、いや、私の救いのために十字架にかかって罪をあがなってくださったイエス様、このすばらしい福音をお伝えするため

にも、闇に沈む魂の救いのためにも、私はお役にたちたい。でももう少し、決断のためのしるしが欲しい…。すこししつこいかもしれませんが、私は私なりに必死でした。

ある夜、眠れないままに開いた聖書に、次の聖句を見つけました。

すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。　（ローマ　11・36）

全能にして万物を造り、支配しておられる主のご決定にはさからえません。「どうぞ！」ということで、土浦キリスト集会は、主のくださったこの土地に主の建ててくださったこの建物を使って開かれることになったのでした。

ああ、何と深いことでしょうか、主の恵みは。その昔、私を大洗の地から埼玉の東松山へ、そして土浦へと、ご自身の栄光のために慰め主、救い主、そして助け主として導いてくださったのでした。主を賛美し、ひとりでも多くの方々が主を受入れ、救われ、主にある幸いを手にすることができますことをお祈りしながら、筆をおきます。

主とともにある平安

藤澤順子

一九三一年長野県佐久市に生まれる。岩村田小、岩村田女学校、岩村田高校卒業。家族は夫範男さん、長女あゆみさん。



▲上・春日部キリスト集会にて。
下・左から順子さん、範男さん。九州旅行で。

▼左から長女あゆみさん、順子さん。



急な発病

突然のことでした。身体の調子がおかしい。風邪の症状とは違い、熱も痛みもなく気持ちも悪くないが、手足に脱力感を覚え、立っていることができなくなりました。一九九二年三月十五日夕方六時過ぎのことでした。家族の帰りを待って、かかりつけの医者に連絡してもらいましたら、「極度の貧血だと思うからすぐ救急車で病院へ行くように」との指示があり、すぐ救急車を呼んで主人につきそってもらい、北浦和の社会保険中央病院に急ぎました。この病院は、前に住んでいたところのすぐ近くの病院で、何度か外来、入院の経験があり、一年前から胃のポリープの定期検診を受け、主治医も決まっておりました。救急指定地域が違うため、病院への連絡、受け入れ態勢の確認、脈拍や呼吸数のチェック、容態の説明など、車中でしばらく時間がかかりました。「主よ、私の心を知ってください。あなたは私の苦しみの時に、心のゆとりを与えてくださいました。感謝します」と祈り、このことのいっさいは主からのものと、迷わず受けとめることができました。

すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

（ローマ　11・36）

二十分ほどで病院につきました。当直医の診察があり、血液検査が行なわれ、ヘモグロビンが正常値の55パーセントと少なく、いっときもゆうよできない状況で、すぐに輸血の準備がはじまりました。しかし私は不思議なほど平安でした。ただ、入院の期間がどれくらいになるのかわか

りませんし、再三の入院でしたので、主人や娘がさぞ大変だろうとそれが気がかりでした。そのこともすべてイエス様におゆだねすることにしました。

イエス様に出会って

私は二十二歳の時に、アメリカ人の宣教師に導かれてイエス様と出会いました。健康で、真面目で、がんばり屋だった私は、高校卒業後、英語を勉強するために東京に出ましたが、肋膜炎になり、五ヵ月で郷里に帰ることになってしまいました。でも、入院するほどではなく、自宅療養しながら家事を手伝っていました。普通に望むものは手に入り、やりたいことはできて不自由のない生活でしたが、何となく心の満たされないものがありました。その時にイエス様に出会ったのです。聖書との出会いです。

あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。（詩篇　4・7）

イエス様が、私の罪のために十字架にかかって血を流されたことを信じ受け入れました。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。（Ⅰテモテ　2・5）

罪ゆるされて永遠の生命が約束されたよろこびは、今も忘れることができません。

その後結婚し、主人の転勤のため、先々でいろいろな教会に集っておりましたが、組織された教会の中で、だんだんと喜びがなくなっていきました。教会の宗教的、律法的な部分、イエス様が中心でなく、人間の思いで管理されている部分など、いろいろと悩むようになってしまいました。そのころは聖書は教会に行く時だけ埃をはらって持って行くかざりものになっていました。私の信仰は、成長のない土台だけのものでした。そうした悩みに苦しんでいた時、キリスト集会の方を通して「光あれ」とメッセージを録音したテープが与えられました。そして吉祥寺キリスト集会の火曜日の学び会へと導かれ、まことの祈りを捧げる日曜日の礼拝へと導かれました。私のもやもやとした思い煩いは雲が切れるように晴ればれとなりました。みことばに立ち、主を慕い、主に信頼する時の喜びを、再び体験させていただきました。一九八七年に教会を離れました。

緊急の手術へ

さて、急な発病で入院した私ですが、病室に入った時は、もうすでに九時の消灯時間が過ぎていました。輸血が始まりました。思いがけないできごとでしたが、主がともにいてくださるというお約束を確信していましたから不安はありませんでした。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。
（詩篇　34・18）

翌日から検査があり、胃のどこから出血しているのか確認できず、輸血と一緒に止血処置を行なっていたようですが、出血が止まらなかったため緊急の手術となりました。主人には主治医から病状と手術の方法などについて細かく説明がありましたが、私は何も知らされず、ただいっさいを主におゆだねしました。とり乱すこともなく、静かな気持ちでした。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。
（ピリピ　4・6、7）

私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。
（ヨブ　1・21）

いよいよ手術となり、開けてみたところ食道のすぐ下に直径二・五センチほどのポリープが二つもあり、その中央が破れ、出血していることがわかりました。そのために食道を少し取り、胃の上部三分の二を切除し、腸を切ってつなげる二階建ての大変な手術で、手術の途中、医者は主

人を呼んで説明し、承諾をとったそうです。時間は六時間半を要しました。麻酔が覚め、集中治療室で目をあけた時、娘がベッドの脇ですすり泣いていました。私は気がついたばかりの時で、何の涙かわかりませんでしたが、とてもかわいそうに思いました。そしてこの子は幼い頃から教会に集っていて、イエス様と出会って信じているはずだけど、永遠のいのちの確信がほんとにあるのだろうか、もし娘も主人も天国での再会を確信していないのであれば、このまま召されていくわけにはいかないのではないかと、一瞬思い煩いが頭をよぎりました。でもすぐ、「主よ、あなた様にいっさいをおゆだねします」と祈り、静かな眠りに入ることができました。手術は主に守られて無事に終わり、家族も親戚もほっとした翌日、呼吸困難になり、肺機能の低下で気管切開し、人口呼吸器をつけることになってしまいました。原因はわかりません。しかし私は、何をされるのか、どうなるのかについて、思い煩いはいっさいありませんでした。その日から声は出ず、筆談になりました。

主人の日記から抜き書きします。

三月十九日　手術。午後一時～七時半。胃の三分の二切除、腸を切って胃と食道の間をつなげる。

三月二十日　肺機能低下。気管切開。人口呼吸器つける。筆談となる。

三月二十八日　左肺白く、溜まっている水をとるために左胸に穴をあけて管を通す。肝機能低下、腎機能低下、血圧70～50。危篤状態におちいる。

三月三十日　胸苦しがる。二本目の管を通す。

四月二日　肺に三本目の管を通す。
四月三日　四本目の管を通す。血小板破壊で大量出血の恐れがあり、助かる見込みがないことを医者から知らされる。鎮静剤で眠らせる。
四月四日　遺言を筆談する。天国が約束されている。葬儀はベックさんに。お世話になった方々へお礼のことばを書く。
四月五日　集中治療室より個室に移る。症状悪化。
四月六日　血小板破壊による大量出血は回避できた。しかし右肺も悪くなってきている。
四月八日　右肺浸潤の疑い。
四月十二日　早く天国に行きたいと筆談。
四月十三日　管一本ふえる。五本目。
四月二十日　右肺に管入れる。六本目。二日位の生命と言われる。
四月二十一日　苦しみのあまり「もう限界だ」と書く。
四月二十二日　腎機能低下。むくみ。肺組織くずれる。
四月二十七日　筆談できなくなる。
五月一日　意識ほとんどない。危険。
五月四日　幻覚症状。幻影症状。
五月七日　呼吸不全。
五月十一日　管一本抜く。

五月十五日　幻覚症状続く。
五月二十四日　右肺痛がる。生命はとりとめたけれど、どの程度回復するか。三ヵ月位の長期間かかる見込みと医者から言われる。
六月十日　人口呼吸器をはずし、自己呼吸になる。声が出るようになる。
六月十八日　流動食出る。

この間私は、幻覚症状が続き、長い間ずっと夢をみていました。天井を指差したり、縫い物をするしぐさをしたり、付き添ってくださっていた方は、つい笑ってしまったり気味悪がったり、と大変だったようです。時々はっきりと目をあけて、そのときは頭はしっかりしていたのだそうです。身体の自由がきかないつらさ、傷の痛み、呼吸の苦しさ……。しかし主は、いつもともにいてくださいました。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。
（イザヤ　63・9）

ああ、私は床の上であなたを思い出し、夜ふけて私はあなたを思います。あなたは私の助けでした。御翼の陰で、私は喜び歌います。私のたましいは、あなたにすがり、あなたの右の手は、私をささえてくださいます。
（詩篇　63・6～8）

本当に大変だった時、看護婦さんはじめ、みなさんが「頑張って、頑張って」と言ってくださいましたが、私は頑張れませんでした。ただ、イエス様のみ腕の中に抱かれている安らぎだけでした。何もかもゆだねることのできる恵みを実感しました。聖書を読むこともできず、テープを聞く元気もなく、苦しみに耐えている時、自然に心の中で賛美していました。

「いかに恐るべきことありとも、み翼の陰は安らかなり。愛の神はいかなるときにも、頼る汝が身保護したまわん」(聖歌347)

「み国に住まいをそなえたまえる、主イエスの恵みをほめよたたえよ。やがて天にて喜び楽しまん、きみにまみえて勝ち歌を歌わん。」(聖歌638)

医者からは後二、三日とか、今日か明日かと言われ、斎場も用意し、ベックさんに葬儀のことをお願いし、キリスト集会のみなさま方にもお願いしておりましたが、その都度ベックさんは、「医者が言っているんでしょう」と言っておられたようでした。いつもベックさんが言っておられる「人は病気では死にません。神の時でなければ」というのが現実でした。何回かの危機を通り、こんな状態ではよくなるのが不思議、よくなっても植物人間になると言われていましたので、快方に向かうと、奇跡だと病院中の話題になりました。主治医は一生懸命適切な治療をしてくださいましたが、今までにこのような例がなく、「こんなによくなるとは思わなかった」と驚いておられました。そして「これだけのことを通り抜けてきたのだから、あなたは何だってできる」と言われました。でも私が頑張ったのでしたら到底こんなことにはならなかったことだけははっ

きりしています。すべては主のご計画だったのです。

入院以来、キリスト集会の方々がずっと祈り続けていてくださったことを、後で知りました。まわりの方々の懸命な看病に助けられ、支えられての四ヵ月半の長い入院でした。どなたさまに来ていただいてもお会いできるような状態ではなく、すこし良くなってからも院内感染のＭＲＳＡにかかり、院内で隔離の状態でした。寝たきりの四ヵ月は、筋力も衰えて立ち上がることもできず、リハビリの訓練を受けてようやく歩けるようになりました。このような大きな体験を通して、私は、若い頃にイエス様に出会えたこと、また、キリスト集会で、主は生きて働いておられるという生きたまことの信仰に導かれたことを本当によかったと感謝し、喜んでおります。主のご計画によって与えられましたこれからの地上の生活を通して、祈りながらイエス様のことをお伝えしていきたいと願っております。

あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。

（イザヤ　40・28～31）



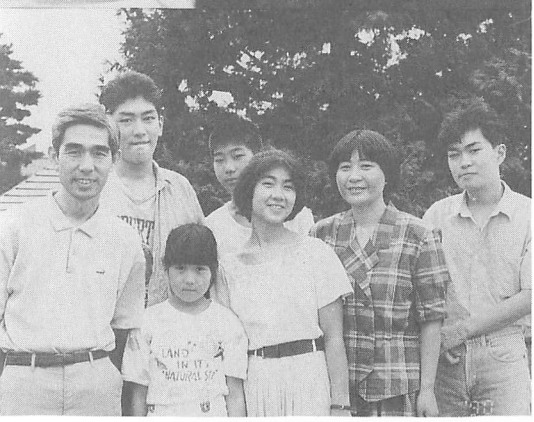
◀授業中の浩さん。

汚れと恥との深みから

吉田　浩

一九四三年彦根に生まれる。高宮小、高宮中、彦根東高、滋賀大学卒業。足利商業、八潮高を経て越谷西高勤務。担当教科地理。家族は妻和子さん、長男直一郎さん、次男信夫さん、長女結実子さん、三男満さん、次女喜実子さん、母富美さん。

- 家庭集会　毎週水曜日
- 住所　埼玉県春日部市南三―一五―七〒三四四
- 電　〇四八―七三六―九七一三



▲長女結実子さんの洗礼で。
左から浩さん、二男信夫さん、次女喜実子さん、三男満さん、結実子さん、和子さん、長男直一郎さん。

死への恐れと、愛する母の死

中学二年生の時、同級生のお父さんがなくなりました。当時、私の父も結核にかかっていましたから、「死」の問題について考え悩みました。死んだらどうなるのか、考えるだけで心臓がドキドキして、親に聞きたくても「お前は何という勇気がないやつだ」と軽蔑されるような気がして話し出せませんでした。今とちがって神様を知りませんでしたので、一室にこもって「助けてください」と、闇に向かって叫び出して泣いたのを、昨日のことのように思い出します。しかし、泣き終わってみると、外は明るく、私の悩みはウソのようでした。そして頭の中に、人は死んでも燃やされて骨になるだけで、自分という存在は形を変えて物質として残るんじゃないかという思いが浮かび上がったのです。そうだ、そんな死のことにクヨクヨしているよりは物質の究極の姿を研究したら何かが分かるんじゃないかと思い、それっきり「死」について考えることをやめてしまいました。

やがて高校に進学し、卒業してまもなくの一九六一年五月のこと、私は母をがんでなくしました。その母の臨終のとき、当時付き添って看病してくれていた叔母からの連絡を受け、かけつけた私は病室の枕辺に座っていました。母と一人息子の静かな最後のひとときでした。母は意識もなく、スヤスヤと眠っているように見え、私にはとても臨終のときとは思えませんでした。ですからプロ野球の実況中継の結果をイヤホーンで聞いているという、いかにも呑気な状態でした。その後、脱脂綿に水を浸し、母の唇に潤いを与えたとき、母の両目からポツリと落ちる真珠のような涙に、母の死にゆく気持ちは分かりましたが、とても死んでしまうとは思えませんでした。

そして、母がなくなったとき、父は男泣きに泣きました。幼い私は夫婦の愛も知らず、父に泣くなと命令する始末でした。すでにこのとき、私の心には父を父として尊敬していない罪がありました。母は戦争で先夫を失い、二人の間には子供がありませんでした。その家を守るために父が養子として迎えられ、一人っ子として私が誕生しましたが、両親の夫婦生活の中には微妙に先夫の存在が影を落としていたのです。

「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。

（エペソ　6・2、3）

そのくせ、病室から夕闇迫る戸外に出たときはもう自分の体を支えるのが精一杯で、頭の中はグルグルと回っていて、「お母さん、ぼくはお母さんの遺志を継いで家を守るよ！」と死んだ母に向かって叫んでいました。

彦根城の下にある病院から母の遺体が運ばれてきて、仏間に寝かせられたとき、掃除の手伝いにきてくれていた隣近所の小母さんたちが、「この家には悪いつきものがついている、追いださなければ…」とせっせと箒で掃き、清めのために塩をまいているのを見たとき、愛する母の体がそのようにしか扱われないことに割り切れない思いを抱きました。ただ、母の供養は自分がやらねばと、祖母にお経を読んでもらったのを録音して、毎日そのあとについて仏壇にむかって読経する生活をしばらく続けました。

神様との最初の出会い

母の死、大学受験の失敗、と失意のうちにある私を、何人かの友人が慰めにきてくれました。その中に高校時代の同級生の力石君がいました。私は彼を通して、聖書と神について初めて知らされました。あるとき彼が、「神様はおられるのだ。君も信じれば喜びが与えられる」と言ったとき、「神がいるなら、私にも分かるはずだ。見せてみろ、そうしたら信じるから。そんな非科学的なことは信じられぬ」と言い返しました。そのときは口論になり、それ以来、彼も私に神様のことを語るのを諦めたようでした。

しかし、彼が私を励ましてくれる手紙のなかに、時々聖書の言葉が書かれていました。そのなかの一つに、次の聖句がありました。

「あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」（マタイ　6・34）

この聖書の言葉は、母をなくし、浪人生活を送らざるをえなくなった私にとって、何よりの慰めを与えるものでした。

罪の泥沼の中から

母がなくなり、兄弟のいない私は、父とのふたりの生活に味気なさを覚えるようになりました。

そして、私も父の再婚を望むようになり、父は母の死後二年にして、今の母と再婚しました。私はこの母とは絶対に継母と継子の関係ではなく、真の親子になりたいと望んでいました。しかしその願いがこうじて、父と母の夫婦生活よりも、まず母と私との親子関係を優先するように強制するというわがままな要求をし、母を苦しめました。

私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。（ローマ　7・14、15）

このように母の心を平気で傷つけ、父を敬わない私の自己中心のわがままな性質は、家庭の中から平和を奪っていきました。それは当初の私の願いとはまったく異なった結果になりました。

さて、私がこのように自分の内にある罪に悩みながらもそこから脱出できないでいたちょうどそのようなとき、大学の講義を通してキリスト者である永岡薫先生に接し、福音の片鱗に触れることができました。またそのころ、叔父から知り合いの方の家庭教師を頼まれました。そして、その家庭に、神様はひとりの女性を用意してくださっていたのです。それは、のちに私の妻となる女性で、家庭教師をしていた家の長女でした。私にはその時、なぜか彼女に心ひかれる思いが与えられたのでした。これらのことは今から振り返ると、まったく主のあわれみとしか言いようのないできごとでした。

しかし私は、大学生活の大半を神様の存在も愛も知ろうとせず、あいかわらず神を否定し、自

分の内にある罪を肯定し、人間のみを至上とする道、特にマルクス主義へ傾いていきました。結局、人間の思想を至上とするそのような生き方では、社会改革はおろか自分自身の人生上の問題もまったく解決できないまま、暗い気持ちで大学を卒業せざるをえませんでした。

卒業後、私は遠く栃木県足利市の教師としての道を選びました。悩み苦しんだ故郷を後にして、誰も知らない新しい土地で自分の人生を再出発させたいという思いがあったからです。ところがその年の夏、私のもとに一通の手紙が届きました。それは彼女からのものでした。「私はイエス様を信じました」というその幸せにあふれた手紙は、彼女が私のことを忘れていなかったという喜びを与える反面、彼女が私のあずかりしらない遠くの世界へ行ってしまったようで淋しいという思いを私に抱かせました。それだけでなく、当時の私は「キリスト教は人間が考えだした一つの教えである」と自分勝手にきめつけており、逆に「どうにかして彼女にその非を認めさせなければならない」という使命のようなものを感じたのです。ですから、彼女が聖書を引用した手紙をよこすと私はそれに反論する、するとまた彼女から手紙がくる、という具合でした。そのうち私は段々彼女が私を清いものと思っているように思え、耐えられなくなってしまいました。そこで、私は彼女との交際を断ち切るために、私はこんなにも惨めで汚い者だ、こういう私の存在から離れてほしいという思いで、誰にも言わなかった自分の罪を告白する最後の手紙をしたためたのです。ところが、彼女から帰ってきた手紙は、私の思いもおよばないものでした。手紙には、彼女が私の罪のために泣いたということ、それから、私も彼女も神様の前ではまったく同じ罪人であり、イエス様はこの私たちの罪のために十字架にかかられ、それゆえ、私たちの罪はすでに

救されていることなどが書かれていました。そのころから、私のイエス様への思いは少しずつ変化しはじめたようでした。

そのうち、私たちは互いに結婚したいと思うようになりました。旧知の間柄である私たちの結婚は、どちらの両親も賛成してくれ、前途には何一つ障害のない幸せな縁談であるように思われました。しかし、そのうちに、彼女の信仰が問題になり、私の家の方に反対が出てきました。また、次第に彼女と私の価値観が違うことも明らかになってきました。彼女の願いは、私がイエス様を信じた後で結婚しようということでした。私の方は、今はイエス様を信じることはできないが、個人の信仰の自由はあるのだから私の家が反対するのはおかしい、きっといつかは分かってくれるから何とか諦めないで結婚できるように頑張ろうというものでした。

やっと主の前に砕かれる

しかし、神様は本当に不思議なお方です。自分を第一とする私の生き方に、とうとう神様から鉄槌が加えられるときがやってきたのです。それは一九六九年三月十二日の雪の降る朝のことでした。自転車で山道を登っていく私が上から降りてきた対向車の幼稚園のマイクロバスに衝突して、後方遠くへ飛ばされてしまいました。そのとき、雪の田圃に投げだされた私は、何の血も出ていない自分を見て、瞬間「俺はなんて運がいいやつだ」と思いました。しかし、それはその時だけで、結局ムチ打ち症のため、二ヵ月半余り入院するはめになり、その後の一年余りの闘病生活の中で、かつて中学時代に私を悩ませた死の問題を、今度は自分の生身の体を通して繰り返し

考えさせられるようになりました。私のかたわらには彼女が私にプレゼントしてくれた一冊の聖書がありました。その扉には彼女の手で、「聖書は私を罪から遠ざけ、罪は私を聖書から遠ざける」という言葉が書き込まれていました。その聖書を読んでいるうちに、自分がかつて父を無視し苦しめたという罪の自覚が初めて出てきて、いてもたってもいられなくなり、入院していた佐野市の病院から長距離電話で父に許しをこい、和解することができました。

その後退院しましたが、ムチ打ちの後遺症は一進一退の状態が続きました。気の小さい私は、この先結婚しても子供が与えられるのだろうかと漠然とした不安をもっていました。ちょうどそのようなとき創世記を読んでいて、主がアブラハムに星空を示して子供を与える約束をなさる場面にいきあたり、私もアブラハムと同じように主を信じる信仰が欲しいと思いました。

彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。（創世記　15・6）

翌朝、アブラハムも見た星空を見ようと、当時下宿していた洋館の外に出ました。夜明け前の冬の空には無数の星々がきらめいていました。その空を仰ぎ見るうちに、私は神様の大きな愛に圧倒されてしまい、目にこそ見えないが生命の与え主、造り主のお姿がはっきりわかりました。「神様、私はあなたがおられるのに、今まで神様を無視して生きてきました。本当に申しわけありません。赦してください」と、その畑の一隅にひざまずき、声に出して謝りました。こうしてイエス様の救いを受け入れ、一九七〇年三月に洗礼を受け、四月には両親も結婚を許してくれ、教会で結婚式をあげました。

教会奉仕のこと

結婚後、春日部にある教会に出席し、教会の方々と信仰をともにする生活にはげむようになりました。そのうちに献金を管理する立場の役員に選ばれ、教会会計のために日曜だけでなく平日も時間を使うという忙しい奉仕を続けるようになりました。牧師に重んじられ、教会の方々にも信頼されましたが、知らず知らずのうちに、イエス様の十字架を仰ぐより自分の信仰の力に頼る生活にはまり込んでいきました。伝道会になると一生懸命に人々の名前を上げてイエス様を信じ救われるようにと祈りました。教会は急速に人数が増えてきて喜びも拡大しましたが、一方、教会の維持管理に役員の責任はますます重くなっていきました。ときとするとその重圧に押し潰されそうになるのですが、歯を食いしばって頑張り続けました。

父が天に召されて

その頃、結婚式には出席してくれましたが、教会生活に忙がしくしている私達といつしか疎遠になっていた私の実家の両親と、狭い私の家で同居をしなければならない事態が発生しました。予期しない父の痴呆症発病でした。父は八ヵ月後、故郷を離れた埼玉県の毛呂山の病院から天に召されていきました。この父の死の出来事は全く突然のことで、私はその死に目に立ち会うことができませんでした。日曜日に家族一緒の礼拝を終え、何も知らずに病院に行った私を待ち受けていたのは、父の変わり果てたなきがらだったのです。主はすでに地上で私達家族に死の六日前

に、父とともに頭を垂れて神様の前に出てイエス様がともにいてくださるように祈ることを許してくださっていました。また、精神的に混乱状態にあった父が、その時には正気に戻され、私達の家族のことを心から気遣ってくれ、家族全員が平安に満たされた幸いな一時を病院内で過ごさせていただきました。死後、遺された日記を初めて見るにおよび、父が必死になって私の信仰や福音を知ろうと努めていたことを知り、主ご自身がこのような方法で父を憐んでくださったことを思うのです。私は、最晩年に一人息子の私の家族との同居を望みながら果たせなかった父、土地問題で裁判が不調に終わり身も心もボロボロになった父を、主が憐んでくださり、私達家族より一足先に永遠の故郷天国へ召してくださったことを確信し深く深く感謝しました。またそれだけでなく、父の看病を通して、私達夫婦と母との間にもイエス様は介入してくださって和解へと導いてくださいました。その上、父が病のなかで購入した隣家が、十年後にキリスト集会の家庭集会の会場として用いられるなどとは当時は思ってもみないことでした。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

教会を出て

それから十年後の一九九〇年五月、私は教会を退会しました。退会するちょうど一週間前に、私の家で、ベックさんが来られての最初の家庭集会が行なわれました。およそ百名の方々が集われました。私は我が家で家庭集会が開かれることには大反対で、妻に対しても離婚を口走ったり

しました。私には教会を出る意志が全くなかったからです。この当時教会は、さまざまな文化事業、音楽会、英会話、結婚式場などに手を出し、信者の教会生活はその事業を運営するための奉仕活動が中心になってしまっていましたので私は不満でしたが、それでも聖書の言葉が中心にあればその問題は解決するし、それに何があろうと神様に立てられた牧師や教会に背くことは背教である、と考えたからです。ところが家内は、家庭集会の件は主から出ていることだとさかんに言っていましたので、私の考えと真っ向から対立し、夫婦の関係は険悪なままで家庭集会の日が来てしまいました。

しかし職場から帰って家内の報告を受けたとき、私はびっくりしました。出席者は百名以上というのです。当日、私の家にどうしてそんなに人が入ったのか信じられないことでした。その時から今日まで、家庭集会は休むことなく毎週続けられていますが、主を求められる多くの方々が集ってこられるのです。聖書には、イエス様がお話をなさっているとき、あまりにも人が一杯で、中風の人は友人に運ばれて屋根を剝がして上から吊り降されたと書かれていますが、家庭集会のたびにそれに近い状況になるのです。

この事実は私にとって、これらすべてを主がなさったことを示す決定的な証拠に思われました。私は、それまで二十年間集っていた教会を去ることを、ようやく決心しました。今ふりかえってみますと、父が召されるときも嵐のような八ヵ月でしたが、教会から家族で出るときには、最初は夫婦の間で、次には子供たちと私達夫婦の間で、涙、怒り、悲しみ、不信が渦巻き、ただ主に祈るのみでした。しかし、神様は本当に真実なお方です。私たちがすべての事柄にまさって主イ

エス様だけにしっかり頼り、結びつくことを望んでいらっしゃったのです。私が二十年間、教会のなかで身につけた宗教生活は、人間である牧師を恐れるだけの宗教家のそれでした。主がなさってくださった一つ一つのみわざがはっきりと分かるはずなのに、主を恐れあがめる生活ではありませんでした。私は教会生活でボロボロになりました。主によって救われたはずの私が、主イエス様を排除して、いつのまにか人間的な知恵に頼る伝道をし、表面上は敬けんを装いながら、内側では自分と同じように教会に奉仕していない人々を裁いたりしていました。

やがてその後、キリスト集会に導かれてベックさんのメッセージや皆さんのお話をお聞きするたびに、私に迫ってくる主のお言葉は「あなたは私を愛しますか」という言葉でした。私は、自分がイエス様を少しも愛していませんでしたので、このことが一番よく分かりました。愛していないのだから、ただ泣いてばかりいました。かつては主を知らないで、主を無視した生き方をしていて、主のご存在が分かったとき悔い改めましたが、今度は、主を知っているのに無視して自分の力に頼って生きてきたことを徹底的に悔い改めさせられました。私自身が教会のど真ん中に座り続け、人々が主イエス様のみもとに来るのを妨げていた事実が、はっきりと分かるようになりました。

「見よ。わたし（主）は自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。」
（エゼキエル　34・11）

主のお取り扱い

初めのうちは家庭集会は春日部で、日曜礼拝は吉祥寺キリスト集会でという生活が続きました。そのうちに春日部でも日曜礼拝をしたいと願うようになり、皆さんで祈り始めました。主は祈りに答えてくださり、私の家から歩いて二分とかからない幼稚園が、理事長さんのご好意で借りられるようになりました。礼拝のあとの福音集会のメッセージも、吉祥寺からキリスト集会の方々が来てくださることが確定しました。ところが私は、九月からの日曜礼拝開始を前にして、本当に自分たちだけで礼拝を捧げられるのだろうかと不安になりました。それまで二十年間、牧師に頼って教会生活を過ごしてきたこともあり、「ああこれからは牧師のような苦労を自分もするのだ」と思うと、それまでキリスト集会に出て自由だ自由だと喜んでいたのも忘れて、急に両肩に重荷を担ったようで苦しくなってきました。そんな私にキリスト集会の池田さんは、耳にタコができるくらい次のみ言葉を語ってくださっていました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。

（詩篇　37・5）

また、神様はさらにていねいに私に分かるように聖書のみ言葉を示してくださいました。

あなた（主）は、いけにえや穀物のささげ物をお喜びにはなりませんでした。あなたは私の耳を開いてくださいました。あなたは、全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、お求めになりませんでした。

（詩篇　40・6）

本当にその通りでした。私の内側には、まだ自分の力でキリスト集会を維持していこうという思いが残っていたのです。主はその罪を私に示すためにご配慮をもって導いてくださったのに、自分がやらねば誰がやるのだという、主を退ける傲慢な私の罪が心の中にあることを次々に示してくださいました。

イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

（マタイ　16・23）

今でもこのペテロのように、私は自分というものがすぐ出てしまうのですが、「人間の組織である教会」から「主のご栄光だけが現わされることを祈るキリスト集会」に導き出されて、やっとそのまちがいが分かったのでした。聖書のみことばは次々に私自身の罪がいかに大きいものか、語りかけてくるのでした。

数えきれないほどのわざわいが私を取り囲み、私の咎が私に追いついたので、私は見ることさえできません。それは私の髪の毛よりも多く、私の心も私を見捨てました。

（詩篇　40・12）

このようにして、私は自分が神様の前で全然駄目なものであることが分かりました。しかし、

こんな自己中心のどうしようもない自分を、主イエス様は十字架にかかって赦してくださったのです。今までの苦しかったことが次々に思い出されました。しかし主イエス様は、私の叫びにならないうめきを常に聞いていてくださったことが一つ一つ分かり、ただむせび泣くだけでした。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。

（詩篇　40・1、2）

だから新しく始める礼拝は、皆がこの心をもって主をご礼拝すればいいのだと思いました。今までの自分の重荷は、すべてがもともと負いきれない重荷を担おうとすることからくる苦しみであることがよく分かりました。主の救いがすべてですから、主ご自身だけをお慕いすればいいことが分かり、やっと本当に魂の自由を得ました。これは私一人だけのことではなく、キリスト集会に集う皆さんの真実な気持ちだと思います。十字架のイエス様をいつも主と仰ぐと、本当に自由があるのです。

あなたを慕い求める人がみな、あなたにあって楽しみ、喜びますように。あなたの救いを愛する人たちが、「主をあがめよう。」と、いつも言いますように。（詩篇　40・16）

一九九一年、父が召されて十年ぶりに春日部に来た母がキリスト集会に出席し、ベックさんのお話を聞くことができました。義母方の従弟も八王子の家庭集会に出席し、導かれつつあります。

西荻の実母の従兄の家にも福音が伝わり、姑さんと妹さん夫婦が救われ、一九九二年に洗礼を受けました。また、かつての同僚や教え子の中にもキリスト集会に出席し、主イエス様を賛美するものに変えられる方々が増えています。しばらく信仰から遠ざかっていた旧友の力石君も、キリスト集会に導かれ、互いに祈りあう友となりました。実家のある彦根にも、松浦さんのお宅で家庭集会が開かれるようになり、家内の両親の家族のところにベックさんが訪ねてくださいました。二十年かけて伝えられなかった親族友人への福音の結実を思うとき、主イエス様はすべての人を救いたくてしようがないのだ、それを妨げていたのは、先に救われた私自身のどうしようもない傲慢さであったことを知らされ、ただただ主のみ名を恐れあがめるばかりです。

神の家族へ、新しい出発を求めて

結婚生活も早や二十三年、五人の子供も主に守られて成長してきました。子供たちはそれぞれ私達両親との葛藤を経験しながらも、少しずつ主イエス様に従うことの喜びを経験しています。かつての私がそうであったように、子供たちもやはり父親である私に反抗しました。一九九一年の十二月、三男の満が高校受験を控えて私に叱られ、「あんたは俺の親じゃない。拾ってきたんだろう」とひどく悪たれをつき、親の言うことをガンとして聞き入れないことがありました。私は愛するわが子にそのようなことを言われ、腹が立ち、殴っても殴りきれない思いでその悔辱に耐え切れず、「確かに私はお前の親ではない」と言うなりそこを立ち去りました。すると、彼は大声で泣き叫び「お父さん、ごめんなさい」と謝ってきました。この息子とのできごとを通し、

背く者に侮辱された時の父なる神様のお気持ちがよく分かり、神様はどんなに私達が背こうとも神様は神様なのだと体験的に知りました。それから数日後に西軽井沢のゲスト・ハウスのバイブル・キャンプに共に参加しました。ベックさんが二年近く家庭集会にお見えになっているのに一度も話をすることのなかった彼が、相模大野の神沢君と一緒にベックさんからイエス様のことを聞き、部屋を出てきたとき顔は輝いていました。彼はその前の日、西軽井沢国際福音センターの天井に張る重いボードを、全国各地から集まってきた老若男女の方々と共に力をあわせて運び、神の家族の一員であることを体験させていただいたばかりでした。春日部キリスト集会に出席する皆さんや京都、横浜の皆さんに祈られていた息子を思うとき、地上にあって「家族」とは何かと子供の頃から悩み続けた私への主からのご解答に、心から感謝するのみです。

「神のみこころを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」
（マルコ　3・35）

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
（ピリピ　3・20）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
（使徒　16・31）

主イエス様がくださっている約束のみことばを信じ、神様の家族の中にひとりひとりが加えられる日をはるかに仰ぎ見て、この地上の生涯を全うしたいと望んでいます。

▼ホームステイしていたマイクさんと和子さんの実家を訪ねて。





▲左から和子さん、友人の力石さん夫妻と。彦根家庭集会で。

主の御名を呼び求めて

吉田和子

一九四五年滋賀県に生まれる。甲良東小、甲良中、彦根東高、滋賀県立短大卒業。甲賀学園に保母として勤務の後退職。家族は夫浩さん、長男直一郎さん、次男信夫さん、長女結実子さん、三男満さん、次女喜実子さん、母富美さん。

人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。

（箴言　20・24）

私は琵琶湖の東、豊かな自然に恵まれた甲良町に生まれ、妹二人弟一人、四人兄弟の長女として育ちました。第二次世界大戦の終戦直後で、田舎のことですから食料品もふんだんにあり、食べるにこと欠くこともなく、家族も健康で、成人するまで質素で平凡な暖かい家庭生活を送ることができました。このことは今、どんなに感謝しても感謝しきれません。

小学校四年生の春の遠足の翌日のこと、突然左足が痛くて歩けなくなりました。結核性関節炎と診断され、十カ月の病床生活を送ることになりました。十歳頃というと親からはなれて友達どうしで何のくったくもなく遊び放題という年頃です。元気な友人が見舞いに来てくれるとうらやましく、ギブスベッドで寝たきりだったり、少し回復して青白い顔をして松葉杖をついている自分がふびんに思えました。勉強も運動もおくれ、そのうち友人もいなくなり、今思うと短い間だ

ったのに当時の私にはとても長くて辛い孤独な経験でした。その頃、伯父から何冊かの児童文学書をもらい、心が潤されました。その中の一冊に「アンクル・トムの小屋」がありました。奴隷制度の中で苛酷な労働を強いられ、動物のように鎖につながれ人間扱いされなかったトムたち。白人の非情な仕打ちに甘んじるだけのトムたち。私の心は悲しみにうずき、はりさけそうでした。このような場面とともに深く心に残ったのは、トムがイエス様にお祈りしたり、お話したり、エバと天国の話をしたりする場面でした。その後二十一歳になって、はじめて自分でイエス様にお祈りしたときも、この場面を思い出しました。イエス様は苦しみのときには慰めてくださり、救い主として天に迎えてくださるお方だったのです。

中学、高校と成長するにつれて「自分はなぜ、何のために生きているのか。本当の幸せとは何なのか。自分を本当にわかってくれる人はいるのか。どうしたら人と信頼しあえるのか」と次々に悩み、周囲を見回しては人生の虚しさが目につくようになり、他の人はそんなことで悩んでいないように見えて一人で殻にとじこもっていくようなところがありました。しかしその半面、明るいところもあり、そのような悩みは、私が毎日生きていく一瞬一瞬に最善を尽くしていけば自ら解決するだろうという結論に達し、「頑張って生きていくしかない」と思いました。その頃、神様の存在を教えてくれる人は誰もいませんでしたが、「クォ・ヴァディス」や「罪と罰」、「狭き門」、「ベン・ハー」などを読み、心をひかれ、中でも神様を中心とした男女の愛、特に女性の愛に深く感動し、西洋にいらっしゃる神がどうして日本にはいらっしゃらないのだろうなどと思ったりもしました。高校一年の時、仲よくしていた山本（和井田）嵩子さんに初めて教会という

所につれていってもらいました。そこには何かがありそうで続けて行ってみたいと思いはじめた頃、父から「家は仏教だから止めるように」と言われ、行かなくなりました。私は幼ない頃からお寺の日曜学校に行き、毎晩家族でお経をあげたりしましたし、近くには天照大神の親が祀ってあるという多賀大社があり、行事があるたびに行っては拝んでいました。生まれた時から神社仏閣を大切にする地方に育ち、母はよく「何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」と西行法師の句を口にしていましたし、私も何でもいいから拝んでいれば不幸にならず、幸せがくるだろうと、漠然と考えていました。

私は小さい頃から孤児院に勤めることが夢でしたので、大学卒業後、家から二時間ばかり離れた、緑また緑の丘の上にある養護施設に、住み込みで勤めました。四季おりおりの花が群をなして咲き乱れ、百合の咲く林や野原など花園のようでした。子供たちは小学生から中学生まで六十人位で、私たち保母は七人位の子供の親代わりをつとめるのです。実の父母のいない幼な子たちは、けなげに共同生活にとけ込み、大家族の中で過ごします。私は毎日毎日「生きている」という充実感があり、こんなすばらしい所に来られたことを心から喜びました。短大の先輩で今は天に召された平野幸子さんも同じ保母として働いておられました。彼女は誠実な方でしたから、とても尊敬していました。彼女からよくイエス様のお話は伺っていましたが、私にはわからないことだと決めてかかっていました。しかし、楽しく生きがいのある仕事だと思って喜んだのもつかの間、私には犠牲的精神がない、子供たちが手を広げて待っているのに私は手をさし伸ばすことができないと悩むようになり、全力を尽くして今日一日を頑張ろうとするのですが、自分の思い

どおりにはいかず、挫折してしまうのです。どうしてもやらなければ、と自分を励ましても、できなかったときには無力感と虚しさが残ります。平野幸子さんも人一倍子供のこと、自分のことで悩むのですが、けれど彼女には何かがあるのです。彼女は子供たちにとって空気のような存在で、いつも子供たちを深く受けとめ、心の動きをつかみ、いざという時には子供にすべてを捧げて仕えることができるのです。私は仕事のジレンマに陥り、とうとう自分にあると思いこんでいた自信を失ってしまい、ほかにもいろいろな精神的な悩みがあり、どこにも逃げ場が見つからず苦しみました。高校時代の山本嵩子さんの洗礼式に名古屋まで行ったのもこの頃で、神様に頼れる彼女がうらやましく、私も何かにすがりつきたい思いでした。その夏に、奥日光のバイブル・キャンプに幸子さんが誘ってくださり、期待もせずに参加したのでした。イエス様のお話を聞くうちに、やっと幸子さんからいつも聞いていた話の意味がわかるようになってきました。天地万物の創造主である唯一の神様、その神様のひとり子であられるイエス様が、罪人の私のために身代わりとなって十字架にかけられ、死んでくださったのでした。自分の力に頼り、がんじがらめになっているみじめで哀れでボロボロの私。こんな私を愛して、私の命を救うために死んでくださったとは……。私はイエス様を知らないで今まで生きてきました。わがままで人を憎み、裁き、批判する高慢のかたまりであった私。小さい時母のさいふからお金をとったこと。父に反抗してしばらく口もきかなかったこと。母や妹、弟たちに冷たい言葉しか言わなかったこと。失恋してあまりにも苦しいので絶望し死にたいと思ったこと。自分のためにしか子供たちを愛せなかったこと……。沢山沢山でてきます。イエス様、こんな醜い私のために何度もむちで打たれ、ののし

られ、十字架にかかって死んでくださったのですね。ありがとうございます。私を赦し、私のすべての重荷を負ってくださったことを心から感謝いたします。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。（ガラテヤ　2・20）

それからはすっかり世の中が違って見え、今までは自分の管理者は自分だと思っていましたが、もう今からはイエス様が私の内にいてくださるので何の心配もなくなり、毎日が嬉しくて仕方がありませんでした。幸子さんはとても喜んで、京都の教会へ連れていってくださいました。父母に「今までのわがままを許してください」また「イエス様を信じる信仰を持つことを許してください」と書いた手紙を出しましたところ、案の定大問題になり、家庭騒動になりました。私はどうしても仏壇を拝むことができず、父母とは平行線のままの状態が続きました。これだけは親不幸と言われても仕方がなく、妹や弟たちも私のために悩みました。一時は苦しくて教会に行けませんでしたが、イエス様は私の内に生きていてくださいましたので、やがて再び信仰を強められ、一年後には家の人に内緒で洗礼を受けました。「嫁入り前の娘が」と大反対でしたが、その頃、父母のよく知っていた今の主人との結婚の話が進み、そのこともあって仕方なく認めてくれたと

いうわけでした。

ここで今の主人のことですが、私が高校の時、弟の家庭教師として家に来てくれていたのです。主人は私のことを気にとめてくれていたらしく、時々手紙をくれたり、本を貸してくれたりしました。でも私たちは、本の読後感や、絵や音楽の感想を交換しあうだけで、ゆっくりと会って話したこともなかったのです。長年お互いに知り合いながら、その頃それぞれの人生で大きな試練を迎えていたのです。私は短大時代に好きな人がいましたが、別れるはめになりました。すべてが虚しく味気ないものになり、将来の希望もなくなったかのように思え、二年位、心はさまよい続けておりました。イエス様を信じてはじめて、今まで自分が抱いてきた恋愛感情はエゴの塊であり、不純で汚れていたことに気付かされ、その痛手からすっかり解放されました。イエス様が導いてくださるのなら、結婚もイエス様にお任せしようと思うようになりました。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――

（エペソ　2・1～5）

そして長年の友人だった今の主人にも、どうしてもイエス様のことを知ってもらいたくて、短い手紙を書きました。この時から、聖書のみことばをお互いが交換するようになりました。いえ、みことばが私たちを導いてくださったのです。そして私たちのそれぞれの過去がみことばの光の前に照らし出され、苦しくなり、打ち明けざるをえなくなりました。主人の過去の罪を知った時、すぐ、「私も同じ罪人です。イエス様は私たち一人一人を赦し受け入れてくださいます」と、心の中で叫んでいました。

それぞれの家庭との関係で、私たちが結婚に至るまでには多くの動揺がありましたが、主はますます結婚への確信を与えてくださり、京都の教会で結婚式を挙げさせていただきました。そして私たちは主人の職場がある足利市に落ちつきました。

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。（詩篇　127・1）

このみことばをいただいて、新生活が始まりました。それから二十二年、主のお恵みなしには生むことも育てることもできなかった主の賜物である子供たちを、主は五人も与えてくださいました。

私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。（詩篇　139・15、16）

しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。
（ローマ　9・20）

子供たちは周囲の多くの方々に助けられ、祈られて、育まれました。一人一人にはさまざまなことがありましたが、長男直一郎は十六歳の時に、次男信夫は十七歳の時に、長女結実子は十六歳の時に、洗礼を受けてイエス様への信仰を証しする恵みにあずかることができました。三男満と次女喜実子も主を受け入れておりますが、一日も早くこの恵みにあずかれるようにと祈っています。親にとって子供たちが個人的にイエス様に出会って罪を赦され、苦しみ悲しみの時に慰めていただき、イエス様といつも一緒に歩めることの喜びを知ることは、何ものにもまさる喜びです。母として子供たちに十分に応えることができず、子供の心をわかってあげることのできなかったこんな者ですが、イエス様、どうぞあなた様があわれんでくださり、子供たち一人一人をみ心のままにお取り扱いくださいますようにと心から祈る毎日です。

彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない。　（ローマ　9・33）

話は戻りますが、結婚後も主人の実家とは疎遠になっていました。一年に一回帰省するのに、辛い思いをしました。イエス様だけを仰ぎ見ることができなくて、人を見たり自分を見たりして

落ちこみ、平安のない日々でした。教会の皆さんとの仲のいいおつきあいが唯一の慰めでした。結婚して十二年目、五人目の喜実子を妊娠していた頃、主人の父は一人っ子の息子を頼って郷里の彦根から春日部に出てきました。すでに老人性結核と痴呆症を病んでいました。はじめは子供たちも大喜びでしたが、だんだんと様子が変わっていき、おじいちゃんに合わせてゆくと混乱状態がひどくなっていくようになってしまいました。主人としても、父を長らく一人で置いておいて淋しい思いをさせていたので、何とかしようと必死でした。このために、朝早くから聖書を読み祈っている主人に心も合わせず、かえって逃げ出したくて、子供たちと私だけで別居がしたいと言い張りました。こんな一大事の時に妻から冷たくされ、主人に本当に悲しい思いをさせてしまって申し訳なく思います。遠く離れていた時は「おじいちゃんとおばあちゃんがイエス様を信じますように」と、いつも子供たちと祈っていましたのに、いざ近くにこられると「私たちの家庭をこわさないで」とばかり、自分本位の考えになってしまうのでした。そのうち主人の父は、母も呼びよせました。主人の母から「今までのことは許して」と謝られたのに、私の心はかたくなでした。何ということでしょう。以前は何とかして結婚を認めてもらおう、お母さんに仕えなくてはと小さくなってお母さんに接していた私が、今度は逆になり、心の中では「そんなに簡単に許せるものですか」と反発するありさまでした。

こんな状態の中で、父は正気だったら買えない隣の家を買ってくれましたが、入院したためにその家に住めないまま、天の御国に召されていったのです。召される一週間前、六カ月になった喜実子を見せに家族全員で遠くの病院まで行きました。子供たち一人一人を「おう、おう」とい

とおしそうに見ながら本当に嬉しそうで、作っていったおはぎを三個も食べてくれました。皆でお祈りをした時もいっしょに祈り、帰り際には私たちの姿が見えなくなるまで手を振り続けてくれ、私たちは何ともいえない平安をいただいて帰ってきました。死因は心不全で、苦しみもなくあっという間のことだったそうです。今はすべての苦しみから解き放たれ、天国のイエス様のみもとで安らいでいることを思い感謝しています。

「その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」（イザヤ　40・2）

嵐のような八カ月が過ぎさり、静かな私たちだけの家族に戻ってふと我に帰った時、神様は私たちの上に大きな恵みを示してくださり、また私の醜い姿をあらわにされました。私は「父母に対する愛が一かけらもなく、冷たい嫁でしかなかった」のでした。私自身の高慢のために父母を拒み、主のもとに来るのを拒んでしまっていたのでした。持っていると思っていた信仰はくつがえされ、悔い改めて、もう一度主のみもとに立ち返らされたのです。

私の悩みとさすらいの思い出は、苦よもぎと苦味だけ。私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。…私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。…主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。主の救いを黙って待つのは良い。…主はいつまでも見放してはおられない。たとい悩みを受けても、主はその豊かな恵みによって、あわれんでくださる。

（哀歌　3・19、20、22、25、26、31、32）

その後お母さんにも謝ることができ、私の心ははれやかになり、主のあわれみに感謝しています。

それからの十年間というものは、今までにもまして教会生活に没頭していきました。教会は、わが家にとって絶対的な存在でした。家から十分のところにありましたので、よく通いました。教会が大きくなってくると、いろいろなイベントを催すようになりました。英会話教室、ピアノ教室、ボーイスカウト、キリスト教式の結婚式などの教会事業がどんどん拡大され、祈り会でのカウンセリングの勉強会、また聖書の勉強会や研究会など、本来の家庭集会がおろそかになり、日々聖書の生きたみことばを食べて主のみを見上げて生活するというよりは、教会活動の奉仕また奉仕の生活に追いまくられていくようになりました。その頃わが家に住んでいた英会話教師のランさんに、「日本の教会はまちがっています。教会より家族が第一ですよ」と言われたのもこの頃のことでした。奉仕また奉仕で疲れきって家に帰ると子供たちが、「お母さん、遅いよ。僕たちと教会とどっちが大切なの」と痛いところを突かれ、「ああ、教会の大きな歯車はいつ止まるのだろう」と思いながらも、自分が止めようとすればいつでも止められたはずなのに、無我夢中で高慢にも先頭に立って頑張っていました。

そのような中でも、わが家で開いていた家庭集会では主にある親しい集いが続けられ、毎週皆さんが来てくださるのが楽しくて、どんなことがあってもこれだけはと開き続けていました。ある時、長年イエス様や聖書のことを知りたがっている方から、「あなたの忙しさを見ていると、

私はとてもクリスチャンにはなれないわ」と言われたり、ある方から「教会にお世話になったから奉仕はしますが、教会の会員にはなりません」と言われたり、そんなとき私はどうしたらいいのかわからなくなってしまいました。教会はなによりもまずみことばを聞く場であり、奉仕をするだけの場ではないはずですが、自分が間違った生活をしていることにはっきりと目覚めず、どうして多くの方々を教会におつれすることができないのかとひとりで悩んでいました。自分が的はずれの信仰生活をしていることによって多くの方々をつまずかせる結果になっていたことは、吉祥寺キリスト集会に出るようになってよくわかりました。その頃開いていたわが家の家庭集会でも、イエス様を受け入れる方々が次々とおこされたのですが、主のみわざ、主のみ名があがめられなければならないのに、私は高ぶって自分を誇ったり、他の人の伝道を批判したりしていました。これこそ神様のお怒りになることでした。救いは主のものであり、私たちは主のみからだである教会の器管にすぎません。自分の力に頼って何とかして教会を建て上げようとするこざかしい私の高慢さを、どんなに主は憎んでおられたことでしょう。後でそのころの方々にお許しをこい、許していただきました。

「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、人々から天の御国をさえぎっているのです。」（マタイ　23・13）

御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。（ガラテヤ　3・3）

このような状態でしたから、次第に、教会でも家でも、人や自分が中心になってしまって、イエス様のご臨在が遠のき、霊的にどんどん飢え渇いていき、教会は私にとって砂漠のように思えるようになりました。

そういうこともあって、「光よあれ」を何冊か読んで、キリスト集会というところに行ってみたくなりました。そしてはじめて、一九九〇年の三月、柏で開かれているキリスト集会に出てみました。「ああ、ここには私の求めていた心の故郷がある。イエス様を信じた時の、あの始めの愛、始めの喜びが、ここにはある」と胸にジーンと迫ってくるものがありました。

この時以来、私の心の中に、切々と尋ねるものが生まれました。「イエス様、あなたを信じた頃のあの喜びは、いったいどこへ行ってしまったのでしょう。イエス様だけを中心とする皆さんとの親しいおつきあいはどこへ行ってしまったのでしょう。たどたどしい祈りでも熱心に祈りあったあの祈り会はどこへ行ってしまったのでしょう。みことばのお約束のみを信じる単純な心はどうなってしまったのでしょう。今の私は、イエス様を以前のように喜びをもって証しできるでしょうか」。これらの問いに追いつめられ、疲れきって主のみ名を呼び求めました。「主イエス様、私が今置かれている教会は、果たしてあなたが望んでおられる所でしょうか。私は苦しくてたまりません。イエス様、私はただあなたについて行きたいのです、私をあなたの所、あなたのみことばの生きて働かれるところに連れ出してください」と毎晩毎晩涙ながらに祈りました。しかし一方で、今までずっと愛し続けた教会の皆さん方や子供さん方と別れるのは、あまりに辛すぎて

苦しみました。

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。」（ヨハネ　6・63）

私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。（Ⅰヨハネ　1・3）

不思議なことに、主は道を備えていてくださいました。教会では、いつのまにか入りこんできていて内密にされていた「異言といやし」の問題が明るみに出され、私たちは教会を出ざるをえないように導かれたのです。この「異言といやし」の問題は、ずっと以前にも一度あって、当時私は深く悩んだことがありました。そのとき、ベックさんのお嬢さんのリンデさんの「実を結ぶ命」という本を読んだことがあって、「異言といやし」はまったく違う霊からくるものだということをはっきりと知らされていたので、今度の問題のときにも、主にあって、はっきりとした態度をとることができました。すべてを主にお委ねして、私たちは教会をでることになりました。（編集注・異言とは、意味のわからない言葉や声を祈りの中に入れることをいい、いやしとはどうしても病気を癒してほしいと主に催促して祈ることをいいます。この「異言といやし」の問題についてベックさんは「実を結ぶ命」の一二七ページで、「…異言を語ったり、どうしてもいやされることを催促したりすることを絶対にしないように忠告いたします。なぜならば、そうする

ことによって、多くの人々は悪魔の支配下に陥ってしまうからです」と実例をあげて明快に書いておられますので、ぜひ、あわせてお読みください）。

ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするとき……

（Ⅱコリント　11・4）

霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。

（Ⅰヨハネ　4・1）

ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。

（黙示　2・25）

すでにこの頃から、キリスト集会のことはリンデさんの素晴らしい証しによってうかがい知ることができ、心の中にほのかな希望のともし火をもやし続けておりました。時至って、私たちの思いもおよばなかった方法で主は私たちを導きだしてくださったのでした。牧師ご夫妻にお手紙を出し、退会を願い出て、二十年間の教会生活にピリオドを打つことができました。

主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。

（Ⅰペテロ　2・4）

「あなたがたに言いますが、ここに宮より大きな者（イエス様）がいるのです。」
（マタイ　12・6）

人が組織した教会でもなく、立派な建物の教会でもなく、ただイエス様「ご自身」が頭であられるこのキリスト集会に導かれたことをほんとうに感謝いたします。私はそれまでがんじがらめに縛られていた身体が解きほぐされた思いがし、自由にされた喜びに主を心から賛美せずにはおられませんでした。

主は私たちによくわかるように、大きなみわざを見せてくださいました。五月二十三日のこと、わが家に百名以上の方々がぎっしりと集められ、ベックさんは「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。」（詩篇127・1）とのみことばによって、私たちが祝福をいただくためのとるべき道をさし示してくださり、長く渇ききった私たちの魂は、主の大きな恵みと祝福に満たされ、心から喜ぶことができました。それまで堅く心を閉ざしていた主人も、その日の様子を聞いて心を開きました。それから三年以上がたちましたが、主は働き続けてくださり、大勢の方々が毎週集ってこられます。また日曜日の礼拝では、イエス様おひとりを中心とし、集われた方々が心を一つにして、イエス様がなしてくださった十字架のみわざをほめたたえ、感謝のお祈りをし、喜びの賛美を捧げます。主ご自身が働いてくださって私たち一人一人を造り変えていってくださるさまが実によくわかります。ベックさんは聖書のメッセージを通して、神の国の奥義

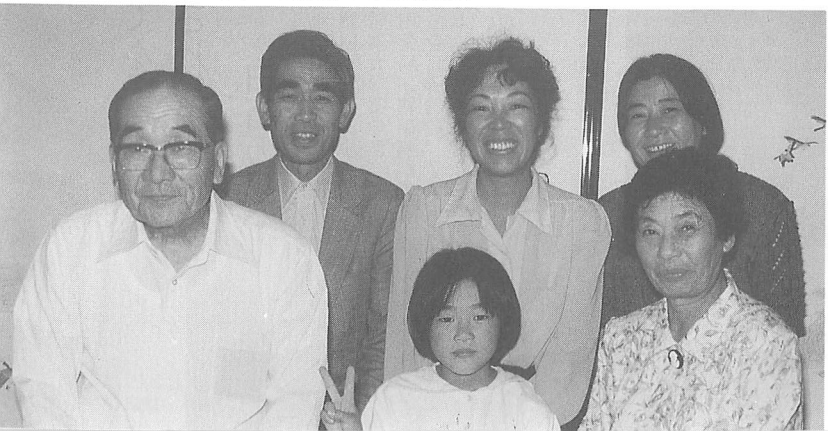
をわかりやすく伝えてくださり、聖書全巻をとおしてみことばからみことばへと私たちを導いてくださり、聖霊の満たしを与えてくださいます。また多くの方々のメッセージも聖霊ご自身が直接働かれるので大きな恵みを受けます。家族や友人が次から次へと救われ、遠くの親戚も救われ、またイエス様を信じて天に召されていく方々の平安と喜びを目のあたりに見させていただき、ただただ主のみ名をあがめ、主のご栄光をほめたたえるのみです。

主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう。

（詩篇　116・12、13）

イエス様が再び来てくださる日の近い今、この詩篇の作者ダビデのように、「主の御名を呼び求め」ていきたいと心から願っています。

▼和子さんの実家で。浩さん、和子さんと父奥川貞一さん、母美恵さんほか。





▲左から康夫さん、万里子さん。軽井沢で。

すべてを益とされる主

白石万里子

一九四二年福岡県嘉穂郡穎田町に生まれる。穎田小、穎田中、嘉穂東高校を経て熊本大学薬学部卒業。持田製薬、上田薬局、穎田病院勤務、結婚後、博仁会共済病院、愛仁病院勤務。家族は主人の康夫さん、父重雄さん、長女直美さん。



▲洗礼の日に。長女直美さんと。

私は一九四二年、福岡県の山村で生まれました。両親は小学校の教師でした。父も祖父も村のお宮から養子にきており、近所の人はお宮の分家としてあつかってくれていました。父は、私が母の胎内にいた時がんで亡くなり、生まれた時にはすでにいませんでした。兄が三人いるのですが、一番上は二十二歳、一番下は十六歳離れています。私は生まれたとき、未熟児でしたから、母には苦労をかけたようです。四歳の頃、母に連れられて出かけた先で、「あの赤ちゃんが育ったのですか…」と、よく驚かれることがありました。病弱で、小学校の間は一年間に一カ月位は休んでいました。けれど学校の先生は皆父母の友人か教え子でしたから、いじめに会うこともなく、高校生になるまで挫折を知りませんでした。母はいつも私に「お前がいてくれてよかった」と言ってくれました。三人の兄も父親代りだといって、それぞれ精一杯のことをしてくれました。しかし高校生になった頃から、私は自分がどういう風に生きていけばよいのか分からず、あれこれと悩むようになりました。家庭も学校もとりたてて問題はないのに、淋しくて淋しくてたまらなくなりました。それは希望の大学に入った後も続きました。そして二十三歳の時にその解決を求めて、はじめて教会の門をたたいたのです。そして一年後に神と出会う体験をしたのです。福岡県飯塚市の教会でした。讃美歌を歌っていた私は突然、自分の心が神とぴったり出会っていることに気づきました。神に見られているとでも言えばいいでしょうか。心の底から喜びが噴きあげてきました。「神に出会った」と皆に証しをしてまわりました。聖書の聖句が心に飛び込んでくるようになり、讃美歌の歌詞はすべて自分の証しのような気がしました。「自分は生きる価値があるのか」と問い続けてきた問いに対して、神様が答えをくださったのです。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。」（イザヤ　43・1～3）

私は主によって造り出された者、主に買いとられた者。主が私を愛していてくださる。だから何もこわいものはない、と思いました。気が小さく、いつも何かに頼り、体格の悪いことや、にきびの多いことなど、人の目を気にして劣等感のかたまりであった私は、その時突然、光の中に移され、解放を感じました。世の中のなりたちがわかり、人間関係がわかり、仕事の段取りができるようになりました。生きるってこんなに楽しいことだったのかと、教会の青年会の活動を楽しみました。やがて、神様にすべてを捧げて生きていきたいと望むようになりました。そんな中で、今の主人との結婚に導かれたのです。ある日、教会で一人で祈っていますと、「遠くへ遣わす…」そんな声が心に響いてきました。帰りますと、今の主人との見合いの話がきていました。お母様がクリスチャンだと聞いて、み心だという気がし、まだ会わないのに私は心を決めていました。やがて結婚にまで導かれて上京し、浦和の教会に移り、さらに三年後、上尾の教会に移りました。主人は未信者ですが、温かくて頼りになる人でした。教会は三十人足らずの小さな教会で、和気あいあい、牧師は人格者でした。私は心から尊敬して楽しい教会生活を送りました。

私は娘をみごもった時、それまで一点の曇りもなかった平安な心の中に思い煩いが湧いてくるのに気づきました。それは今思えば、主が授けてくださった賜物であるはずの我が子への執着でした。私は自分自身を主に捧げているつもりでした。また、他のどんなものでも主に捧げられる、だけど我が子だけは捧げられない…。私は我が子のことが心配で心配で仕方がなかったのです。主はこのような私の心をよくご存知でした。

長女の直美は、私に心配をかけることもなく、順調に育っていきました。しかし、つづいて生まれた長男の浩之のときには、次から次へと問題が与えられるのです。まず妊娠中に私のわがままから流産気味になったこと、またかぜやその他の病気で大量の薬を使ったことなどが心配の種でした。だから浩之の発達が遅れ、自閉気味で集団行動ができないと保育所の保母さんに言われた時、私の中の心配と思い煩いが、いよいよ形をとって現実になったのだ、と思いました。それは祈っても祈っても襲ってくる不安でした。その頃は、みことばに信頼する時に与えられる力を今ほどは知りませんでしたし、何とかこの子を自分の力で育てあげねばと思って気負いこんでいました。ですから、小学校に入る前から、数や文字を一生懸命教えました。幼くてまだ日常生活の基礎がきちんとできていない子供なのに、勉強の方から教えていったのです。それは主人の希望でもありました。そしてリピート学習法というのを利用することによって、コツコツ型の彼はどんどん成績を上げていきました。時々は失敗があり、またクラスの中でいじめも受けましたが、何とか学校についていけるようになりました。集中力には優れていましたので、宿題に特定のテーマが出て、他の生徒が投げ出してしまうような場合でも、彼は最後までやりとげて自信もつ

けてきました。けれどその実は、いつも私が陰で指導をしていたのです。彼は勝気なところもありましたが、とても純真で、素直な子供でしたので、先生や私が一を要求すると、二と応じてきました。私は「こんなにできるんなら三までしてごらんなさい」と要求し、実は彼が二をするためにどんなに苦しんでいるかすら分からない愚かな母親でした。この子には私が必要だ、私が教えてやらなければ、と思っていました。教会学校にも欠かさず出席し、小学一年からずっと皆勤でした。クリスマスにはいつもメダルをもらいました。

周囲の期待に自分を合わせようと、いつも背伸びをしてきた息子は、実は中学に入った時点で疲れ切っていたのです。それに加えて、対人関係や生活上の体験が薄かった息子は、よその小学校の生徒もいっしょになった中学で、しかも自我を主張しあう、るつぼのようなクラスの中に突然ほうり込まれて、どう対処していいか分からなかったのでしょう。入学式当日に、校長先生が式辞の中で「今日から乗車券はもう大人並みなのだから、大人としての自覚を持つように」と言われると、「ああ自分はもう大人として扱われるのだと思って胸がどきどきした」と後で言っていました。嘘がつけず、本音と建て前のちがいなど分からない子でした。勉強も部活も友人関係も、完全にやりとげなければと思って緊張していたようです。その陰には、それを要求している私の存在がありました。浩之はもともと集団行動やとっさの判断が苦手な上に、新しい環境の中での緊張続きで、こだわりのある異常な行動をとるようになりました。それをきっかけに、はげしいいじめが始まりました。それでも私達両親は浩之に通学するようにと言い続けました。一年間はなんとか通学したのですが、中学二年の二学期から、それこそ本当に動けなくなってしまい

ました。その少し前のイースターの日に、牧師の勧めもあって、自分も承知して洗礼を受けていましたが、彼にとってはどうやら形だけのものでした。その頃私は一つの聖句を与えられていました。

「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」（ヨハネ　11・4）

私はこの聖句の中に、死ぬという預言が含まれているというベックさんのメッセージを後で聞いてびっくりしました。前の教会で使っていた口語訳聖書では「死ぬほどのものではない」となっていたので「死なない」という意味だと思いこんでいたのです。浩之は家に閉じ籠っている頃、こう言ったことがあります。「お母さん、僕はずっと教会学校に行っていたのに、イエス様が生きているなんて一度も教えてくれなかったじゃないか」と。私も教会学校のお手伝いをして、よく紙芝居や人形劇をやることがありましたが、生きておられるイエス様との交流はあまりなく、生きておられるイエス様とは遠い者になってしまっていました。「お母さん、僕は小さい時、よく、ぼうっとしていたろう、あれは『空の青はきれいだなあ、葉っぱの緑はきれいだなあ』と心の中で楽しんでいたんだよ。それをお母さんは勉強、勉強と僕に言った」と語ったことがあります。私は浩之に心からあやまりました。「勉強、勉強と言ってごめんね。お母さんがあんなことをしなければこうならなかったかも知れない」と。浩之は「いいんだよお母さん。イエス様はお母さんの代わりに死んで赦していてくださるんだよ。心配しなくていいよ」と言ってくれました。

私はその頃、午後一時半までの仕事をしていました。職場はとても楽しくて、私の気に入っていました。私が浩之に勤めをやめようかというと、「お母さんが楽しいんならやめなくていいよ。僕のためにやめるということはしないでくれ」と言います。でもある時「お母さんがやめたいんだったらやめてもいいんだよ」と言ったことがありました。あの時、息子はほんとは私にやめてほしかったのかも知れません。けれど私は、自分が家にいたら鬱状態になりそうで、自信がありませんでした。半日間健康な人達とふれあっていることで、どうやらバランスがとれている、とかってに思いこんでいたのです。今思うと、あの時にやめて、吉祥寺のキリスト集会に集ってほんとうに主を土台とした生活をしていれば、事態はちがっていたのではないかと思います。このような警告をいただいた時、私は主の前にひれ伏すべきだったのです。今までの罪を悔い改めるべきだったのです。それなのに、見る目も聞く耳も持たない傲慢な母親でした。

「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

（ルカ　22・31、32）

これは、自転車に乗って買い物に行く途中、突然胸に響いてきたみことばでした。このように主が語りかけてくださったにもかかわらず、その頃の私の信仰は死んだものであり、律法的な生活の中でいつも忙しく働いて休まずけんめいに努力すること、それが主に喜ばれることだと思っ

ていたのです。聖書は自分に合わせて読むものだと思っていました。人間の方が聖書より大きかったのです。神を神としてあがめず、従うことを知りませんでした。

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。」（ヨハネ　6・63）

この肉と、御霊の区別がつきませんでした。旧約聖書はめったに開きませんでしたが、時々開く詩篇の言葉にははっとすることがありました。まるで私自身のことが書かれていると思いました。でも一方で、これは三千年も前のダビデの讃歌だ。素晴らしいけれど現代に生きる私とは何の関係もないと思っていました。神から私へのみことばとして読んではいなかったのです。まったくの不信仰でした。そして私は、自分の信仰は何もまちがっていない、と思いこんでいたのです。一番大切なのは自分でした。祈りはいつも、一方的な「息子をいやしてください」という祈りでした。私は私の幸せのために、神にいやしを要求していたのです。その頃私は、みことばを読んだ時に与えられる平安と、現実を見ておちいる不安の間を行ったりきたりしていました。

ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。そういう人は、主から何かをいただけると思ってはなりません。そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。

（ヤコブ　1・6～8）

息子のためならどんなことでもしようと思って、キリスト教関係の相談所を尋ね歩きました。

どこでも最初は希望があるように見えて、結局は何の実りもありませんでした。私は主の前に静まることをせずに、子供を変えてくれそうな所を次々と探し求めていたのです。そうしていつの間にか、五年近い月日がたってしまっていました。そしてやっと、吉祥寺キリスト集会に導かれたのです。その頃ある友達から「光よあれ」の本をいただいたのです。読み終わると肩からすとんと重荷が降りた気がしました。どうしてか肩が軽くなったのです。このキリスト集会に行ってみようと思って、早速次の日曜日に訪れました。扉をあけたとたんに、目には見えないけれど主が礼拝の真中に立っておられ、主を信じる方々が主をおそれ、感謝し、心をつくして祈っておられる姿に強く打たれました。「ああ、ここには主がおられる。恐るべき聖なるお方がおられる」と思いました。そして「きっと私はこのキリスト集会に来ることになる」と、自分の意志ではなく、主にはっきりと示されたのでした。

初めて吉祥寺キリスト集会の礼拝に参加した後、友人の紹介で古田さんの奥様にお会いした時、「我が家で家庭集会をしていただきたい…」と初対面から言うほど、私は感動していました。これこそ本当の礼拝だと思ったのです。その時古田さんの奥様は「まず礼拝に続けていらしてみてください。火曜日には婦人の学び会があります。その後二階で子供さんの問題をもった方々の集まりがありますから、行ってみられるといいですよ」と言われました。

私は火曜日は休めない日でしたので、十二時まで仕事をして、早退して学び会に出席してみました。遅れて行ったので、二階で開かれていた家族の問題を祈る会も終わり、それでも何人かの方々が残っておられて私の話を聞いてくださいました。その中のお一人、江藤さんの奥様のお話

を聞いて、私はびっくりしてしまいました。その頃通っていた教会や、クリスチャン・カウンセラーの話とまったく逆なのです。私は「子供の要求はすべて満たしなさい」という、そのクリスチャン・カウンセラーのやり方を、全面的に信じて従っていました。すべてを許せない自分を責めながらも、もう一度、もう一度と努力してやっていたのです。ところがここで聞くお話はまったく逆なのです。こんなことをしたら大変なことになると思いました。古田さんは七月六日の浦和の家庭集会で、ベックさんとお話ができるようにとりはからってくださいましたが、私の心はもう、遠くなっていました。

それでも何かひかれるものがあり、家庭集会に参加してみて、またまたびっくりしてしまいました。予想と違って、百人近い人々がひしめきあっているのでした。ベックさんは、「いやしを求めるのはまちがっている。登校拒否はわがままなんだよ」とおっしゃいました。私はその意味がわからず、失望しました。けれどその時「これからどうなっても、主のみ名を賛美することです」とおっしゃった言葉だけは強く心に残りました。皆さんとお話をしているとき、私は古田さんに「自分ががんだというのなら、直してくださいと祈らないこともできます。けれど若い息子が苦しい、苦しいと言っているとき、私はどうか直してくださいと祈らないではおられません」と言いました。古田さんは「そうでしょうね。主が分からせてくださる時まで、祈っていらしていいのでは」とおっしゃいました。私は吉祥寺キリスト集会という所はすばらしい所だけれど、息子のためには行かない方がいいと思いました。めちゃくちゃになると思ったのです。今は「わがまま」というのが「神中心ではない」ということだと分かりました。当時は言葉通りの「わが

まま」だと思ったのです。

その頃の浩之は鬱状態がひどく、食欲もなくなり、部屋に籠っていることが多く、私もまた主を見失い、暗闇の中にいました。勤めから帰ってくると、私も鬱状態で動けなくなるのでした。そして、それから一カ月後の八月五日のこと、私が勤務している間に、息子はビルから投身したのです。息子は私の目の前から姿を消しました。私が対面した時には、顔だけ出して、あとは全身布に包まれていました。途中で植木の繁みがクッションになったのか、顔は損傷がなく、平安な顔をしていました。母教会で前夜式と葬儀をやっていただきました。

主人は浩之を小さい時からたいへんかわいがっていました。浩之はかつて私にそっと、「僕はお父さんが『浩之』って呼ぶ声を思い出すと涙が出るんだ。あんまり優しいから」と言ったことがあります。その主人にとってもこの突然の別れは辛かったようです。火葬場には行きたくないと、それまで全責任を負ってしっかり立っていた主人が子供のようにすくんでしまっていました。けれど仕方がありません。私はご挨拶はしっかりしたものの、やっぱりかわいそうでかわいそうで泣いてしまいました。

それからしばらく、実家の母といっしょに九州に帰っていたのですが、戻ってみると悲しみは同じでした。それから周囲の方々はみな、暖かく気づかってくださいましたが、私は毎日、職場から駆け戻ると写真の前を動けず、何時間も何時間も泣いていました。私が殺したと思いました。こんな母のもとに生まれなかったら、この子はきっといい人生を送っていたにちがいない、と思いました。私はしばらくは浩之が死んだことが信じられませんでした。主人もずい分、辛い思い

をしたと思います。私を気づかって会社人間、仕事人間なのに早く帰ってきてくれました。その頃、手元にあった「光よあれ第二集」の重田さんの証しを読んで、ずい分気が楽になりました。何度も何度も読み返しました。

私たちは、お墓を探しに行きました。浩之は荒川の周辺が好きだったので、荒川の土手が見える所に墓地を買いました。その帰りのタクシーの中で、ラジオからニュースが流れました。連続幼女誘拐殺人犯逮捕のニュースでした。その時私は、ああ、この犯人は私と同じだと思いました。私は、子供を小さい時から切り刻むような育て方をしました。いつもああしなさい、こうしなさいとひっぱりまわし、子供が一生懸命ついてくると、さらにその上に重荷をのせるようなやり方をしてきたのです。主はその時、私の前に、浩之に対して私がどんな態度をとってきたか、ずらりと並べて見せられたのでした。私は息子のためといいながら、主のみ声に聞き従うことをせず、いつも自分中心に行動していました。息子が社会に出られるようになってほしいと心の底で願っていること自体、息子を追い込み、苦しめていたのでした。全能の主を頼らず、委ねようとはしませんでした。私は自分の罪の深井戸をちらりと見ました。それは暗くて深い底なし井戸でした。私は頭がくらくらとしてめまいを覚えました。「主よごめんなさい。赦してください。私はどうしようもない罪人です。赦してください…」と祈りました。すると不思議なことに主がそばで支えていてくださるのが分かりました。

ある夜、眠れないままにふと開いた「光よあれ」のあとがきに、ベックさんのメッセージがありました。「一番大切な祈りは『主よ、罪人の私をあわれんでください』という祈りと『主よ、

今何をなすべきですか』という祈りです」と書いてあったので、私はあらためて祈ってみようと思って「主よ、罪人の私をあわれんでください」と、心から祈りました。すると突然、澄み切った大空のような、波一つない大海のような平安が訪れたのです。その時「ああ、やっぱり、主は生きておられる」と思いました。何日かぶりでぐっすり眠れました。それからは、夜は眠れるようになりましたが、私にとって現実の辛さはあまりに大きくて、すぐ悲しみにのみこまれてしまいます。それにどうしても、あんなに苦しんだ息子を思うと、私もいっしょに苦しんでやりたいという変な同情が湧いてきて、苦しむことで自分を慰めているのです。ある方は何度も「浩之君はいま、主と共に天国にいるのですよ」と慰めてくださいました。私もそうだと思うのですが、やっぱりそばにいないという現実がありました。

その頃のこと、竹沢さんの奥様から、毎月のように家庭集会に出てみませんかというお誘いの電話が入っていました。けれど私はどうしても行く気になれず、「母教会に出席していますので」と言ってお断りしていました。何といっても前夜式や葬儀のことでお世話になった母教会ですし、私自身ほんとうに慰めを求めてその教会に出席していました。けれどいつも淋しくて悲しくて、教会の皆様も何と声をかけてよいのか分からず、かわいそうにと遠巻きにして眺めているという感じで、いたたまれずにすぐ帰ってくるのでした。教会から帰ると疲れがどっと出て寝込んでしまうのです。

キリスト集会の祈り会も、いつもさそってくださっていて、私は行きたくて行きたくてたまらないのに、何かためらいがあるのです。その頃私は、自分の信仰がどこかゆがんだものになって

いることに気づいていました。けれど、どこがどういう風にちがっているのか、主の前にじっと立ち止まって静まることのないままにすごしていたのです。「主よ、私を本当の信仰に導いてください」と祈りました。するとそのあとで竹沢さんの奥様から祈り会のお誘いの電話がありました。私は今日こそ行こうと決心しました。勤め帰りでしたので着いたのは遅く、数人の奥様がたしかおられず、かえって悲しみを打ちあけるのに好機でした。私は包まずにすべてをお話しました。「体がもうぼろぼろになりそうなんです」と泣きながら訴えました。息子の思い出の中から身を起こそうとしない私に、飽戸さんの奥様が「白石さん、浩之君が今そこで楽しそうに遊んでいる所を想像してごらんなさい。その時、あの子は昔病気だったんですといって泣きますか」と言われました。私は突然、現在と過去の区別がつきました。そうだ今、あの子はイエス様のそばで喜んでいる。苦しんでいたのは昔のことだったのだと、明るい気持ちになりました。それまでは私にとっては浩之のいないこの世が現実だったのに、その言葉で、浩之が喜んでいる天国、それが現実になったのです。この世がすーっとかすんでいきました。

けれど家に帰ると、生活の中で息子に密着していた物を見るたびに、それはそれは強い力で過去に引き戻されてしまいます。仕事でまぎれていることも多かったので、私はお正月の五日間の連休を恐れました。この重荷に耐えられるだろうかと思いました。すると一月四日の夕方、前橋で家庭集会があるというのです。飛びつくように出かけました。前橋ではベックさんとお話する機会が与えられました。ベックさんは「万里子、浦和の祈り会に来てくれたんだってね」と温かい言葉をかけてくださり、泣きながら今までのことを話す私に「イエス様は万里子の罪を全部赦

して、もう忘れているよ。イエス様に出会った時、私はこんな罪を犯しました。と言ってもイエス様は『知らないよ』と言われるよ。それに天国の浩之はいま、『かあちゃん元気だよ』といって喜んでいるよ」と身振りをいれて言われました。私はその現実味のある言葉に、思わず笑ってしまいました。この集会にくると、神の国の方に現実味があるから不思議でした。ベックさんは「現実を見ないで、目を上げて」と言われました。私は「現実を見ないで」という言葉を聞いたのは初めてでした。私はそれまで二十五年間というもの教会に通っていましたけれど、信仰はこの世の現実をよく生きるためにあるのだ、と思っていたのです。その現実が行き詰まってどうしようもない結果が出てしまった今、どうして現実と信仰をつなげばよいのか分からなくなっていました。浩之の死によって天と地の仕切りはなくなったのですが、私にとって天国はなおもかすんではっきり見えなかったのです。まだ私の国籍はこの世にあったのです。その私にベックさんは、「現実から目を離しなさい、聖書が示す神の国にこそ、私たちの生きる現実がある」と言われているのです。その帰りの電車の中では、私のことをご存知ない二人の方といっしょでした。幸せそうなお二人は「早く天国に行きたいわね」と話をしておられるのです。私はびっくりしました。この集会の人は本気で天国を信じていると思いました。

それからもお誘いを受けて、成城の家庭集会に伺いました。上野さんが私の横に来てくださって「天国の確信のない信仰は、本物ではないのですよ」と言われました。私は「ああ、私はその言葉を聞きにこの集会に来たのです」と答えました。実は主人の母もクリスチャンで、今から十六年前に七十四歳でがんで召されました。その時母は、「がんだという診断が出た時には、私に

知らせてちょうだい。七十四年も生かされて感謝だから」と言いました。けれど医者も牧師も「本人には告げない方がよい」と言われて、ついに最後までかくしとおしました。天国の希望を共に語りあうこともありませんでした。母は「私の病状はどんどん進むけれど、がんじゃないのにどうしてなの」と私にいらだつ心をぶつけてきたこともありました。「告知しない方がよい」と牧師に言われた時、「天国って絵に描いた餅のような物ではないだろうか」とふと思ったのです。当時は告知しないのが普通でしたが、それは私の中で晴れない疑問として残っていたのです。それが「浩之が天国で喜んでいる」と言われても現実と思えない原因になっていたことに気づきました。重田さんの奥様にもお電話をして、次の聖句を贈っていただきました。

イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」

（ヨハネ　13・7）

その夜は特別にぐっすり眠れたことを覚えています。重田さんのお宅にも家族三人で伺いました。「この世には確かなものは何もないのですよ」と言われて、未信者の主人は驚いたことと思います。当時倉敷にお住まいの若山さんの奥様にもお目にかかり、我が家に一晩泊まっていただきました。同じ経験をお持ちの奥様が、「昔は家族四人そろってほんとうに楽しかった。けれど多くの経験をして、今の方がもっと喜んでいます」とおっしゃったのを聞いて、ああ、私も早くこうなりたいと思いました。

私はとにかくキリスト集会が慕わしくて慕わしくて、何とか集会に出たい、と思うようになり

ました。吉祥寺キリスト集会の夜の祈り会に出席した時、田中さんの司会の中で、神竹さんのお話が出ました。「お子さんを亡くしてこの世的に言えば絶望の中にいるはずなのに、『この集会に来ると不思議に、ブラック・ボックスを通して絶望が希望に変わっている』と言われた」とのことでした。それを聞きながら、私はいつの間にかほんとうに暗闇を通して絶望が希望に変わっている自分を発見したのです（神竹さんご夫妻の証しはこの本に掲載されています）。

同じ頃、私は自分の信仰生活をかえりみて「私は確かに主に出会った。赦されて喜んだ。そして『主を喜ばせたい』と思った。そこからまちがいが始まったような気がする」と気づきました。そのことを飽戸さんの奥様に電話でお聞きしましたら「その通りですよ。私たちには主を喜ばせることはできないのです」と言われたので私は大きなショックを受けました。それまで私はローマ人への手紙の7章に書かれてある真の意味を知らなかったのです。肉の思い、肉の力で始めた「奉仕」には無理が多く、何一つ実を結ばないばかりか、悪い実ばかりを結んでいることに気がつきました。私が愛していたのは、主ではなく、いつの間にか人間であり、組織であり、結局は自分自身だったのだ、と分かりました。それに今までの教会生活では、礼拝している時は確かに神を礼拝しているのですが、礼拝が終わるとすぐ、自分中心の生活に戻ってしまうのです。「絶えず祈る」ということも実行していませんでしたから、家庭に帰ると未信者と同じ生活でした。

「あなたがたは多くを期待したが、見よ、わずかであった。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。それはなぜか――万軍の主の御告げ――それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがみな、自分の家のために走り回っていた

からだ。」

（ハガイ　1・9）

本当にその通りでした。でも信仰を持った初めはちがっていました。いつも喜んでいました。絶えず祈っていました。そのことを蘇畑さんに言いましたら、次のみ言葉を示されました。

「あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。」

（黙示　2・4、5）

私の心に、この世と聖書が示す神の国は、逆の価値感をもって二重に映っていました。それまでは、この世のほうが色鮮やかで、私は現実のこの世にいました。自分が中心でした。このキリスト集会に来ると、神の国のほうが色鮮やかになり、この世が色褪せて見えてきました。私の国籍は天にあったのです。立つべきところは天国だったのです。イエス様の支配なさる国こそが私の国だったのです。すべての中心は、主イエス様だったのです。

今までは自分が幸せになるために、主よああしてください、こうしてくださいと祈っていました。けれど今、天地を創造された主イエス様こそが宇宙の中心であり、すべての栄光をお受けになるべきお方であり、主のみ心が私の上になりますようにという祈りこそが、真の祈りであることを知らされました。心の中に逆転が起こりました。

私はすべてを牧師に告げようと思いました。実は母教会の納骨堂に、間もなく来るイースター

に分骨をすることになっていました。今だったら教会を出られると思いました。私はやさしい牧師やお世話になった皆様を裏切るようで、とても心が痛みましたが、とにかくこの大きな逆転のことはお話をしなければなりません。ある日、今日こそ牧師に会おうと決心して家を出ました。その前に用事を果そうと行った郵便局で、なんと牧師が横に立っておられるのです。「お話したいことがあります」と言いますと、「いいですよ」と応じてくださいました。それまでも、それからも、そういう出会いをしたことは一度もありません。主のお導きだとしか思えませんでした。穏やかな牧師は静かに話を聞いてくださいましたが、翌々日、また説得に来られました。「信仰が弱いから、天国の確信が持てないのですよ」と言われ、私はその通りだと思いました。「私は信仰が弱いのです。仕方がありません。吉祥寺キリスト集会でなければ天国が確信できないのです。許してください」と申しあげましたら「あなたの弱い所に主が働いてくださるように」と、私のために祈ってくださいました。

十七年半続けた勤めもやめました。火曜日に吉祥寺キリスト集会で開かれている学び会に参加したかったからです。仕事をやめて初めての学び会は、息子が召された一年目の日でした。西軽井沢のバイブル・キャンプにも主人といっしょに出かけました。そこで主は、生き生きと私たちの心にみことばを贈ってくださったのです。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」（ヨハネ　11・25）

主人は「今日のメッセージを聞いたら、浩之が天国にいることがよくわかった」と言いました。婦人の学び会にも参加して、素晴しいメッセージと証しを聞き、祈り会にも出席することができるようになりました。そして、家庭に問題を持った婦人がたが本当に主に百パーセント信頼して委ねる時、主がその信頼に応えて働かれるみわざを見ました。それはイサクを捧げるアブラハムの信仰でした。私は自分の信仰のまちがい、主からいただいた賜物を自分の物と思って思い通りにしようとしていた間違いを、はっきりと示されました。

息子が召されて二年近くたった頃の七月に、浩之の部屋をようやく整理することができました。それまではちょっとでも触れると過去につれ戻されそうで、こわくてできなかったのです。整理している時、あの子が書いた祈りのノートと紙切れが出てきました。その一部を次に書き写します。

「夜十一時。寝る前に私は心の扉を開きます。主よ、お入りください。私はあなたと共にいたいのです。あなたの平安と恵みを受けたいのです。あの平安と喜びは、何物にもかえられない喜びです。主よ、どうかいつも私と共にいて、私の心を祝してください。主よ、私は弱い者です。あなたの愛と平安を求め続けます。どうぞ、先のことを思い煩わないで、今のことをあなたに感謝して、あなたと共にいられますように。主よ、どうか私の心にあるいっさいのプライドやあらゆる誘惑やわずらいを追い出して、私と共にいてください。どうか私を一人にしないでください。私は本当に淋しいです。主よ、あなたが私の心のすべてを知っておられます。主よ、私の心に入ってきて、希望の光で満たしてください。お願いします。私を清い心にして

ください。聖霊で満たしてください。お願いします。主よ、いつも祈り求めます。あなたの愛の内にいたいからです。主よ、どうか私にみ心を現わしてください。あなたのみ心のある所には、悪魔がいないからです。そして、あなたの愛が私に注がれますように。あなたの愛を忘れたくない、あの愛の喜びを。あなたの愛の内にいれば、人への恐れが取り除かれ、不安がとれ、こんなにも明るくなっているのです。これからあなたのみ心がなりますように。あなたと共にいて、信じ続けることができますように。こんなにも希望が見え始めているのです。あの闇と苦しみのどん底から救ってくださったイエス様、私と共にいてください。お願いします」。

「主よ、私にみ心を現わしてください。私は罪の子です。どうぞお赦しください。私は本当に弱い者です。あなたと共にいたいのです。主よ、どうしてでしょうか、本当に心から悪かったと反省している時にこそ、あなたの言葉が心の底からわかるのです。どうしてでしょう。あなたは本当に貧しい心にこそ、入ってこられることができるのです。主よ、どうぞそのことを私になしてください。私が本当に欲ばったり、自慢したり、あなたの言葉を忘れたり、いじけたり、ひねくれたり、すねたり、そういう心にならないように、いつもみちびいてください、私のために」。

「私の心の扉を開きますので、どうぞお入りください。お願いします。あせらず、あわてず、落ち着いて、明日は明日自身が思い煩います。今日は今日でもうおやすみ。父さん、母さん、姉さん、おやすみ。主よ、あなたは人間の心理状態をすべて知っておられます。私の心を平安にして安心感を与えてください。主よ、私はあなたのみ姿は見たことがありませんが、あなた

の言葉は知っています。それが真実であることをもっともっと私に教えてください。どうか、あなたのみ心がなりますように。あなたのみ心のある所には私の本当の幸せがあるからです。すべてのものから私を解放してください。どうか私を幸せにしてください。これからも真実の言葉の意味をもっともっと知らせてください。お願いします。あなたのみことば通りになりますように」。

「いつも、神様からどう見られているかということだけを気にするようになりたい。いっさいのものから解放されたいと思うなら、まずその人を愛すること。その人の幸福を心から願うこと。いつも神様からどう見られているかだけを気にすること。神は愛のお方であって、愛以外の何物でもない。主はすべてを愛され、すべてをよくしようと思っておられる。愛の内に入れたいと思っておられる。神は救いの最後の手段をとられた。それはみ子を十字架につけたこと。今、全能の神と、こうしてお話ができることを感謝します。ありがとうございます。神の愛はすべてのものから私を救ってくださることができます。愛の源は主です。主イエス・キリストが私と共にいて、すべての誘惑や恐れから、私を解放してくださいます」。

これらが書かれていた日付けは、死ぬ前の年の九月から十一月にかけてのものでした。この頃、浩之は見ちがえるようにすっきりと明るい顔をして、どんどん聖書を読むようになっていました。本当に嬉しそうでした。そして百科辞典を書き写したりしていました。元気になったきっかけは、その年の四月に、ある方から「ただ主の前に静まるように」といただいた次の聖句だったのです。

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、

あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」
（イザヤ　30・15）

浩之が元気になった十一月の末頃のこと、私は通信制高校の話を耳にしました。ちょうどその時に浩之が、「僕も高校に行きたかったなあ」と言いました。私はすぐその言葉尻をとらえて「行こうと思えば行ける所があるのよ」とたたみかけるように言いました。彼はまだまだ、聖書だけを読んでいたい時期だったのでしょう。それなのに私は浩之に、この世への方向転換を要求したのです。彼は素直に学校を見に行きましたが、建物を見て、あのいじめを思い出したのかも知れません。それからすぐ鬱状態に陥って、そのまま立ち上がれませんでした。私は浩之の死後、この紙とノートを見つけた時、本当に涙が止まりませんでした。あらためて流す、悔い改めの涙でした。こんなにも息子はイエス様を求め、イエス様もまた息子を愛していてくださったのです。

「わたし（イエス様）を愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。」
（ヨハネ　14・21）

私は息子がこの世に適応できるようになることばかりを考えていました。けれど、主こそ、息子の求めるものであり、主こそ、私以上に息子を愛し、本当の幸せをくださるお方だったのです。この主にすべてをおゆだねしていれば、主はきっと息子に愛を注いで導いてくださったにちがいありません。それなのに、私の自我が主のみわざをさえぎっていたのだと分かりました。息子の

部屋をいっしょに片づけていた娘がいいました。「浩之は一度もお会いしたことがないのに、ベックさんのような祈りだねえ」と。その祈りは、これが書かれていた頃私が持っていた信仰や祈りとは異質のものでした。しかし泣いている内に、それらは主のあわれみへの感謝と賛美に変わっていました。「主はたしかにこの部屋にきて、浩之と会っていてくださったのだ」。そう思うと、この部屋はまばゆいばかりに慕わしく思えるのでした。

私はこんなにも罪深い者です。いやしい者です。そして主はこんなにもあわれみ深いお方です。去年、西軽井沢のバイブル・キャンプで、ベックさんが私たちに「すべてが益となるよ」とおっしゃいました。私はそれまで「すべてが益となる」ことを信じてきていました。けれど、この息子の死だけはどうしてもそう思えませんでした。しかし今は、次のみことばが真実であることを味わっています。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

息子が召されて早や四年が過ぎました。私は今、主が私のすべての人生をみ手のうちにおさめておられ、かたくなで自分中心の私に「神の国こそ真実であり、私たちの国籍は天にあること。私たちはこの世の者ではなく、聖別された者であること。目に見える世界に住んではいても、この世では寄留者であり、旅人であること」を告げ知らせるために息子をつかわされたのだと信じています。それと、私の深い深い罪を知らせるためでもあります。私の罪は、底なし井戸のよう

に不気味に深く暗いものでした。このどうしようもない暗さ、深さ！　けれど、主の聖さはもっと深く、イエス様のいのちだけがこの罪を贖うことができるのです。

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。（エペソ　1・7）

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。（Ⅰヨハネ　1・7）

このお方以外にはありません。私は自分の罪の深さと贖いの深さが分かりました。主に心から、感謝いたします。

娘も悩んであちこちの教会をめぐり歩いていましたが、吉祥寺キリスト集会に集うようになって救われ、私といっしょに昨年五月に洗礼を受けました。洗礼の日に次のみ言葉をいただきました。

「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖う主は仰せられる。

（イザヤ　54・7、8）

九州の実家の母も、昨年、九十歳で救われました。そのあと脳硬塞で倒れて入院中ですが、イ

エス様の守りの中で、平安に過ごさせていただき、感謝しております。実家の姪も九州のバイブル・キャンプで思いがけず導かれて、ベックさんと共に祈ることができました。主人も今年、北海道のバイブル・キャンプで洗礼にあずかりました。その日のメッセージは、奇くもイエス様のよみがえりについてでした。私は次のみ言葉の約束が成就されたことを思い、涙が溢れて止まりませんでした。

イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」（ヨハネ　11・40）

浩之の分骨も、キリスト集会の納骨堂に納めさせていただきました。その納骨式には、私たちの親族九名が集められ、福音を伝えることができましたことは私たちにとって大きな喜びでした。主人はその時の挨拶の中で、次のみことばが一番嬉しかったと証しをしました。

イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（ヨハネ　9・3）

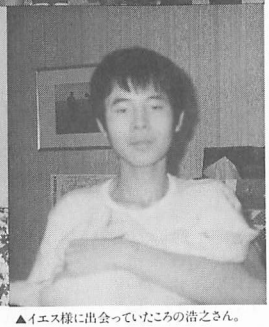
私は今、この世にありながら、この世のものならぬ喜びの中におります。これは永遠のいのちの喜びであり、永遠に続く喜びであると思います。主のみ心は、この喜びを喜ぶことだったのだと、心から主のみ名を賛美いたします。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これ





▲上・納骨式で。康夫さん、万里子さんと親戚の方々。
下・母の安原マスミさんと。大牟田バイブル・キャンプで。



▲イエス様に出会っていたころの浩之さん。
1988年8月。

が、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。
（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

息子の浩之は、イエス様のおそばで喜んでいますし、やがて私もその故郷に帰って再会できます。これはすべて主のご計画であったことを思い、「すべてを益とされる主」に、心の底から感謝と賛美をお捧げいたします。

来なさい！

どうしたら私たちは救い主であるイエス様との親しい交わりに近づくことができるか？

ゴットホルド・ベック



「どうしたら私たちは救い主であるイエス様との親しい交わりに近づくことができるか？」ということをごいっしょに考えてみましょう。

イエス様は、いつも私たちと深い交わりをもちたいと思っておられます。
イエス様は、世界の創造者であり、見えるもの、見えないもの、すべてをお造りになりました。
しかしそのイエス様は、私たち人間のために悲しんでおられるのです。

イエス様はあなたを思っておられます。愛しておられます。
イエス様はあなたと親しく話したいと思っておられます。
イエス様は、ただひとつの欲求をもっておられます。
あなたと親しい交わりをもちたく思っておられます。
あなたもこれと同じ欲求をもっていますか。
あなたは「もちろん！」と言うでしょうが、ほんとうにそうでしょうか。
ペテロは強い欲求をもっていました。

ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。（マタイ　14・29）

ペテロは自分の信仰を試そうとしてそんなことをしたのではありません。
水の上を歩くことができるかどうかを試してみたのではありません。

そうではないのです。ペテロの心からの願いはイエス様のところにすこしでも近づくことでした。
みなさん。「イエス様をよりよく知る」ということが、いつも変わりない
私たちの願いでなければなりません。
主よ。イエス様との結びつきがますます緊密に、親しく、完全になりますように！

たぶん、ほかの弟子たちは、考えたことでしょう。
「ペテロはなにをしようとしているのか。舟に残っていたらよいのに。
ペテロはいつも変わったことをする。私たちは舟に残っているというのに。
なぜペテロは水のなかにはいっていくのだろう」

ペテロはイエス様のところに近づいていきたいのです。
「イエス様のところに近づきたい！」
この欲求がペテロの心のなかで、強く叫んでいます。
「私はもっとイエス様に近づきたい。おそばにいたい。
私は私の救い主と、もっともっと深く交わりをもちたい！」

ペテロはうしろを振り向きませんでした。
ペテロは「いまヨハネやヤコブはなにを考えているだろう」などとは考えません。

来なさい！

「これはいいことか悪いことか」などと、
ヨハネやヤコブにたずねません。
ペテロは、ただ、ひたすら、イエス様を見つめています。

もし私たちが、ほかのひとを見たならば、
私たちは決して前進することができません。
「**イエス様にもっと近づく**」。
これが私たちの願いではないでしょうか。
もしあなたが神の子であるなら、
イエス様をもっと知りたいと思うでしょう？
そしてもし、あなたがイエス様を知ったならば、
あなたはイエス様をさらにさらに深く知りたいと
のぞむようになるでしょう。
イエス様もまた、それをのぞんでおられるからです。

1．イエス・キリストの啓示によって

どうしたら私たちは救い主であるイエス様との深い交わりに近づくことができるか？



イエス様は弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、
自分より先に向こう岸へ行かせ、
その間に群衆を帰してしまわれた。
群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。
夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。
しかし、舟は、陸からもう何キロメートルも離れていたが、
風が向かい風なので、波に悩まされていた。
すると、夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、
彼らのところに行かれた。
弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、
「あれは幽霊だ。」と言って、怯えてしまい、
おそろしさのあまり、叫び声をあげた。
しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、
「しっかりしなさい。わたしだ。恐れる事はない。」
と言われた。
（マタイ　14・23～27）

イエス様は弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、むこう岸に「行け」と命じられたのです。
それで弟子たちは出かけたのでした。しかしまもなく強い向かい風がやってきて、

波に悩まされるようになりました。風はかれらに逆らって吹いてきました。
弟子たちはいま、絶望的な状態にあります。

イエス様が「行け」と命じられるとちゅうには、困難があるかもしれません。
絶望的な状態が待っているかもしれません。この弟子たちのばあいもそうだったのです。

しかしイエス様は、いつもはっきりとした目標をもっておられました。
イエス様は弟子たちにご自身をあきらかにされ、
それによって弟子たちと親しい交わりをもちたいと思っておられました。

イエス様は、弟子たちが悩んでいるのをごらんになりました。
しかし、すぐにはかれらのところにおいでになりませんでした。
イエス様は弟子たちと親しい交わりをもちたいと思いましたが、まだ、ときが早すぎたのです。
たぶんあなたはいま、悩みをもち、そこからのがれる道がないように見えるかもしれません。
たとえあなたが、まだ祈りの答えをいただいていないとしても、
イエス様はあなたの苦しみを見ておられることを知ってください。

イエス様は弟子たちを向かい風と波、つまり苦しみのなかにそのままにしておかれました。

そして、イエス様はご自身を現わされるために、弟子たちのところにやって来られたのです。
ところが弟子たちは驚き、恐ろしさのあまり大声で叫びました。
弟子たちは臆病者ではなく、強い漁師だったはずです。
しかし、かれらはこんなことを、いまだかつて経験したことがなかったのです。
だれかが水のうえを歩いてくる。それは幽霊にちがいないのです。

みなさん。私たちはどうしたらイエス様との親しい交わりに近づくことができるのでしょうか。
それはイエス様の「啓示」によってのみ、可能です。
私たちの生活の困難のさなかに示されるイエス様の啓示によってのみ、
主との親しい交わりに近づくことができるのです。

弟子たちはイエス様によって、強いて向こう岸へ行かされました。
弟子たちは向かい風と波のなかに捨ておかれました。しかしこれはイエス様の導きでした。
そのような困難のさなか、イエス様はご自身を現わされたのです。
しかし弟子たちは恐怖のあまり大声で叫びました。
弟子たちは、イエス様がご自身を現わされるために困難な状態に導き、
それをとおしてイエス様とのより深い交わりをもつように
のぞんでおられることを、まだ知りませんでした。

たぶんあなたは、いま、
なぜ私はいい働き場所をもっていないのだろう？
なぜ私にはいい両親がいないのだろう？
なぜ私のうちはこんなに暗いのだろう？
なぜ私は健康ではないのだろう？
なぜ私にはいつも困難がつきまとうのだろう？
なぜ私だけに悩みがふりかかってくるのだろう？
このような悩みをもっておられることでしょう。

イエス様は、あなたと親しい交わりをもちたいと願っておられるのです。
ですから、あなたをそのような困難にお導きになったのです。
たぶんあなたはその導きを、いまはまったくわかっていないかもしれません。
しかしイエス様は、そのような苦しみ、困難、理解しがたいことをとおして、
あなたにイエス様ご自身を現わされたいのです。
あなたをイエス様との親しい交わりに導かれたいのです。それを、信じてください。

私たちはどうしたらイエス様との親しい交わりに近づくことができるのでしょうか？
私たちは、イエス様の「み言葉」による、イエス様ご自身の啓示により、

イエス様との親しい交わりにはいることができるのです。

イエス様は言われました。

「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」（マタイ14・27）

この言葉を、イエス様はあなたにも呼びかけておられます。

イエス様はご自身の「み言葉」によってご自身をあなたに現わそうとしておられます。

あなたは神の子として、いま、神の導きがわからないにせよ、
自分の持っている悩みを、他人や環境のせいにしてはいけません。
イエス様は、あなたを困難や危険のなかにお見捨てにはなさらないのです。
イエス様は、あなたとの深い交わりを持ちたいので、
あえてあなたを生活の困難のさなかにおいて、
ご自身の「み言葉」のなかに、ご自分を現わされるのです。

「しっかりしなさい！　わたしだ！　恐れることはない！」

あなたは、「わたしだ！」というイエス様の「み言葉」を聞きましたか？

イエス様は弟子たちに、ご自身を現わされました。
それまでとぜんぜん違ったかたちで、ご自身を現わされました。
ですから弟子たちはたいへんびっくりし、恐れのあまり叫んだのです。
それはイエス様の「啓示」でした。しかし弟子たちはそれを幽霊と思ったのです。
愛するみなさん。私たちもしばしば弟子たちとおなじではないでしょうか。

イエス様のあなたにたいする語りかけを聞いてください。
「このことは、『わたしから来た』。
わたしの子よ！ あなたはあなたを苦しめるものがなにかを考えたことがありますか？
わたしの子よ！ もしあなたが周囲にたくさんの困難、試練をもっているならば、
それは『わたしから来た』ということを知りなさい。
あなたの弱さは、わたしの強さを必要としている。」

「わたしの子よ！ あなたはむずかしい環境と人間関係のなかで苦しんでいますか？
それは『わたしから来た』のです。
わたしはあなたがおかれている環境の主です。
あなたがおかれている環境や、人間関係において、
まわりのひとびとがやりたいようにすることはできません。

かれらは、わたしの心、思うとおりを行なわねばならないからです！」

「わたしの子よ！　あなたはお金のことで苦しんでいますか？
それをきりぬけるのはむずかしいですか？
それも『わたしから来た』ということを知りなさい！
わたしはあなたのお金に責任をもっている！
ただわたしはあなたがわたしのほうへ来ることを、わたしに頼ることを願っています。
わたしの約束が真理であることを、あなたに証明したい！」

「わたしの子よ！　あなたはいま、暗やみのような人生を生きていますか？
それは『わたしから来た』のです。
わたしは世にあったとき、苦しみの人でした。だからあらゆる困難をよく知っている！
あなたがわたしのほうへ来るようになるために、わたしがそうしたのです」

「わたしの子よ！　あなたは自分の友に失望し、幻滅しましたか？
それは『わたしから来た』のです！　わたしがあなたの最良の友であることをよく知るために、
あなたは友に失望したのです」

「あなたの計画はくつがえりましたか？
あなたは悲観し、疲れましたか？
それも『わたしから来た』のです！
あなたは自分で計画し、そのあとで「祝福してください」と言った。
しかし、わたしは自分で計画したい。そうすればわたしはその責任もとります」

「あなたはわたしのために働きたいと願った。しかしあなたはいま病気です。
それも『わたしから来た』のです。
あなたが忙しかったとき、わたしはあなたに話すことができなかった。
しかし、わたしはわたしの秘密を語りたい。あなたはいま、わたしのそばにいる。
祈る人となりなさい」

「あなたはむずかしい使命を負わされている。
それも『わたしから来た』のです。
あなたはわたしに頼ってください！」

「わたしの子よ！ わたしの声を聞きますか？
『わたしである！ それはわたしから来た』のです」。

「しっかりしなさい！　わたしだ！　恐れることはない！」
すべてのうしろにおられるイエス様を見てください！

それはもはや、あなたの苦しみ、あなたの悩み、
あなたの環境、あなたの人間関係ではありません。
イエス様はあなたに
「しっかりしなさい！わたしだ！恐れることはない！」と言っておられるのです。

私たちはどうしたら主イエス様との深い交わりに近づくことができるのでしょうか？
私たちの生活の困難のさなかに示されるイエス様の啓示によってのみ、
主との親しい交わりに近づくことができるのです。

イエス様はご自身をあきらかにされました。
向かい風、波、嵐、つまり悩み、苦しみ、逆境、いま理解できない導きのなかにおいて。
しかしイエス様がご自身をあきらかにされたにもかかわらず、
弟子たちはイエス様をみとめず、「幽霊だ！」と言って叫び声をあげました。

私たちはなんとしばしば自分だけを見て、

私たちの悩み、人間関係、環境だけを考えて、叫び声をあげることでしょう。

みなさん。それはあなたの苦しみではありません。

そのうしろにはイエス様が立っておられるのです！ それを信じましょう。

またイエス様は、言葉によってもご自身を弟子たちにあきらかにされました。

弟子たちはイエス様のお声を聞いたときに、

幽霊だと思っていたのがイエス様であることを知りました。

あなたはご自分が暗やみのなかにあっても、また悩みのなかにあっても、それを認めますか？

それはイエス様なのです。

弟子たちはイエス様の「しっかりしなさい！ 私だ！ 恐れることはない！」

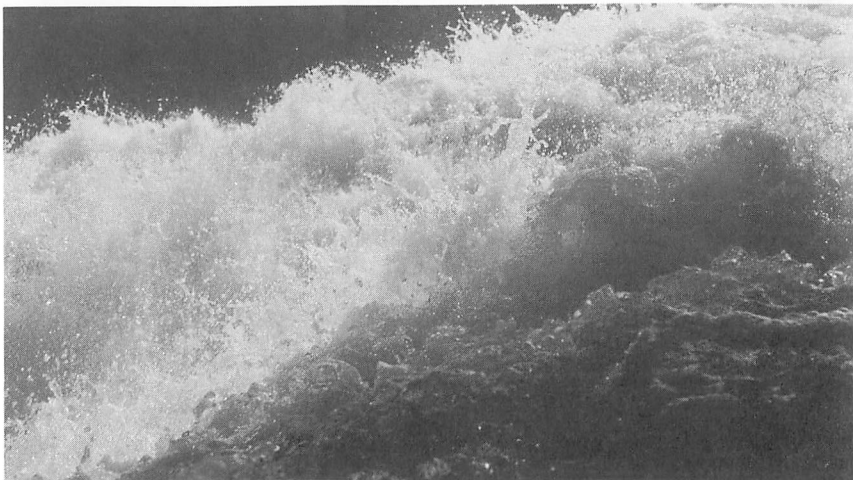
というみ声を聞きました。それは聞きなれた声でした。

「私たちの主人だ！」と弟子たちは安堵のため息をつきました。

2．イエス様の啓示にたいする私たちの答えによって

しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、
「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」
と言われた。
（マタイ　14・27）

イエス様は、弟子たちみんなにこのことばを話しかけられたのです。
イエス様は、弟子たちみんなにご自身を現わされたのです。
イエス様は、ペテロにだけ
「しっかりしなさい！　わたしだ！　恐れることはない！」と
話しかけられたのではありません。
イエス様は弟子たちみんなに
「しっかりしなさい！　わたしだ！　恐れることはない！」
と話しかけられました。
しかし、ただひとりがイエス様の啓示にたいして答えました。
すると、ペテロが答えて言った。



「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」

（マタイ　14・28）

イエス様がご自身を現わされたとき、答えたのはペテロだけでした。

私たちはどうしたらイエス様との親しい交わりに近づくことができるのでしょう？

イエス様の啓示にたいする私たちの答えによって！

主が「わたしである」と言って私たちにご自身を現わされるとき、

イエス様は私たちに決定をせまられます。

ヨハネはイエス様に答えませんでした。ピリポも答えませんでした。ヤコブもおなじです。

ペテロだけがイエス様に答えました。

「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」

（マタイ　14・28）

ペテロは自分自身にこのように言い聞かせました。

「イエス様がご自身を現わされるとき、ご自身のためではなく、

この私のためにご自身を現わされるのだ！」と。

イエス様は言われました。「わたしは道であり、まことであり、いのちであり、

光であり、パンである」と。これはイエス様のご自身の啓示です。
このイエス様の啓示にたいする私たちの答えはどうでしょうか？ あなたは答えますか？

「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」

（マタイ　14・28）

もしあなたがいま聖書をなにもご存じないのでしたら、きょう祈ることができます。

「イエス様。あなたは父のみもとへ行く道ですか？ 自由と喜び、罪の赦しへの道ですか？
もしそうなら、私に『ここまで来い』とお命じになってください！」

「イエス様。あなたは心からの平安への道ですか？
もしそうなら、私に『ここまで来い』とお命じになってください。
私の思い煩いを平安に変えてください！」

「イエス様。あなたは光ですか？
もしそうなら、私に『ここまで来い』とお命じになってください。
私のまっくらやみを光にしてください！」

「イエス様。あなたはいのちですか？
もしそうなら、私に『ここまで来い』とお命じになってください。
どうか私に永遠のいのちを与えてください！」

「イエス様。あなたは真理ですか？
もしそうなら、私をみもとに行かせてください。
『ここまで来い』とお命じになってください。私に真理をお示しになってください！」

イエス様は、ご自身をあきらかにされました。
イエス様は、あなたに「わたしである！」と言われました。
あなたはそれにたいする答えをもっておられますか？
イエス様は、あなたの答えを待っておられます。
きょう、私たちはわれとわが胸にたずねてみましょう。
イエス様の啓示にたいして、私たちはいつお答えをしたのでしょうか。

もしあなたが、まだ、イエス様を信じて救われ新しい生まれかわりを体験していないのなら、
あなたはまったく、イエス様の呼びかけに答えていないのです。

主はあなたを救うために、愛するひとり子のイエス様を死にわたされました。
イエス様の血潮は、あなたの罪をあがなうために流されました。
あなたはそれに答えたことがありますか？
もしあなたがそれに答えていなければ、あなたは大きな罪を犯していることになります。
その罪のために、あなたは永遠に滅びてしまいます。
その罪のために、あなたは喜びもなければ平和もありません。
あなたがそれに答えるまで、神の怒りがあなたのうえにとどまります。

「イエス様。あなたが私のために十字架のうえで死なれたのでしたら、
この私をみもとに行かせてください。『ここまで来い』とお命じになってください！」

「イエス様。あなたが私の罪のために十字架のうえで血を流されたのでしたら、
この私に罪の赦しの確信をお与えになってください！」

「イエス様。もしあなたが私のために十字架のみわざをなしてくださったのなら、
この私に新しいいのちをお与えください！」
あなたは、きょう、イエス様に答えようとは思いませんか？

パウロはなぜイエス・キリストを信じるようになったのでしょうか。
パウロはなぜイエス・キリストを宣べ伝える宣教者になったのでしょうか。
それはイエス様の啓示によってでした。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。
（ガラテヤ　1・12）

そしてパウロは、このイエス様の啓示に答えたのでした。

…私は、この天からの啓示にそむかず、…
（使徒　26・19）

どうしたら私たちはイエス様と親しい交わりに近づくことができるのでしょうか？
イエス様の啓示にたいする私たちの答えによって！

もしあなたが信者ならば、もうすでにあなたは
イエス様の啓示にたいしてお答えになったはずです。
信者として私たちは、いままでにたびたびイエス様の啓示に答えてきました。
しかし、もし私たちの生活をふりかえるなら、自分のことを恥ずかしく思わないでしょうか。
イエス様はしばしば私たちを困難な状態におき、

その導きのさなかにおいて、ご自身を啓示されました。
しかし私たちはそれを無視して答えませんでした。
そこには反抗、自分への愛、自分の思い、
自分の計画、自分の考えがありました。
それによって私たちは
イエス様の愛を退け、踏みにじったのです。

どうしたら私たちは
救い主であるイエス様と親しい交わりに近づくことができるか？

3. イエス様の招きによって

イエス様の招きによって、私たちはイエス様との
親しい交わりに近づくことができます。
ペテロはイエス様がお呼びになるまで
待たなければなりませんでした。



しかしそのとき、イエス様はペテロだけをお呼びになったのです。なぜでしょう？
なぜなら、ペテロだけがイエス様の啓示にたいして答えていたからです。
もし私たちがイエス様の啓示にたいして答えないなら、
なんと大きな恵みがなくなってしまうことでしょう！

私たちはたぶん信仰のうちを歩みたいと思っているでしょう。
しかし、まず「ここまで来なさい」というイエス様の言葉、イエス様の招きが
なければならないことを忘れないでください。

イエスは「来なさい」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。（マタイ　14・29）

もしヨハネとヤコブも「ペテロにできることはおれたちにもできる」と言って
おなじことをしたらどうだったでしょうか？ その結果をここにえがきたくありません。
ペテロだけがイエス様に「来なさい」と呼ばれました。

イエス様はご自身をあなたに現わされましたか？ あなたはお答えになりましたか？
「主よ！ もしあなたでしたら、私に、水のうえを歩いて
『ここまで来い』とお命じになってください！」。

ペテロはイエス様が「おいでなさい！」と言われるまで待たなければなりませんでした。
私たちもまた、イエス様の招きを聞くまで待たなければなりません。

しかし、もしイエス様がお呼びになったら、行動をおこす時期です。チャンスです！
もしイエス様がお呼びになったら、私たちはひとを見てはならず、
うしろを振り返ってはいけません。
もしイエス様がお呼びになったら、私たちは周囲に気をつかってはいけません。

さて、イエス様はペテロに「来なさい」と言われました。
ペテロは舟から降り、水のうえを歩きました。
水がペテロを浮かしたのではなく、イエス様の言葉がペテロを水のうえに浮かせたのです。

もしイエス様が「来なさい」と招かれたら、そのときにたいせつなのは、
実験してみることではなく、イエス様の言葉をそのまま信じることです。
もしイエス様が「来なさい」と言われたなら、ためらってはいけません。
待ってはいけません。振り返ってはいけません。環境を気にしてはいけません！

もしイエス様が「来なさい」と言われたなら、イエス様だけを見てください！

ほかのひとの言うことは気にもとめないことです。
「舟にとどまっているべきだ。あれはいつも変わったことをする」などという他人の言葉には気をとめないことです。
救い主イエス様との生きた交わりがたいせつです。
これはほかのなにものにもまさってたいせつです。

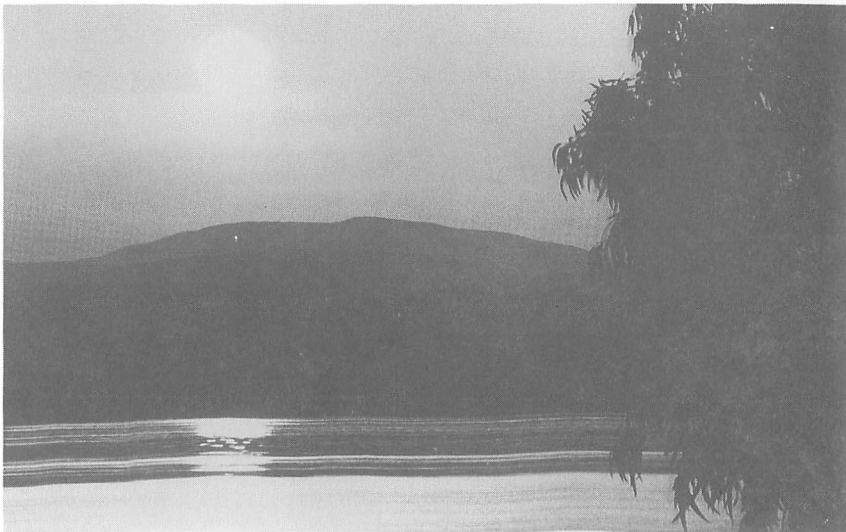
ペテロは舟から降りました。ペテロはイエス様の言葉によって水のうえに浮きました。
そのすこし前までは、ペテロは波に悩まされ、おなじところをこぎまわっていました。
しかし、いまはイエス様の言葉によって水のうえを歩いています。
そしてペテロはイエス様を見ています。

どうしたら私たちは
救い主であるイエス様との親しい交わりに近づくことができるか？

4．信仰の従順によって

信仰の従順は、水を通らなければなりません。
もし私たちがイエス様との親しい交わりに
近づきたいと思うならば、
私たちは水を通らなければなりません。
イエス様が「来なさい」と言われ、
私たちがそれに従うには、水のなかを通らねばなりません。
「攻撃と敵対のなか」を通らねばなりません。

敵がやってくるのはあたりまえの話です。
悪魔はペテロがイエス様のみもとに行くことをいやがり、
じゃまをしました。
それで向かい風と波、あらしがやってきました。
もしひとびとが、イエス様との深い交わりをもちたい



というあこがれを心に深くもっているなら、いつもあらしと攻撃と敵対がおこります。

聖書はペテロが超人間ではないことをよくあらわしています。
ペテロは私たちとおなじようにまったくふつうの人間でした。
ペテロは風を見て沈みはじめました。ペテロは注意をよこにそらしました。
ペテロはイエス様だけを見ませんでした。
もし私たちが環境、人間、自分をかえりみるなら、
イエス様のみ言葉の浮力がなくなって、沈みはじめます。

イエス様のみ言葉に従う道は、攻撃につづいていますが、
イエス様のみ言葉に従う道は、イエス様のみ手につづいています。
これこそ、イエス様に近づく道です。

信仰の従順のなかに、私たちがなにかをはじめれば、
たとえとちゅうで自分の思うようにいかなくても、
そのおわりはかならずイエス様のみ手のうちにあります。
「来なさい！」というイエス様のみことばに従順であるならば、
おわりはかならずイエス様の力強い腕のなかにあります。

そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。（マタイ　14・31）

ペテロは、波のあいだに沈んでしまうという、とうぜんの刑罰を受けてしかるべきでした。
しかしイエス様はそうはさせませんでした。
イエス様はご自身のために、あなたを沈めさせませんし、おぼれさせません。
それにはイエス様の名誉がかかっています。
イエス様はあなたに「来なさい！」と言われましたから、あなたを沈めさせることはできません。
しかし、イエス様はペテロにひとこと言わなければなりませんでした。

「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」（マタイ　14・31）

イエス様は「あなたの信仰は強い！」「あなたの信じたとおりになるように」
とはおっしゃっておられません。イエス様はペテロを訓戒しなければなりませんでした。
イエス様はご自身の手をさしのべられました。
もしイエス様が私たちのほうにみ手をのばされたならば、
それは救い主の手であり、私たちに救いを与える手です。
イエス様はペテロを連れもどさざるをえませんでした。
イエス様はペテロを波のなかから引きあげ、しっかりとした場所、
ご自身のみ言葉のうちにおかざるをえませんでした。

「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか」
そこに私たちの思うようにいかないことがよこたわっています。

なぜ、あなたはいろいろなことを見るのですか？
なぜ、あなたはイエス様だけを見ないのですか？
イエス様との親しい交わりは、私たちがイエス様に求めるだけでなく、
イエス様もまたあなたとの親しい交わりを求めておられるのです。
イエス様はあなたにご自身をあきらかにされました。
さあ、あなたも決心してください！「主よ。もし、あなたでしたら、私に、
『水の上を歩いてここまで来い』とお命じになってください！」

イエス様が「来なさい！」と言われるまで待ちなさい！
しかしイエス様があなたを呼ばれたならば、ためらわないでください！
ほかのひとを見ないでください！
波や困難を見ないでください！
ただイエス様だけを見てください！

▼ベックさんファミリー。ドイツから来られたハイデさんのご家族と。



基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一　みことばの大切さ

ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Ⅰヨハネ5・13　Ⅰペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰

Ⅰヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ53・4～6　Ⅰペテロ2・24　Ⅱコリント5・21

四　血潮の価値

イザヤ1・18　ローマ3・24、25　Ⅰヨハネ1・7　エペソ1・7　Ⅰペテロ1・18、19

黙示12・11

五　確信の根拠

イザヤ43・1、25　イザヤ44・22　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17

詩篇103・12　ヘブル13・5、6

六　思いわずらうな

マタイ13・22　マタイ6・25～32　ピリピ4・6、7　Ⅰペテロ5・7～9　詩篇55・22

七　試練の時

ヤコブ1・12　ヤコブ4・7、8　Ⅰコリント10・13　Ⅰペテロ5・8～10

Ⅰペテロ1・5～7　Ⅱコリント12・9、10　ローマ5・3～5　ローマ8・28

イザヤ40・29～31

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ　31・3）

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語版、ドイツ語版が出版されました。さらに病床にあって本の読めない方々のために、ＰＢＡのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ（８本１組）があります。



ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒１８０武蔵野市吉祥寺本町４―９―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

光よあれ

「私たちは主のもの」

第1集

25人の証し

価三三〇円

山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、染野待子さんの「主が語られたことは必ず実現する」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、またベックさんのメッセージ「神は愛です」を収録。

第2集

25人の証し

価三五〇円

松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」、古田稔・康子夫妻の「すべてを主の御手に」、アルコール依存症から脱出した染野茂夫さんの「駆けのぼりし主の道」、重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」が掲載されています。

第3集

42人の証し

価三三〇円

江藤善清・恵子夫妻の「天国を望み見て」「主に導かれて」、蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、武井達郎・生子夫妻の「主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな」など。ベックさんの「みこころが地でも行なわれますように」を巻末に収録。

光よあれ

「私たちは主のもの」

第4集

66人の証し

価三五〇円

ニュースキャスター山川千秋さんの夫人穆子さんの「ここに、主がおられる」、故笹川郁夫・公子夫妻の「もはや私ではなく、キリストが私の中で」「走るべき行程を走り終えた夫」、竹本誠一さんの「主に導かれて七十年」、大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」などが掲載されています。

第5集

67人の証し

価三八〇円

吉屋和子さんの「その栄光は地に満ちわたれ」、村上誠弁護士と夫人の「主とともに歩む」「キリストにはかえられません」、田中順治・節子夫妻の「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」「数えてみよ、主の恵み」、大城紀美子さんの「今日まで灯し続けた信仰の灯」など。

第6集

70人の証し

価三八〇円

玉城新正さんの「恐怖から解き放たれて」、新井稔さんの「妻の安らぎとともに救われて」、岡本広海・基子夫妻の「キリストにある愛、喜び、平安」「今あるは神の恵みです」、森島左武郎・久仁子夫妻の「あなたは豊かなところへ…」「栄光と支配がキリストにありますように」ほか。

お申し込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上、〒一八〇武蔵野市吉祥寺本町四―九―一一吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込を。なお一部品切れの節はご容赦ください。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）　ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



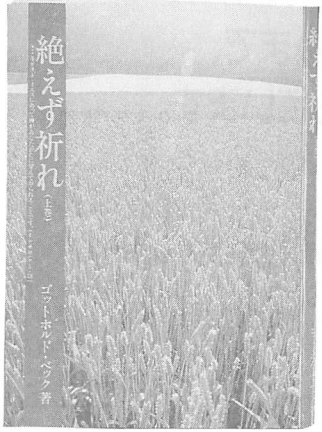
なにものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）
ゴットホルド・ベック著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

絶えず祈れ(上巻)のおすすめ

ゴットホルド・ベック著

主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちにそそごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらをあけるのです。祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていないかたがたはイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われているかたがたは、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るためのはげましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、近く刊行される下巻です。この上巻には、「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」の七つのメッセージがおさめられています。



絶えず祈れ(上巻)

ゴットホルド・ベック著

価四〇〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別)、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4―9―11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

主イエスは言われた。

**見よ。わたしは、世の終わりまで、
いつも、あなたがたとともにいます。** マタイ28:20

牧師制度がありません

私たちのキリスト集会には牧師制度がありません。会社員、公務員、教師、医者、経営者、芸術家、弁護士、技術者などさまざまな職業を持つ人々が集まって、自発的に責任を分かちあい、一切強制されることなく、純粋に聖書のみことばによりたのみ、主にある交わりを保つものの集いです。

会員制度がありません

もちろん名簿もありません。ですから「会員」になりたくてもなれないのです。いわゆる宗教団体的な制度は一切排除して、主ご自身のみが頭となって働かれ、導かれ、主ご自身が満ち満ちておられることのみを祈り求めている集会です。

組織・会則がありません

私たちの集会には、役員会も、総会も、定例会議も、会則も存在しません。みんなが助けあって重荷を分かちあい、全てが自発的に、喜びをもってなされています。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度がなく、献金は自発的に行なわれ、無記名ですから主のみがご存じです。

日曜礼拝と家庭集会

日曜日には、主の十字架の血潮をしのんでの礼拝があり、その後の福音集会では兄弟たちが交代でメッセージを伝えます。全国には90箇所以上に家庭集会があり、礼拝を行なう所も増えています。

キリスト集会

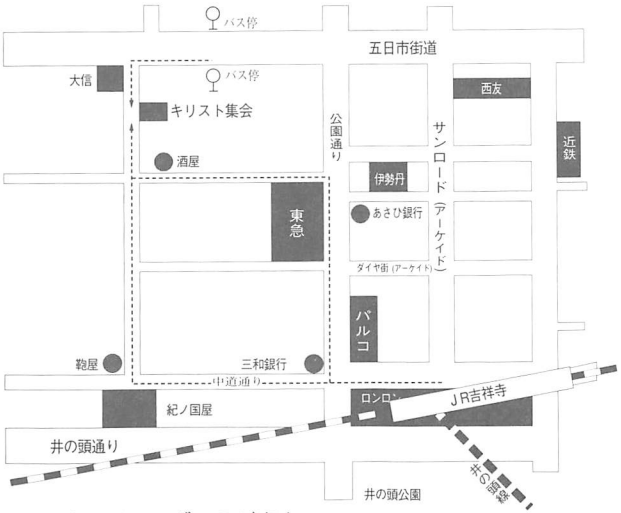
吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。

吉祥寺キリスト集会

G.ベック　0422-22-2016　東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11〒180

日曜礼拝	10:30	14:00	19:00	火曜学び会	11:00
日曜メッセージ	12:00	15:00	20:00	水曜学び会	19:30
子供日曜学校	9:00			木曜祈り会	19:30
中高生日曜クラス	9:00				
青年日曜クラス	14:30				



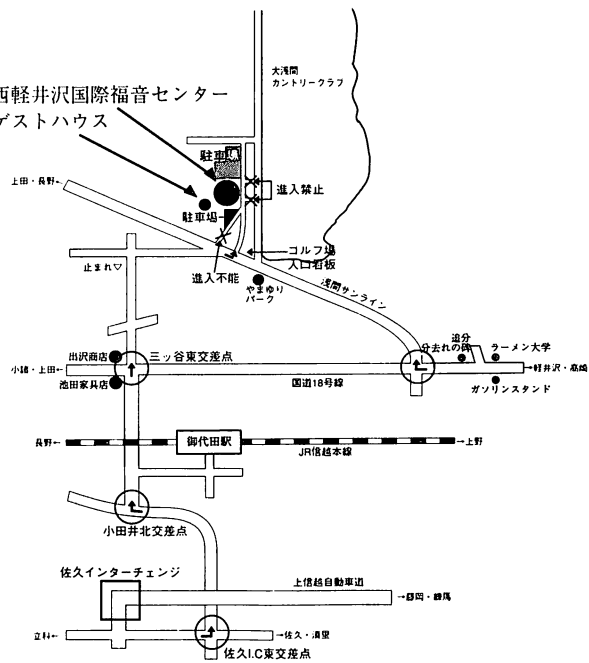
●ＡＡミーティングへのご案内

ＡＡ武蔵野グループは、吉祥寺キリスト集会において、毎週火曜日午後7時よりＡＡグループ・ミーティングを開催しています。アルコール・薬物などの依存症で悩み苦しんでおられる方、またそのご家族の方、知人の方、参加は自由です。ＡＡミーティングは、希望と信仰による回復のステップです。すでに悲惨な依存症から解放され、家族と共に希望と平和に満ちた生活を送っている大勢の人々が心から歓迎いたします。

西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター
0267−32−6400㈹　長野県北佐久郡御代田町塩野４５０−１５〒389-02

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
0267−32−6444　　長野県北佐久郡御代田町塩野４５０−３３〒389-02



• ＪＲ信越線で御代田駅下車。タクシーで約５分＝800円程度。徒歩約45分＝３km。
御代田へは東京上野駅から信越線特急「あさま」で軽井沢乗りかえ、普通で３つ目の御代田駅下車。
• 国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、２つ目の追分宿の信号を越えて10km先、左にESSOのガソリンスタンド、右に「分去れの碑」を右折して約３km。
• 道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

光よあれ
私たちは主のもの
69人の証し
シリーズ第７集

1994年１月31日初版

編　者　ゴットホルド・ベック

装幀・デザイン　飯守恪太郎・上野文子
高橋美代子
編　集　酒井千尋・黒見鮎子
石塚優子
編集連絡　飯守節子・坂口寛子
印　刷　新生運動

発行所　キリスト集会
〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町４－９－11
電話　0422-22-2016(ベック宅)
振替　東京０－５６１１６

定価400円
(本体388円)

















「光が、やみの中から輝き出よ。」
と言われた神は、私たちの心を照らし、
キリストの御顔にある
神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。
(IIコリント 4・6)

定価400円(本体388円)